

平安京左京四條三坊十三町

—長刀鉾町遺跡—

平安京跡研究調查報告

第11輯

財團法人 古代學協會

昭和59年

序 文

四条大路，烏丸小路に面したこの地は，文献史料の上からは特定の貴族の邸宅を推定しにくい，平安京左京内においては，ほぼ中心に位置する場所であった。今回の発掘調査においても，丸太剥りぬき井戸が検出されるなど，平安時代のこの地のあり方を知る上でも重要な成果を得ているのである。

しかし，今回の調査において，最も特筆すべきのは，弥生時代の遺構・遺物を検出したことであり，特に中～後期にわたる大量の土器，更に京都市内としては異例なほどの多種多量の石器の検出は，京内における弥生時代の研究に，良好な基準を与えるものと言って良いであろう。

発掘調査から整理期間中，そして報告書刊行にいたるまで，各方面から様々な協力，助言をいただいている。本書はそれらの援助に報いるには不十分なものであろうが，今回の発掘調査の成果が斯界にいささかなりとも貢献できれば，我々が望外の喜びとするところである。

昭和59年2月

（財）古代学協会専務理事

平安博物館館長

角田文衛

目 次

	頁
はじめに	1
第 1 章 調査地の環境と調査の概要	3
第 1 節 調査の概要	4
第 2 節 弥生時代の立地・環境	10
第 2 章 平安京関連の遺構・遺物	13
第 1 節 平安時代の遺構・遺物	13
1. 平安時代前期の遺物	13
2. SE220	16
3. SE218	20
4. SK215	20
5. SE531	20
6. SE723	22
7. SE741・743	22
8. SD794	26
9. SE418	26
10. SE423	28
第 2 節 平安時代末期土塚群	31
1. SK536	31
2. SK512	32
3. SK571	32
4. SK538	32
第 3 節 平安時代末期包含層	34
第 4 節 平安時代の瓦	36
第 5 節 鎌倉、室町時代の遺構・遺物	39
1. SK49	39
2. 土塚群	41
第 6 節 桃山時代～江戸時代の遺構・遺物	47
1. SK532	47
2. SK339	48
3. SK02	50
4. SE354	51
5. SX534	51
第 7 節 遺構・遺物の年代観	52
1. SE220	52
2. SE423	52
3. SK02	52
第 8 節 土師器皿の分類と編年	54
第 3 章 弥生時代の遺構・遺物	59
第 1 節 遺構	59
1. A, B 区の調査	59
(1) 遺物包含層	(2) 弥生溝 1
(3) 弥生溝 2	(4) 住居址
2. C, D 区の調査	65
(1) 遺物包含層	(2) 弥生溝 3
(3) 弥生溝 4	(4) SK1003
(5) SK1001	(6) SK1005
第 2 節 遺物	70
1. 弥生式土器	70
(1) 第 1 様式の土器	(2) 第 2 様式の土器
(3) 第 3 様式古段階の土器	(4) 第 3 様式新段階の土器
(5) 第 4 様式の土器	(6) 第 5 様式の土器
2. 石器	84
(1) 磨製石剣	(2) 打製石鏃
(3) 磨製石鏃	(4) 円板状石器
(5) 石包丁	(6) 大型扁平片刃石斧
(7) 小型扁平片刃石斧	(8) 大型蛤刃石斧
(9) 柱状石斧	(10) 砥石
(11) 玉材	
第 3 節 考察	91
1. 近江系弥生式土器の成立と展開	91
2. 本遺跡出土第 5 様式土器の山城地方後期弥生式土器に占める位置	95
3. 畿内周辺部における弥生時代の石器使用状況	98
おわりに	99

図 版 目 次

- | | | | |
|-------|------------------------------|-------|--|
| 図版第1 | 上：調査前の三井銀行
下：A区全景(南から) | 図版第29 | SE423・SK536・512・571出土
遺物 |
| 図版第2 | 上：SE220 下：SE218・219 | 図版第30 | SK538・524・49・611・876出土
遺物 |
| 図版第3 | 上：SE218 下：SE219 | 図版第31 | SK533・388・379出土遺物 |
| 図版第4 | 上：SK49 下：SK53 | 図版第32 | SK350・42・31・532出土遺物 |
| 図版第5 | 上：SK87遺物検出状態
下：同完掘後 | 図版第33 | SK339・02出土遺物 |
| 図版第6 | 上：SD44 下：SK45 | 図版第34 | 上：弥生住居址全景
下：同ピット |
| 図版第7 | 上：SK31 下：SK02 | 図版第35 | 上：弥生溝1第1検出面全景
下：弥生溝1南部縦断面土層 |
| 図版第8 | 上：SE06 下：同細部 | 図版第36 | 上：弥生溝1中央部第1検出面
下：弥生溝1中央部第2検出面 |
| 図版第9 | 上：B区全景(南から)
上：同(北から) | 図版第37 | 上：弥生溝1中央部第3検出面
遺物出土状況(西から)
下：同細部 |
| 図版第10 | 上：SD145(西から)
下：SD148(南から) | 図版第38 | 上：弥生溝1南部第3検出面遺
物出土状況 下：同細部 |
| 図版第11 | 上：C区全景(南から)
下：SK512 | 図版第39 | 右上：弥生溝1南部最上層磨製
石鏃出土状況
右下：弥生溝1中央部第2検出
面扁平片刃石斧出土状況
左：弥生溝1中央～南部完掘状
況 |
| 図版第12 | 上：SE734 下：同細部 | 図版第40 | 上：弥生溝2遺物出土状況
下：弥生溝2完掘後全景 |
| 図版第13 | 上：SE418 下：SE723 | 図版第41 | 上：弥生溝2磨製石剣出土状況
下：弥生溝2扁平片刃石斧出土
状況 |
| 図版第14 | 上：SE423 下：同細部 | 図版第42 | 上：弥生溝3西肩遺物出土状況
下：弥生溝3南部横断土層 |
| 図版第15 | 上：SK355 下：SK350 | 図版第43 | 上：弥生溝4全景
下：同細部 |
| 図版第16 | 上：SB353 下：SX400 | | |
| 図版第17 | 上：SX369 下：SE354 | | |
| 図版第18 | 上：SE412 下：SD145 | | |
| 図版第19 | 上：D区全景(西から)
下：同西部(北から) | | |
| 図版第20 | 上：SE531 下：SX534 | | |
| 図版第21 | 上：SK533 下：SK524 | | |
| 図版第22 | 上：SD515 下：SB502 | | |
| 図版第23 | 平安時代前期の遺物 | | |
| 図版第24 | SE220・SK215出土遺物 | | |
| 図版第25 | SE531・741・734・418出土遺物 | | |
| 図版第26 | 平安時代後期包含層出土遺物 | | |
| 図版第27 | 軒丸瓦・軒平瓦(1) | | |
| 図版第28 | 軒平瓦(2) | | |

- 図版第44 上：SK1001遺物出土状況
 下：同襲出土状況
 図版第45 上：SK1003遺物出土状況
 下：SK1003石包丁出土状況
 図版第46 上：C区襲出土状況
 下：C区大形磨製石鏃出土状況
 図版第47 D区弥生溝4 西側打製石鏃出土
 状況
 図版第48 弥生式土器(1)
 図版第49 弥生式土器(2)
 図版第50 弥生式土器(3)
 図版第51 弥生式土器(4)
 図版第52 弥生式土器(5)
 図版第53 弥生式土器(6)
 図版第54 弥生式土器(7)
 図版第55 弥生式土器(8)
 図版第56 弥生式土器(9)
 図版第57 弥生時代石器(1)
 図版第58 弥生時代石器(2)

表 目 次

第1表 調査地周辺の弥生時代遺跡 … 11	第4表 遺構存続表… … … … … 97
第2表 主要遺構編年表 … … … … 53	第5表 弥生式土器観察表… … 102~138
第3表 石器一覧表… … … … … 90	

挿 図 目 次

挿 図	頁	挿 図	頁
第1図	1	第32図	SK350・42・31
第2図	3		出土遺物実測図 …… 46
第3図	5・6	第33図	SK532出土遺物実測図 …… 48
		第34図	SK339出土遺物実測図 …… 49
第4図	7・8	第35図	SK02出土遺物実測図…… 50
		第36図	土師器皿編年図表
第5図	4		(11世紀～17世紀) …… 57・58
第6図	9	第37図	弥生溝1全体実測図 …… 61・62
第7図	10	第38図	弥生溝1第2検出面(右)
第8図	10		・第3検出面(左)実測図…… 60
第9図	14	第39図	弥生溝1南部完掘実測図…… 63
第10図	15	第40図	弥生溝2実測図 …… 65
第11図	16	第41図	住居址実測図 …… 66
第12図	17	第42図	SK1001・1003実測図…… 69
第13図	19	第43図	弥生溝3・4実測図 …… 67・68
第14図	21	第44図	石器実測図(1) …… 86
第15図	23	第45図	石器実測図(2) …… 87
		第46図	石器実測図(3) …… 88
第16図	24	第47図	弥生式土器実測図(1) …… 101
第17図	25	第48図	弥生式土器実測図(2) …… 102
		第49図	弥生式土器実測図(3) …… 105
第18図	27	第50図	弥生式土器実測図(4) …… 107
		第51図	弥生式土器実測図(5) …… 111
第19図	28	第52図	弥生式土器実測図(6) …… 113
第20図	30	第53図	弥生式土器実測図(7) …… 115
第21図	31	第54図	弥生式土器実測図(8) …… 115
第22図	33	第55図	弥生式土器実測図(9) …… 118
		第56図	弥生式土器実測図(10) …… 121
第23図	35	第57図	弥生式土器実測図(11) …… 125
		第58図	弥生式土器実測図(12) …… 128
第24図	37	第59図	弥生式土器実測図(13) …… 129
第25図	38	第60図	弥生式土器実測図(14) …… 130
第26図	39	第61図	弥生式土器実測図(15) …… 131
第27図	40	第62図	弥生式土器実測図(16) …… 132
第28図	41	第63図	弥生式土器実測図(17) …… 135
第29図	42	第64図	弥生式土器実測図(18) …… 136
		第65図	弥生式土器実測図(19) …… 137
第30図	43	第66図	弥生式土器実測図(20) …… 137
		第67図	弥生式土器拓影(1)…… 139
第31図	44	第68図	弥生式土器拓影(2)…… 140
		第69図	弥生式土器拓影(3)…… 141
		第70図	弥生式土器拓影(4)…… 142
		第71図	弥生式土器拓影(5)…… 143
		第72図	弥生式土器拓影(6)…… 144

例 言

- 1 本報告書は、昭和57年4月9日から8月31日まで、京都市中京区烏丸通四条上ル箒町695, 下京区四条通烏丸東入長刀鉾町8・19の三井ビル新築工事敷地内の発掘調査報告である。
- 2 本報告書で用いている座標は、国土方眼の座標系VIを用いている。また方位は真北である。
- 3 本書の執筆者は下記の通りである。

はじめに、第1章、おわりに	寺島孝一
第2章	横田洋三
第3章	若松良一
- 4 写真撮影は、遺構については寺島、横田、若松、芝野康之、小関徹が、遺物写真については、寺島が行った。
- 5 遺物の作図、トレース等は第2章が横田の責任の下で福土順子が協力して行い、第3章は若松の責任の下に小田泰子が協力して行った。
- 6 弥生式土器の挿図番号と写真図版番号は一致する。従って、写真図版では必ずしも番号が連続しない。
- 7 本書の編集は寺島が行った。

はじめに

三井銀行では京都支店(京都市中京区烏丸通四条上ル箆町695および下京区四条通烏丸東入長刀鉾町8, 19)の建替工事を計画したが、この地が平安京跡内にあたるため、平安博物館に事前の発掘調査を依頼された。

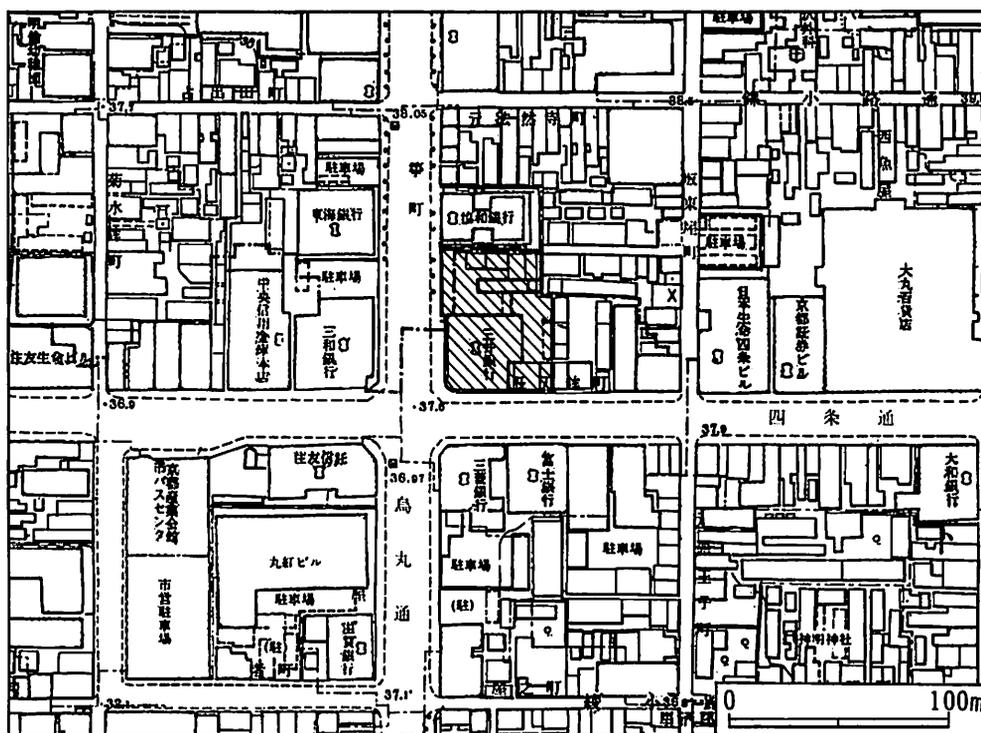
この地は、四条烏丸交叉点の東北角地で、敷地総面積は約3000㎡である(第1図)。このうち四条烏丸交叉点側に建てられていた旧本館部分は基礎が深く、遺跡が既に破壊されていることが予想された。このため、本館をとりまく形で残されていた駐車場および木造建物部分(敷地の東側および北側)約1700㎡を調査対象区域とした。

調査は昭和57年4月9日から8月31日までの4か月半に涉って実施し、調査体制は次の通りであった。

調査者 平安博物館館長 角田文衛

調査担当者 平安博物館考古学第四研究室 寺島孝一

調査補助員 横田洋三(現滋賀県文化財保護協会)、若松良一(現埼玉県埋蔵文化財事業団)、芝野康之、青山淳二(現京都市文化観光局)、石黒朋子、植田良樹、江浪健次、大野かなる、岡 佳子、奥西美子、小関 徹、小田泰子、川西弘一、小林博文、島田政和、嶋本隆一、



第1図 発掘調査地位置図

2 はじめに

新地菜穂子, 相水公夫, 田畑文明, 堤 康雄, 出口瑞鳥, 堂下 薫, 中村卓郎, 久末忠司, 福士順子, 福田晴人, 藤井一雄, 星川 桂, 蒔田明史, 村上信之, 和田一郎
調査作業員 橋本庄次, 五十棲彰雄, 五十棲宏, 小原祥市, 木村謙次, 中島 巖, 橋本俊夫, 平山聖頭, 福田文次, 三浦信一, 安田秀雄, 山中貞夫, 吉田竜太郎
また, 発掘調査終了後の整理作業には次の方々の手をわずらわした。

横田洋三, 若松良一, 芝野康之, 福士順子, 奥西美子, 小田泰子, 大野かなる, 石黒朋子, 出口瑞鳥, 久末忠司, 藤林房男, 福田晴人, 新地菜穂子, 星川 桂

今回の調査地の周辺では, 烏丸通綾小路下ル住友海上火災京都ビル新築敷地で, 弥生時代第5様式~庄内式の土器を検出しており¹⁾, また京都市埋蔵文化財研究所等の調査でも, 近辺で数ヶ所の第5様式を中心とする住居跡, 方形周溝墓などを確認している²⁾。このため, 今回の調査でもこれに関連する遺溝, 遺物の検出が予想された。

また平安京の条坊でいえば, 左京四条三坊十三町にあたり, 文献から特定の遺族の邸宅を推定することはできないが, 12世紀中頃に藤原忠通(摂政関白)が住居を構えた可能性もある。鎌倉時代以降は概ね町屋がたち並び, 一部には祇園社の社事所なども営まれていたようである。江戸時代にはこの地の一面に与謝蕪村の住いがあったと推定される。

なお, 発掘作業, 整理作業中に, 下記の方々をはじめ平安博物館研究部諸兄など多くの御教示, 御指導を受けた。厚く感謝するものである。

小林行雄(京都大学名誉教授), 楠崎彰一(名古屋大学教授), 斉藤孝正(同助手), 藤沢一夫(大手前女子大学教授), 鈴木重治(同志社大学校地学術調査会調査主任), 百瀬政恒・堀内明博・梅川 隆(京都市埋蔵文化財研究所調査員), 福岡澄夫(大阪府文化財センター), 立石盛詞・西口正純(埼玉県埋蔵文化財事業団)

尚, 本報告の副題として「長刀鉾町遺跡」のタイトルをかかげた。平安京で見れば主題の「平安京左条四条四坊十三町」ということになるが, 今回の調査で弥生時代の遺構と大量の土器, 石器が出土したためである。この周辺の弥生時代の遺跡については, 既に京都市埋蔵文化財研究所等による調査で, いくつかが発見され「烏丸綾小路遺跡」と呼称されている。本報告でこの遺跡名にあえて異をとらえるわけではないが, これまでの調査に比較して, 遺物の出土量が格段に多く, 弥生時代における集落の中心が, 必ずしも烏丸綾小路周辺にあるとは考えられないためである。今回は, とりあえず調査地の大半を占め, 知名度も高い「長刀鉾町」を遺跡名として採ったが, 四条烏丸周辺の調査が進み集落の範囲の確認が進んだ段階であらためて考えてみる必要があるだろう。

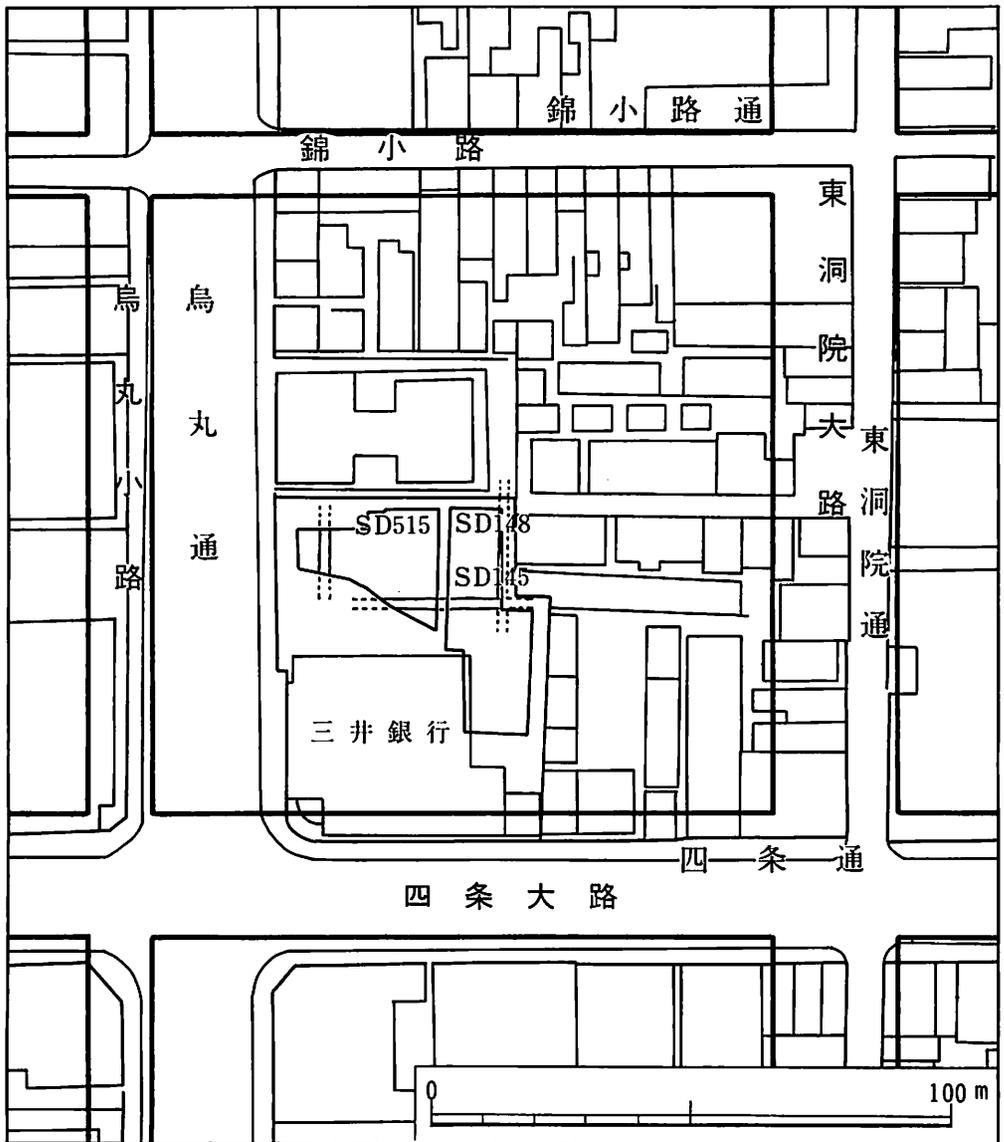
註

1) 佐々木英夫編『平安京左京五条三坊十五町』(『平安京跡研究調査報告第5輯』, 京都, 昭和56年)。

2) 『第6回調査成果交流会資料』(京都, 昭和58年)。

第1章 調査地の環境と調査の概要

調査を行うにあたり、発掘対象地を大きくA～Dの4区に分割した。A区は敷地東側の南半部分、B区は同北半部分、C区は敷地北側の東半部分、D区は西半部分である。調査はA区から始め、A・B区終了後、C・D区の調査を行った。ただし、A区の弥生溝1・2については、精査のため埋め戻しを遅らせて、C・D区と併行して調査を行った。



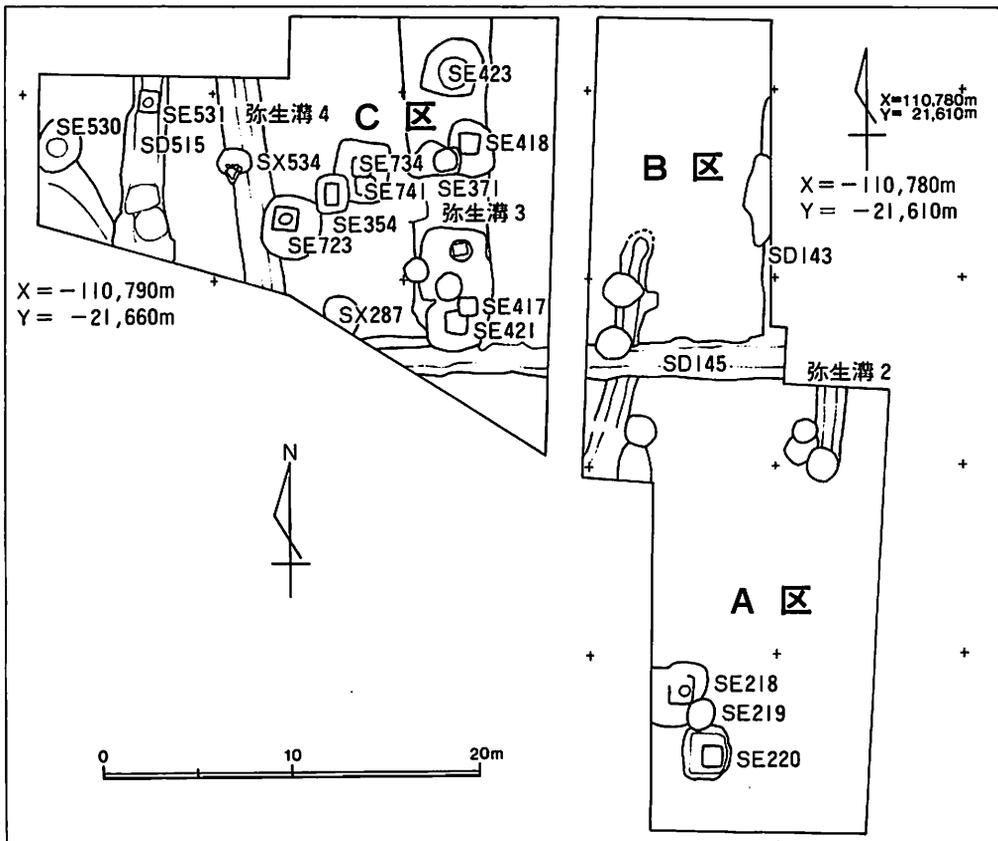
第2図 発掘調査トレンチ位置図

第1節 調査の概要

調査地は南を四条通(四条大路)、西を烏丸通(烏丸小路)に面した、左京四条三坊十三町の、南半中央やや東寄りに位置を占める(第2図参照)。平安京における烏丸小路は、現在の烏丸通の更に西側に位置するため、烏丸小路の側溝については当初から検出は期待できなかった。また四条大路については、敷地内に四条大路に面した築地ラインが推定できるものの、三井銀行本館及び阪急電車への進入階段のため調査不能で、平安京の条坊に関連する遺構については調査不可能であった。

発掘調査は、便宜上全体をA～D区に4分し、期間・費用等の関係から、現地表から約1.2mを重機により掘削し、以下を手掘りによって調査した。

検出した遺構としては、平安京城内の調査の通例と違はず、平安時代から最近世に至るまでの井戸が多く認められた。ただし、今回の調査では、平安時代にかかる井戸の検出例が多く、SE 220, 218, 531, 723, 741, 743, 418, 423など10基近い井戸が検出されたのが注目されるところである。その井戸の分布はA区南側で、SE 218, 220など3基が発見されたのを除けば、いずれもC, D区に分布し、特に弥生時代の自然流路部分に集中して検出されるのは、水脈と



第5図 主要遺構配置図

A区東壁断面図

1. 表土
2. 焼土(江戸時代末期)
3. 瓦溜
4. 焼土
5. 土壌
6. 暗褐色土
7. 暗茶褐色土
8. 礫混砂
9. 炭・灰を多量に含む土抃
10. 暗茶褐色土
11. 土壌(SK02)
12. 明茶褐色土
13. 黒褐色粘質土
14. 黒褐色粘質土
15. 灰茶褐色土
16. 明茶褐色土
17. 明茶褐色土(江戸時代初期)
18. 暗茶褐色土(江戸時代)
19. 井戸
20. 灰褐色土
21. 土壌
22. 灰褐色土(炭・焼土混り)
23. 暗黄褐色土
24. 暗黄褐色土
25. 茶褐色土(炭・焼土混り)
26. 明黒灰色土
27. 暗茶褐色土
28. 黒灰褐色土
29. 明灰褐色土(焼土・炭混り)

A区南壁断面図

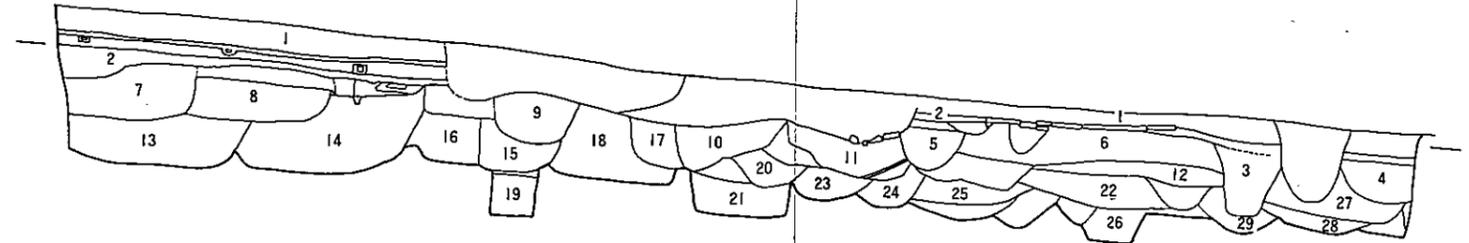
1. 表土
2. コンクリート建物基礎
3. 褐色土
4. 土壌(SK09)
5. 井戸(SE07)
6. 茶褐色土
7. 茶褐色土
8. 黄褐色土
9. 黒褐色土
10. 茶褐色土
11. 灰褐色土(炭・灰混り)
12. 砂
13. 黒褐色土
14. 砂
15. 茶褐色土(炭混り)
16. 暗灰褐色土(SK06)

B区東壁断面図

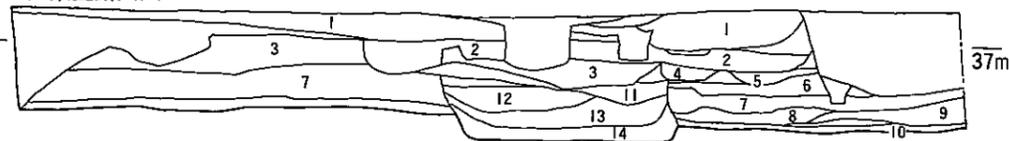
1. 表土
2. 灰褐色土
3. 暗褐色土
4. 暗灰褐色土
5. 暗褐色土(炭化物を含む)
6. 暗黄褐色粘質土
7. 黄灰色粘質土
8. 暗灰褐色土
9. 暗黄灰色粘質土
10. 暗灰色粘質土
11. 灰黒褐色土
12. 灰黒褐色粘質土
13. 灰黒色土
14. 灰黒色粘質土

SD143覆土

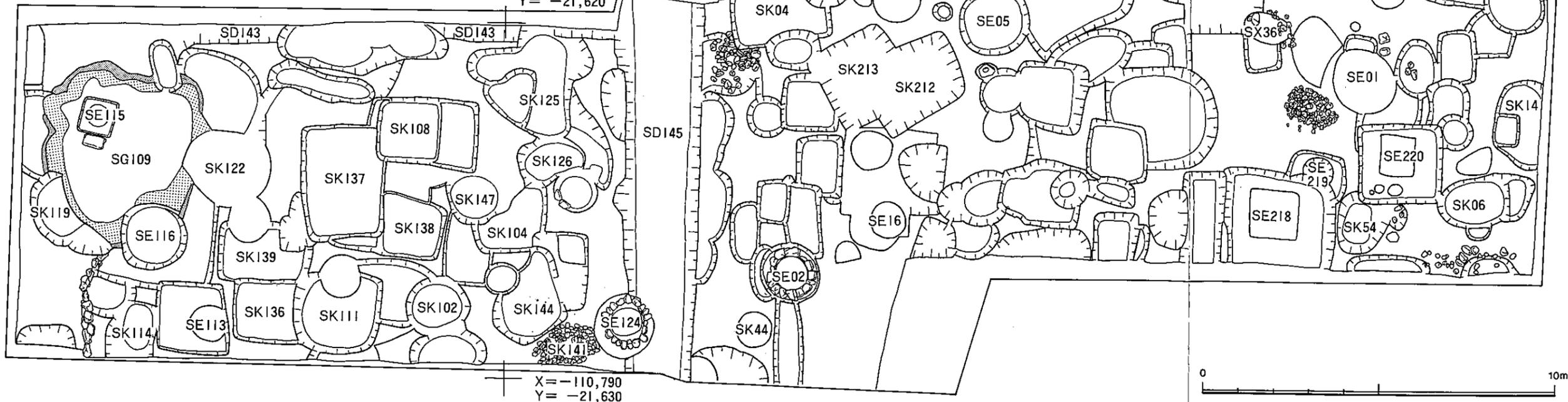
A区東壁断面図



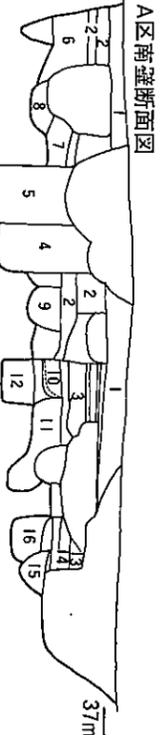
B区東壁断面図



X = -110,790
Y = -21,620



A区南壁断面図

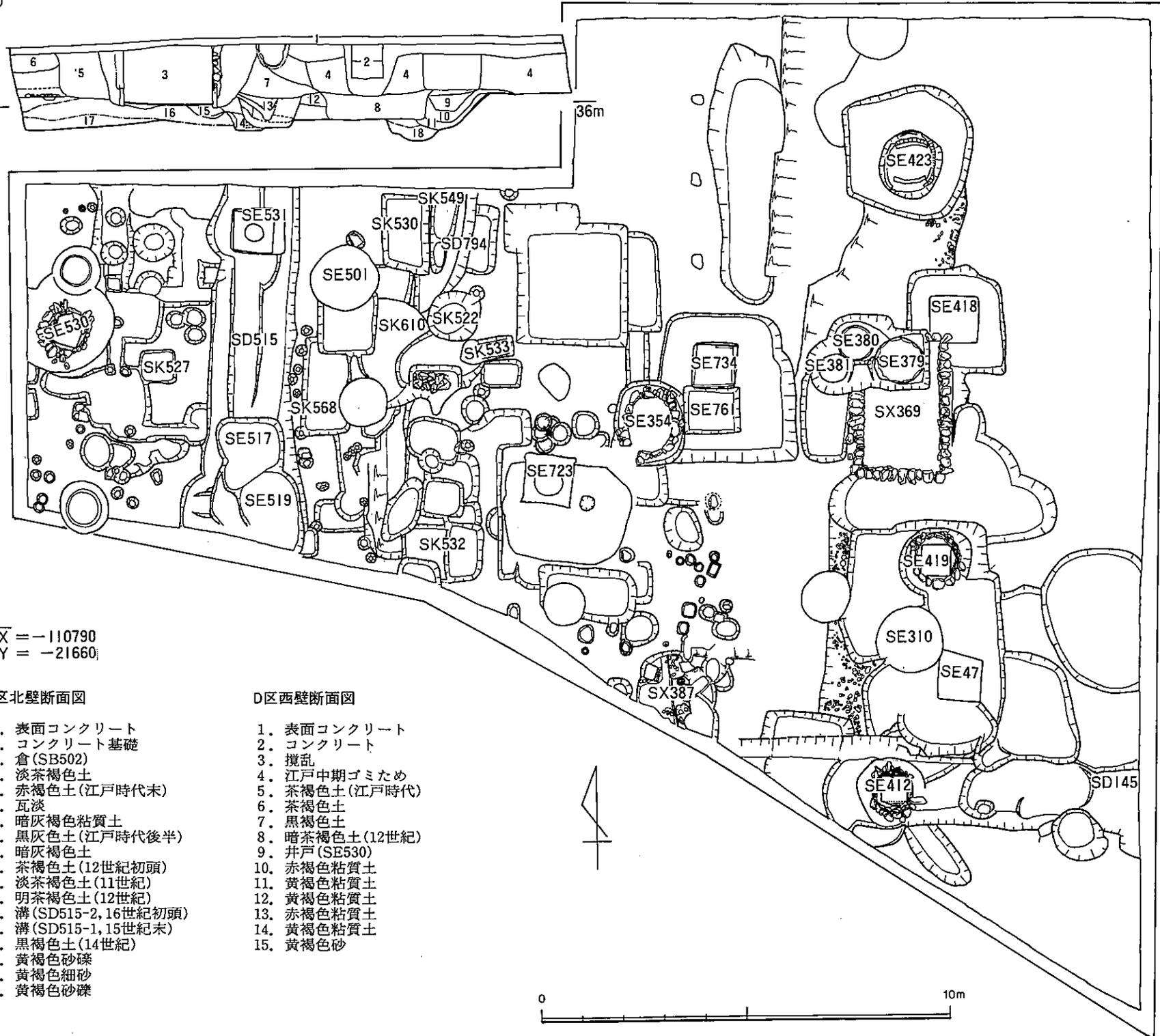
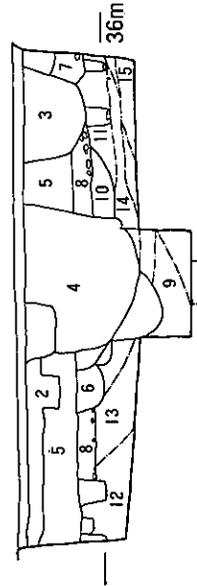
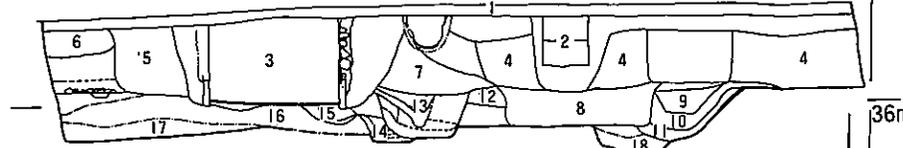
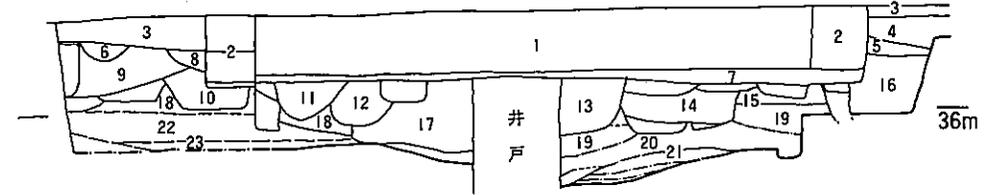


第3図 A・B区平面実測図および断面図

C区北壁断面図

1. レンガ、コンクリート片の混る攪乱
2. コンクリート基礎
3. 表土
4. 赤褐色土(焼土、瓦を混じる)
5. 暗灰褐色土
6. コンクリートの混じる褐色土
7. 礫
8. 礫混り褐色土
9. 暗灰色土(漆喰を混じる)
10. 黒褐色土(江戸時代中期)
11. 茶褐色土(15世紀末)
12. 淡茶褐色土(15世紀初)

13. 礫混り茶褐色土(桃山~江戸時代初期)
14. 炭・礫混り灰褐色土
15. 黄緑色粘質土(9世紀)
16. 灰褐色土(室町時代)
17. 茶褐色土(室町時代)
18. 黄褐色粘質土
19. 淡灰褐色粘質土(平安時代)
20. 灰褐色細砂土
21. 茶褐色砂礫(弥生式土器を混じる)
22. 黄褐色砂礫
23. 黄褐色粗砂



X = -110790
Y = -21660

X = -110,790m
Y = -21,630m

D区北壁断面図

1. 表面コンクリート
2. コンクリート基礎
3. 倉(SB502)
4. 淡茶褐色土
5. 赤褐色土(江戸時代末)
6. 瓦
7. 暗灰褐色粘質土
8. 黒灰色土(江戸時代後半)
9. 暗灰褐色土
10. 茶褐色土(12世紀初頭)
11. 淡茶褐色土(11世紀)
12. 明茶褐色土(12世紀)
13. 溝(SD515-2, 16世紀初頭)
14. 溝(SD515-1, 15世紀末)
15. 黒褐色土(14世紀)
16. 黄褐色砂礫
17. 黄褐色細砂
18. 黄褐色砂礫

D区西壁断面図

1. 表面コンクリート
2. コンクリート
3. 攪乱
4. 江戸中期ゴミため
5. 茶褐色土(江戸時代)
6. 茶褐色土
7. 黒褐色土
8. 暗茶褐色土(12世紀)
9. 井戸(SE530)
10. 赤褐色粘質土
11. 黄褐色粘質土
12. 黄褐色粘質土
13. 赤褐色粘質土
14. 黄褐色粘質土
15. 黄褐色砂

第4図 C・D区平面実測図および断面図

の関係から、興味深い現象といえよう(第3～5図参照)。

また、今回の調査では室町時代にかかる溝が東西方向に1本(S D145)、南北方向で2本(S D148, S D515)発見された。

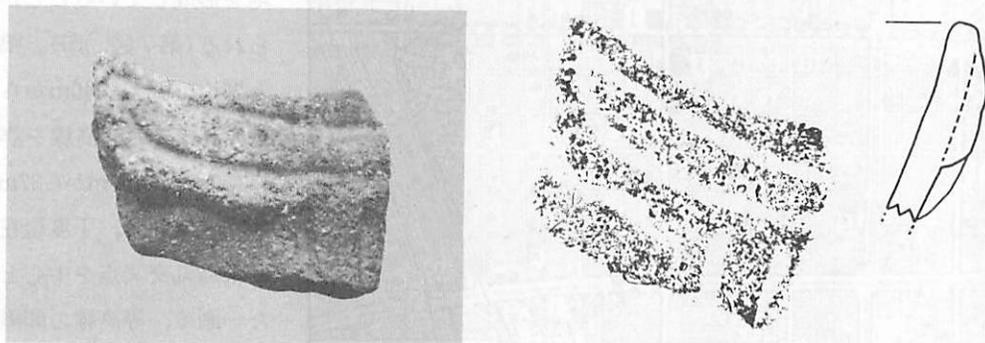
この溝は、S D148が西側肩部分しか発見されなかったため、その幅が不明であるが、S D515, 145では共に幅4mほどであり、検出面からの深さは50～70cmであった。いずれの溝も調査範囲いっぱいのにびており(S D148の南側が消失しているが、これはA区における地山面が、溝底部のレベルより低くなっているため、更に続くものと判断した)、東西、南北に更にのびるものと考えられた。

この溝を平安京条坊の上に重ねあわせると第2図のようになる。東西のにびる溝(S D145)について見ると、四条大路から約40mで、120m四方の1町分の敷地から見れば約1/3の地点に位置する。南北のにびるS D515は烏丸小路から約33m、S D148は東洞院大路から約51mである。これらの数値はいずれも平安京における「四行八門制」による宅地割りと一致するものではなく、この時期における宅地の分割の実体を知る上での一つの資料となりうるものであろう。

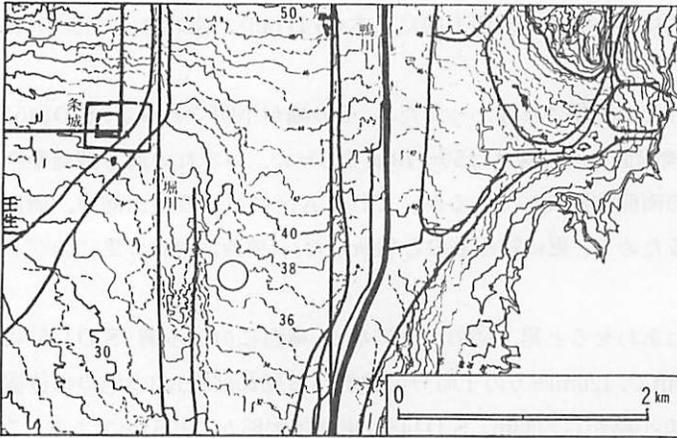
またD区西側では南北方向に並ぶ2件の室跡を検出した(S B502, 図版第22下)。いずれも花崗岩の切石をつみ上げ、その内面に漆喰をぬり上げたもので、床面も漆喰を張っていた。時期的には江戸時代末～明治時代にかかるものであるが、いずれの室もその西南方向にやはり漆喰の井筒を持つ井戸を配していた点が特徴的であった。室と井戸がどのような関係を持つものか理解出来なかったが、相互に関連するものである点は遺跡の配置状況から明らかであり、近世における宅地内の構造を知る上での一つの手がかりとなりうるものであろう。

また江戸時代の瓦積の井戸などもA区において発見されている(S E06, 図版第8)が近世の井戸の一資料として興味深いものであろう。

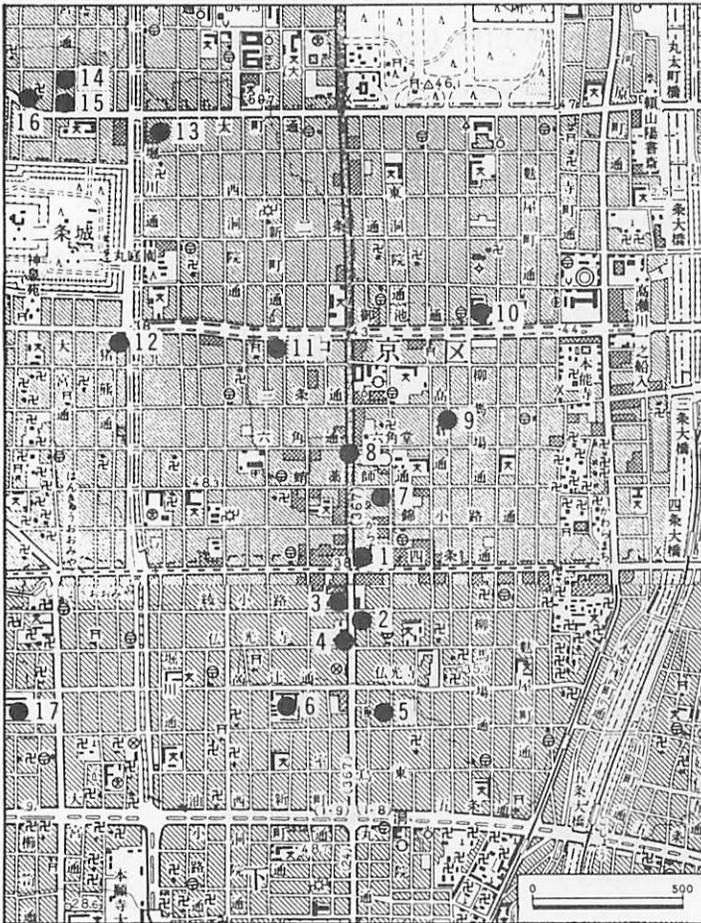
またB区北端では漆喰で築いた池状の遺構が発見された(S G105)。この他の中央やや北東寄りには、他の底と同じレベルに踏み石と井戸が発出された。池状遺構と井戸とは検出状態から同時期のものと思わすが、どのような用いられ方をしたのかは不明である。



第6図 縄文式土器(写真, 拓本)



第7図 調査地周辺地形図



第8図 調査地周辺の弥生時代遺跡

第2節 弥生時代の立地と環境

今回の調査では、A区で南北に掘られた2本の溝(弥生溝1・2)、C・D区で自然流路と思われる溝(弥生溝3・4)が発見され、また弥生溝2が埋没した段階で、その上に住居址があった事が確認されている。出土遺物もA区の溝1、C、D区等で土器を中心に多数が出土しており、また京内の遺跡としては、石器の出土量もきわだっている。

また1点ではあるが縄文式土器も出土しており(第6図)古くから人類の営みがあったことが知られるのである。縄文式土器は中期末頃に比定できると考えられる山形の口縁を持つものである。調査地は標高約38mで鴨川と堀川の氾濫原の丁度中間にあたり舌状の微高地を形成していることが知られる(第7図○印)。鴨川と堀川の間約40mから36mにかけての等高線を詳細に見てゆくと38mから37mにかけての部分、丁度現在の四条烏丸交差点を中心とした一画で、等高線の間隔が大きく開いていることに気づく。このことは、分水嶺

第1表 調査地周辺の弥生時代遺跡

No	遺跡名	所在地	調査年月日	担当者	時期					遺構	報告書	特記事項		
					I	II	III	IV	V				注	
1	長刀鉾町遺跡	京都市下京区四條烏丸東入長刀鉾町 京都市中京区烏丸四條上ル695 三井ビル新築敷地	S.57.4.15 ~57.8.28	寺島孝一	△	○	○	○	○	溝2本 住居址 流路2本	本書	磨製石剣 磨製石鏃 石包丁 手焙り形土器等		
2	平安京左京五条三坊十三町	京都市下京区烏丸通綾小路下ル 住友海上京都ビル	S.54.6.11 ~54.9.29	飯島武次					○	○	検出できず	有		
3	烏丸綾小路遺跡	下京区鶏鉾町 〃 壹侍者町	S.55.9.12 ~55.10.31	木下久世					○		包含層(V~庄)	無		
4		下京区二帖半敷町	S.56.4.8 ~56.7.31	平尾中村					○	○	堅穴住居 庄	無		
5		下京区因幡堂町	S.56.10.19 ~56.12.1	前田平方					○		流路(V~古)	無	壺 高坏 V	
6		下京区繁昌町	S.55.12.15 ~56.2.19	鈴木(久)磯部					○	○	方形周溝墓IV 堅穴住居 庄 流路IV以前	無	石包丁	
7		中京区一連社町	S.54.9.15	上村平方	○					○	流れ堆積 I・V 古後	有	S.54 平安京跡発掘調査概報	
8		中京区七観音町	S.52.11.21 ~53.2.6	吉川石井							流れ堆積	無	時期不明	
9		中京区道祐町	S.56.5.20	大矢							包含層		S.56 京都市内遺跡試掘立会調査概報	
10		柳池中学校内遺跡	中京区東八幡町	S.54.10.16 ~54.12.1	上村					○	◎	流路V未~庄	無	
11			中京区突抜町	S.55.4.25 ~55.5.31	辻(裕)中村	○					○	包含層 I 包含層 V?	無	
12	上巴町遺跡	中京区上巴町	S.57.2.10 ~57.5.11	丸川辻(裕)			○				溝状遺構III	無		
13		中京区東堀川通丸太町下ル七丁目	S.57.2.25 ~57.3.12	大矢	○						流れ堆積 I	有	石包丁、壺、カメ、I S.56 京都市内遺跡試掘立会調査概報	
14		上京区中御門横町	S.54.9.3 ~54.9.30	梅川					○		包含層IV	無	立会	
15	藁屋町遺跡	〃 藁屋町	S.56.3.28 ~56.4.10 S.56.2.9	吉崎大矢					○		Pit IV 炉跡IV 土坑IV 紘	有 無	S.56 平京跡発掘調査概報 立会	
16	〃	〃 西丸太町 〃 藁屋町	S.55.4.1 ~55.7.30	管田木下					○		包含層IV	無	石斧 立会	
17	壬生相合町遺跡	〃 壬生相合町	S.53.8.31 ~53.10.4	家崎中村		○	○	○				無	平安以降の遺構、包含層に混入、中期、詳細は不明	

(第6回調査成果交流会発表資料による)

になる舌状の微高地の中でも、四条烏丸周辺が特に平坦で、居住に適した環境を形成していたことを意味するものであろう。

実際にこの周辺の発掘調査においても第8図、第1表に示すように多くの弥生時代遺跡が発見されている。このうち住居地についてみれば、今回発見された1例に加えて4(二帖半敷町所在)、6(繁昌町所在)で、また6では方形周溝墓(IV様式に伴うもの)が発見されている。

またこの周辺の特徴として、自然流路が多く発見されていることを指摘できよう。

今回の調査での2本の溝に加えて、5(因幡堂町所在)、6(繁昌町所在)で流路が発見されており、また7(一連社町所在)、8(七観音町所在)では「流れ堆積」層中から弥生式土器が確認されているという。

今回の調査で検出された弥生溝3・4内に堆積していたのもかなり大粒の砂が多く、微高地であると言えども、度々氾濫に見舞われた事が推定できるのである。

いずれにせよ、第8図からも見てとれるように今回の調査地を中心として、少なくとも南北1km、東西500mほどの、かなりの広範囲に涉って弥生時代の人々の生活の痕跡が強く残されており、京都盆地の中での、この時期の集落の1つの単位を形成していることは指摘できよう。

第2章 平安京関係の遺構・遺物

今回の調査では、上層に江戸時代から平安時代までの遺構、遺物が検出され、その下層から、弥生時代の溝、住居地などの遺構と、それに伴う遺物を発見した。このうち本章では平安京関係の遺構・遺物を取りあげ、弥生時代の遺構・遺物については第3章にまとめることにした。

まず平安時代の遺構としては、明確な建築遺構は検出できなかったものの、S E 218・220・423など、平安時代後期を中心とする多くの井戸を検出している。このうち特に、S E 423は、丸木を削りぬいた井筒を持つものであり、平安京内における特異な出土例として注目されるものであろう。

鎌倉～室町時代の遺構としては、S K 49で常滑産の甕を検出しており、その他この時期にかかる土壌から多くの良好な土師器皿の出土を見ている。

また桃山時代～江戸時代の遺構、遺物としては、S K 532・339・02など多くの土壌から輸入磁器を含め多くの陶器を出土している。このうちS K 02出土の赤楽茶碗などは興味深いものである。

第1節 平安時代の遺構・遺物

1 平安時代前期の遺物

後世の攪乱が著しく、平安前期の遺構は検出されなかったが、数ヶ所で、レベル36.10m付近に炭を含む5cm程度の包含層を確認している。包含する遺物より9世紀前葉に位置するものと考えられる。数ヶ所で確認したこの層の上層、下層は黄褐色粘土となっており、両層においては遺物を検出していない(さらに下層では弥生時代の遺物を包含する)。

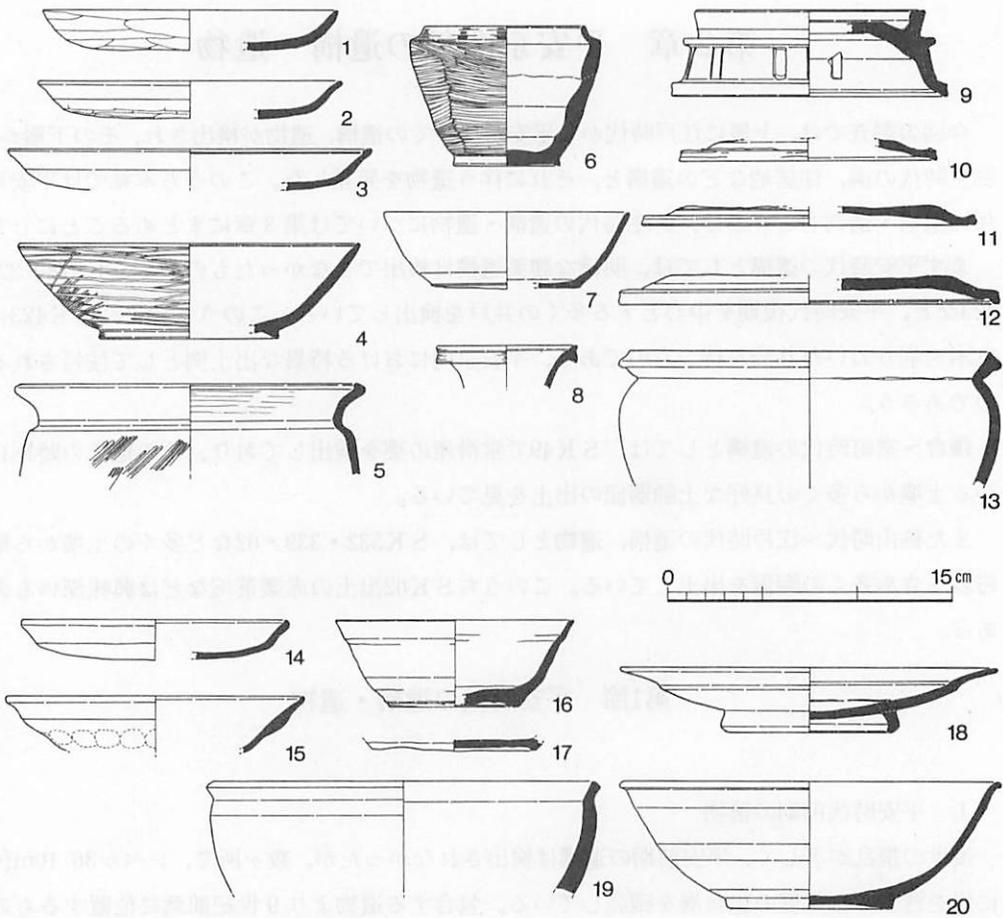
D区西側では、黄褐色砂礫土の包含層を検出し、先のものより新しい9世紀後葉～10世紀前葉と思われる遺物を検出した。

1) 平安時代前期包含層 I (第9図1～13, 図版第23)

土師器(第9図1～6) 皿(1～3) 外面全体をヘラ削り、内面をナデ調整し、口縁がすなおに終るもの(1)、端部が内側に肥厚し、外面底部がヘラ削りのもの(2・3)がある。胎土はいずれも淡赤褐色～淡茶褐色を呈し精良、砂細粒を含む。

壺(4) 外面は広くヘラ削りした後、ヘラ磨きがややすき間をあけ施されている。内面はナデ調整。端部は内側にやや肥厚している。高台は小さく三角状をなす。内面には炭化物が付着している。

壺(6) 須恵器によく見られる小壺と同じ形態をとる土師器の壺。成形、調整法は須恵器のものとは異なり、下2/3を強いナデにより引き上げ、上1/3を継ぎ足している。内部には強いナ



第9図 平安時代前期の遺物

デ痕が残る。外面体部は密にヘラ磨きが施されているが、一部粗になる所もある。口縁部はいいいなナデ。胎土は淡赤褐色を呈し精良。他にさらに小型品の破片一点も検出している。

甕(5) 口縁は大きく外反し端部は上方に折れ曲る。外面体部はハケ目調整。外面口縁部は強いヨコナデ。内面口縁部は横方向にハケ目調整した後、軽いナデ。内面体部は指押しと軽いナデ調整が施されている。胎土は茶褐色を呈し砂分を多く含み粗い。外面にはススが付着。

須恵器(7~13) 坏(7) 灰褐色を呈し軟質で粉っぽい。焼成不良の須恵器と思われる。磨滅が著しいが、高台は付かない器形のようなのである。

円面硯(9) ほぼ平坦な陸部から、鈍な角度で海部につながる。外縁は高く、一条の突帯を設け脚部に続く。脚部には、1単位あたりスカシ 1条の沈線 スカシとなっており全周4単位で構成され、単位間にさらに2条の沈線が入る。胎土は内部が赤褐色、表面近くは暗灰褐色を呈し精良。陸部は使用痕が著しく2mm以上の磨滅が認められる。

蓋(10~12) 外面天井部はヘラ切りの痕が強く残り、その上から軽くナデ調整。他所はすべてナデ調整。胎土は灰褐色~黒褐色を呈し精良である。11は内面に朱が付着しており硯として

使用していた可能性がある。ただし著しい研磨痕は見られない。10は外面外周近くに重ね焼き痕が残り、さらに外側には自然釉が多く付着している。篠窯小柳1号窯¹⁾の出土例によると坏身との重ね焼き痕のようである。

鉢(13) 口縁はシャープさが少なく丸みを持つ。内外面ともナデ。胎土は灰褐色を呈し精良。須恵器は他に壺、甕、平瓶、盤を検出している。

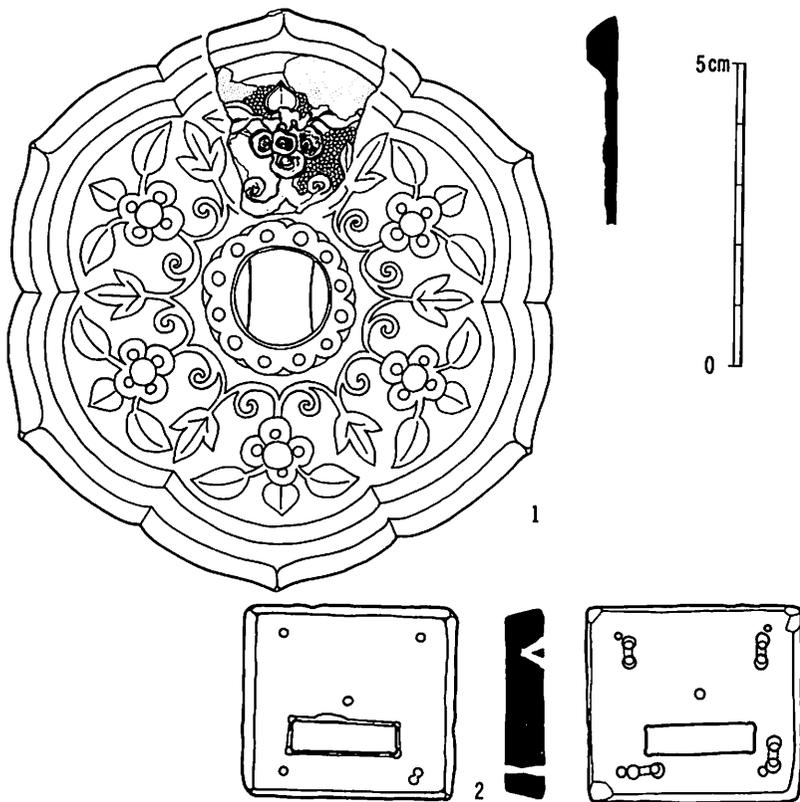
2) 平安時代前期包含層II (第9図14~20, 図版第23)

土師器皿(14・15) 胎土は淡赤褐色を呈し精良。ヘラ削りは見られない。

須恵器坏(16・17) 16は全体に丸味を帯び、体部の引き上げは粗い。胎土は青灰褐色を呈し精良。17の胎土は淡茶褐色を呈し、軟質。焼成不良品と思われる。

灰釉陶器皿(18) 黒笹90号窯式²⁾に相当する。釉は淡緑色透明に発色し、刷毛塗りで施されている。胎土は淡灰褐色を呈し精良。

緑釉陶器碗・鉢(19・20) 19は内面にのみ淡緑色の釉が施されている。胎土は淡茶褐色を呈し精良。20の内面体部はヨコナデ、内面底部は幅3~6mmの幅広の磨きが雑多な方向に施されている。外面体部上1/3はヨコナデ、下2/3は幅3~10mmの強い磨き。高台は削り出しの内反り高台。胎土は淡茶褐色を呈しやや軟質。釉は淡緑色に発色し全面に施されている。この碗に見



られる磨きは、土師器等に見られる「ヘラ磨き」とは様子が異なり、あまり規則性をもたず、幅広のものとなっている。この磨きについては寺島孝一氏が、石作窯等の窯跡で検出される、「辺に研磨痕がある陶片」に注目しており³⁾、この陶片を製作道具の一つとして器面の磨きに用いたのではと考えている。

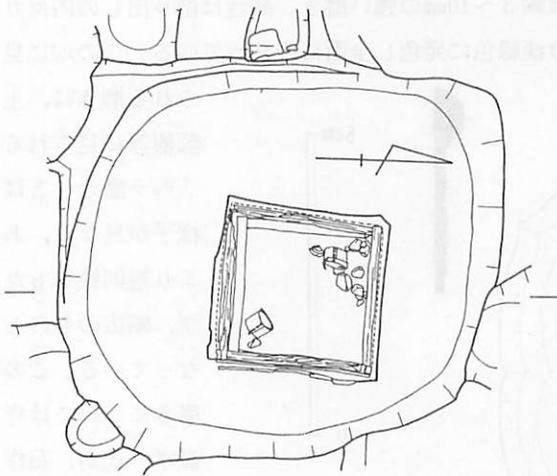
第10図 鏡・石帯実測図

3) その他の平安時代前期の遺物(第10図, 図版第23)

唐草文六稜鏡(第10図1, 図版第23の9) A区の主に鎌倉時代～室町時代の遺物を包む包含層より検出した。およそ文様1単位分の破片であり, 復元すると六稜となるようである。復元後の径は約9.5cmである。文様は中央に4弁の花を配し3ヶ所より葉を出す。下端からはツルを出し3枚の葉をへて次の単位に続く。文様の間にはくまなく魚々子目が入る。縁は断面台形をなし宝珠型に稜をなしている。表面は銀黒色を呈する。サビはひどくなく磨けばいまだに使用できるかとも思われる。同様の文様の鏡は, 東大寺大仏殿より出土している。大きさも同じ所から同範の可能性があり⁴⁾。ただし東大寺のものは六花鏡となっており, 稜を作っていない。だが稜部を除いた部分の縁のカーブは本品と同じであり, 東大寺のものは稜の部分を研ぎ落したのものとも考えることができる。東大寺のものは奈良末～平安初頭のものとしてされている。

石帯(巡方)(第10図2, 図版第23の8) 石質は流紋岩系のものである。表面と4辺は良く磨かれており, 各稜は軽い面トリが施されている。裏面は他所に較べやや磨きが粗い。4隅及び中央に径1.3mm程度の貫通する穴が通る。裏面はスミ4ヶ所に「V」字形のもどり穴があいている。

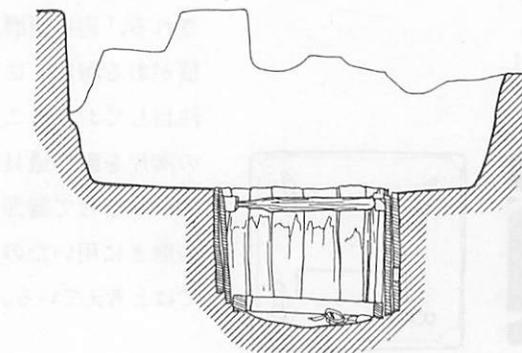
左上の穴は貫通に失敗しており, 「V」字の穴と共通し, 本来の穴は貫通していない。下部にあけられた長方形の窓は4スミに貫通した穴の痕跡が残る。



2 SE-220(第11・14図, 図版第2上)

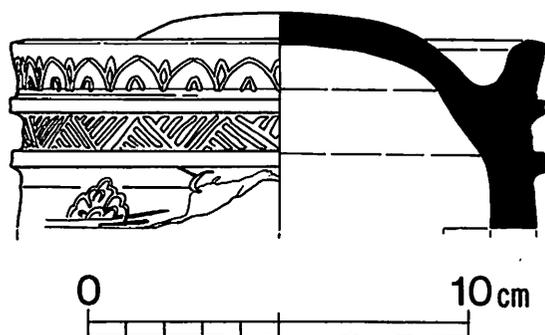
埋土上層は黄褐色粘質土(小さく破裁された焼土を含む。有機質は分解している), 下層は灰褐色粘質土で十分に水分を含む。掘方中心部よりやや南西方向に偏った位置に木組の井筒を検出した。

木組は1辺約100cmの横棧隅柱型, 底部より上約80cmが残存する。横棧はホゾを切って組合せており, 隅柱は棧間にはめ込む形をとっている。タテ板は, 幅15~25cm, 厚さ3.5~4cm, 長さ80cm以上の板を1辺に6~8枚2重に廻らせている。タテ板にはホゾ穴の切られ



第11図 井戸(SE 220)実測図

たものが見られ廃材を再使用したものかと思われる。底部は5～10cmの礫を敷きつめており、曲物等の水溜は検出していない。



第12図 緑釉円面硯実測図

緑釉円面硯(第12図、図版第24の5) 陸部は強く丸味を持ち、稜を作らずにやや深目の海部につながる。外縁はやや外傾し脚にかけ2条の突帯をもうけ、上から蓮華文、山杉文、半裁の宝相華の陰刻文様を配している。脚には横広のスカシが入るようである。陸部・外面は主にへう調整、海部・裏面はナデ調整。胎土は白灰色を呈し、きわめて硬質。やや粒感はあるもののきめ細く、均質で混雑物は

ほとんど見られない。また白色土器に見られるような粉っぽさはまったく無い。釉は陸部を除いて全面に施されている。釉厚は薄いが素地にしっかり定着しており、剝離は見られない。暗緑色に発色する。

本品は他に例を見ないものであり、若干の検討を加える。

①素地に使用されている土は他の緑釉陶にはほとんど見られず、唯一の類例として平安京左京五條三坊十五町の井戸B⁹⁾(11世紀前葉)出土の緑釉・壺がある。胎土は共通しており、釉薬は厚く施されているが、同様の発色をしている。本品はこの壺と同じ生産地で作られたものと考えられる。

②円面硯の生産は9世紀いっぱいまでと考えられており、10, 11世紀に相当する資料は現在発見されていない。

③国産円面硯に緑釉を施したものは本品以外には発見例がなく、他の硯の型態においても緑釉の施されたものはきわめてまれで、風字硯2点⁹⁾が発見されているにすぎない。

④上段に配された蓮華文は陰刻文としてはめずらしい文様である。檜崎彰一氏の御教示によれば、国分寺市武蔵国分寺僧寺より出土した緑釉花文皿⁷⁾(11世紀)の文様(蓮花文)と同様の意味として、密教的要素を持ち合わせている可能性があり、この種の文様は11世紀以後に現れるものであろうとのことである。

SE-220は、他の出土遺物から、11世紀初頭に位置づけられる。そこで②より本品を平安前期からの伝世品とした場合、①④と矛盾を生ずる。また③から、緑釉陶の円面硯という他に例を持たない形態を示し、胎土や器形も、須恵器の円面硯の系譜とは直接つながらない所から、単に円面硯に緑釉を施したのものとは、とらえられない。外国製品と考えた場合、中国等において類似のものの発見例は報告されておらず、積極的な意見は見あたらない。

土師器皿 [A₁タイプ(1), Cタイプ(2～3)その他(5)] いずれも小片で器形を復元するのは困難であったが、精査した所では、Aタイプは16cm～11.5cm級、Cタイプは11cm級を確認

した。A₁タイプ(1)の胎土は淡赤褐色から灰褐色を呈し精良。Cタイプ(2~4)は薄手で作りはていねいである。胎土は淡茶褐色~淡茶褐色を呈す。5はロクロ成形した皿で底部には粗い糸切痕が残る。胎土は淡黄褐色~灰褐色を呈しやや砂分を含む。硬質。

白色土器(6~9・12・29) 胎土は白褐色を呈しやや硬質、粗く粉っぽい。6~8は削り出し高台、9はヘラ切り。29は鉢と思われ、胎土は白灰色を呈し精良。硬質。外面はロクロ痕が残る。底部は糸切り。内面は摺り痕が著しく、外面一部にはススの付着が見られる。高坏(12)は白色土器碗、皿類とほぼ同様の胎土。他に多角形に面取りした脚部も検出している。

灰釉陶器(13~19) 13は井筒内最深部より検出している。内面に1条の沈線を描き、さらに内側に輪状の重ね焼痕がある。高台内には糸切り痕が残る。釉は斑点状、浅緑に発色し、内面重ね焼き部分より外側に付着。胎土は灰褐色を呈し、きめ細かく、精良。14は軽い「く」の字状の高台で、高台内の糸切り痕はきれいに消されている。釉は白灰色に発色。胎土は灰褐色を呈し精良。15は低く丸みを帯びた高台で、糸切り痕はナデにより軽く消されている。胎土は白灰色を呈し精良。16~19は高い高台を持ち、高台内に糸切り痕を残す。釉は白灰色~淡緑色に発色。胎土は淡茶褐色~白灰色を呈する。灰釉陶器はいずれも東海地方の産で、13・15~19は東山72号窯式⁹⁾、14は折戸53号窰式に位置すると思われる。

緑釉陶器(20~24) 1は段皿で、台形の低い高台が付く。釉は全面に施され、粘質土層内で検出したために黒色に変色している。内面にはトチン痕が残る。胎土は硬質で、灰褐色を呈す。21は硬陶で、薄緑色の釉が施されている。内面、高台内部にトチン痕が残る。22~24は軟陶で、緑~濃緑色の釉が施されている。20・21は東海系、2~4は近江系であろう。他に輪花状の碗の破片を検出している。

黒色土器(25・26) A類とB類を検出している。量的にはB類の方が多い。25・26はB類、内口縁に沈線が廻る。体部は内外面とも透間無くヘラ磨きが施されている。

土製埴(10・11) 10は内面から外口縁にかけナデ調整、外体部は指押しで刷手目は見られない。胎土は茶褐色を呈し1mm程度の砂粒を含む。外面はススが多く付着。これと同型式で端部を丸く反すものも検出している。11は厚く短い罎に低い口縁がやや内傾して付く。胎土は暗茶褐色を呈し粗く多くの砂を含む。外面にはススが付着。本品の報告例は少ないが、平安時代中期には一般的に見られる埴の形態の一つのようである。

須恵器(27・28) 27は把手を有する蓋で胎土は青灰色を呈する。28は大きく肥厚した玉縁を有する鉢で胎土は青灰色を呈し精良。篠窯の編年⁹⁾では、前山2・3号窯様式以後と思われる。

白磁(30) 1点のみ検出。蛇の目高台、胎土は白色を呈し精良であるが微細な黒色粒を見る。釉は透明、純白色に近いが、わずかに灰青味を帯びる。全面に施釉し畳付の部分の釉のみ妻き落している。本品は最近の中国での古窯跡の発掘¹⁰⁾や研究により明かになりつつある邢窯の白磁と思われる¹¹⁾。

釘(31, 図版第24の8) 6点検出している。材質は鉄。頭部は約90度折り曲げやや扁平に叩いている。断面は四角形。井戸井筒には釘が使用されていた痕跡は無く、いずれに用いられて

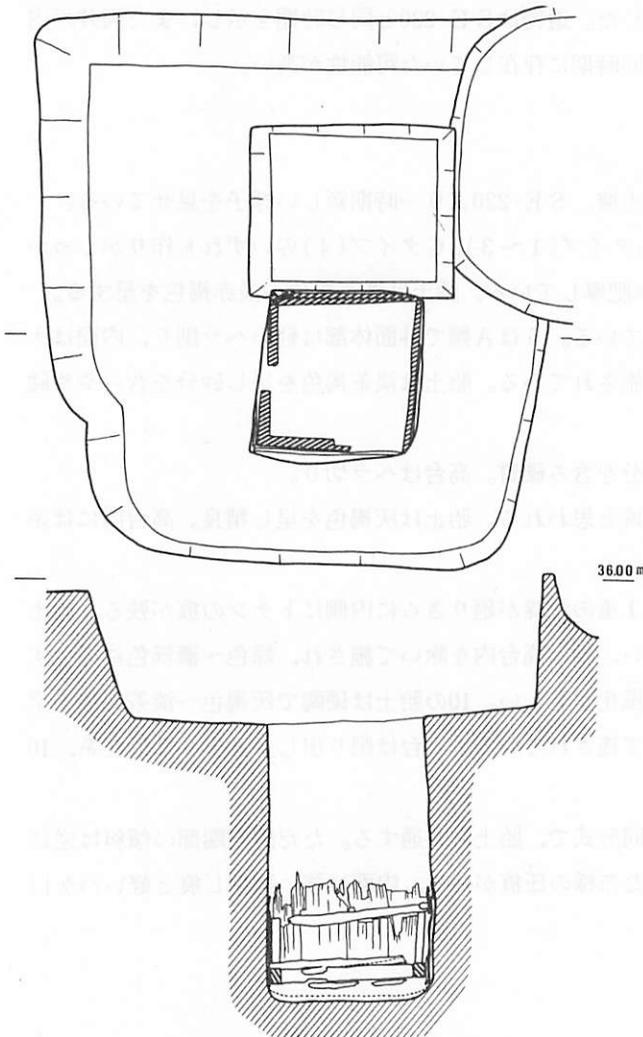
いたかは不明。

古銭(図版第24の9) 乾元大宝を1枚検出している。初鑄は958年で11世紀初頭には鑄造を停止している。

曲物(32・33) 32は側板と底板の一部を欠損するが、ほぼ完形である。底板は、はずれた状態であった。底板はやや楕円形を呈しているが、側板の形はほぼ円形であったと思われる。

口径17.1cm、高さ12.5cmを測る。側板の厚さは3mm前後。底板は整形が粗く、厚さも5～8mmと一様ではない。また、一部にこげ跡、きず跡(刃物きず)が認められる。側板との接合のために打った木クギの跡を4ヶ所確認することができた。

側板は一重で、重ねの幅は6.5cmである。この部分が厚くなるのを防ぐため、側板を薄くしてある。そして、重ねの内側と、対向内側の約13cmの間に、幅4～10mmの斜め方向にきざみ目がつけられている。



第13図 井戸(SE 218)実測図

とじ目は幅約6mmの桜皮を使い、1列のみぬいとめている。

用途はつるべを考えたい。絵巻物にみるつるべは、底板にひもを十字にかけて使われている。これがはずれて井戸内に残った場合、出土する曲物がつるべであるかどうかは判断しにくい。この曲物もひもがかけてあったような痕跡はなかった。しかし、井戸内から出土する曲物の中につるべが含まれている確率はかなり高いと考えられる。あえてつるべの可能性を指摘する。

33は底板と側板の一部を欠く漆塗曲物である。漆は内外側両面に認められるが、内側に比べ外側の漆はかなり薄い感がある。さらに外側はかなりの部分の漆が欠落している。

口径15.8cm、現存高は14.5cmであるが、欠損部分を考えても高さは15～16cm程度のもと思われる。側板の厚さは3mm前後

である。

側板は一重で、重ねの部分の幅は約10cmである。この部分の厚さを整えるため、外側にくる側板の外側をより薄く加工している。そして、外板内側全面に幅4～10のきざみ目が認められる。

とじ目は、幅約1.3cmの桜皮を用いて、1列のみでとじている。つるべにくらべ、とじ目は粗い。

用途を考えると水桶のように思われるが、漆塗をしていることから日常生活用具としても、使われる場が少し違っているのかもしれない。

3 SE-218(第13図・図版第3の上)

SE-220の北西で検出し、SE-220とは3m余りしか離れていない。上層部は攪乱されていたが、下層で井筒及び曲物の施設を検出した。遺物はSE-220と同じ時期を示し、また両井戸内より同一個体の破片を検出しており、同時期に存在していた可能性が高い。

4 SK-215(第15図)

SE-220直上で検出した円形の浅い土壇。SE-220より一時期新しい様子を見せている。

土師器(A₁タイプ、Cタイプ) A₁タイプ(1～3)、Cタイプ(4)のいずれも作りがしっかりしているが、SE-220のものに較べ肥厚している。胎土は淡茶褐色～淡赤褐色を呈する。

黒色土器(5) A類でB類を検出している。5はA類で外面体部は軽いヘラ削り、内面はナデ調整の後、軽く幅の広いヘラ磨きが施されている。胎土は淡茶褐色を呈し砂分を含みやや硬質。

白色土器(6) 胎土は白色を呈し砂分を含み硬質。高台はヘラ切り。

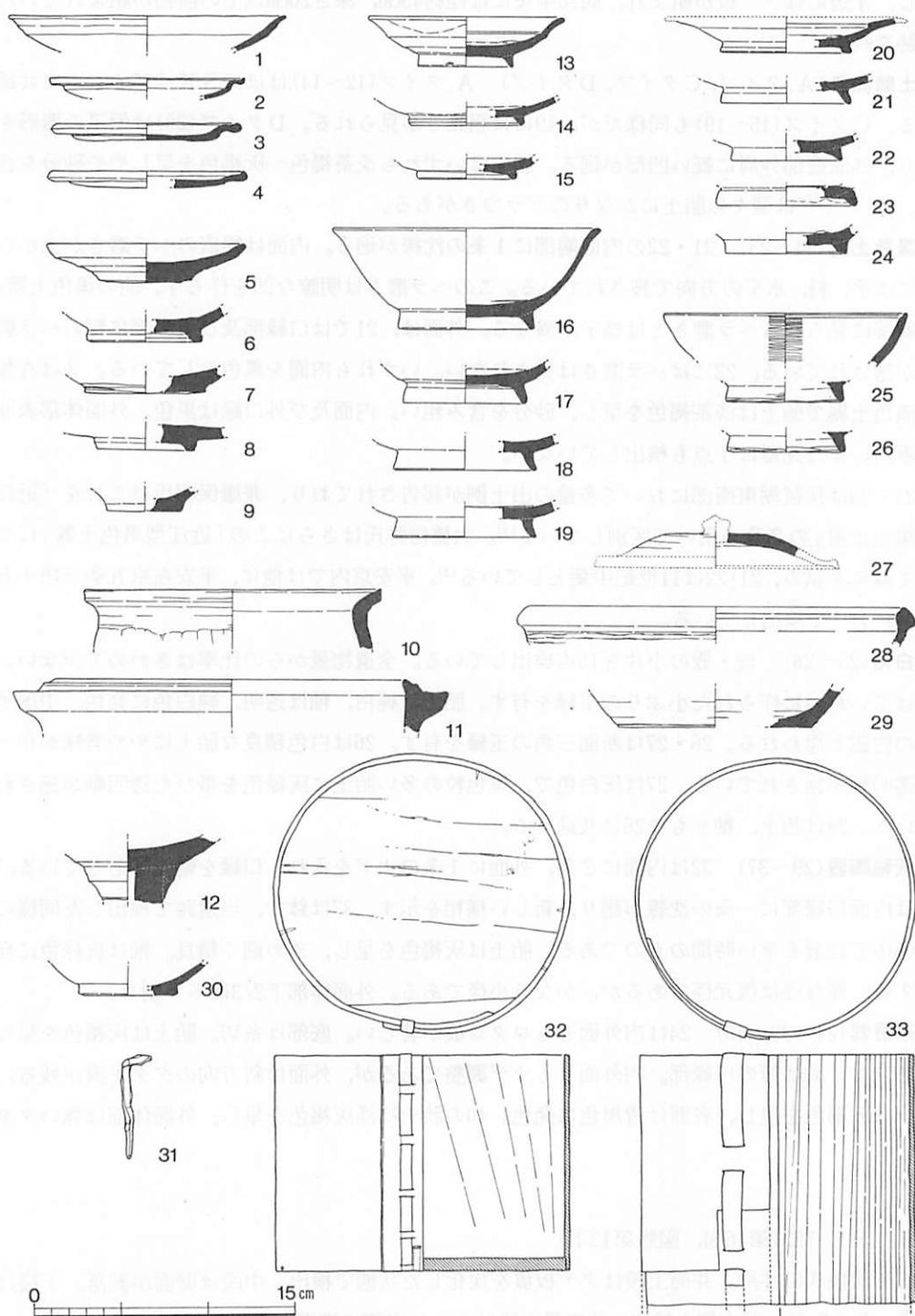
灰釉陶器(7) 口縁が輪花状になる堦と思われる。胎土は灰褐色を呈し精良。高台内には糸切りが残る。

緑釉陶器(8～10) 8・9の内面は1重の沈線が廻りさらに内側にトチンの痕が残る。胎土は軟陶で淡赤褐色を呈し砂分を含み粗い。釉は高台内を除いて施され、緑色～濃緑色に発色する。8は一度火災にあっているらしく風化が著しい。10の胎土は硬陶で灰褐色～淡茶褐色を呈す。釉は薄緑に発色し、高台内を除いて施されている。高台は削り出し。8・9は近江系、10は京都近郊の産と思われる。

土製埴(11) SE-220出土のものと同形式で、胎土も共通する。ただ鋤先端部の傾斜は逆になっており、外面体部は織目のくずれた布様の圧痕が残る。内面は強い指押し痕と軽いハケ目調整。外面にはススが付着。

5 SE-531(第15図、図版第25)

近世の溝SD-515の底部に位置し上部は完全に削平されている。井筒は1辺約100cmの方形を



第 14 图 SE 220 出土遺物実測図

呈し、4辺にはタテ板が生まれ、底部中央には径約45cm、深さ20cm以上の曲物が組み立てられた痕跡を残す。

土師器皿(A₁タイプ、Cタイプ、Dタイプ) A₁タイプ(12~14)はほぼS K-215のものに共通する。Cタイプ(15~19)も同様だが、19には粗雑さが見られる。Dタイプ(20)は扁平の器形をとり、外面底部外周に軽い凹部が廻る。胎土はいずれも淡茶褐色~灰褐色を呈しやや砂分を含む。A₁タイプは個々の胎土にかなりのバラつきがある。

黒色土器(21~23) 21・22の内面端部に1条の沈線が廻る。内面は幅広のヘラ磨きが上から順に水平、斜、水平の方向で施されている。このヘラ磨きは明瞭な凹を作らず、他の黒色土器、瓦器塚に見られるヘラ磨きとは様子が異なる。外面は、21では口縁部及び下半部に粗いヘラ磨きが施されている。22にはヘラ磨きは見られない。いずれも内面を黒色としている。3はA類の黒色土器で胎土は淡茶褐色を呈し、砂分を含み粗い。内面及び外口縁は黒色、外面体部表面は赤色。また瓦器は1点も検出していない。

21・23は琵琶湖東南部において多量の出土例が報告されており、兼康保明氏はこれを「近江型黒色土器」の名称を用いて区別している¹²⁾。大橋信弥氏はさらにこの「近江型黒色土器」について編年を試み、21・22は11世紀中葉としている¹³⁾。平安京内では他に、平安左京五条三坊十五町井戸D¹⁴⁾で検出している。

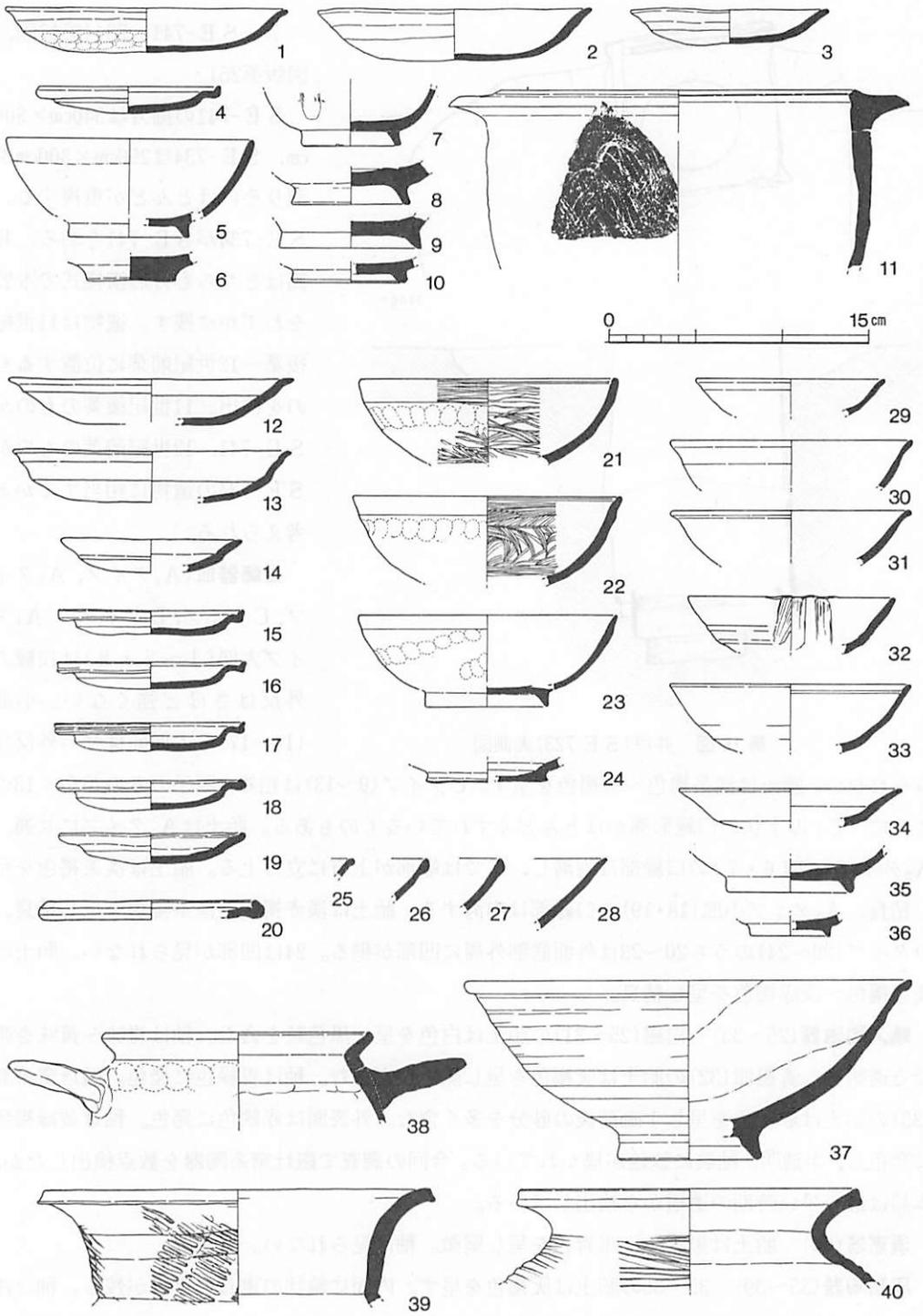
白磁(25~28) 塚・壺の小片を15点検出している。全遺物量からの比率はきわめて少ない。25はていねいに作られた小ぶりの玉縁を有す。胎土は純白、釉は透明、純白色に発色。中国邢窯の白磁と思われる。26・27は断面三角の玉縁を有す。26は白色精良な胎土にやや青味がかかった透明釉が施されている。27は灰白色で、黒色粒の多い胎土に灰緑色を帯びた透明釉が施されている。28は胎土、釉ともに26に共通する。

灰釉陶器(29~37) 32は内面に2条、外面に1条のナデを入れ、口縁を輪花状としている。33は内面口縁部に1条の沈線が廻り、新しい様相を示す。37は鉢で、当遺跡で検出した同様の鉢の中では最も早い時期のものである。胎土は灰褐色を呈し、きめ細く精良。釉は灰緑色に発色する。高台径は復元径であるが、かなり小径である。外面体部下2/3はヘラ削り。

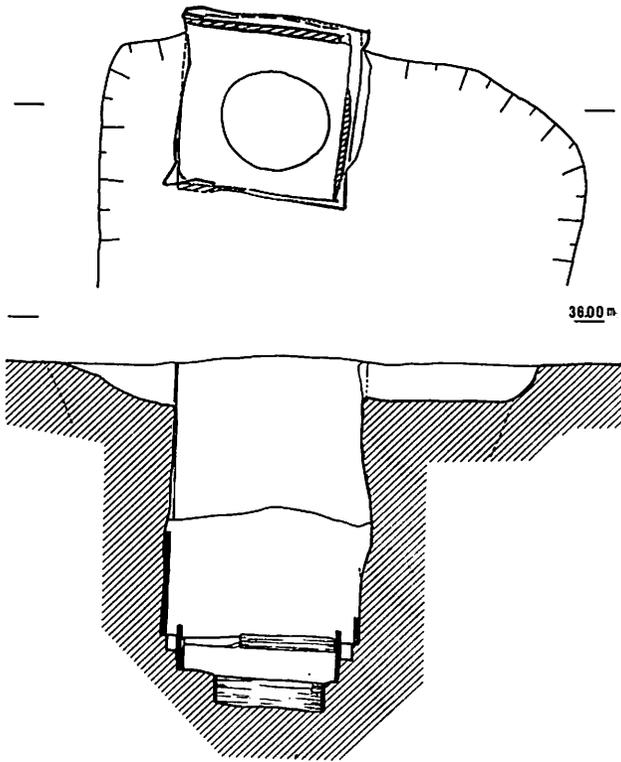
須恵器(24・39・40) 24は内外面ともロクロ痕が著しい。底部は糸切。胎土は灰褐色を呈し砂を含む。39は壺の口縁部。内外面ともナデ調整であるが、外面は斜方向のタタキ痕が残る。胎土は赤褐色を呈し、表面は青黒色に発色。40の胎土は淡灰褐色を呈し、外面体部は強いタタキ。

6 S E-723(第16図、図版第13下)

方形横棧式の井戸。井筒上段はタテ板痕を炭化した状態で検出。中段は壁面が剥落。下段は横棧、タテ板の一部木質を検出。井筒最下段はさらに内側に横板を方形に組む。底部は径70cm、深さ20cm以上の曲物を設置している。井筒上段が炭化していたのは火災に合ったものかと思われる。検出遺物はごく少量で11世紀後葉の土師皿を検出している。



第15图 SK 215, SE 531 出土遺物実測図



第16図 井戸(SE 723)実測図

7 SE-741・734(第17図, 図版第25)

SE-741の掘方は340cm×300cm, SE-734は290cm×300cmを測りそのほとんどが重複する。SE-734がSE-741を切る。井筒はどちらも方形横棧式で木質をわずかに残す。遺物は11世紀後葉～12世紀前葉に位置するものを検出。11世紀後葉のものがSE-741, 12世紀前葉のものがSE-734の遺物に相当するかと考えられる。

土師器皿(A₁タイプ, A₂タイプ, Cタイプ, Dタイプ) A₁タイプ大皿(1～5・8)は口縁の外反はさほど強くない。小皿(14～17)も大皿同様強い外反は

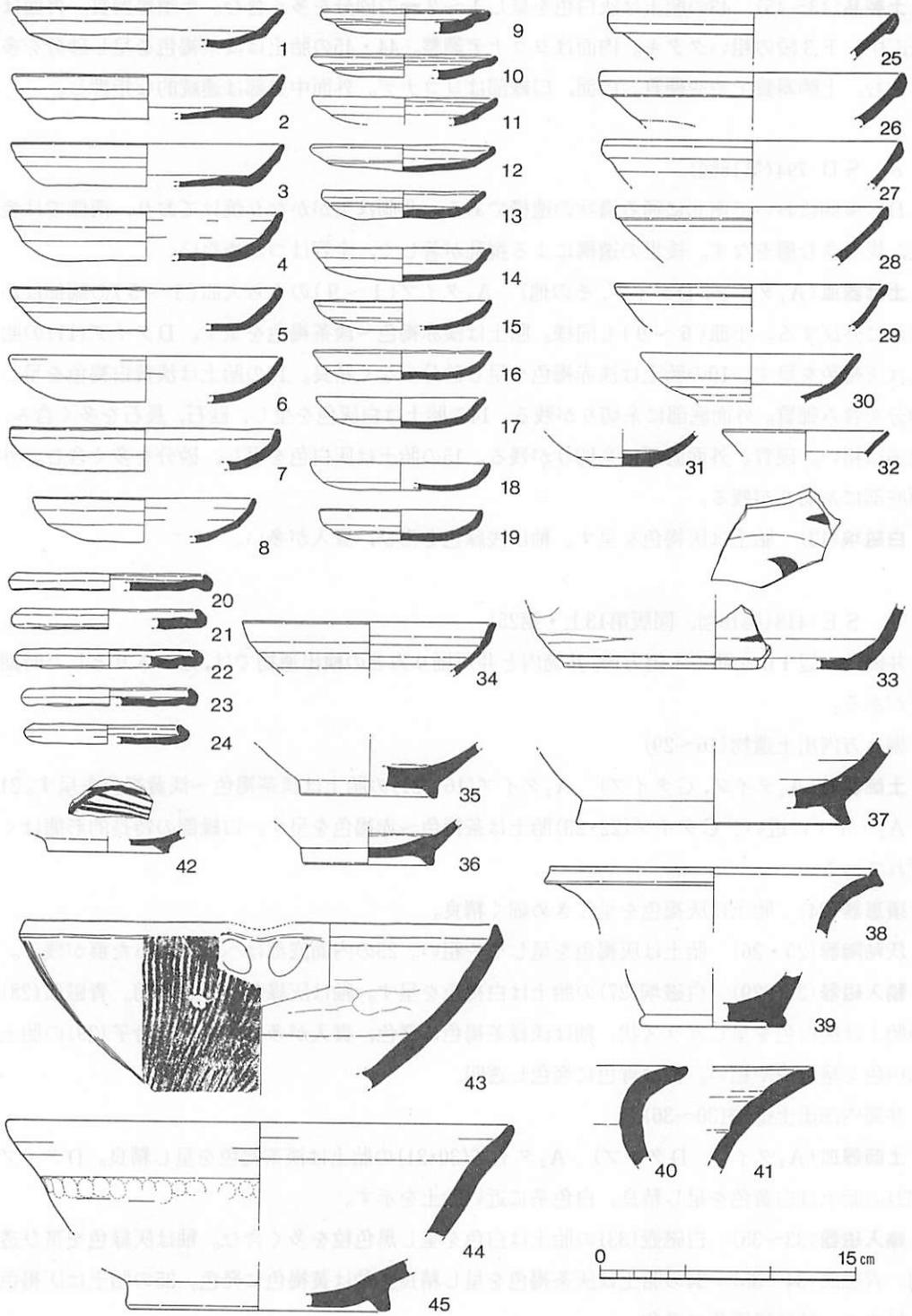
みられない。胎土は淡茶褐色～茶褐色を呈す。Cタイプ(9～13)は粗雑, 厚手のものが多く13のように「て」の字状の口縁形態がほとんどくずれているものもある。胎土はA₁タイプに共通。A₂タイプ大皿(6・7)の口縁部は内湾し, 7では端部が上方に立ち上る。胎土は淡茶褐色を呈し精良。A₂タイプ小皿(18・19)の口縁部は内湾する。胎土は淡赤褐色～淡茶褐色を呈し精良。Dタイプ(20～24)のうち20～23は外面底部外周に凹部が廻る。24は凹部が見られない。胎土は淡茶褐色～淡赤褐色を呈し精良。

輸入陶磁器(25～33) 白磁(25～31)の胎土は白色を呈し黒色粒を含む。釉は青味～黄味を帯びる透明釉。青磁皿(32)の胎土は灰褐色を呈し黒色粒を含む。釉は青緑色に発色。磁灶窯系盤(33)の胎土は赤灰色を呈し1mm前後の砂分を多く含む。外表面は赤鉄色に発色。釉は黄緑褐色に発色し, 半透明。釉裏に鉄絵が描かれている。今回の調査で磁灶窯系陶器を数点検出したが, 本品は最も早い時期の遺構から検出している。

須恵器(34) 胎土は黒灰色～黒青色を呈し堅微。釉は見られない。

灰釉陶器(35～39) 35・36の胎土は灰褐色を呈す。内面に輪状の重ね焼き痕が残る。釉は浅緑透明, 斑点状に付着。38の胎土は灰褐色～茶褐色を呈し, 砂分を含む。39の胎土は白灰色を呈しきめ細かい。内面底部に浅緑の釉が付着。

瓦器(42) 胎土は灰白色を呈す。内面は粗いヘラ磨き。



第 17 図 S E 741・734 出土遺物実測図

土製品(43~45) 43の胎土は灰白色を呈し1~2mmの砂分を多く含む。半須恵器質。外面は上, 中, 下3段の粗いタタキ。内面はヨコナデ調整。44・45の胎土は淡茶褐色を呈し砂分を多く含む。土師器質でやや硬質。内面, 口縁部はヨコナデ。外面中央部は連続的な指押し。

8 SD-794(第18図)

D区東側において南北に通る溝状の遺構である。北側は土がかなり焼けており, 南側では焼土, 炭を含む層をなす。後世の遺構による攪乱が著しく, 全容はつかめない。

土師器皿(A₁タイプ, Dタイプ, その他) A₁タイプ(1~9)のうち大皿(1~5)の端部はわずかに外反する。小皿(6~9)も同様。胎土は淡赤褐色~淡茶褐色を呈す。Dタイプ(11)の胎土は灰褐色を呈す。10の胎土は淡赤褐色を呈し砂分少なく精良。13の胎土は淡黄白褐色を呈し砂分を含み硬質。外面底部に糸切りが残る。14の胎土は白灰色を呈し, 珪石, 長石を多く含み, 粒子は粗い。硬質。外面底部に糸切りが残る。15の胎土は灰白色を呈し, 砂分を多く含む。外面底部に糸切りが残る。

白磁碗(12) 胎土は灰褐色を呈す。釉は浅緑色を帯び, 貫入が多い。

9 SE-418(第18図, 図版第13上・第25)

井筒は一辺1mを測る木組方形。井筒内と井戸掘り方との検出遺物では, はっきりとした時期差がある。

掘り方内出土遺物(16~29)

土師器皿(A₁タイプ, Cタイプ) A₁タイプ(16~21)の胎土は淡茶褐色~淡黄褐色を呈す。21はA₂タイプに近い。Cタイプ(22・23)胎土は茶褐色~赤褐色を呈す。口縁部の特長的形態はくずれている。

須恵器(24) 胎土は灰褐色を呈しきめ細く精良。

灰釉陶器(25・26) 胎土は灰褐色を呈しやや粗い。25の内面底部はヘラで削った痕が残る。

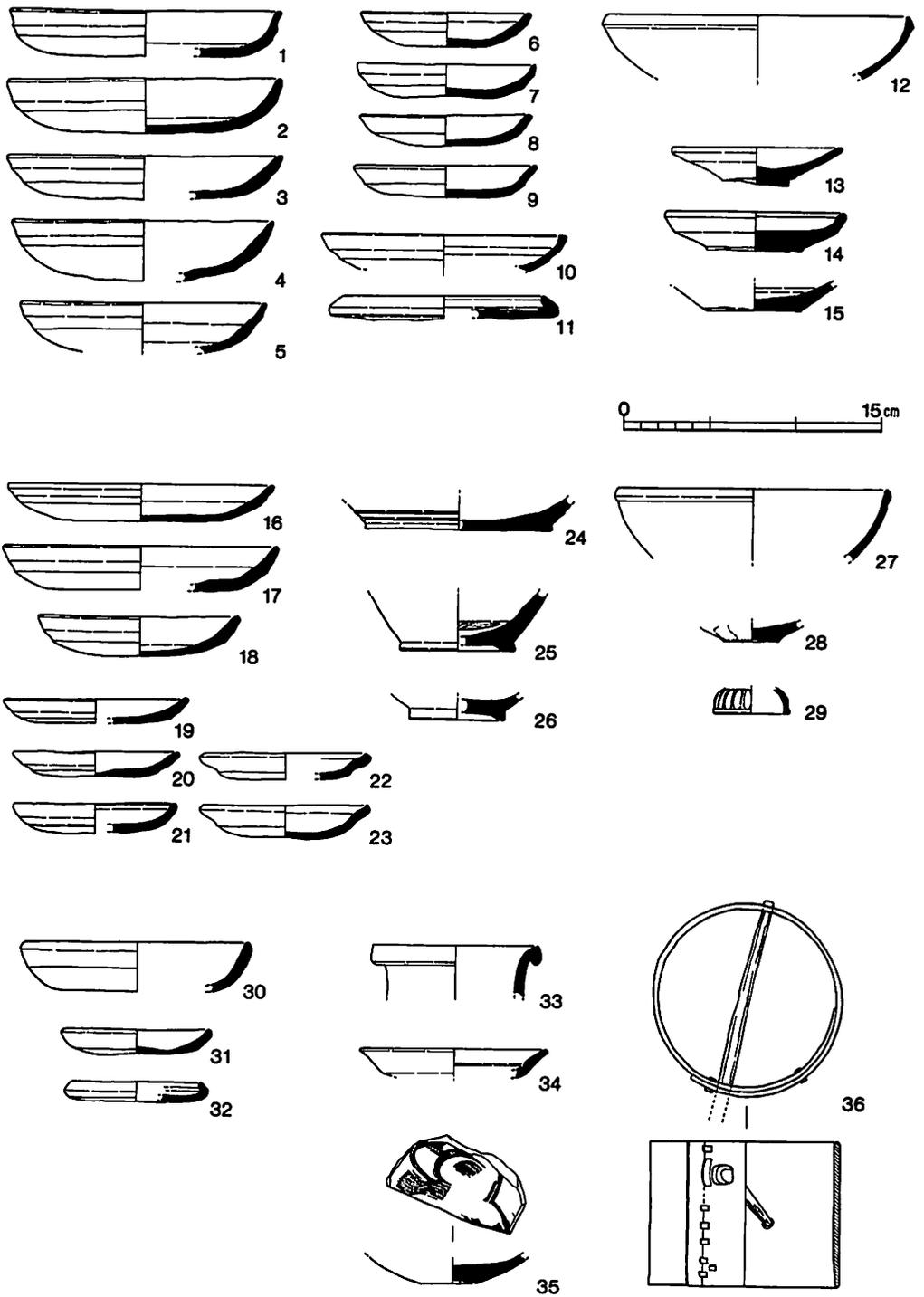
輸入磁器(27~29) 白磁碗(27)の胎土は白褐色を呈す。釉は灰緑色を帯び透明。青磁皿(28)の胎土は灰白色を呈しガラス状。釉は淡緑茶褐色に発色, 貫入が多い。青白磁合子(29)の胎土は白色を呈しやや粗い。釉は青色に発色し透明。

井筒内部出土遺物(30~36)

土師器皿(A₂タイプ, Dタイプ) A₂タイプ(30・31)の胎土は淡茶褐色を呈し精良。Dタイプ(32)の胎土は白黄色を呈し精良, 白色系に近い胎土を示す。

輸入磁器(33~35) 白磁壺(33)の胎土は白色を呈し黒色粒を多く含む。釉は灰緑色を帯び透明。青磁皿(34・35) 34の胎土は灰茶褐色を呈し精良。釉は黄褐色に発色。35の胎土は灰褐色を呈する。釉は緑灰色に発色。

柄杓(36) 杓の形は円形で口径5.4cm, 高さ4.1cmを測る。側板の厚さは1.3~1.5mm。底板は欠除しているが, 側板底部内側周縁に底板との接合痕が認められる。これから推測すると, 底



第18图 SD 794, SE 418 出土遺物実測図

板の厚さは約4mmと思われる。また、側板との接合は木クギを用いておらず、ただはめ込んだだけのものと思われる。側板の重ねは一重で、約5cmの幅で重ねている。とじ目には幅約2mmの桜皮を用いている。

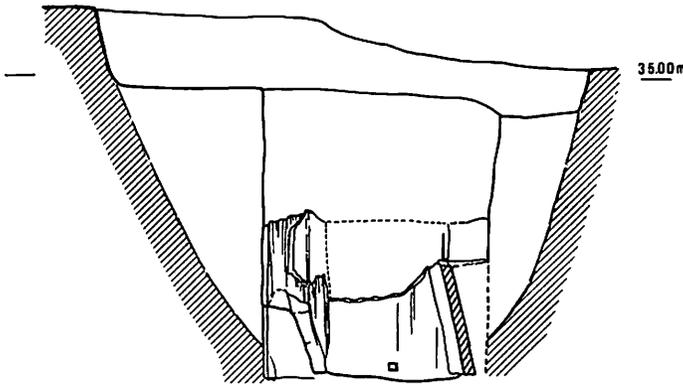
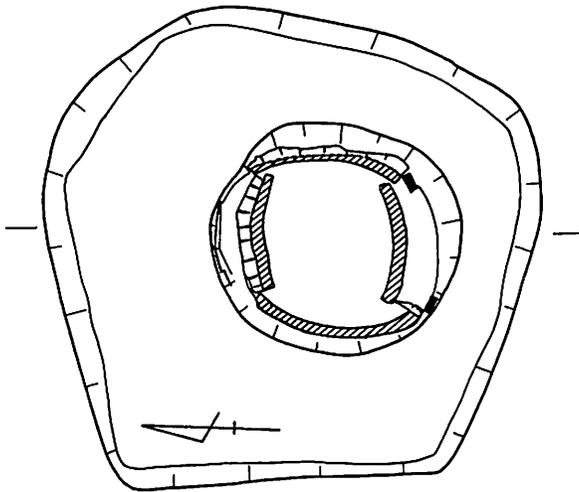
柄の差し口は、元の方が径4mmで、高さ3.1cmのところに、先の方は径2mmで、高さ1.7cmのところにあけられている。両穴とも、穴をあけることによって生ずる側板への影響に対しては、何の処理もしていない。他遺跡の出土例をみると、差し口の周囲を桜皮でぬいとめたり、柄の先端が側板にあたる部分にコケシ状の木片を側板にぬいとめるなどして、側板を保護している場合がある。また側板の内側に柄の一部が残存していた。腐朽が著しく詳細は不明だが、先端が一段細くなっており、この段が側板と組みあっていたものと思われる。

9 SE-423(第19・20図 図版第14・29)

丸太割り抜き井戸。丸太は4分割して組まれており、残存状態のよい1枚では弧80cm、厚さ7cm、高さ66cm以上を測る。外側は未加工、内面もノミなどによる加工は見られず、形成層か

らはぎ取った状態そのままのコルク層を使用している。4分割した丸太材は、まず対面する2枚を組み込み、残りの部分は製材した板材を裏打ちした後、他の2枚をやや内側にずらして組んでいる。丸太材の1枚には、中央下部に6cm×7cmの方形の穴があいている。埋土は暗灰色の礫の多い粘質土で、遺物はいずれも小片で検出している。

円塔(45) 高さ3.7cm・径5.4cmを測る。外面はていねいな回転ヘラ磨き(幅1~2mm)、台部はおよそ9面にカットしている。内部には空間を設け、布のしぼり痕、あるいはヘラ押しの痕かと思われるものが見られる。外面には緑釉が施され、淡



第19図 井戸(SE 423)実測図

緑色に発色。胎土は土師質で淡茶褐色を呈し、やや砂を含む。釉下の胎土約1mmは炭素が吸着しており、黒ずんでいる。

土師器皿(A₂タイプ、Dタイプ、その他) A₂タイプ大皿(1~4) 口縁の湾曲がほとんど見られず、A₁タイプの様子を残す1・2と、口縁が内湾するA₂タイプの強い特徴を持つ3と、口縁が直線的に立ち上りA₃タイプの特徴を現わし始めている4を検出している。小皿は規格からはずれた5、A₁タイプの6とA₂タイプの7・8を検出している。Dタイプは底面外周にわずかに凹みが見られる。胎土はいれも淡茶褐色~暗茶褐色を呈しやや砂分を含む。10・11はロクロ成形の糸切皿で白黄色のやや砂分の多い胎土である。

高坏(12・13) 12は小型の高坏の坏部で脚部との接合面には糸切りが残る。接合部外面は粘土を粗く連続的に盛り上げ、一見花卉風に見える。胎土は淡茶褐色を呈し、やや砂分を含む。13は脚部との接合部は貼り付けた粘土をナデによりていねいに仕上げている。胎土は精良で黄白色を呈す。粗く面取りをした脚部が付くものと思われる。

白磁(14~19・24・25) 14・15は大ぶりの玉縁を有する碗で、14は直線的な体部でやや薄手。15はやや内湾する体部で厚手。胎土は14が黒色粒が少ないのに対し15はこれを多く含む。釉は14・15ともやや灰色に濁った透明釉。16は玉縁を有さない碗で他は15に類似する。17は直線的に端部を折り返しシャープな作り、他は14に類似する。18は薄手で端部は折り返し、数ヶ所にキザミ目を入れ、内面はこれに合せ一条の細い凸帯をもうけて全体を輪花状にしている。胎土は白色、黒色粒を含む。19は内底部を平面に仕上げ、明良な屈曲部を作って体部につながる。釉は黄白色に発色し貫入が多い。24・25は白磁四耳壺の口縁と体部。釉は内外全面に施されやや灰緑色がかった透明釉。口縁は強い折り返しにより成形。耳の付く肩部には幅4mmを測る浅い沈線が2条廻る。耳には3条の粗い凹凸があり両端は指で押え体部に密着している。

青磁(20~22) 20の胎土は灰褐色を呈し黒色粒が多い。釉は青緑色に発色。21は内面に強い沈線が廻る。作りはやや粗い。他は20に類似する。22は内面にのみ釉が見られ、淡青緑色に発色する。高台の作りは粗く、ヘラ削りをした後、中央部をわずかに掻き取って凹部を作る。

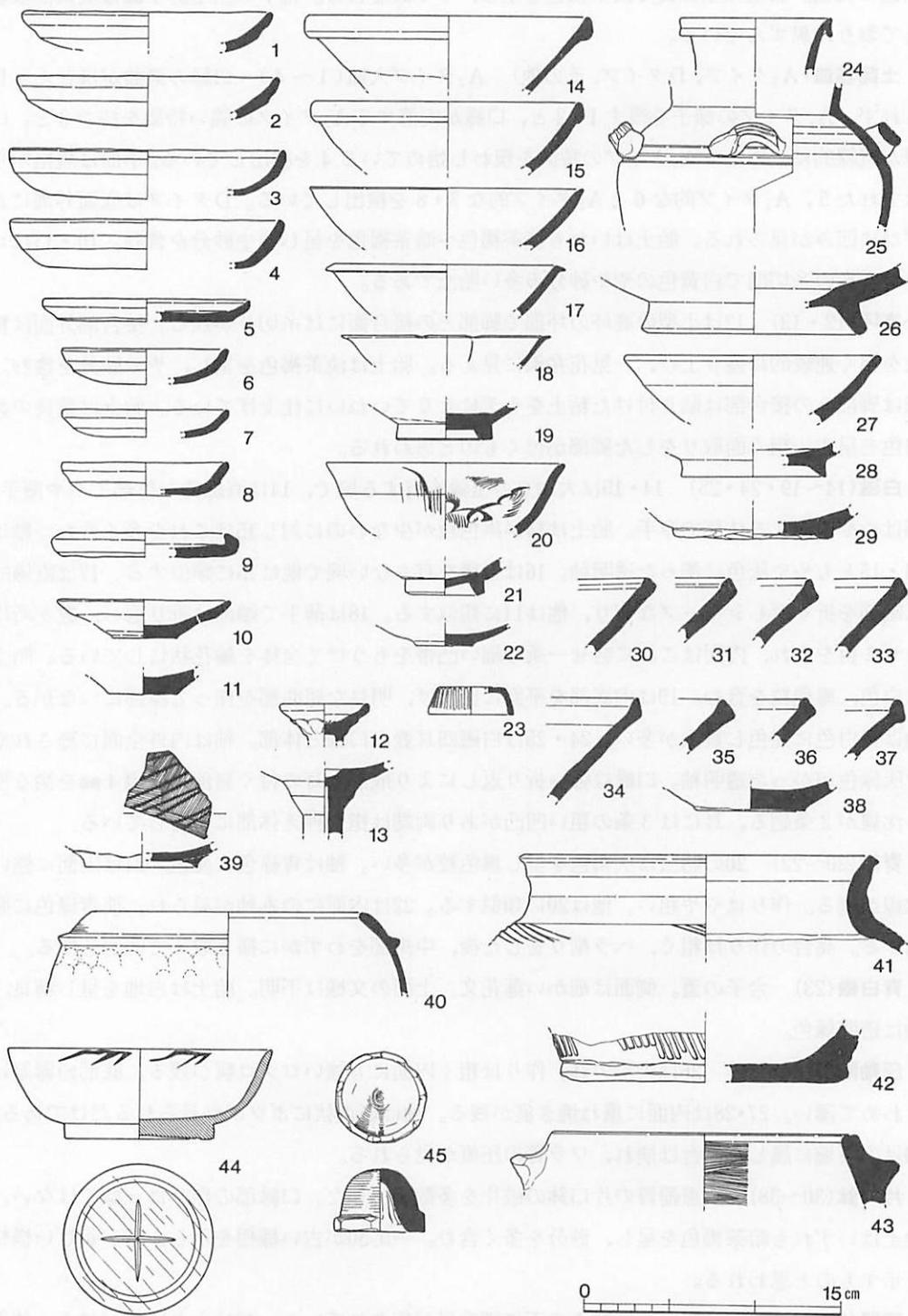
青白磁(23) 合子の蓋。側面は細かい蓮花文。上面の文様は不明。胎土は白地を呈し精良。釉は透明緑色。

灰釉陶器(26~29) 26は大形の鉢。作りは粗く内面にも強いロクロ痕が残る。底部の器厚はきわめて薄い。27・28は内面に重ね焼き痕が残る。釉は斑点状にポツポツ見られるだけである。29は山茶碗に属し、高台は崩れ、ワラ等の圧痕が見られる。

片口鉢(30~38) 須恵器質の片口鉢の破片を多数検出した。口縁部の作りは一様ではない。胎土はいずれも暗茶褐色を呈し、砂分を多く含む。一応30が古い様相を示し、37が新しい様相を示すものと思われる。

瓦器(39・40) 39は粗いヘラ磨きの下に刷毛目が施されている。40は小さい罫が付き、体部は内湾する。脚が付くものと思われる。

甕(41・42) 41は外面外部に斜方向の粗いタタキが施されている。胎土は須恵質、灰褐色を



第20図 SE 423 出土遺物実測図

呈す。42は瓦質に近い胎土で、内部が白灰色、表面は黒褐色を呈す。砂分を多く含む。外面には粗いタタキ、内面は強いヨコナデが施されている。

土製塼(43) 小さい耳が突起状に付く。胎土は赤褐色を呈し、1~2mm程度の砂を多く含む粗い、内面は横方向のハケ目調整。

木製漆塗塼(44) 全体にロクロ削りの痕が残る。高台内部は外周に一条の沈線が廻り、中央に「十」字形の彫りがある。黒ウルシは高台内を除く部分に施され、内外口縁部3ヶ所に朱の文様が入る。

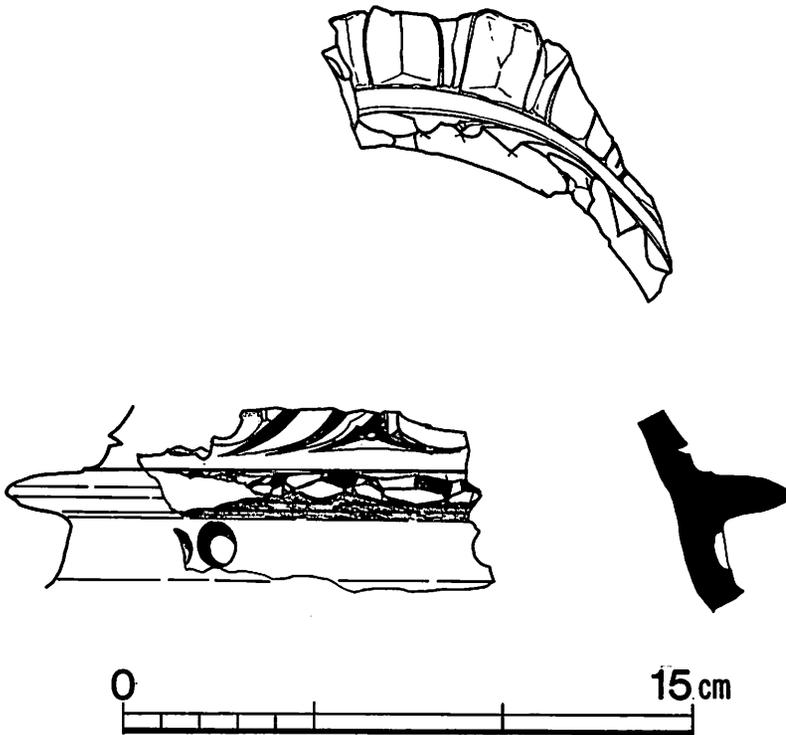
第2節 土壙群(平安時代末期)

12世紀中葉~後葉に相当する時期において多くの土壙を検出した。1m²程度の円形又は方形の浅い土壙が多い。検出される遺物は、ほとんどが土師器皿で、完形品の割合も高い。祭祀的要素を含むものと思われる。

1 SK-536(第21図, 図版第29)

土師器皿(A₂タイプ, A₃タイプ) A₂タイプ大皿(1・2)の口縁はゆるく内湾し、2段ナデ。1は端部に明瞭な面取りナデが入るが、2は不明瞭。胎土は淡茶褐色を呈し、砂分は少なく軟

質。A₃タイプ大皿(3~6)は口縁が直線的に立ち上り底部は平面に近い状態を示す。口縁の調整は3を除いて幅広のナデ、端部は強い面取りナデが入る。胎土は淡茶褐色~淡黄褐色を呈し砂分は少ない。小皿(7~12)は、浅手のものと深手のものがある。Aタイプ系土師器皿の規格性から、なんらかの分類が出来、それぞれ、A₂・A₃タイ



第21図 筆架山窯青白磁実測図

ブ大皿とセットを組むものと思われる。胎土は淡茶褐色～淡黄褐色を呈し、砂分は少ない。

高坏(13) 坏部はロクロ成形。中央部は脚部との圧着のためか凹みを作る。外面接合部は粘土が盛り上げられ、後ヨコナデ調整。胎土は灰黄色を呈し、砂粒感が強く硬質である。

白磁埴(14) 胎土は灰白色を呈しやや粗い。微細な気泡が多い。釉は淡灰緑色を帯びる透明釉。内面底部には幅1cmを測る蛇の目状の釉の掻き取りがある。外面下部は施釉していない。

2 SK-512(第22図)

土師器皿(A₃タイプ(15~21)) SK-536出土のA₃タイプとほぼ同様の様子を示す。明確なA₂タイプは検出していない。

青磁皿(22) 胎土は白灰色を呈し精良。釉は黄茶褐色に発色し半透明。外面下半部は露胎。

灰釉陶器(23) 胎土は灰褐色を呈し黒色粒を含む。釉は浅緑色に発色。内面に輪状の重ね焼き痕が残り、釉はこれより上に付着する。

片口鉢(24) 胎土は黒灰色を呈し砂分が多く粗い。

甕(25・26) 25の胎土は赤灰黒色を呈し砂分をやや含む。表面は赤鉄色に発色する。26の胎土は赤褐色を呈す。表面は黒茶褐色に発色し一部に白色ゴマ状の自然釉が付着する。

3 SK-571(第21図)

土師器皿(A₂タイプ, A₃タイプ, その他) 27・28がAタイプ, 29~32がA₃タイプに分類されるが、その区別は明瞭ではない。大皿・小皿共にSK-536のものに共通する。37~39はロクロ成形の皿。37は外面に強いロクロ痕が残る。胎土は白桃色を呈し、砂っぽく硬質。38の胎土は37に類似。39の底部は糸切り。胎土は灰褐色を呈し、砂分は少ない。

壺(40) 胎土は灰褐色を呈する。表面は黒鉄色に発色し、口縁内側にゴマ状の自然釉が付着。

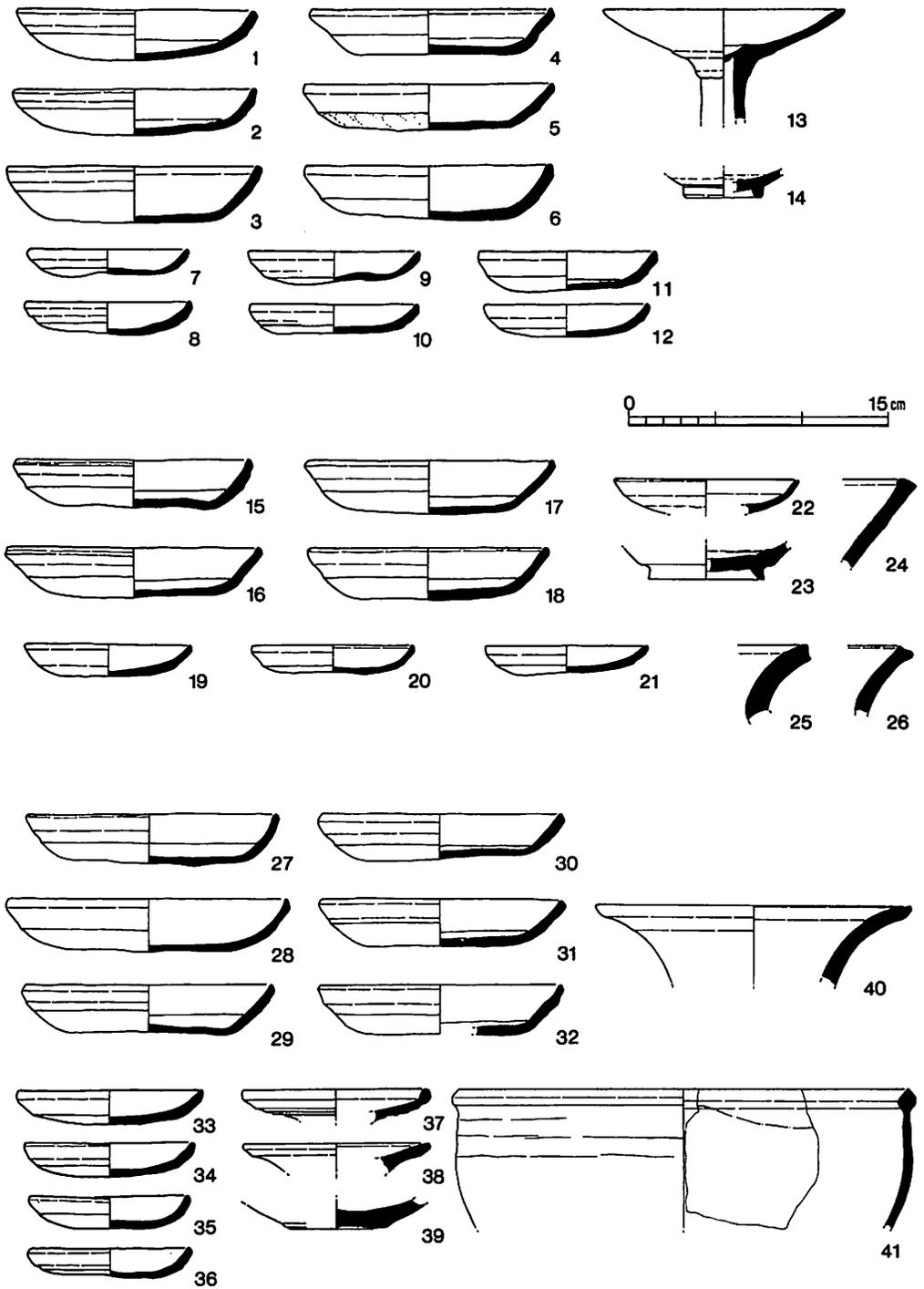
輸入陶器(磁灶窯系)(41) 胎土は灰褐色～明赤褐色を呈す。砂分を多く含む粗い。釉は口縁部を除いた内面に施され、青緑褐色に発色。透明感は少ない。

4 SK-538(第22図)

前出の土壌に較べやや大きく長径1.9m、短径1.3mを測る不整形の土壌。土師器皿以外の遺物も数多く検出した。

土師器皿(A₃タイプ, Dタイプ) A₃タイプ大皿(42~44) 前出のA₃タイプに較べ、小形化しており、底部・口縁部の作りに粗雑さが見られる。口縁部は幅広のヨコナデで前出の大皿に見られた2段ナデは無い。端部は強い面トリナデ。胎土は淡茶褐色を呈し、砂分少なく精良。小皿(45~48)もまた小型化の傾向を示している。口縁部の調整法には大きな変化は見られない。胎土は大皿に共通。Dタイプ(49)は歪が大きく粗雑。胎土はA₃タイプに共通。

灰釉陶器埴(50) 外面は強いロクロ痕が残る。高台内部には糸切り痕、畳付にはワラ等の圧痕が残る。胎土は灰褐色を呈し砂分を多く含む粗い。釉は内面上半部に見られ、浅緑透明で斑



第22圖 SK 536・512・571 出土遺物実測図

点状に付着している。

片口鉢(51~55) 端部の成形に多くの種類を見ることが出来る。胎土は灰黒色を呈し砂分を多く含み粗い。

輸入陶磁器(56~61) 白磁碗(56・57)の胎土は白灰色を呈す。釉は青灰色を帯び、透明。青磁皿(58・59)の胎土は白灰色を呈し黒色粒を多く含む。58はきめ細く、59は粗い。58の釉は緑灰色に発色、貫入が多い。59は黄褐色に発色。外面下半部は露胎。青白磁合子(60)の胎土は灰褐色を呈し、黒色粒をわずか含む。釉は青灰色を帯び透明。磁灶窯系陶器(61)の胎土は灰黒色を呈し砂分を含む。外面は無釉で茶褐色に発色。内面は下地に白濁色の化粧土が施された上に、青茶褐色の半透明釉が施されている。釉下に黒茶色の鉄絵が描かれている。

第3節 平安時代後期包含層

C・D区において11世紀後期~12世紀にかけての包含層を検出している。

風字硯(62・63) 62の胎土は青黒灰色を呈し精良、堅微。脚部はヘラでていねいに成形。裏面にはタタキ様のものが残る。使用痕が著しい。63の胎土は灰褐色を呈し砂分を多く含み、粗い。成形もきわめて雑である。脚は欠落しているが、62と同様のものが付くと思われる。使用痕有り。

滑石製鍋(64) 外面はノミによるていねいな削り。内面は磨き。内面には炭化物が付着。外面はススが厚く付着。

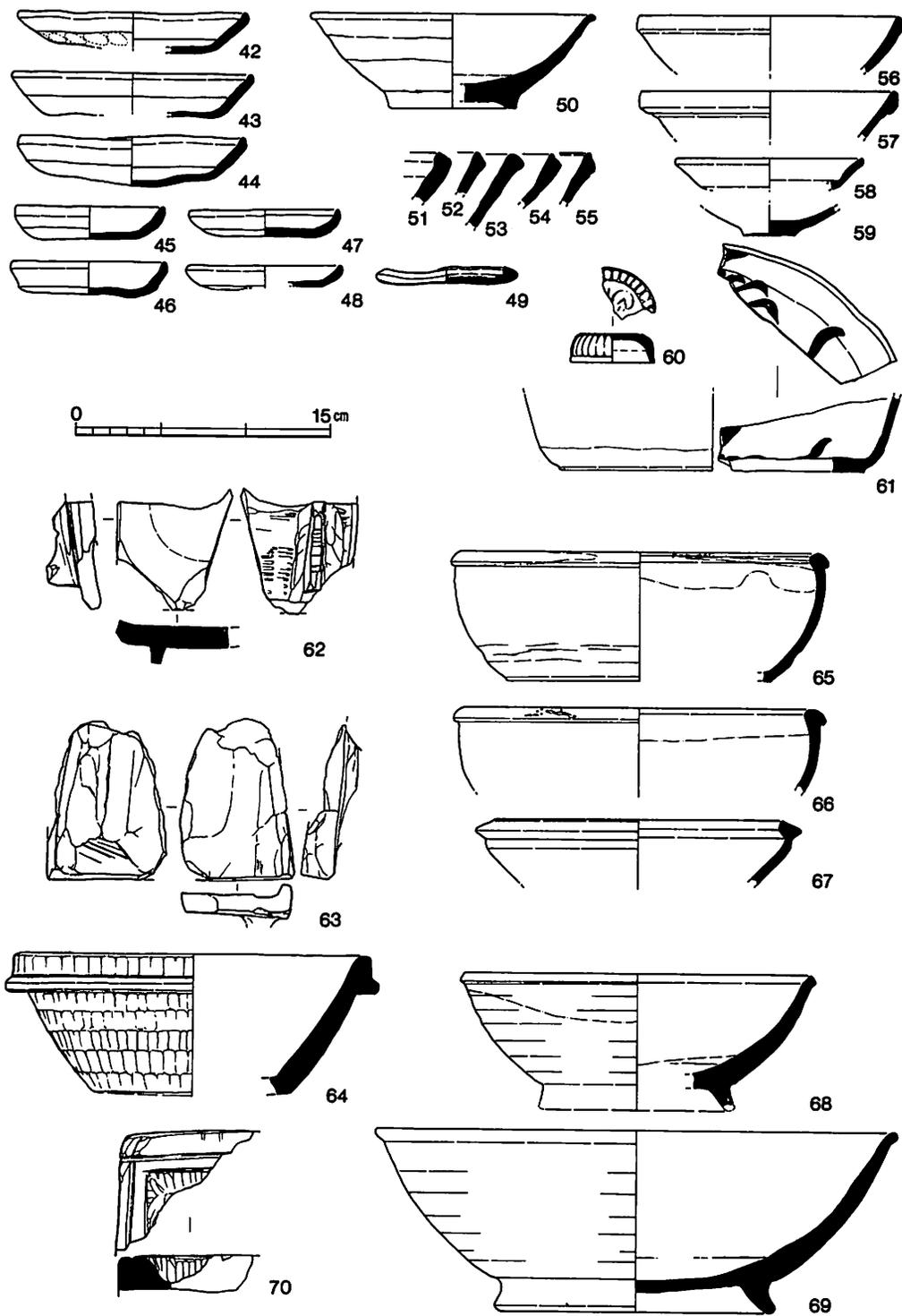
石製水盤(70) 水盤の未製品のようなものである。2辺には切断中の深い溝が切られており、内部は丸ノミで順に削った痕が残る。材質は、粘板岩。同様の製品は押小路殿跡の発掘で検出している¹⁵⁾。

磁灶窯系陶器(65~67) 65の胎土は灰褐色を呈し砂分は少ない。黒色粒を多く含む。内面から外側玉縁下まで白灰色の化粧土が薄く施され、内面下2/3に淡灰緑色の半透明釉が施されている。外面底部には砂等による細かい凹凸が見られる。66もほぼ同様。67は体部が開く器形をとる。胎土は淡茶褐色を呈しやや軟質。内面には白茶褐色の化粧土、釉は茶褐色に発色。

筆架山窯系陶器(第23図) 鏝を持ち、下部が広がる円筒状の破片。全体的な器形は不明。鏝より上はヘラにより深い彫刻が施され、一部はスカシ状となる。鏝上面は連弁が刻まれている。鏝より下は2対以上の円形の凹部が入る。胎土は灰白色を呈し精良でねばりがありガラス状。釉は影青で青緑色を帯び透明。

灰釉陶器鉢(68・69) 胎土は灰褐色を呈し精良。釉は緑茶褐色に発色し、斑点状に付着。

四耳壺(図版第26) 胎土は灰白色を呈し、堅微。釉は青緑色を帯び透明。体部に3条の沈線が上下2段に入る。



第 23 图 SK 538・平安後期包含層出土遺物

第4節 平安時代の瓦

瓦も相当数出土しているが、ここでは平安時代の瓦39点を図示した(第24・25図)。

瓦の出土状況として、全体に言えることは、瓦の年代が9世紀前半までのもの(1, 8~14)と11世紀後半以後のもの(他の全て)に分かれる事で、平安時代中期に相当する瓦が全く見られない点である。このことは、他の遺構・遺物についても同様で、平安時代前期の包含層で、遺物を検出した他、中期の遺構は全く見られず、井戸など今回の調査で確認した遺構は、全て平安時代後期と考えられているもののみであった。この、土器類、瓦類について共通して見られる傾向は、この他の変遷を知る上での一つの判断材料と言えるであろう。

1は、単弁の軒丸瓦で、作り等から平城系のものとも考えられるが、9・11を焼成した芝本瓦窯で、ほぼ同じ文様を持つものも出土しており、山城産の可能性も考えられる。

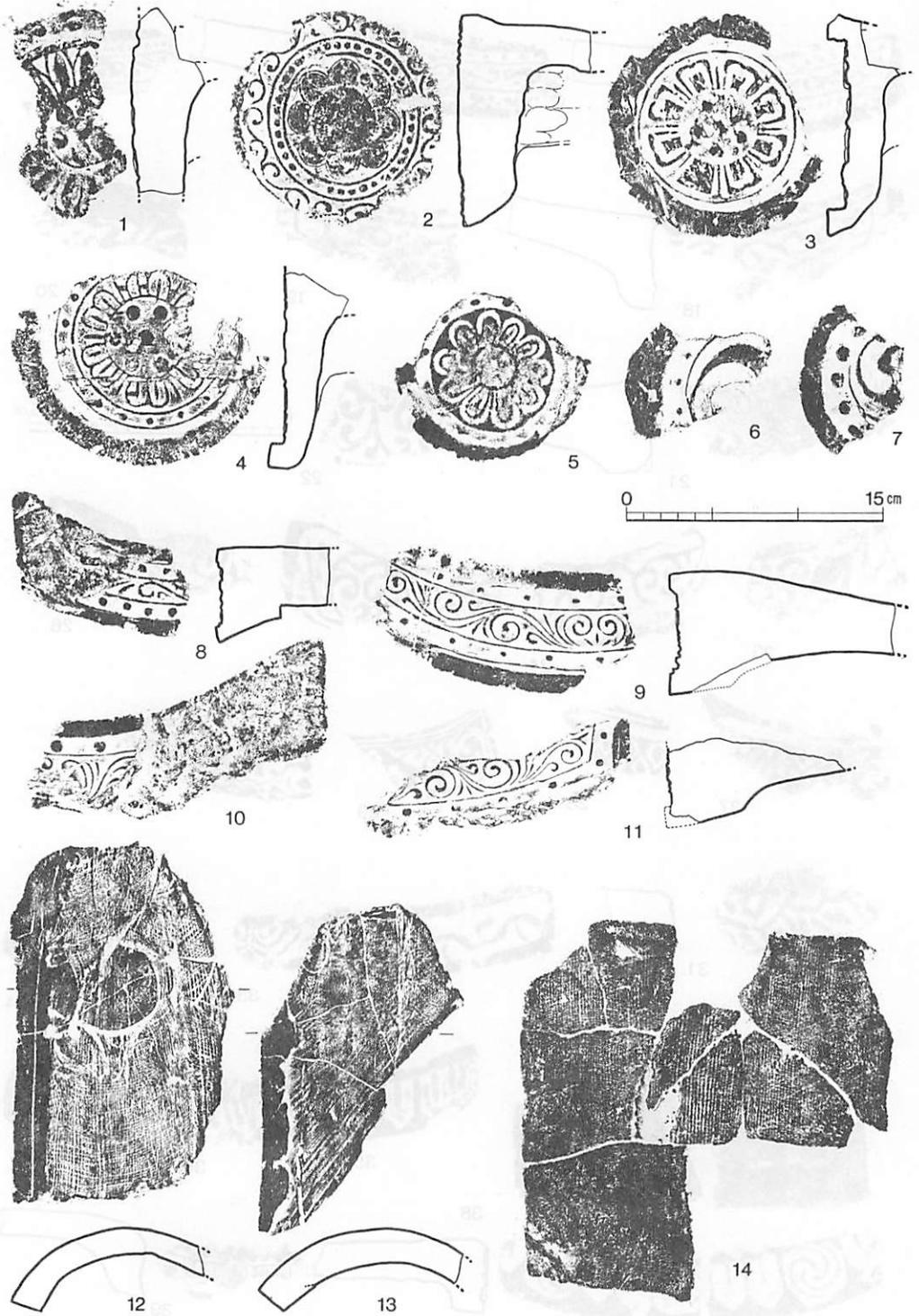
8は平城京の瓦。10は西寺の瓦で、外区珠文帯右下部分に、横向きの「西」字の入るものである。9・11は前述した京都市左京区松ヶ崎芝本瓦窯で作られたもので、文様は同範である。

平安時代後期の瓦のうちでも、軒丸瓦では2、軒平瓦では15~22はやや古く、11世紀後半に比定できる。このうち15・16、18・19はそれぞれ同範で、いずれも京都市北区河上瓦窯産と推定される。また20・21は京都市右京区森ヶ東瓦窯のものと考えられる。

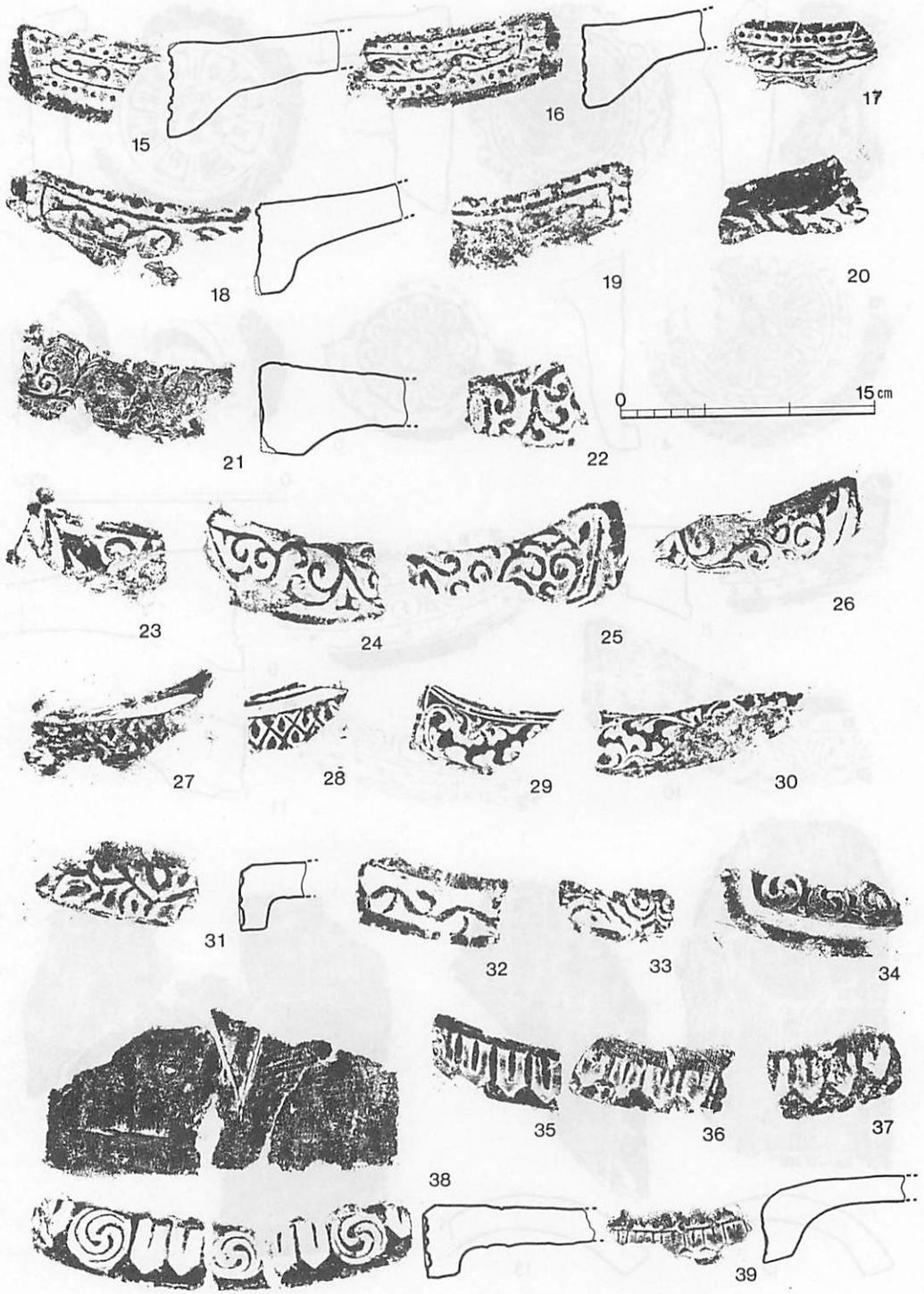
3~7、23~39は12世紀代に年代を考えられるもので、京都市左京区岩倉幡枝瓦窯跡で作られたものの他、播磨産(34)の瓦など京外からの瓦も若干含まれている。このうち29・30は文様の陰陽の逆転したもので、鳥羽離宮跡などで同文の瓦が出土している。

また27・28の幾何学文を持つ瓦は、3の軒丸瓦と伴って出土する例が多く、セット関係となる可能性がある。38の剣巴文軒平瓦の凹面には「V」字状のヘラ記号が施されていた。

平安時代の瓦の出土量は平安京創建時のものがいくらか見られるものの、検出された遺構・遺物の中心をなす11~12世紀代のものが圧倒的に多く、この時期における邸宅の建造・修復等の活動が特に活発であったことをうかがわせるものと言えよう。



第24図 出土瓦実測図・拓影(1)



第25図 出土瓦実測図・拓影(2)

第5節 鎌倉時代～室町時代の遺構・遺物

1 SK-49(第26・27図, 図版第4上)

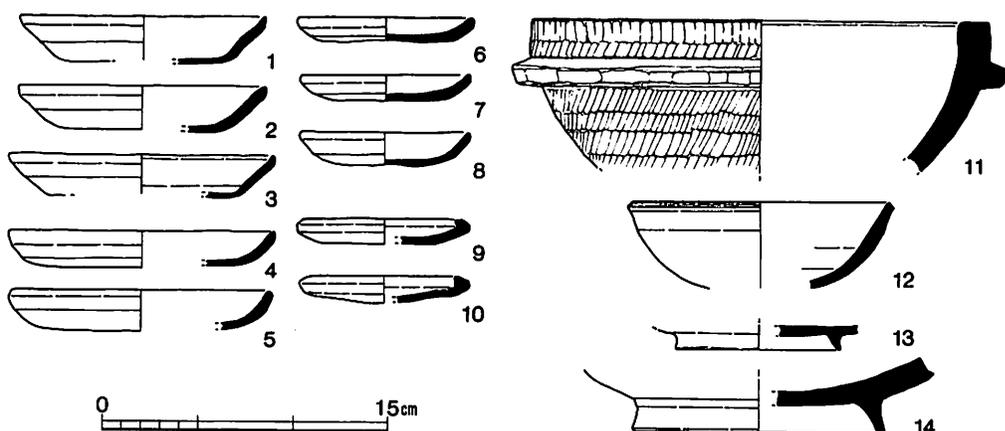
A区東北部に位置する南北に長い溝状の土壌。炭と共に多くの甕の破片が西から東へ流れるように堆積していた。供伴する土師器皿はいずれも小片。

土師器皿(A₂タイプ, A₃タイプ, Dタイプ) A₃タイプ大皿(1~3)は前出SK-538出土のA₃タイプに較べさらに小形化している。胎土は淡赤褐色を呈し、雲母が多い。A₂タイプ大皿(4・5)も同様に小型化が進み、またA₃タイプとの器形の違いを明確にしている。小皿(6~8)には大きな変化は見られない。

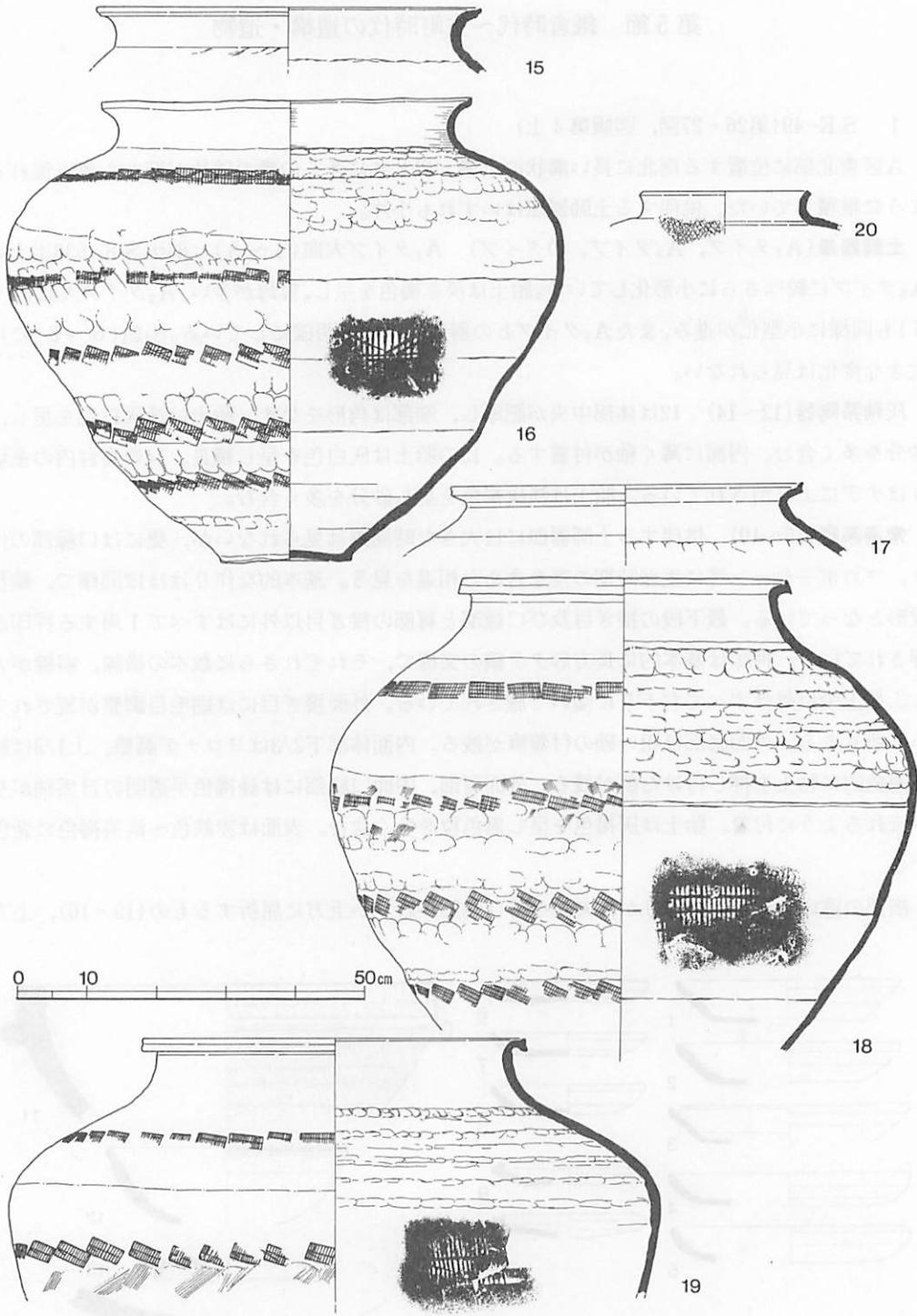
灰釉系陶器(12~14) 12は体部中央が肥厚し、端部は角形をなす。胎土は淡灰白色を呈し、砂分を多く含む。内面に薄く釉が付着する。13の胎土は灰白色を呈し精良。14の高台内の糸切りはナデにより消されている。胎土は淡灰褐色を呈し砂分を多く含む。

常滑系甕(15~19) 供伴する土師器皿には大きな時期幅は見られないが、甕には口縁部の作り、プロポーション等に生産時期の差を含めた相違を見る。基本的な作りはほぼ同様で、輪積成形となっている。最下段の接ぎ目及び口縁部と肩部の接ぎ目以外にはすべて1周する押印が押されている。押印は基本的に長方形タテ縞の文様で、それぞれさらに数本の横線、斜線が入る。最上段以外はすべて右下りに傾いて施されている。外面接ぎ目には刷毛目調整が施されている所もある。外面底部は粗い砂の付着痕が残る。内面体部下2/3はヨコナデ調整。上1/3は粗く連続的に粘土を押し付けた痕が残る。外面肩部、内面口縁部には緑褐色半透明の自然釉がやや流れるように付着。胎土は灰褐色を呈し黒色粒を多く含む。表面は赤鉄色～淡茶褐色に発色する。

細部の違いは、端部の作りが、丸味を帯び端部がわずか上方に屈折するもの(15・16)、上方



第26図 SK 49 出土遺物実測図(1)



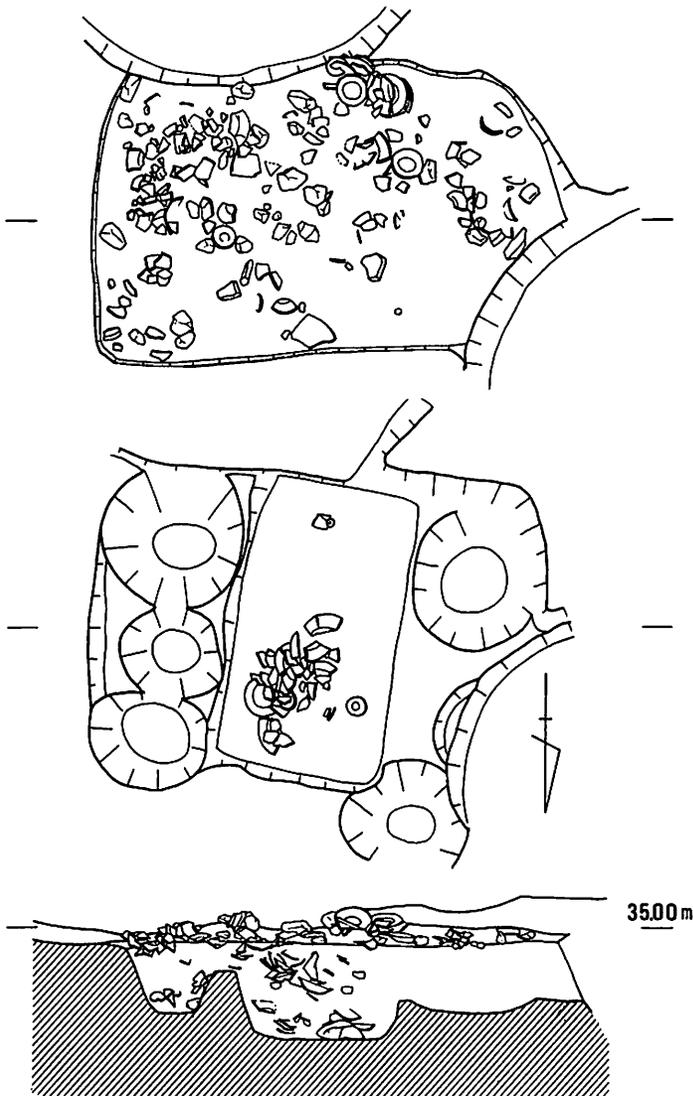
第27図 SK 49 出土遺物実測図(2)

に鋭く屈折しシャープに仕上げるもの(17・18), 下方にも張り出し, いわゆる「N」字状口縁を示すもの(19)がある。口縁部から体部へのつながりは, 口縁部が「U」字形となり穏やかな曲線をなすもの(15・16), 口縁上方で強く屈曲し, 直線的に体部へつながるもの(17~19)がある。体部のプロポーションは, 16では丸みを帯びふっくらとしており, 18ではやや肩が張り, 19では強く肩が張り出している。

亀山系甕(20) 外面体部は格子状のタタキ。胎土は黒灰色を呈し粗い。須恵器質で硬質。

2 土壇群

多くが長方形を呈す。ほぼ同一レベルで一面に土師器皿を検出する。土師器皿以外の遺物はきわめて少ない。



第28図 土壇(S K 81)実測図

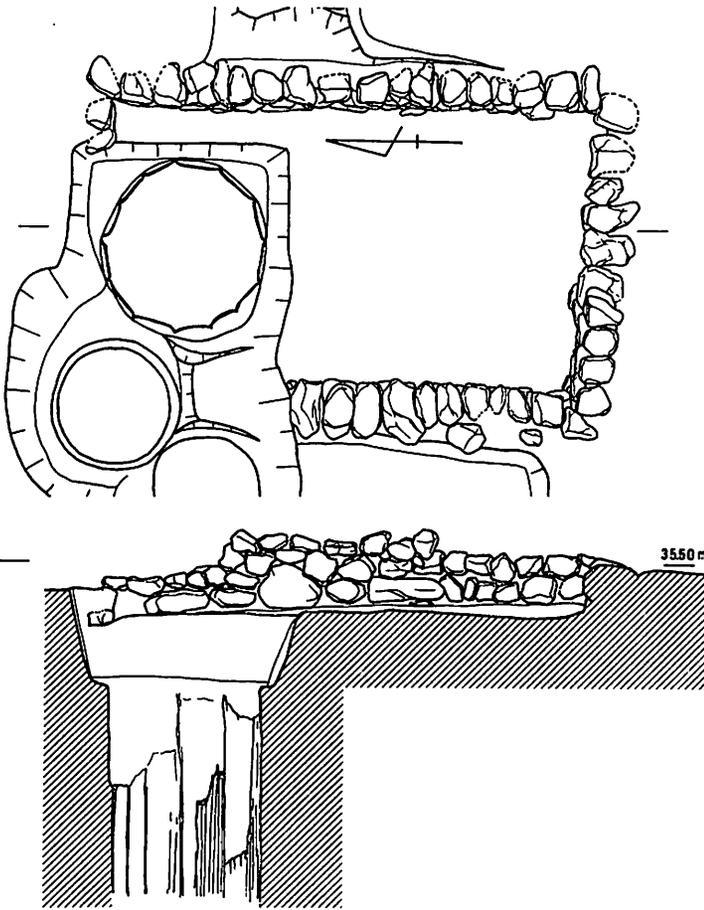
1) S K-524(第30図)

土師器皿(A₃タイプ, B₁タイプ, その他) B₁タイプ(1・2), やや厚手で口縁の立ちが強い。胎土は白灰色を呈し精良。A₃タイプ大皿(3~6)と小皿(7~9)の胎土は茶褐色を呈す。10は京都市内ではほとんど出土していないへら起こしの小皿である。今回の調査では他に一点包含層からも検出している。胎土は茶褐色を呈す。

青磁皿(11) 胎土は灰褐色を呈しやや粗い。釉は黄緑色に発色し透明。底部の釉は掻き落している。

2) S K-611(第30図)

土師器皿(B₁タイプ, A₃タイプ) B₁タイプ碗(12・13)の胎土は黄白色を呈し精良軽質。へそ皿(14・15)



第29図 室(S X 369), 井戸(S E 379)実測図

タイプ(19~26)の胎土は白灰色を呈し軽質精良。へそ皿(27~34)も同様。A₃タイプ大皿(35~37)は粗雑な作りで外面底部に板状圧痕の残るものが多い。胎土は淡茶褐色~淡赤褐色を呈し砂分を多く含む。小皿(40~45)は前出の17に較べ作りが粗雑になり、口縁を幅広に引き上げている。胎土は大皿に共通する。

4) S K-533(第31図)

土師器皿(B₁タイプ, A₃タイプ) B₁タイプ碗(46~70)はS K-87出土のB₁タイプに較べ口縁がやや外反し、端部は軽く折り返す。胎土は白灰色を呈し精良。A₃タイプ大皿(58~64)はS K-87出土のものに較べさらに小形化、粗雑になっている。

5) S K-388(第31図)

土師器皿(B₂タイプ, A₃タイプ) B₂タイプ碗(71~75)の口径に変化が見られ、やや肥厚す

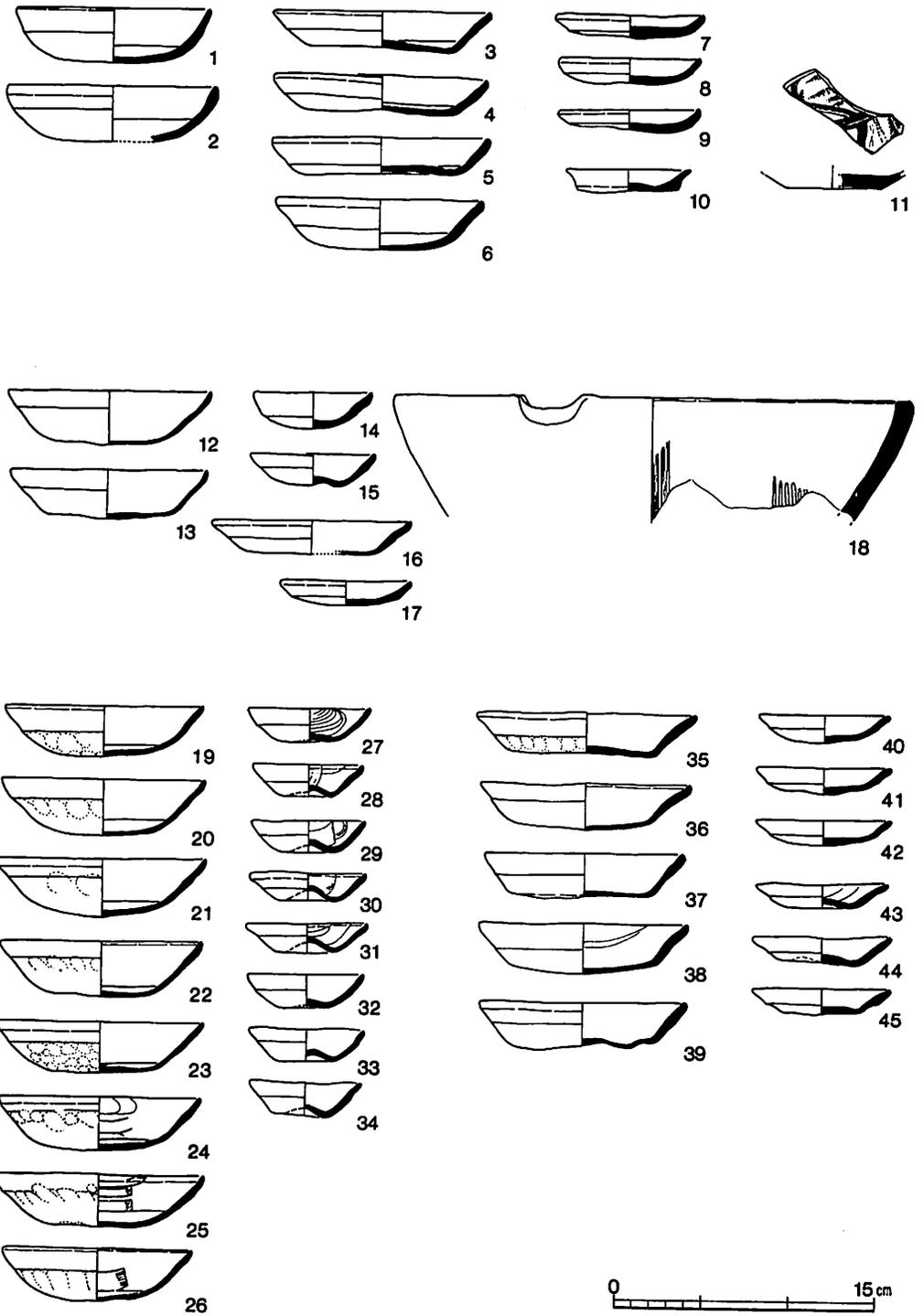
も同様。A₃タイプ大皿(16)は口縁部が軽い「S」字状をなす。胎土は淡茶褐色を呈す。

片口鉢(18) 胎土は須恵質で灰黒色を呈し精良。表面は自然釉が付着しツヤを帯びる。産地不明。

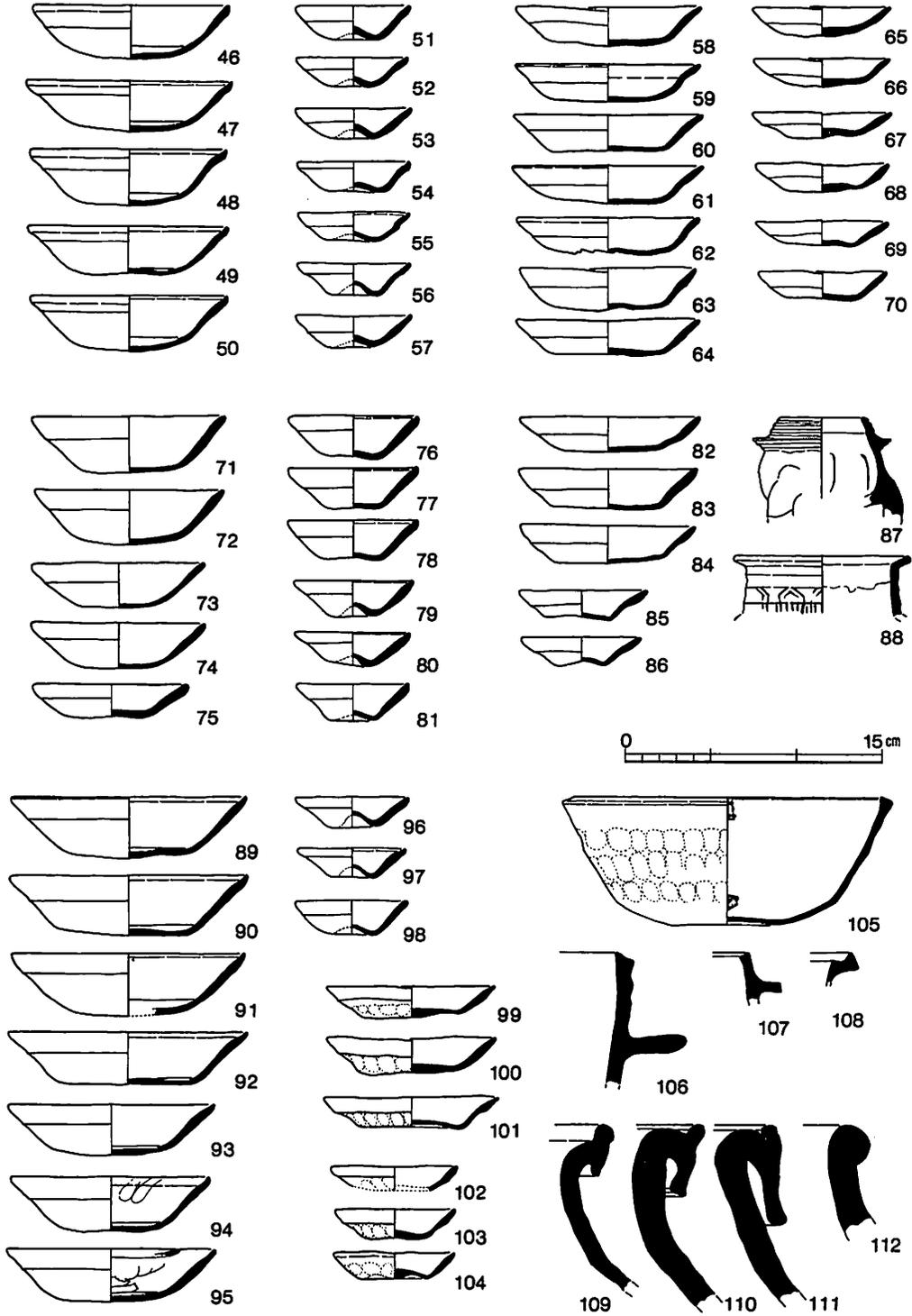
3) S K-87(第30図)

土壇底面は、中央に長方形、両脇に3連の円形掘り込みがある。遺物は上面に多く、A₃タイプ、B₁タイプを検出した。各タイプにおいての検出状態の相違は見られない。遺物は土師器皿のみ。

土師器皿(B₁タイプ・A₃タイプ, 実測図には状態の良いものに表面の調整を記入している) B₁



第 30 图 S K 524·611·87 出土遺物実測図



第 31 図 S K 533・388・379 出土遺物実測図

る。へそ皿(76~81)には凸部を明瞭に作らないものもある。胎土は白黄色を呈し精良。A₃タイプ(82~86)の胎土は赤褐色を呈し砂粒を多く含む。小形化は進んでいる。

有脚羽釜ミニチュア(87) 胎土は瓦質、淡灰茶褐色を呈し、表面は黒色。

鉄釉印花文香炉(88) 胎土は淡茶褐色を呈しやや粗い。釉は黒緑色に発色。内面下半部は露胎。外面には印刻文が押されている。瀬戸系。

6) S E-379(第31図)

井筒は幅20~35cmを測るタテ板の板材を多角形(13枚)に組んでいる。

土師器皿(B₂タイプ, A₃タイプ)口B₂タイプ碗(89~95)には大・小2種の規格がある。胎土は淡赤色~黄灰色を呈し重質。へそ皿(96~98)の胎土は碗に共通。A₃タイプ(99~104)の胎土は赤褐色を呈し粗い。さらに小形化、粗雑になっている。A₃タイプは土師器皿に占める割合が減少し、Bタイプの半分にも満たない。

土壺(105~108) 胎土はいずれも瓦質、灰白色を呈す。口縁部付近のみ黒色。内面は刷毛目調整、口縁付近はナデ調整、外面は連続的な指押し。105はめずらしい器形であるが、作りは107や108に共通する。

甕 常滑系(109~111)の胎土は白灰色~黒灰色を呈し粗い。珪石・長石・雲母等の粗粒を多く含む。表面は赤鉄色に発色し、一部に緑茶色の自然釉が付着。備前系(112)の胎土は明灰褐色を呈し、黒色粒を含む。表面は赤鉄色~暗茶褐色に発色。(図版一)は体部にヘラ描きの文様が描かれている。胎土は灰褐色を呈し、表面は茶褐色に発色。緑色~白色の自然釉が多く付着。

7) S K-350(第32図)

片口鉢(116) 体部はふくらみを持つ。外面は強いロクロ痕が残る。口縁部は縁帯状に大きく肥厚している。内面下半部は磨滅が著しい。胎土は灰黒色を呈し硬質で粗い。東播系。

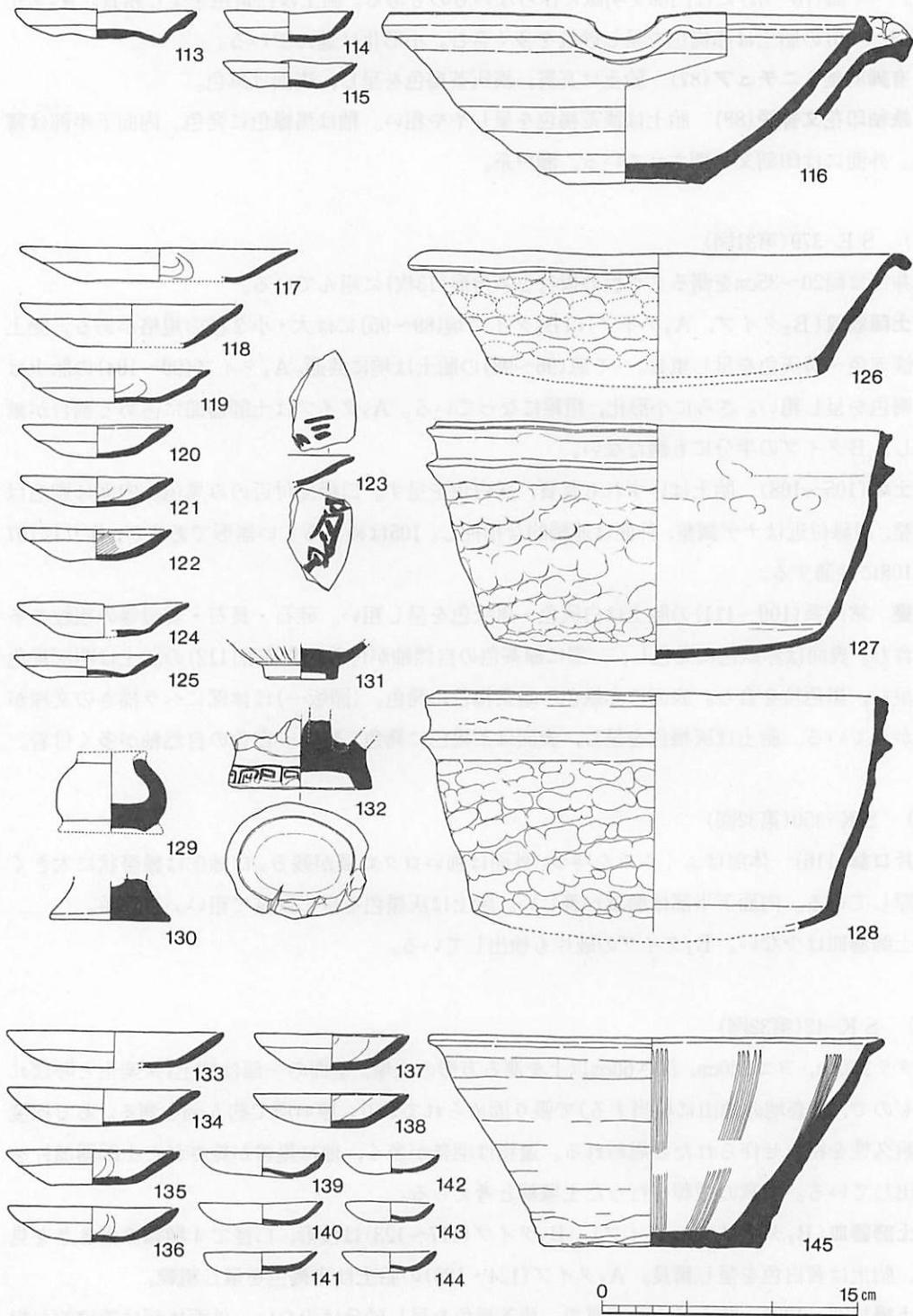
土師器皿は少ない。B₂タイプの破片も検出している。

8) S K-42(第32図)

タテ260cm, ヨコ220cm, 深さ60cm以上を測る方形の土壇。壁面の一部は粘土(聚楽土と呼ばれるもので、調査地の地山に相当する)で張り固められており、厚い所で約5cmを測る。ある程度の耐久性を持たせ作られたと思われる。遺物は羽釜が多く、他に墨書が施された土師器皿片を検出している。複数の埋葬を行った土壇墓と考えらる。

土師器皿(B₃タイプ, A₃タイプ) B₃タイプ(117~123)は浅形、口径で4種類の大きさを見る。胎土は黄白色を呈し精良。A₃タイプ(124・125)の胎土は赤褐色を呈し粗雑。

土壺(126~128) 胎土は土師器質で、淡茶褐色を呈し砂分は少ない。外面体部は連続的な指押し、外面底部は砂の付着痕がある。他所はナデ調整。外面はススが付着。127の内面底部には炭化物が付着する。



第 32 図 S K 350・42・31 出土遺物実測図

国産陶器(129・130) 胎土は灰褐色を呈しきめ細く精良。釉は暗緑色～淡緑色に発色し透明。
 青磁(131・132) 131の胎土は灰褐色を呈す。釉は青白色に発色し、半透明。釉の界は茶褐色に発色。132の胎土は灰白色を呈し精良。釉は青緑色に発色、透明。

9) SK-31(第32図)

土師器皿(B₃タイプ, Eタイプ) B₃タイプ(134～139)は4種類の口径を見る。134～137では内面屈曲部に溝が廻る。138, 139は内面「の」の字状ナデ調整。胎土は淡茶褐色を呈し精良。Eタイプ(140～145)は大小2種類の大きさを見る。胎土は茶褐色を呈し焼きが甘い。

摺鉢(146) 胎土は赤褐色を呈し硬質。少量の長石粒を含む。

10) SX-369

縦3・3m, 横2・5m, 深さ40cm以上(石積3段以上)を測る半地下式の室。床面は黄褐色粘質土(聚楽土)で、良好な平面をなす。内部には相当量の石が落ちていたため、周囲の石積はさらに数段積まれていたものと思われる。13世紀中葉を示す土師器皿片を検出している。

第6節 桃山時代～江戸時代の遺構・遺物

1 SK-532(第33図)

タテ250cm, ヨコ150cm, を測る土壇。東半分は一段深く掘削されている。

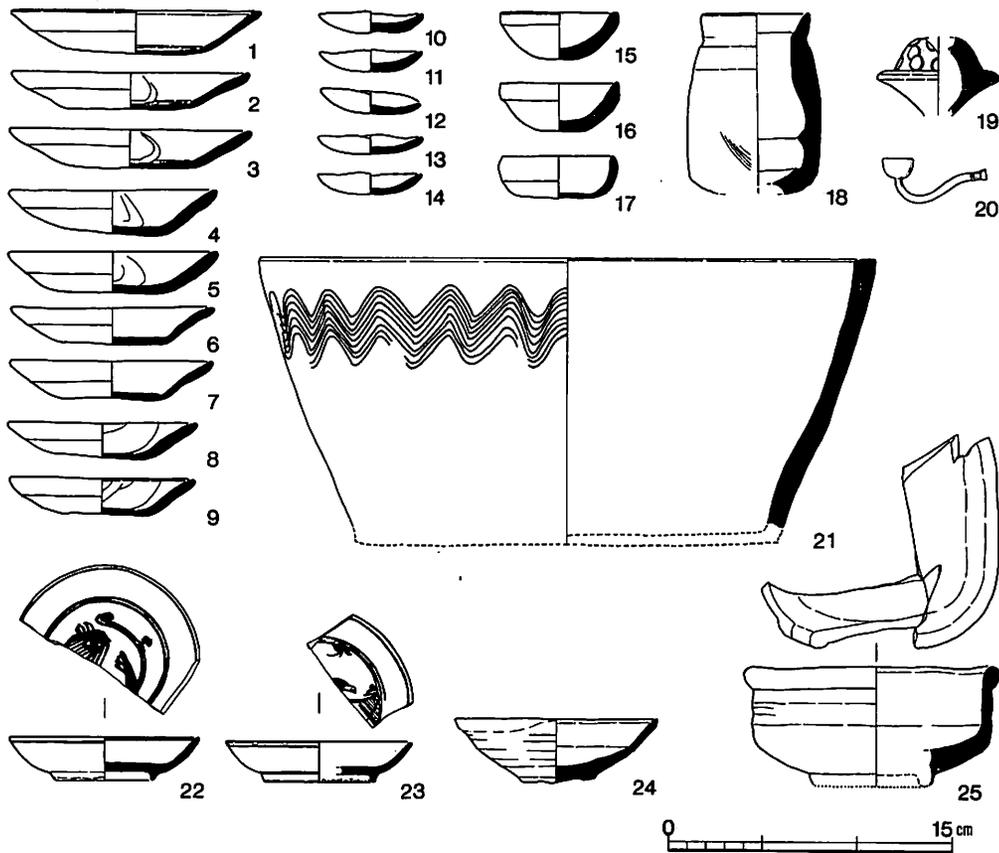
土師器皿(B₄タイプ, Eタイプ) B₄タイプ(1～9)には3種類の大きさがある。1～7は内面屈曲部に溝が廻る。8・9は内面「の」の字状のナデ調整。胎土は淡茶褐色～淡赤褐色を呈し精良。Eタイプ(10～14)は一種類の大きさのみ検出。胎土は茶褐色を呈し, B₄タイプと共通しない。

土製品(15～19・21) 小型坏(15～17)のうち15・16の胎土は淡赤白色を呈す。17は赤褐色を呈す。塩壺(18)の胎土は赤褐色を呈し砂分を多く含み粗い。外面底部はワラ等の圧着痕が残る。19は円形の印文が上半部に押されている。胎土は赤褐色を呈し砂分が多く粗い。表面は黒褐色。用途不明。火鉢(21)の胎土は灰褐色を呈し粗い。表面は黒色。

金属器 キセル(20)は頭部側面に径1・5mm程度の穴が三ヶ所あいている。首部はロウ付け。材質は銅である。

輸入磁器染付皿(22・23) 高台はやや内傾し, 断面三角形。畳付付近に砂が付着。畳付の部分はヤスリがけが施されている。22は龍の文様が描かれている。当時好まれて描かれた文様の一つ。SK-538での染付皿の検出はこの2点のみ(SK-538の全遺物量はコンテナ5箱)である。明末の染付が多量に輸入され始めた頭初のころに位置すると思われる。

唐津系陶器(24) 胎土は赤褐色を呈し粗い。釉は緑褐色に発色, 貫入が多い。内面に砂トチンの痕が残る。高台の削り出しは浅い。唐津系の陶器も数点しか検出していない。



第33図 SK 532 出土遺物実測図

瀬戸・美濃系陶器(25) 胎土は淡茶褐色を呈し粗い。釉は全面に施され、黒色に発色。

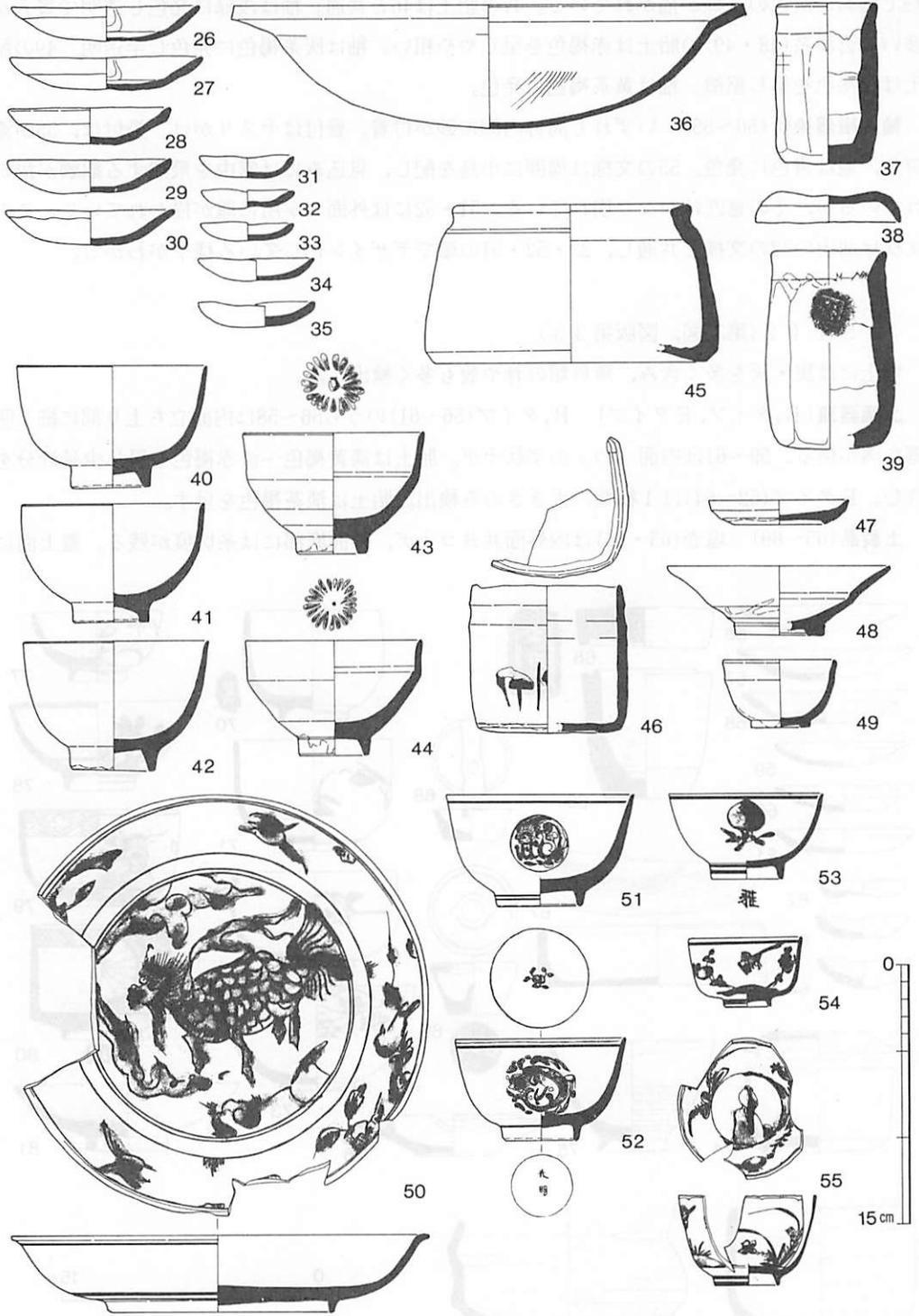
2 SK-339(第34図)

土師器皿(B₄タイプ, Eタイプ) B₄タイプ(26~30)は大・小2種の大きさのみ検出。26・27は内面立ち上り部にすどい溝が廻る。29・30は内面「の」の字状ナデ調整。胎土は淡茶褐色を呈し精良。Eタイプ(31~35)は2種の大きさのものを検出。内面のみ一方向ナデ。胎土は茶褐色を呈す。

土製品 ほうらく(36)は内面ヨコナデ, 一部刷毛目調整。外面は細かい砂の圧痕が残る。型作りによる所のはなれ砂と思われる。塩壺(37~39)の胎土は赤褐色を呈し粗い。内面に布目が残る。39にはメーカー印が押されており「ミなと藤口□」と読むことが出来る。

国産磁器(40~44) 胎土は白色を呈す。釉は淡青色に発色し透明。高台内部は露胎。43・44の内面底部には青茶色の染付文様が描かれている。伊万里系。

国産陶器(45~49) 備前系水注(45)の胎土は暗赤鉄色を呈し堅微。外面下端はヘラ削り。瀬戸・美濃系(46・47)では46の胎土は淡黄褐色を呈し粗い。釉は白赤褐色に発色し半透明, 志野



第 34 图 S K 339 出土遺物実測図

釉で釉裏に灰色の文様が描かれている。47の胎土は46と共通。釉は浅緑に発色し透明で貫入が多い。唐津系(48・49)の胎土は赤褐色を呈しやや粗い。釉は灰茶褐色に発色し半透明。49の胎土は灰褐色を呈し堅微。釉は黄茶褐色に発色。

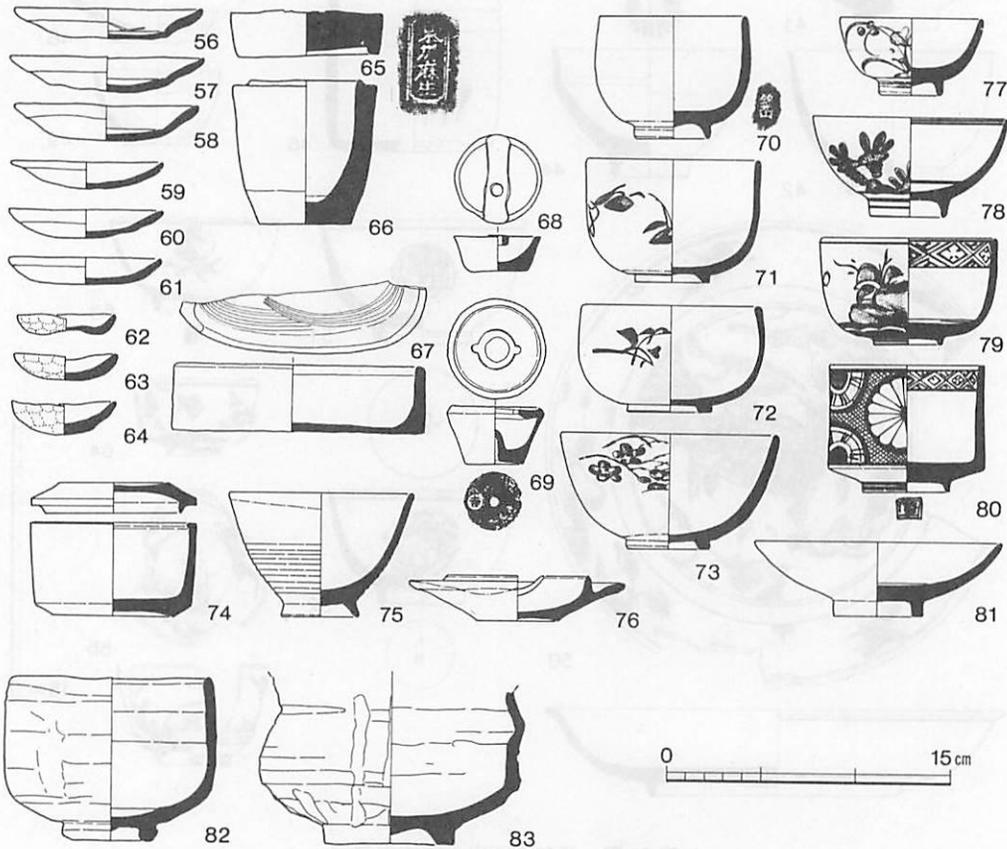
輸入磁器染付(50~55) いずれも高台内側に砂が付着。畳付はヤスリがけ。染付は、55が濃青色、他は青色に発色。55の文様は周囲に小鳥を配し、見込みには雲中を飛翔する麒麟が描かれているが、その意匠はかなり崩れている。51・52には外面3ヶ所に龍が描かれている。この文様は前出の22の文様と共通し、22・52・51の順でデザイン化している様子がわかる。

3 SK-02(第35図, 図版第33)

埋土には炭・灰を多く含み、魚貝類の骨や殻も多く検出した。

土師器皿(B₄タイプ, Eタイプ) B₄タイプ(56~61)のうち56~58は内面立ち上り部に細く明確な溝が廻る。59~61は内面「の」の字状ナデ。胎土は淡黄褐色~淡赤褐色を呈し少量砂分を含む。Eタイプ(62~64)は1種類の大きさのみ検出。胎土は淡茶褐色を呈す。

土製品(65~69) 塩壺(65・66)は内外面共ココナデ、外面底部には糸切痕が残る。蓋上面に



第35図 SK 02 出土遺物実測図

は「泉州麻生」¹⁵⁾の印が押されている。67の胎土は淡茶褐色を呈す。全面に黄褐色の釉を薄く施している。内面底部は刷毛目調整。68・69の胎土は淡赤褐色を呈す。全面に緑釉が施されている。69は外面底部に「吉」の印がある。

国産陶器(74~76・82・83) 70~73の胎土は灰白色~黄白色を呈す。70は白灰色の化粧土が施された上に透明の釉が施されている。高台内部には「錦光山」の印がある。71~73は鉄絵が描かれている。73の花弁の部分は青色の染付。74の胎土は黄白色を呈す。釉は黄灰色に発色、貫入が多い。75の胎土は灰褐色~赤褐色を呈す。内面~外面口縁部には白色の化粧土が厚く施され、さらに全面に透明釉が施されている。高台内部には「錦光山」の印がある。76の胎土は灰白色を呈し、釉は灰色透明。82の胎土は明赤褐色を呈し砂分を多く含む。釉は基本的に透明釉でわずかに白濁。高台内は渦^{うず}兜^{とんぼ}巾、内面見込には茶溜がある。長次郎、赤茶茶碗かと思われる¹⁷⁾。83の胎土は淡茶褐色を呈し粗く軟質。釉は黒緑色に発色、薄く施されている。器形は歪が著しい。体部は、縦及び横方向に粗い削り文様がある。高台畳付の部分には糸切痕が残る。

4 S E-354(図版第17下)

掘り方は長円形を呈し、底部の石組の井筒もまた長円形を呈す。石組は底部より上70cmまで組まれている。上段は木製の井筒が組まれていたものと思われる。江戸中期以後。

5 S X-534(図版第20下)

20cm級の石を弧状に組み、他所は黄褐色粘質土(地山)を直接切り込んで加工している。壁面は赤く焼け、石組み手前は炭を多く含む層が広がる。周辺で室町時代後葉の遺物を検出した。

註

- 1) 「條窯跡群昭和55年度発掘調査概要」(『埋蔵文化財発掘調査概報1981—2分冊』所収、京都、昭和56年)。
- 2) 檜崎彰一・斉藤孝正 「猿投窯編年の再検討について」(『シンポジウム「平安時代の土器・陶器」各地域の諸様相と今後の課題』所収、名古屋、昭和56年)。
- 3) 寺島孝一 「石作窯跡の発掘調査」(『古代文化』第31巻第11号掲載、京都、昭和54年)。
- 4) 奈良・東大寺六花鏡
- 5) 「平安京左京五条三坊十五町」(平安京跡研究調査報告第5輯、京都、昭和56年)。
- 6) 「日本の陶硯」(東京、昭和53年)。
- 7) 檜崎彰一 「世界陶磁全集2 日本古代」遺物番号277、東京、昭和54年。
- 8) 註2)に同じ
- 9) 註1)に同じ
- 10) 「日本出土の中国陶磁」(東京、昭和53年)。
- 11) 寺島孝一 「西寺跡出土の白磁・青磁」(『古代文化』第21巻第1号、京都、昭和45年)、寺島孝一・百瀬正恒・堀内明博 「唐代邢窯の発見と日本出土の白磁」(『古代文化』第34巻第11号、京都、昭和57年)。
- 12) 兼康保明 「高島町中ノ坊遺跡」(『ほ場整備関係遺跡発掘調査報告書V』)大津、昭和53年)。
- 13) 大橋信弥 「七ノ坪地区」(『久野部遺跡発掘調査報告書』、大津、昭和52年)。
- 14) 註5)に同じ
- 15) 「押小路殿跡・平安京左京三条三坊十一町」(平安京跡研究調査報告第12輯、京都、昭和59年)。
- 16) 渡辺誠 「焼塩壺の研究」(第161回帝塚山大学考古学談話会発表試料、昭和55年)。
- 17) 「世界陶磁全集5」(東京、昭和50年)、145に類似。

第7節 遺構・遺物の年代観

検出した一括資料の中で、実年代あるいは相対年代を示唆するものがあるため、近年明らかになりつつある実年代を考えた上、推測を試みる。

1 SE-220

土師器皿の形態変化では、Cタイプ大皿(口径14cm以上)の消滅後に位置し、実年代を示唆する供伴遺物として「乾元大宝」(958年)を一枚検出している。参考とする遺構に、同じく乾元大宝を4枚検出している土壌、平安京左京内膳町SK-18¹⁾がある。しかし供伴遺物として、SE-220では見られないCタイプ大皿を検出している。伊野近富氏は乾元大宝の流通状況を加味して、SK-18の年代の一点を1000年前後においている。SE-220は、Cタイプ大皿の検出を見ないところからSK-18にわずかに後出するものと考えられ、11世紀初頭に位置すると考えられる。ただし井戸の性格上ある程度の時期幅は考慮したい。

2 SE-423

円塔1基を検出している。この円塔については西田直二郎氏が、大治三年(1128)白河上皇が法勝寺において供養した18万余基の円塔に比定している。円塔は、六勝寺を中心に検出しており、石田茂作氏によると性格的にはスツープに非常に近いものとしている。今回は、井戸から単品での検出であり、また仏教的な要素が見られない所など、本来の意味をなすものかは疑問であるが、12世紀中葉に遺構の年代をもってきて大差のないものと思われる。

3 SK-02

塩壺の蓋にメーカー印「泉州麻生」を読むことができる。渡辺誠氏によると、延宝年間(1673～1680)～享保年間(1716～1733)の製造としている²⁾。また壺(70・75)の高台内部に「錦光山」の印がある。これは京都粟田焼の陶家の印で、この名は元禄年間(1688～1704)に賜っている。よってSK-02は18世紀前葉と考えたい。

註

1) 「平安京左京内膳町」(『埋蔵文化財発掘調査概報(1980-3)』, 京都, 昭和55年)。

2) 渡辺誠「焼塩壺の研究」(第161回帝塚山大学考古学談話会発表資料, 昭和55年)。

第 2 表 主要遺構編年表

	SB	SE	SD	SK	その他	備 考
800					包含層	平城京 SB605B
900					包含層	
1000		SE-220・218				乾元大宝(958年) 内膳町 SK-18
		SE-531		SK-215		
1100	SB-01	SE-741・734 SE-418 SE-423	SD794			「寛治五年(1091)」紀年銘の 須恵器鉢 大治三年(1128)円塔供養
1200				SK-536 SK-512・571 SK-538 SK-49		
	SB-361			SK-524		
1300				SK-611 SK-87 SK-533 SK-388		
1400		SE-379		SK-350		
		SE-538		SK-42		
1500					SX-400	山科本願寺 焼土面
		SE-412		SK-31 SK-532		
1600					SX-534	明末染付の大量輸入
				SK-339		
1700				SK-02		「泉州麻生」印の塩壺 「錦光山」印の壺
		SE-354				

第8節 土師器皿の分類と編年観

11世紀以後と考えられる土師器皿を対象に分類・編年を行う。分類は各調査機関でそれぞれ試みられているが¹⁾、ここでは左京五条三坊十五町の調査で行われた分類法をとり²⁾、今回の調査及び押小路殿での調査³⁾等の資料をもとに、分類・編年を補足・修正するものである。

1 土師器皿の大分類 11世紀以後の土師器皿はまずAタイプ(褐色系)、Bタイプ(白色系)に分類できる。分類の基準は①成形法及び形態⁴⁾、②胎土、③規格性、④焼成方法におく。ただ焼成方法はいずれも酸化焰焼成で簡単な窯をもって焼成されたものと考えられ、製品での区別は明瞭ではない。また明確な土師器皿窯は発見されていない。ただ木野に最近まで使われていた窯が現存する。

Aタイプ、Bタイプの分類は以下を基準にしている。

Aタイプ(褐色系)

- ①手づくねで成形。円形を作り出すために端部に多くの加工が見られる。
- ②茶褐色～赤褐色を呈す。
- ③基本的に大皿・小皿の2種類の規格で構成する。

Bタイプ(白色系)

- ①型作りの成形法を用いる。
- ②白灰色～淡茶褐色を呈し精良(鉄分が少ない)。
- ③数種の口径を示し、一時期「へそ皿」を供伴する。

他に形態上特徴のあるものを、Cタイプ、Dタイプ、Eタイプで区別する。

Cタイプ 俗に「て」の字状口縁と言われるもので、11世紀以後では1種類の口径を示すもののみ検出される。Aタイプとセットを組みAタイプ系に属する。

Dタイプ 俗に「受け皿」と言われているもので、口縁を内側に折り込む形態をとる。胎土は、褐色系、白色系、どちらも存在する。2種類以上の口径を見る。Aタイプ系、Bタイプ系いずれにも属さない。

Eタイプ 粘土塊を肘で圧して成形する粗雑な皿。Aタイプ系消滅期と前後して出現してくる。焼成の甘いものが多い。2種の口径を見ることが出来る。Aタイプ系に属する。

2 各タイプの小分類 各タイプの時期的変化は、A₁～A₃、B₁～B₄の小数字を持って表わす。小分類は基本的に検出量が多く、形態変化の大きい大皿で行う。大皿と小皿では大きな形態変化の見られる時期がずれる場合があるが、セット関係でとらえる。

Aタイプ

A₁タイプ

- ①口縁部が1段又は2段のナデにより引き起こされ外反する。

②灰茶褐色～茶褐色を呈し、砂分を含むものが多い。

③大・小皿のほかに中間口径を示すものがある。ただしこれら小形品は検出量が少なく、基本的には、A₁タイプ大皿・Cタイプ小皿でセットを組む。

A₂タイプ

①口縁部が1段又は2段のナデにより引き起こされ、内湾する。

②淡茶褐色を呈し、砂分は少なく精良なものが多い。

③大・小皿でセットを組む、中間口径を示すものはほとんど検出されていない。徐々に小形化する。

A₃タイプ

①口縁部が直線的に立ち上り、底部との境に屈曲部を作る。初期形では端部に面取り状のナデが入る。

②胎土は、初期形ではA₂タイプとほぼ共通し、後、明赤褐色～茶褐色を呈し、砂分を多く含むようになる。

③徐々に小形化、粗雑化が進むが、最後まで、大・小皿のセット関係はくずれない。

Bタイプ

B₁タイプ

①深形

②白灰色～白桃色を呈し、精良、軽質。

③初期形は、大・中・小の3口径で構成され、後、堦・へそ皿でセットを組む。

B₂タイプ

①深形、B₁に較べやや外へひらく。

②淡赤黄色～淡茶褐色を呈し、精良、重質。

③堦・へそ皿でセットを組む。

B₃タイプ

①浅形

②明赤褐色～淡茶灰色を呈し精良。

③数種の口径を示すもので構成される。後、口径規格の整理が見られる。

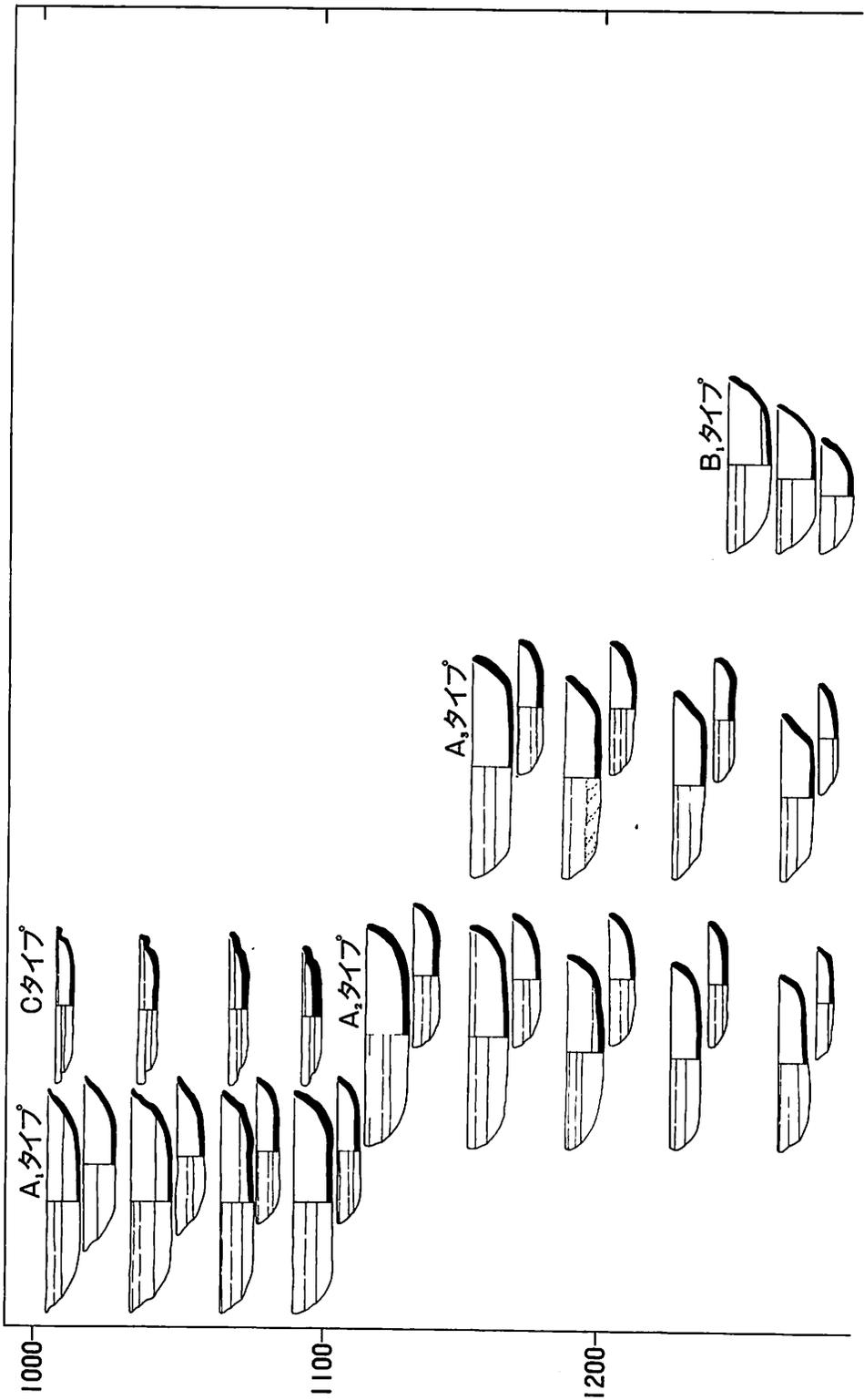
B₄タイプ

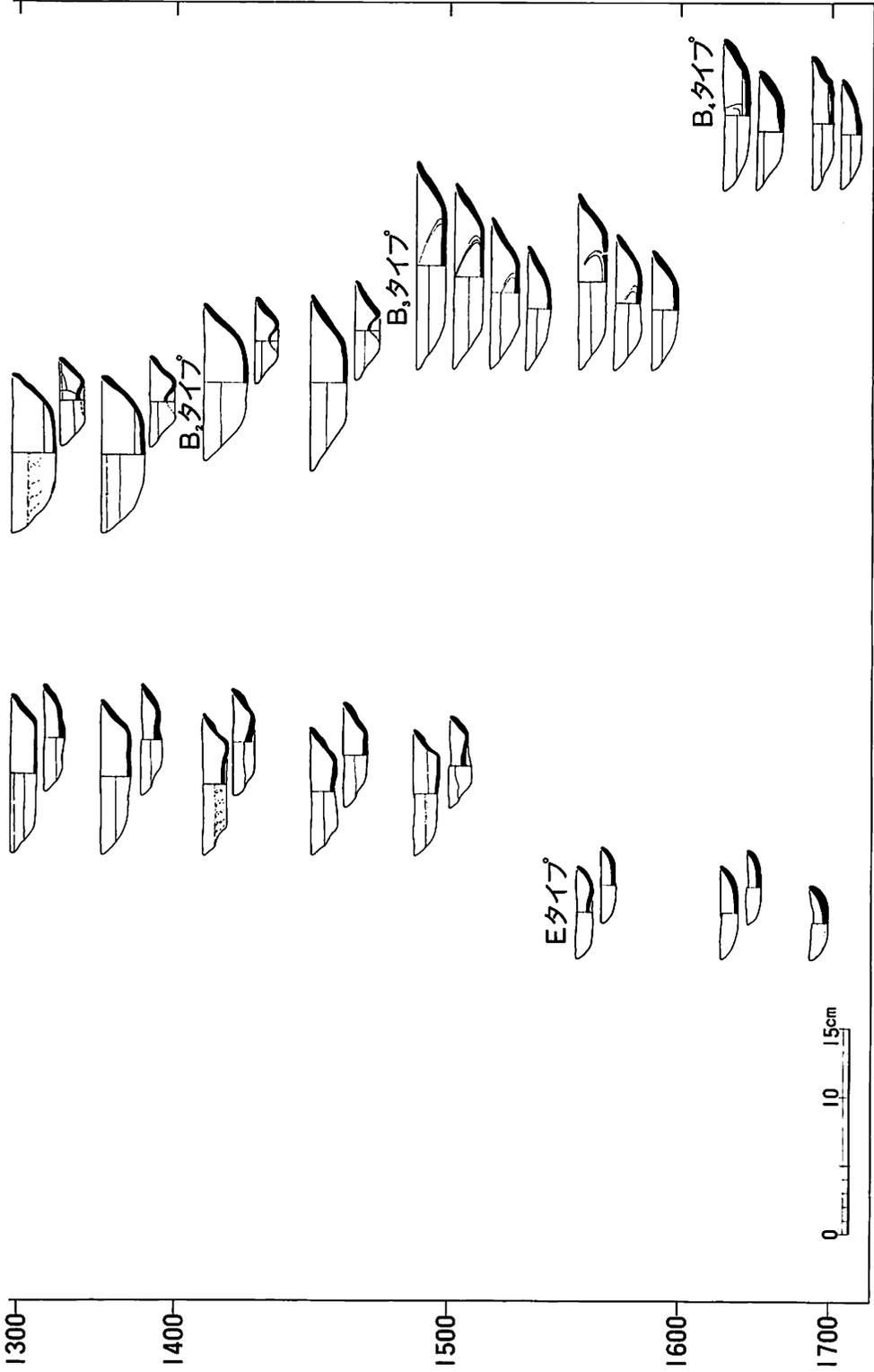
①浅形で大皿は内面屈曲部に溝が廻る。

②淡茶褐色を呈し精良、後、砂を多く含むものもある。

③大・小皿、2規格のみの検出となる。

他に土師器皿として分類されるものに、糸切り、又はへら起こしの皿があるが、これらは京都では検出量がきわめて少なく、地方からの流入品と考えられる要素が多いため⁵⁾、今回の分類からは除外している。またこれらの土器で白色を呈するものがあるが、本分類の白色系土師器皿の胎土とは共通しない。





第36図 土師器皿編年図表(11世紀～17世紀)

第36図で示した編年表は、各タイプをセットに組んで編年している。

A₂・A₃タイプが供伴する時期の小皿についてはいずれがA₂・A₃を示すか明確ではない。ただし、A₂タイプ最終段階においては、明確な違いが小皿にも見られる。

註

- 1) 伊野近富 「土師器」(「平安京左京跡(内膳町)昭和54年度発掘調査概要」, 『埋蔵文化財発掘調査概報(1980—3)』所収, 京都, 昭和55年)。宇野隆夫「土器と陶磁器の種類と器種」(『京都大学埋蔵文化財調査報告II—白河北殿北辺の調査—』所収, 京都, 昭和56年)。
- 2) 横田洋三 「出土土師皿編年試案」(「平安京左京五条三坊十五町」(平安京跡研究調査報告第5輯, 京都, 昭和56年)。
- 3) 横田洋三 「土師器皿(Bタイプ系)の器形, 規格の変化と製作技術について」(『押小路殿・平安京左京三条三坊十一町』, 平安京跡研究調査報告第12輯, 京都, 昭和59年)。
- 4) 同上
- 5) 横田洋三 「平安末～鎌倉の土師器皿(京都を中心に)」(『中世土器研究』19, 高槻, 昭和57年)。

第3章 弥生時代の遺構・遺物

第1節 遺構

1 A・B区の調査

1) 遺物包含層

A・B区はC・D区と異なり、平坦地における弥生時代遺物の包含は稀薄であった。但し、後期に属する弥生溝1の覆土上に中期の土器を含む層(A層)が乗っていたため、西側のC区方面から2次的な流れ込みがあったものと推定される。

2) 弥生溝1(第37～39図)

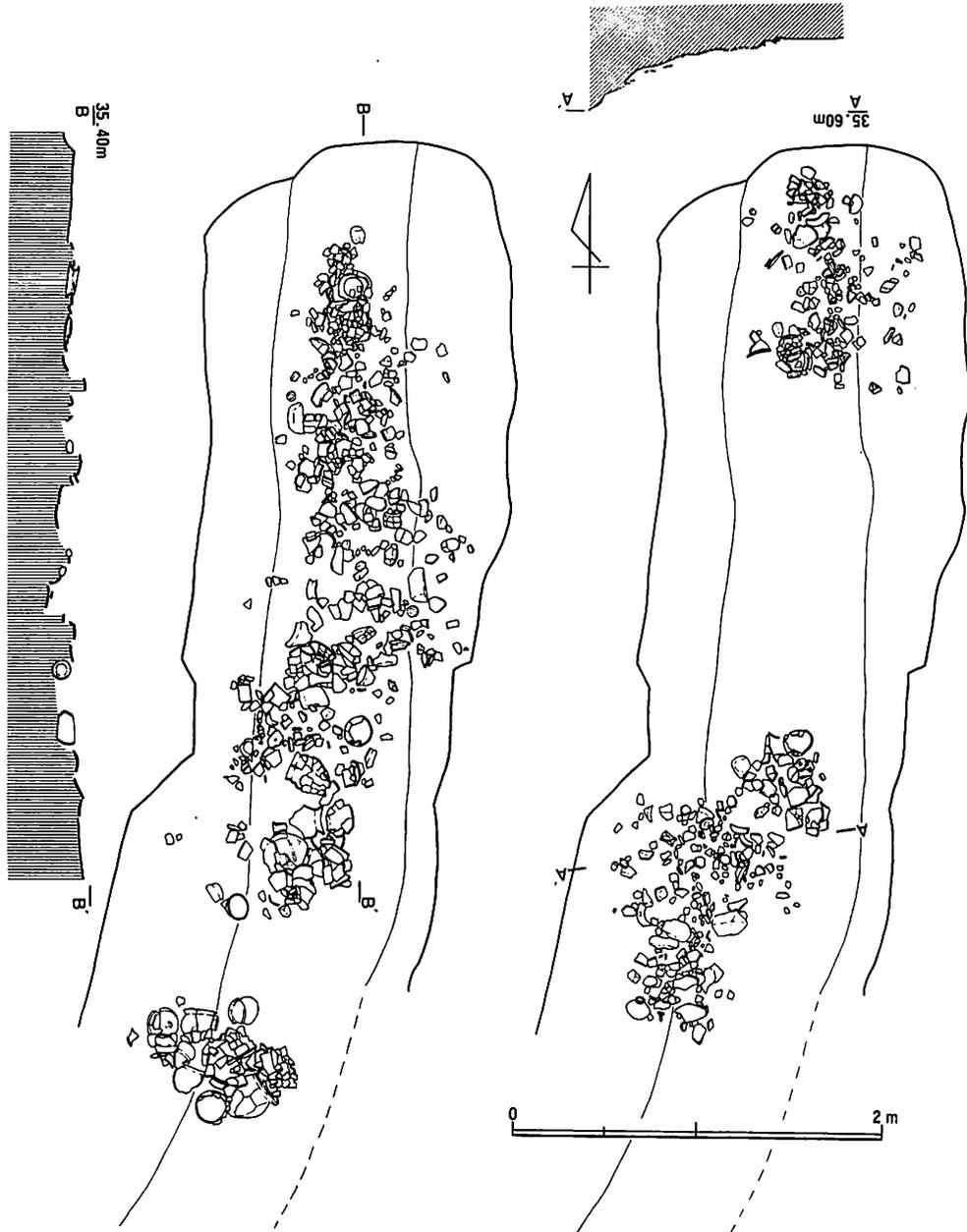
調査区の西側に位置し、B区からA区にまたがっている。一部後世の井戸や溝によって破壊を受けているものの遺存状態は良く、南北方向に13.5mの遺存が確認され、北端には立ち上がりが認められたが、南側にはまだ延びることが確実である。但し建物の基礎によって既に失われていることが推測されたためにその部分の調査は断念せざるを得なかった。

溝の横断面は浅いU字形を呈するもので、部分によっては中位の両側に段を有し2重掘り込み状になっている。溝幅は1.3～1.7m、深さは平均0.6mを測り、地山の黄褐色粘土を貫き、さらに基盤の砂礫層を0.25m程掘り込んでいる。また、溝底のレベルに注目してみると、北端で標高35.2m強、南端で35.1m弱を測り、13.5mの区間で実に0.1m強の差しか存していないことが判る。この事実からは本溝が相当高度な土木技術によって構築されていることが知られるのであって、水害に悩まされやすい立地から考えれば、地形の傾斜に従って南から北へ向け水を抜くための排水路面的な性格が推定されても良いものと思われる。

溝内堆積土層の観察によれば、灰色系統の色調を呈する粘質土が充満していることは溝の傾斜の緩さと呼応して、水流がおだやかであったことを示すものといえよう。

溝内出土遺物として大量の弥生式土器と僅かの石器が挙げられるが、本溝の中間地点を破壊して東西方向に走る後世の溝(S D145)を界として、北側では遺物が少なかったのに対して、南側では対照的に大量の遺物を出土している。このために、南部に限って一種の分層発掘法を用いて遺物の出土状態の記録と取り上げを行うことにした。但し、溝内の堆積層が近似しており分層の難しいことと、遺物が足の踏み場も無い程密集していたために、段階的に3次の遺物検出面を精査したというのがふさわしく、必ずしも、これが層位と完全に対応するもので無いことをことわっておかざるをえない。

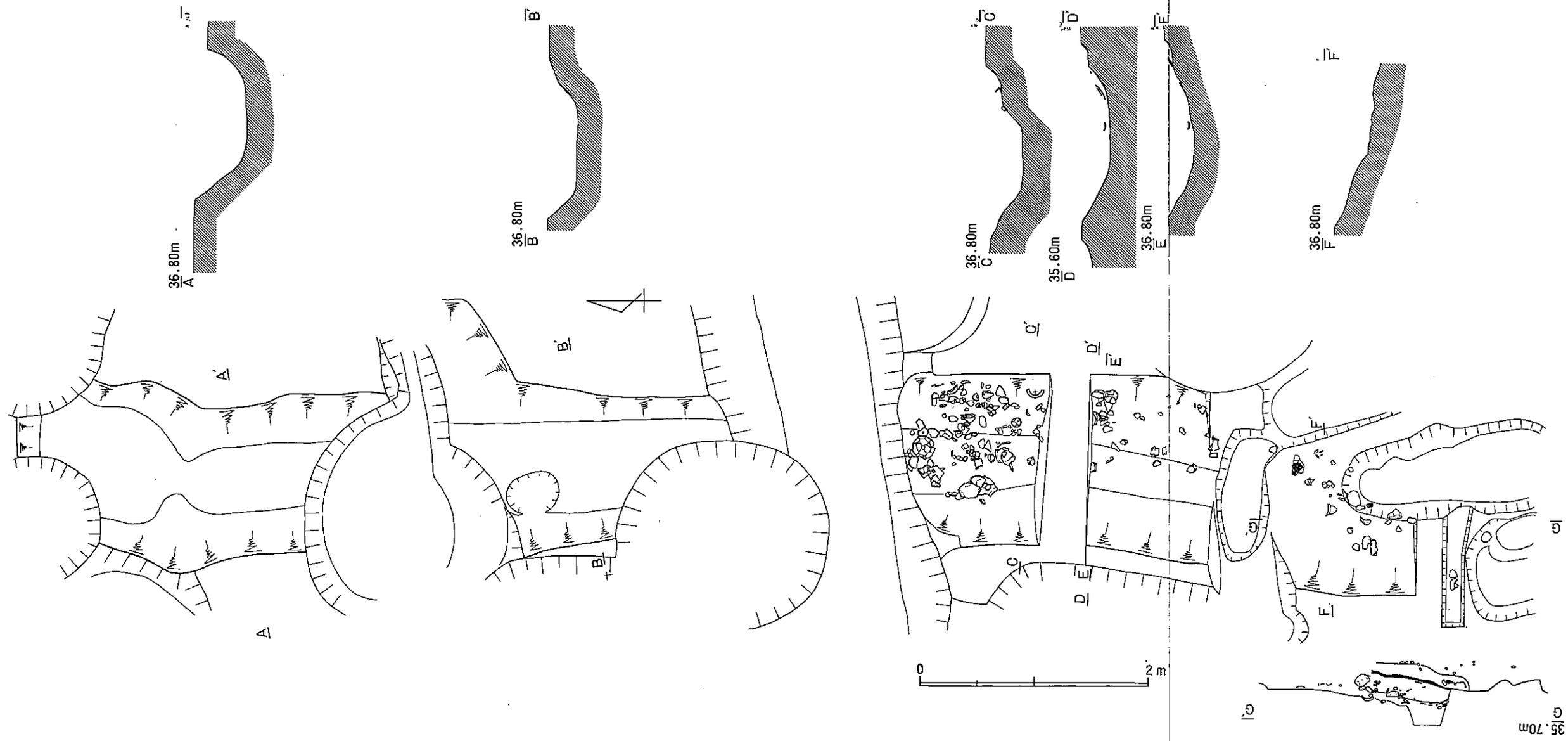
第1検出面(第37図)では南部でも北半に遺物の量が多く、南半では少なかった。遺物の検出レベルも両者に相違が認められ、北半では溝底から0.2m以上の標高35.4m台にあたり、横断



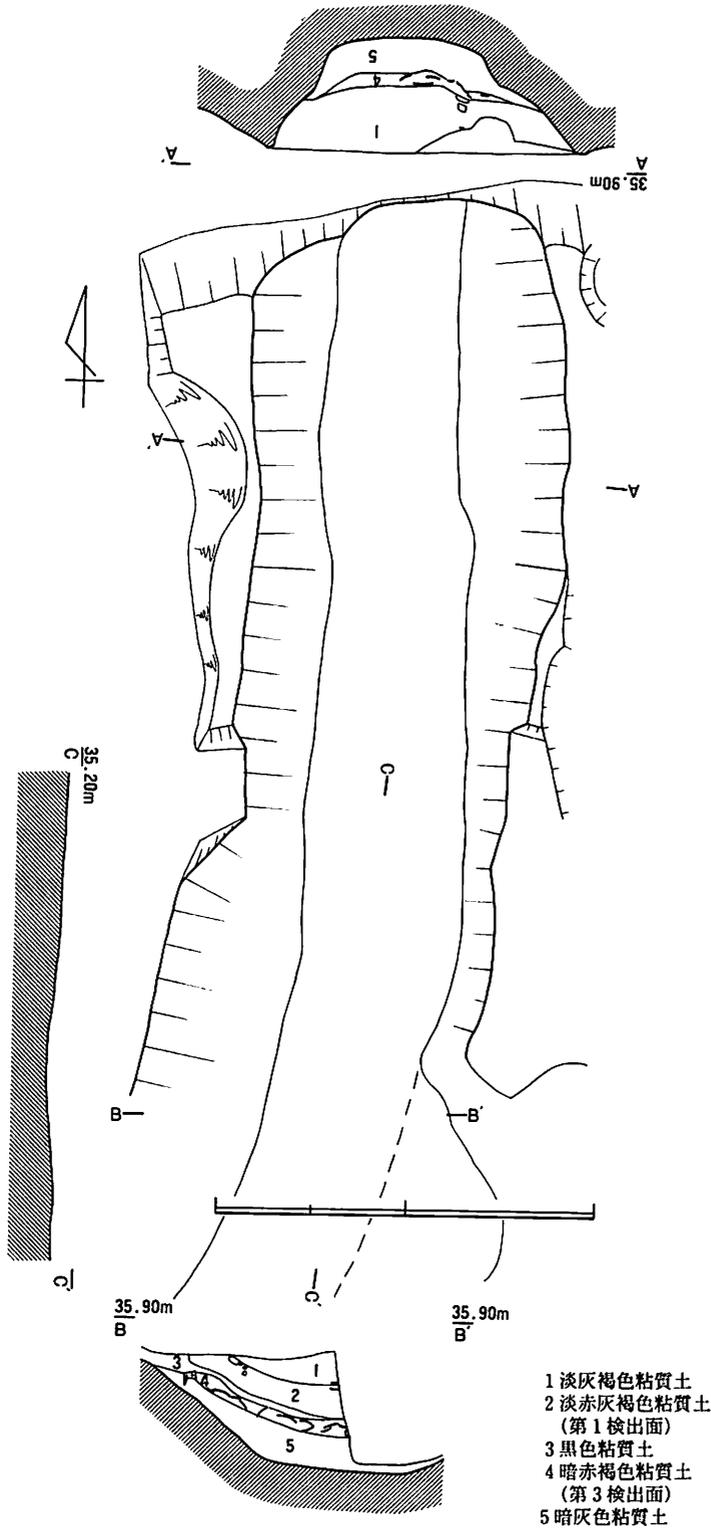
第38図 弥生溝1第2検出面(右)第3検出面(左)実測図

土層A(第39図上)の第2層(暗灰色粘土層)にはほぼ対応するのに対して、南半では溝底から約0.45mの標高35.55m前後にあたり、横断土層B(第39図下)の第1層(淡灰褐色粘質土)と第2層(酸化鉄分を多量に含む淡灰褐色粘質土)の境界に相当している。遺物には01~50と101~126の計76の番号が付されたが、全体に破片資料が多かった。南部北半での遺物の分布状況及び横断土層Aから見る限り、溝の東側からの廃棄が想定される。

第2検出面(第38図右)では北端と南端に分かれて遺物が分布し、中央部では稀薄であった。



第37图 弥生溝 1 全体実測図



第 39 弥生溝 1 南部完掘実測図

遺物の検出レベルは北端では溝底から0.1~0.2mにあたる標高35.3~35.4mの間にあり、横断土層Aの第3層(暗灰色混礫粘土)の上位に対応するが、南端ではレベルはやや高く横断土層Bの第2層にほぼ対応している。遺物には201~289の計89の番号が付されたが大型の破片に混っていくつかの半完形品も認められた。遺物の分布状況からみて、北端では東側から、南端では西側からの廃棄が想定される。

第3検出面(第38図左)では溝内全域に亘って濃厚な遺物の分布をみた。遺物の検出レベルは多くが標高35.2~35.3mの間に含まれ、北端では横断土層Aの第3層下位にあたり、南端では横断土層Bの第4層(赤褐色粘質土)及び第5層(暗灰色粘土)の上位に相当している。遺物には301~383の計83の番号が付されたが、第1~第2検出面に比べて大形の破片が多く、特に南側ではそのままほぼ完形に復元しうる資料が多く、実測図に示したものの大部分はこの第3検出面出土資料という結果になっている。

特筆すべきはこの第3検出面から2点の石器が出土していることで、1点は磨製の小型扁平片刃石斧(第44図2)、もう1点は磨製の凸基式柳葉形石鏃(第44図9)であるが、純粹に第5様式のみを含む本溝から石器類が伴出していることは畿内地方周辺部においてさえ、弥生時代後期に石器を使用していることを実証するもので、重要な実例とすることができる。

尚、横断土層図Bから明確に窺われるように、弥生溝1の南端では、溝の西側から大量の土器類の投棄が認められ、しかも、それがほとんど完形品に近いものばかりで、直上には大量の炭を含んだ粘土層(第3層)が乗ること、これに加えて住居址の炉体と考えられる焼土塊も検出されていることから考えて、この時期に、住居址の取り壊わしと、排水路の機能停止につながる大量廃棄が行われていることが確実であり、特に開削後間もない溝の廃絶を重視すれば、共同体内に何か大きな動きがあったことが推測されてくるのである。

3) 弥生溝2(第40図)

A区北東部に位置する南北方向の溝で、幅1.3~1.6m、深さ0.6mを測り、横断面はU字形を呈するが中位にわずかな段を有しており2重掘り込みになっている。

北側が調査範囲外にあたり、南側が後世の攪乱によって失われているために調査できたのは長さ5m程であったが、本来は南北両方向にさらに延びるものであったことが確実である。

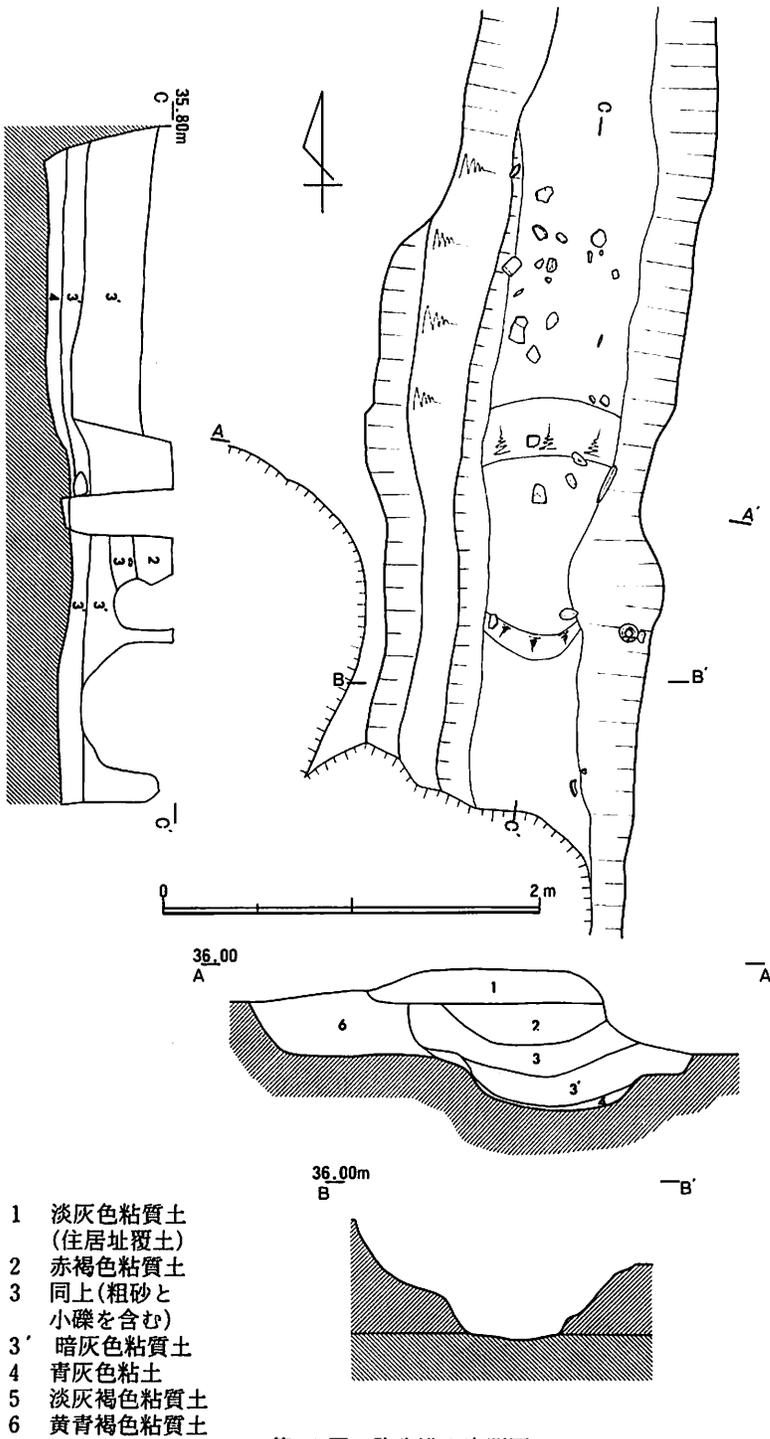
本溝は酸化鉄分を多く含む地山の黄赤褐色粘質土を掘削した人工の溝であって、底面は基盤の砂礫層を掘り残す部分と0.3m程掘り下げている部分とがあるため同一レベルとならず、中程にはわずかな高まりを残す結果となっている。このため溝中の水流は緩やかなものであったと推測され、覆土中に砂礫をほとんど含まず、灰褐色に近い粘質土となっていることとも一致する。

底面に近い暗灰色粘質土(第3層)から第4様式に属する土器類と共に、磨製石剣・大型の扁平片刃石斧・柱状石斧・砥石・磨製石鏃等の豊かな石器群を検出した。この事実から弥生溝2は弥生時代中期後葉に掘削され、覆土上に第5様式末頃の住居址が乗ることから、弥生時代後期にその機能を停止したものと考えることができる。

4) 住居址(第41図)

弥生溝2の覆土を切り込んで構築されており、主軸方向は弥生溝2の方向とほぼ一致する。第40図土層断面図(S P-A~A')の第1層が住居址の覆土であり、淡灰色粘質土が堆積し、床面には厚さ5mm程度の炭化物層が認められた。東側と南側を後世の攪乱によって失い、北側が調査区外にあたるため、検出できた部分は西壁よりの幅1.2m、長さ4.2m程にすぎなかった。床面は平坦で良くしまっており、北側の西壁から1m程の位置に直径0.3mの不整形の地床炉が存在している。中心部は赤褐色を呈し良く焼けていたが、周辺部は生焼けでくすんだ赤褐色を呈していた。この他、床面には大小6個のピットが検出されたが柱穴に相当するものは無かった。但しピット-2は直径0.5mの円形プランの大型土壇で、深さ0.3mを測り、壇内からは底

面から浮いた状態で長径25cmもある台形状の石が検出され、その上下から土器片が数点発見された。



第40図 弥生溝2実測図

住居址の覆土が10cmと浅いため検出された土器片も少なく、復原不可能なため図示できるものが無かったが、第5様式末から庄内式に属するものと考えられ、この時期には、本遺跡に多数認められた排水用と考えられる溝も必要無くなり、居住地とすることが可能になっている点は注目に価する。

2 C・D区の調査

C・D区はA・B区と異なり、黄褐色粘土の堆積が東端でしか認められず、遺構及び遺物包含層は礫層上に検出されている。

1) 遺物包含層

調査区全面が弥生時代の遺物包含層となっているため、この淡褐色砂

質土層を機械的に2回に分けてレベルを下げ、上を弥生第1層、下を弥生第2層とした。その結果、後述の弥生溝3と弥生溝4に囲まれるC区では弥生第2層に第2・3・4様式の土器が混在し、弥生第1層には第2・3・4・5様式の混在が認められ、必ずしも分層の効果を上げることにはならなかった。

弥生溝4の西側にあたるD区では弥生第2層に第2・3様式が混在、弥生第1層からは第5様式が少量認められた。

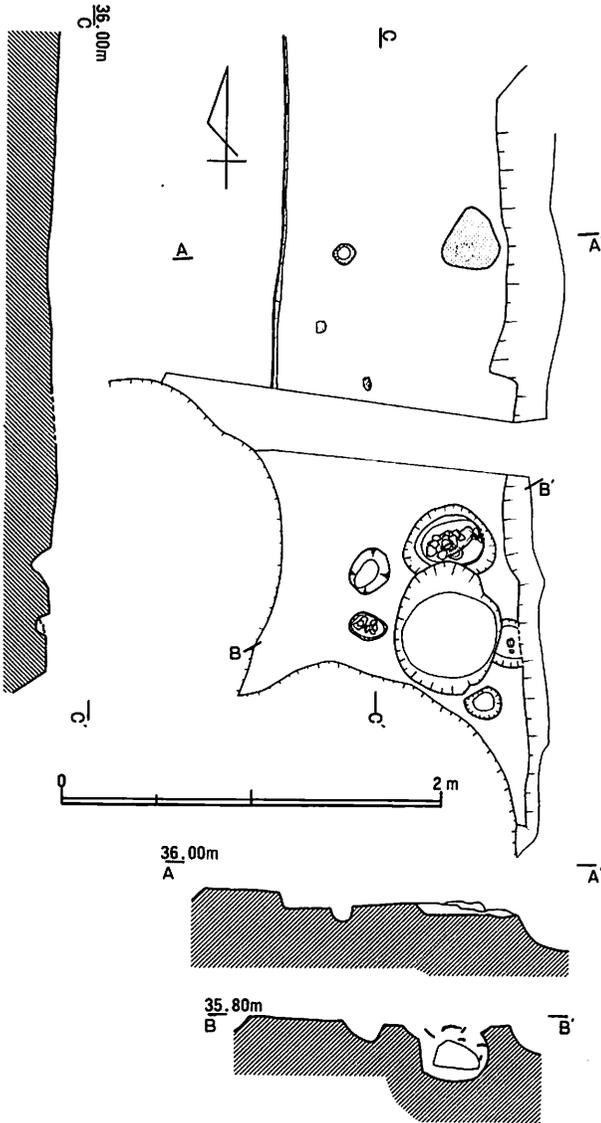
2) 弥生溝3 (第43図)

C区を南北に縦断する溝で、所々を平安時代以降の遺構、特に井戸に破壊されているが、途切れることなく、延長23.0mに亘って確認され、さらに南方及び北方に延びることが確実である。

部分的な調査しか行われていないが、土層断面図からみると本溝は当初は地山の礫層を切って流れる幅6m、深さ0.8m程の流路(古流路と呼称)であって、下層には砂礫が厚さ0.5mに亘って堆積し、粘土層の認められないことから、水勢の激しかったことが判る。この砂礫層中には第2様式の土器が少量認められることから、本溝の成生を弥生時代中期前葉以前に置くことができる。

この砂礫の堆積の著しさによって、中期後葉の段階には既に深さ0.2~0.3程の浅い窪地状と化し、水流の鈍化によってC区弥生包含層と共通する淡褐色土が堆積するが、同層中に第4様式土器を包含することが確かめられている。

そして、ほぼ埋まり尽した後期の段階で溝の掘り直しが行われており、幅2.8m、深さ0.5mの溝として再生する。調査区の南半では



第41図 住居址実測図

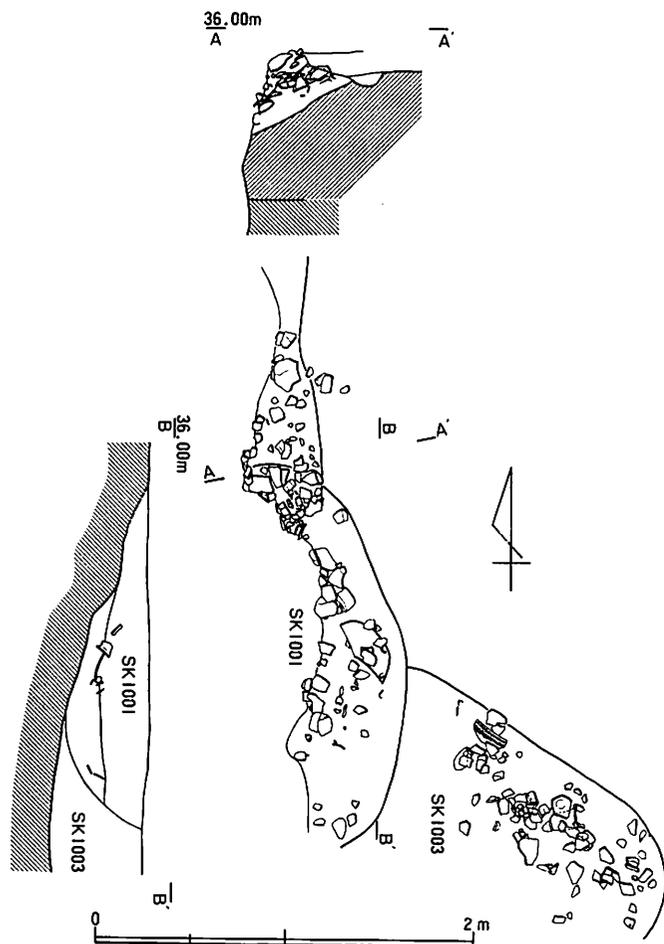
溝の西側斜面に炭層が確認され、図に示すように大量の第5様式の土器が散乱していることから、西側から土器類の排棄が行われたことが判明した。この第5様式段階の人工溝の方向は当初の水路とほぼ一致するものの、南側では土層断面図(第43図)に示すように大きく西側に屈曲し、本来の流路からそれることが判明している。

尚、図に一点鎖線で示したのが当初の水路の復原想定、連続鎖線で示したのが第5様式の段階の人工水路の復原想定である。

3) 弥生溝 4 (第43図)

D区の東寄りを南北に縦断する溝で、幸いなことに後世の遺構による破壊は少なく、全長11.0mに亘って調査され、さらに南方及び北方に延びることが確かめられている。

図に実線で示したのは弥生溝3と同様に後期の段階に掘り直された溝(新人工溝)で、幅2.0m、深さ0.4mを測る。溝が埋没する寸前の段階で第5様式土器の排棄が行われており、幅0.6m、深さ0.05mのレンズ状の堆積が中央部において認められた。



第42図 SK 1001・1003 実測図

本溝も当初は幅9m、深さ1.2mを測る大規模な流路(古流路と呼称)で、土層断面図に示すように下層には砂礫が厚く堆積しており、水勢の激しかったことが判る。この砂礫層には遺物が含まれておらず、この上に第2・3様式土器を含むC区弥生第2層が乗ることから古流路の成生はかなり古いものと推定される。

しかし、弥生時代中期前葉には水勢がおとろえたものと考えられ、暗灰色土が厚く堆積し、この中に第2様式の土器を多く含んでおり、特に東側からの流れ込みと推定されるものが多い。

そして溝がほぼ埋まり終わった後期の段階に、前述のように溝の掘り直しが行われたことが確かめられている。

4) S K1003(第42図)

D区南壁寄りにある土場で、後世の攪乱によって北半部しか現存しておらず、西側をS K1001によって切られているが、小判形を呈するものと考えられ長軸復原長2.2mを測る。丸底で深さは0.5mを測り、墳内には炭を多量に含有する黒褐色細砂が堆積していた。下部から僅かの第1様式土器を、それより上のレベルで多量の第2様式土器と欠損した石器類を出土していることから、弥生時代前期末から中期前葉にかけての排棄用ピットと考えることができる。

5) S K1001

S K1003の西側に位置し、その一部を切って掘られている。西側を後世の攪乱によって失っているが、現存部から楕円形を呈するものと推定される。復原径2.0m、深さ0.45mを測り、内部には黄褐色ないし茶褐色の細砂が堆積していた。底から0.2~0.3mのレベルで多量の第2様式及び第3様式古段階の土器が含まれていることから、S K1003埋没後まもなく掘られたもので、弥生時代中期前葉から中葉にかけての排棄用ピットと考えることができる。

6) S K1005

C区南端に位置する土場で、弥生溝3の当初の流路中に堆積する暗褐色砂層を掘り下げて作られている。北側を失っているが、現状で長軸長2.0m、短軸長0.9mの長楕円形を呈し、深さ0.3mを測る。内部には弥生溝3古流路の最上層と共通する青灰色微砂層が堆積していることから水流によって比較的短時間の内に埋没したものと思われる。第2から第3様式古段階の土器と破損した太型蛤刃石斧1点を出土しており、弥生時代中期前葉から中葉にかけての排棄用ピットと考えられる。

第2節 遺物

1 弥生式土器

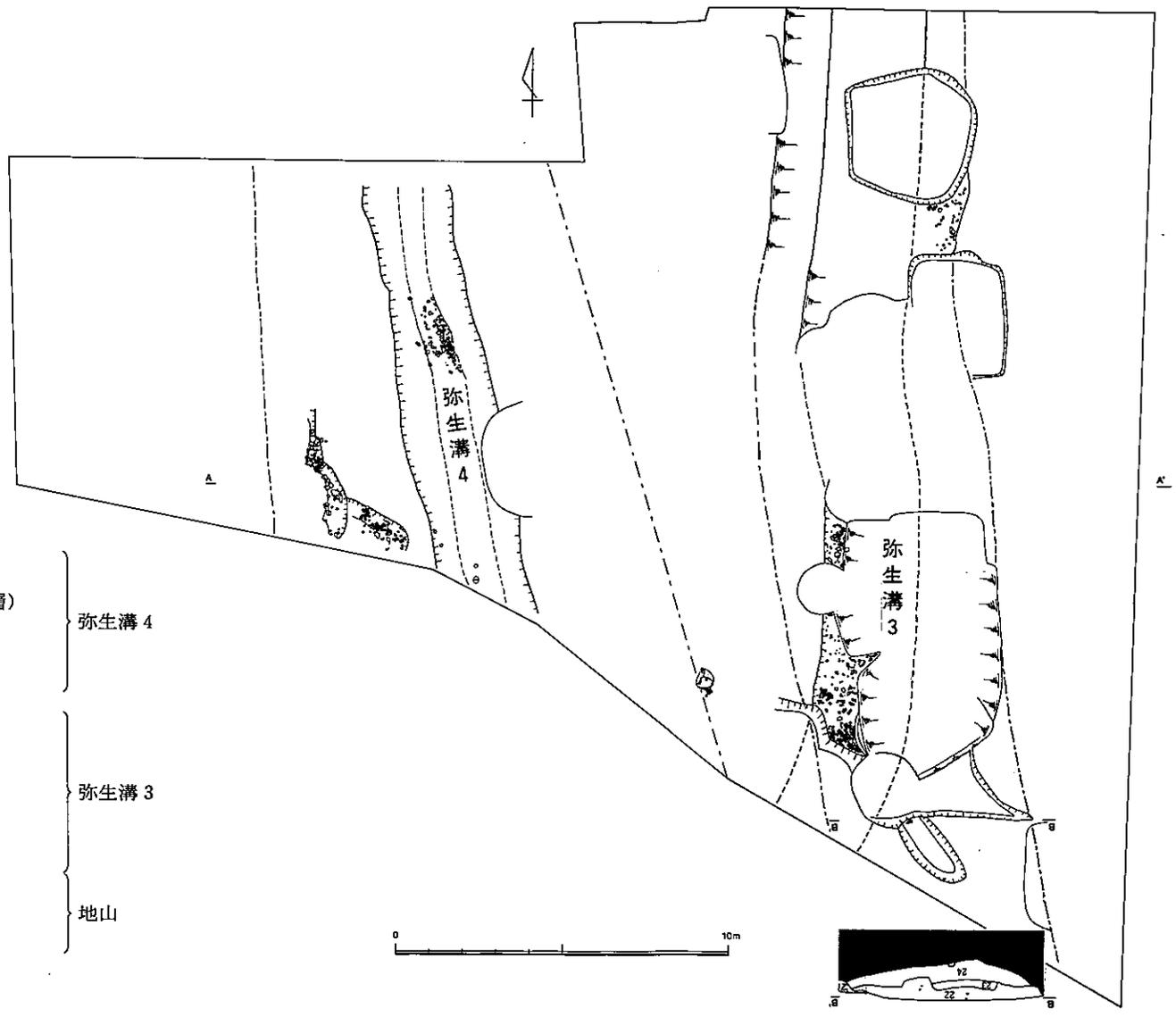
1) 第1様式の土器(㊸)

本様式に属することが明確なものは全調査区中でただ1点のみ出土している。

第2様式の土器を大量に含むS K1003の下層から検出された甕口縁部で、外面タテハケ内面ヨコハケ調整によっており、口縁部は弧状にゆるく外反する。端部に刻目文、頸部にはヘラ描沈線が1条現存している。第2様式の土器と伴出することから新段階に属するものと考えべきであろう。

2) 第2様式の土器

畿内第2様式併行と考えられる土器はS K1001及びS K1003の一括資料の他に、弥生溝3及



- 1. 褐色土(弥生溝 4 表層)
- 2. 暗灰色土(弥生溝 4 上層)
- 3. 淡褐色砂質土(弥生第 2 層)
- 4. 淡黄灰色砂
- 5. 暗褐色砂礫
- 6. 黄色砂
- 7. 灰色砂礫
- 8. 黄灰色砂質土(地山)
- 9. 灰色土(弥生溝 3 上層)
- 10. 淡褐色土(弥生第 2 層)
- 11. 暗褐色土
- 12. 淡黄色礫
- 13. 明灰色砂
- 14. 明灰色礫
- 15. 暗褐色土
- 16. 黄灰色砂
- 17. 暗黄灰色粘質土
- 18. 黄灰色砂質土
- 19. 灰色砂質土
- 20. 暗灰色砂
- 21. 灰褐色粘質土
- 22. 青灰色細砂
- 23. 暗褐色細砂
- 24. 暗褐色粗砂

第43图 弥生溝 3・4 実測図

び弥生溝4, C区, D区, 弥生溝1覆土上のA層から少量出土しており, 調査全域に亘って分布している。ここでは共伴関係の信頼できる土壌出土品を中心に記述していきたい。尚, SK1003はSK1001によって切られており先行することが明らかである。前者には微かの先行様式, 後者には微かの後続様式が混在している。

器種は, 広口壺・受口壺・細頸壺・把手付大型鉢・甕・甕蓋が認められる。

広口壺形土器A (120・124・163~165・176・178~183・185・209・213・215・230・235)

全体を知りうる資料は無いが, 長い頸部が徐々に開き, 口縁部で外反して水平に近く開くもので, 頸部と体部の境界が明瞭でない(185)。口縁部は端部がほとんど肥厚しないもの(タイプI)の他に, 下端に粘土を貼りたすことによって斜め下方に肥厚させるもの(タイプII)と, 擬口縁の先端に粘土帯を接合して明確な垂下口縁とするもの(タイプIII)がある。これは口縁部装飾法の発展過程を示すものと考えられるが, 第2様式の段階でタイプI~IIIの全てが出揃っていることは本地域では壺の口縁部を飾ることが畿内中心部以上に早くから発達したためと判断される。

タイプIでは口縁部端面は無文(163・180・182)か刻目を加える程度のもの(124・①上・④)が一般的で, 櫛描波状文を施すもの(164・②)は少ない。

タイプIIではむしろ口縁部端面を飾ることが一般的で, 通常の間目文(202)の他に, SK1003からは下端部に二重に棒で押圧することによって作り出した特殊な刻目文例③が出土している。また, 波状文を旋すもの(209・213・215・⑤)も多いが, これらは通常の間目ではなく, 間隔をあけて半截竹管または歯の少ない櫛を束ねた特殊な工具によっていることが注目される。

タイプIIIでは口縁部端面の加飾はさらにパラエティーに富み, A櫛描直線文を施すもの(④・④), B端正な櫛描波状文を施すもの(176・179・④), C円形浮文を連続的に貼り付けるもの(178)等があり, これらには刻目文と組み合わせるものもある。

広口壺Aの特徴として特筆されるべき第1点は口縁部内面に加飾する土器の多いことで, 前述した特殊な施文具によって直線文④や波状文(230・⑤)の他, 縦描きの直線文(209・213・215・④)などが施されている。

同じく特筆されるべき第2点は口縁部内端にコブ状の突起をもつものが多い点である。全体の配置が判る例は無いが, 間隔をおくもの(163他)と2個1組(③他)とするものがあり, 若干の形状の相違(高低と円形・楕円形の別)も存在している。これと関連して壺形土器の中に体部上半にコブ状突起をもつもの⑥があることも注目される。

このような特徴は近江系の壺形土器個有の特徴と考えられる。

尚, 主たる文様帯は頸部にあり, 単帯構成の櫛描直線文を数帯施すものが最も多く, 最下に波状文を加える例(181・183)も認められる。施文具は通常の間目の他に, 特殊なものが用いられることは前述の通りであるが, わけても19は3・2・1条と異なった櫛歯の間隔をあけて順次束ねたものを使用しており特異である。

広口壺Aの中には通常の大きさ(口径25cm前後)のもの他に, 口径20cm以下の小型品(165・

235)が存在しているが、口縁部内端にコブ状突起をもつ点が共通している。235の口縁部内面には扇形文が一巡している点が注目される。

広口壺形土器B (104・121・162・169)

頸部が太く直立気味のもので、コブ状突起をもつものがある点などAに共通するが、端部が肥厚せず紋飾もやや乏しい傾向がある。

広口壺形土器C (166・217)

頸部の存在が明確でなく、太い体部から外反する短い口縁部に移行するものを分類した。166は無文、217はタイプIIの拡張口縁の端面にヘラ描の斜格文を施すのみで装飾に乏しい。後者は深草遺跡に類例がある。

尚、これら広口壺形土器は突出する平底(105)をもつと推定され、製作工程を示す一例(133)も見られる。

受口口縁壺形土器(177)

S K1003に頸部がほとんどくびれず、口縁部が外反して外へ張り出した後、内弯気味に立ち上がる大型の特殊な器形の壺形土器がある。外面調整は極めて粗いハケによっており、口縁部外面に2段の斜位櫛歯圧痕文を巡し、2個1組の耳状突起を推定4対付している他、水平な口縁部端面にも波状文を施している点など近江系の壺形土器の特徴をもっている。深草遺跡に同タイプのものである。

細頸壺形土器(197)

C区弥生第1層から小型で頸部の細長い細頸壺が出土している。頸部は徐々に径を増した後、端部で急に内傾する特異な器形をとる。文様帯は頸部から体部上半部に及び、単帯構成の櫛描直線文を繰り返しており端部外面の他に、水平な口縁部端面にも波状文が施される点はS K1003出土の受口口縁壺との共通性が注意される。滋賀県南滋賀遺跡に類例があり、近江系の土器に含めることができる。

尚、183は本様式の細頸壺の体部と推定されるが、下膨れの算盤玉状の器形は近江地方の他に伊勢湾地方にも顕著な地域色である。

他地域産の壺(49)

S K1003から体部上半にヘラ描の重四角形文と重三角形文帯をもつ細頸壺と推定される土器が出土している。胎土・焼成共に他と著しい相違があり、一見して搬入品と判るものである。関東地方の中期初頭の土器の中に類例を見出すことができる。

壺形土器に施される他の文様

本様式に伴う文様の内、器種別の記述からもれたものについて触れる。

S K1003には複帯構成の櫛描直線文が存在している(45・46)。この内46は一見、太細併用の櫛描直線文に見えるが、ヘラは使用しておらず、特殊な一個の施文具によっている点が特筆される。これはいずれも頸部径数cmの小型の細頸壺と推定される。

S K1001及びS K1003以外では弥生溝1上層に広口壺口縁部内面への棒による全面的な刺突

文が1例ある(④)。類例は長岡京市森本遺跡にみられる。

また、単帯構成の櫛描直線文帯上に縦2列の背中あわせの扇形文を加え、その間を擦り消して作り出した擬流水文⑤も同時期の文様と推定される。類例は京都市深草遺跡などに見られる。

把手付大型鉢形土器(108)

弥生溝3から出土。一部を残すのみであるが、厚手大型で復原口径31.8cmを測る。体部はやや深いものと推定され、頸部でわずかにくびれてから口縁部は弧状に外反する。粗いハケ調整が行われており、頸部直下に横長扁平な把手が付されている。第1様式から存在する器種で山城地方では森本遺跡に例がある。

甕蓋形土器(167)

S K1001から半球形で裾部の開く甕用の蓋形土器が出土している。高台状で外開きのつまみが付されているため蓋と判るものの、該期の鉢形土器との共通性が強く、蓋・鉢両用が考えられる。

甕形土器A—I(174・175・187・188・189・191・223)

体部は張りの弱い倒胴形を呈し、頸部がゆるく外反して開く、所謂如意形口縁をもつもので、体部最大径と口径がほぼ等しい。外面調整は粗いタテハケ、口縁部内面はヨコハケを行っている。以上の特徴は唐古第2様式の甕と共通し、佐原真氏によって大和型と称されるものに該当しよう。但し、口縁端部が巻きこむように外反し、端面を丸く収めるものはなく、底部が上げ底である(187)点、頸部直下に櫛描直線文を施し、第1様式からの伝統を反映したと考えられる例(174・187)がある点、端部の調整にハケを用いるもの(174・191)がある点などいくつかの相違も認められる。

尚、甕Aの中には口縁部内面に櫛描波状文を施文する例(223・⑦・④④・⑦・⑤①)が多く、同時に口縁端部に2個1組の櫛歯押捺を行っているもの(④④)も存在する。これらは大和型の甕が近江的に変容したものと考えられる。

甕形土器A—II(188・189)

S K1003からは内外面の調整手法や体部の形状などが上述のものに共通するが、頸部で「く」字状にくびれて口縁部が直線的に開くもの出土している。若干新しい要素として捉えられよう。

甕形土器A—III(109・192・204)

口縁部径が体部径を凌ぐものを分類した。S K1005出土品(192)は体部最大径を頸部にもつもので、短い口縁部が斜め上方に開く。器形の上では第1様式の甕と区別がつかないが、ヘラ描直線文をもたないことから一応、本様式に含ませておきたい。弥生溝3出土品(109)とC区弥生第1層出土品(204)は甕A—Iに近い特徴をもっており、口縁部端面が斜ハケ調整されている点が注目される。

甕形土器B(186・②)

口縁部が一旦外反した後に、端部で立ち上がるもので、端面は細く尖っている。頸部以下は粗いタテハケ、口縁端部外面と内面は粗いヨコハケ調整を行うが、㉔は内外面にハケ状工具によって波状文が加えられている。甕Bは近江型受口甕の初現的なものと考えられるが、未だ立ち上がりは短かく未発達である。

甕形土器C—I (190)

口縁部が4単位の山形口縁をなす。頸部でくびれてから口縁部は外反して開き、端部で緩く屈曲して斜め上方に立ち上がる。薄手精巧で内外面は浅いハケによって丁寧に調整されている。文飾は乏しく、口縁部端面に刻目文をもつのみである。

甕形土器C—II (㉕・㉖・㉗・㉘・㉙・㉚)

C—Iと同じく口縁部が4単位の山形口縁をなすと推定されるが、口縁部の立ち上がりはより長く、先端は尖る。粗いハケ状工具によって頸部は縦位、口縁部は斜〜横位の調整が行われており、C—Iと趣を異にしている。甕C—IIには通常の大きさのもの他に、かなり厚手の大型品(㉛)も存在する。口縁部内面に調整具による粗い波状文を施すことを共通点としており、口縁部外面に斜位の櫛歯刺突文を加え頸部直下に直線文を施すもの(㉜)もある。破片資料の場合、突起以外の部分は非山形口縁と見誤ることがあり、205も諸特徴から見て本類に含める方が妥当かも知れない。甕C—IIは深草遺跡や中臣遺跡に類例が見られる。

3) 第3様式古段階の土器

畿内第3様式古段階併行と考えられる土器は第2・3様式を混在するSK1001, SK1005の他、弥生溝4, C区, D区, 弥生溝1上層から出土している。凹線文出現以前で櫛描文を多用し、凸帯文のあることなどが指標となる。

器種は広口壺・細頸壺・高坏・甕が認められる。

広口壺形土器A (123・168・198・203)

全体を知るべき資料はないが、口縁部が漏斗状に開くもので、端部は垂下口縁(タイプIII)とし、直線文を飾るもの(123)がある。一方、畿内周辺部の地域性を反映して凸帯を飾る土器も多く、SK1001出土品に頸部下端に2条の断面三角形凸帯を巡し、上方を無文とするもの(168)がある他、C区弥生第1層からは口縁端部外面に凸帯を巡し、頸部に波状文と直線文を飾るもの(198)がある。203は厚手の大型品で、頸部下端に一条の凸帯を巡し、その直下と口縁部内面に櫛歯刺突文を加えており異色である。

尚、該期の広口壺の中には頸部下端に指頭圧痕文凸帯を巡すものがあり、1本指による幅狭のもの㉝、2本指によるもの(20)、3本指による扁平幅広のもの㉞の3種が存在している。

広口壺形土器B (228)

口頸部が内弯気味に立ち上がるもので、口縁部外面に2条の指頭圧痕文凸帯を巡している。第4様式に受けつがれていく(194参照)器種である。

細頸壺形土器A (122)

弥生溝4から頸部が細く、上方で大きく外反して開く細頸壺が出土している。口縁端部は下方に大きく拡張される垂下口縁で、外面には櫛描波状文が施され、下端に刻目文を加えている。頸部には単帯構成の櫛描直線文が見られる。

細頸壺形土器B(170)

SK1001から下膨れで頸部の細い無花果形の壺体部が出土している。外面に粗い縦ハケ調整が行われており無文である。該期の在地土器にこのような器形は無いところから、伊勢湾地方第3様式(貝田町式)の粗製細頸壺と考えられる。

細頸壺形土器C(171)

SK1001から口頸部が一旦外反して開いた後に、端部が短く内傾する細頸部の口縁部分が出土している。段部に刻目文、頸部に櫛描直線文を施している。滋賀県南滋賀遺跡に類例があり、伊勢湾地方の第3様式細頸壺である可能性が高い。頸部から体部上半には次節で説明する様な文様が付されていたものと考えられる。

壺形土器に施される他の文様

第3様式古段階に属する文様の内、器種別の記述からもれたものについて触れる。

SK1001には複帯構成の櫛描直線文(177・179)が存在している。この内、179には竹管を間隔をあけて2個束ねた工具によって断続的な縦位短線文が加えられている。両者はいずれも頸部径数cmの小型の細頸壺に付された文線であり、滋賀県南滋賀遺跡の類例と同様に、伊勢湾地方の第3様式(貝田町式)細頸壺を模倣したのと考えられる。

同じくSK1001には細かな櫛描波状文を重ねたものに、竹管による縦描直線文を数帯加えたもの(180)がある。

SK1001以外ではC区弥生第2層に縦描きの櫛描直線文を横描きのものと組み合わせる文様(181・182)が認められる。これも南滋賀遺跡に類例のある文様構成で、やはり伊勢湾地方の第3様式土器を模倣したのと考えられる。C区にはこの他に複帯構成の櫛描直線文例(183)と複帯構成の櫛描直線文に竹管による縦描き短線文を加えて、文様帯をヘラで界す例(184)とがある。

同様の文様ではD区弥生第2層に複帯構成の櫛描直線文を切る縦描直線文(185)と櫛描直線文を切って縦描きの波状文を加え、上端をヘラ描き直線文で界し無文帯とするもの(186)がある。後者の場合は単に模倣品にとどまらず、直接、伊勢湾地方から搬入された可能性もある。

このように第3様式前半においては直接あるいは琵琶湖地方を介して間接に、伊勢湾地方の影響を受けた土器が多いことが大きな特徴となっている。

こうした伊勢湾系の文様とは別に、斜格文も同時期に多用された文様の1つとして挙げることができる。斜格文の中にはヘラを施文具とするもの(26・257)、竹管を施文具とするもの(31・57)、櫛を施文具とするもの(16)の3種類があり、同時期に併用されたのと考えられる。

尚、大型の壺形土器体部に施される歯の粗い大きな施文具による直線文と波状文の交互施文(187)も該期の文様の一つと考えられるが、出土例は少ない。

高坏形土器(224・232・188)

体部が半球形を呈し、水平口縁をもつもの(232)がD区弥生第2層から、水平口縁の端部をわずかに下方に拡張するものが(232・㉔)が同層とC区弥生第2層から出土している。第2様式高坏からの伝統をひくが、口縁部内面の屈曲部には内方に向く凸帯が1条巡らされている。3点の内2点は無文であるが㉔には口縁部端面にヘラ描斜格文が施されている。

壺形土器A(173)

SK1001から、体部の張りが強く、頸部でくびれてから口縁部が水平気味に開く壺が出土している。端部も若干拡張されており、第2様式の壺とは大きい懸隔があるが、口縁部端面に刻目文をもつ点や、頸部に2個1組の蓋緊縛孔が開けられている点に古相をとどめている。

壺形土器B(231)

D区弥生第2層から口縁部が外反した後に段をなして端部が立ち上がる壺が出土している。第2様式の壺Bの発展形態と考えられ、口縁部外端面はヨコハケ調整によっている。

把手(234・241)

その他、第3～4様式に属する器種として把手付水差形土器があるが、その離脱した把手部分が2点出土している。

4) 第3様式新段階の土器

出土点数は多くないがC区弥生第2層からまとまって出土している。口縁部端面の凹線文と他の櫛描文線の併用が指標となる。

器種は広口壺・鉢が検出されている。

広口壺形土器A(216)

第2様式の広口壺Aの発展形態として捉えられるもので、外反して大きく水平に開く口縁部は、端部を下方に著しく拡張(タイプIII)しており、外面には全面に亘って凹線文が巡らされ、さらに、その上に竹管による縦位短線文と2個1対の円形浮文が加えられている。口縁部内面には列点文をはきんで2重の扇形文帯が巡らされており、装飾性に富んだ土器である。退化的なコブ状突起も認められ、第2様式以来の近江系壺形土器の伝統の強さを示している。

広口壺形土器B(210・212・㉕)

口縁部を上下両方向にわずかに拡張するもので、口縁部端面には3条の凹線文が巡らされている。210が畿内中央部のものと共通性が強いのに対して、212は口縁部内面への櫛歯刺突文の多用、退化的なコブ状突起の存在など近江地方の土器との関連性が認められる。弥生溝1上層出土品㉕も後者の類型に入ろう。

広口壺形土器C(208)

第3様式新段階に至っても、未だ頸部に凸帯文を施す土器がある。ただし、凸帯は退化し、凹線文への発展過程を窺い知ることができる。体部上半には多種類の櫛描文様が併用されており、土器装飾ここに極まれりといった感がある。本遺跡では他に例を見ない簾状文が多用されているものの、凸帯文の残存と併せて文様帯下端に波状文を加える点など在地性も強く、畿内

中心部と周辺部の両要素が折衷されている。尚、体部下方はヘラケズリ調整が行われている。

鉢形土器(22)

口縁部が直立し、端部が折り返し状の段状口縁をなすものである。口縁部外端面には直径2mm弱の細かな竹管刺突文、体部には櫛描直線文を施している。

高坏形土器(157)

弥生溝4から高坏脚部が出土している。頸部が太く、円板充填技法によることが看取されるもので、裾端部は斜め上方に拡張して面取り状に成形している。裾部内面がヘラケズリされていることをもって、この時期に比定したが、第4様式まで下がる可能性もある。

5) 第4様式の土器

弥生溝2が純粋に本様式のみを含む他、弥生溝3・4、C区弥生第1・2層、弥生溝1上層から少量ずつ出土している。凹線文の多用、無文化を指標とし、櫛描文は極めて少ない。

器種は広口壺・円窓付壺・高坏・甕の他、台付器種の脚台部が認められる。

広口壺形土器A(194・195・③)

倒卵形の体部をもつ大形の壺で、194は器高53.9cmを測る。口縁部は一旦、緩く外反した後、端部が直立する。紋飾に乏しく、頸部下端に櫛歯刺突文またはヘラによる刻目文を加えた扁平な凸帯を巡すことを共通の特徴としている。口縁部外面に凹線文を巡すもの(195)とこれを欠くもの(194)とがある。体部下半はヘラ削り調整が行われている。

広口壺形土器B(103)

球形の体部をもつやや大型の壺で、口縁部は該期の水差形土器と共通するもので、端部はわずかに内弯する。紋飾は頸部全面に密接して施される凹線文のみである。体部は平行叩き調整が行われており、下半部をヘラケズリ調整している。

広口壺形土器C(100)

頸部が直立した後に、口縁部が屈曲して水平に開くもので、無文であるが、口縁部端面のヨコナデ調整を凹線文と見ることできる。唐古第4様式に類例がある。

円窓付壺形土器(125・201)

2点とも体部上半に焼成前に大きな円窓を穿孔しているが、201は無文で内外面の粗いハケ調整や体部下半のヘラケズリ等が他の第4様式土器と共通するのに対して、125は体部上半に櫛描直線文を施しており、胎土・焼成及び調整手法を異にしている。あるいは伊勢湾地方からの搬入品かも知れない。

高坏形土器(225)

C区弥生第2層から脚部が出土している。脚柱部の長い中空足で、裾部との境に数条の凹線文を巡らしている。該期の土器に共通する独特な茶褐色の色調を呈する。

台付土器脚台部(102・226・227・240)

第4様式には脚台を付ける土器が多い。いずれも円錐形を呈し、無文であるが、小型で円板

充填技法によるもの(227)と大型で非円板充填技法によるものがある。裾端部は直口のもの(227)と面取り状にしているもの(102)に分けられる。これらは台付鉢の脚部である可能性が高い。

壺形土器 A (110)

体部が豊かに張り、頸部でくびれた後、短い口縁部が水平に開く。口縁部端面に1条の凹線を施し、口縁部内面にもヨコナデによる浅い段を形成している。体部外面はヨコナデによって平滑に仕上げられている。

壺形土器 B (101)

体部の張りは弱く、口縁部が一旦外方に張り出した後、端部が内傾気味に立ち上がる。所謂受口状口縁の壺である。口縁端面に刻目文をもつほか、頸部にも波状文を施しており、飾る壺である。伝統的な近江系の受口壺である。

鉢形土器 (150)

弥生溝4から口径14.2cmを測る小型の鉢が出土している。半球形直口のもので口唇部は薄く尖っている。上げ底の底部には焼成後の穿孔が行われており、2次的に甑として使用されたものと推定される。無文だが内外面の全面に赤彩が行われている。体部外面はヘラ削り調整によっている。

6) 第5様式の土器

弥生溝1が純粹かつ大量に本様式土器を包含する他、弥生溝4からまとまった量の出土がある。弥生溝3、C区第1層、D区からはわずかずつ出土している。

器種は広口壺・短頸壺・長頸壺・細頸壺・壺・小型壺・鉢・小型鉢・甑・高坏・器台・甑蓋・手焙形土器と一通りの器種が揃っている。

壺形土器 A (4・9)

球形に近い体部に、短く直立した後に外反して開く口縁部を付けたもので、端部は下方に拡張されている。4は異った2種類の粘土を用いることによって体部と口頸部に赤白のコントラストをつける特殊な手法が採用されている。口縁部端面はヨコナデによって2条の太い凹線文が施されており、紋飾としては口縁部内面への2個1組の竹管刺突文が認められる。

9は口縁部端面に3条の凹線文が巡らされ、その上に、3個1組の竹管刺突を加えた円形浮文が貼られている。

第4様式からの伝統をひくもので、後者は西ノ辻I地点式のものに良く似る。

壺形土器 B (127・200)

算盤玉形に近い体部に、短く外反して開く口縁部をつけたもので、体部径に比して口径は著しく小さい。外面は両者とも良くヘラ磨きされている。

類例に乏しいが、畿内中央部のものと異なり、伊勢湾地方のものに似る。

壺形土器 C (6・128)

肩の張る体部に、頸部から外反して開く口縁部をつけたものである。

西ノ辻 I 式には例を見ないものの、最も存続期間の長い一般的な器形である。

壺形土器 D (3・5)

球形に近い体部に、頸部が直立した後に屈曲して開く口縁部をつけたものである。

体部の形態に第 4 様式のものとの懸隔があり、唐古45号竪穴上層式と併行しよう。

壺形土器 E (1)

球形に近い体部に、受口状口縁を付けたものである。頸部直下には櫛描直線文と櫛齒列点文を飾っている。

器形、紋飾ともに同時期の近江系壺形土器(126)との関連性が強い。類例は京都府今里遺跡に見ることができる。

短頸壺形土器(2・15・16・131)

全て直立ないし、わずかに開く口頸部をもつが、体部が丈高になると推定されるもの(15)と球形に近いもの(2・16・131)とがある。後者には体部径10cm余りの小型品(16)と25cmを超える大型品(2)とがある。

西ノ辻 I 式から見られる器種であるが、16は唐古45号竪穴上層式、2・131は安満周溝墓 A 5—2 出土例に最も近い。

長頸壺形土器(10・11・130)

11は口径部が短かく短頸壺との区別が難しい。体部と口頸部との境界が明瞭でなく、なだらかに移行する点と口縁外端部に凹線文を巡す点は古い様相として捉えられ、第 4 様式細頸壺からの系譜が考えられる。

一方、口頸部が直線的で外反度の低いもの(130)は第 5 様式でも古い段階に一般的なもので西ノ辻 I 式にも類例がある。10は長頸壺に復原したが、体部が扁平気味で新しい段階に属することが考えられ、細頸壺の体部である可能性も残されている。

尚、13・14も小型の長頸壺体部である可能性が強く、上げ底である点に注意される。

細頸壺形土器(12)

口頸部を失っているが、頸部径は扁球形の体部径に比して著しく細いものとなっている。

細頸壺は第 5 様式内でも新しい段階に登場する器種であり上六万寺式に類例がある。

甕形土器

甕形土器は本遺跡出土の第 5 様式土器中、最も資料的に恵まれており、各段階のものが存在しているので時間を追うのに好都合である。そこで器形・紋飾・成形・調整の変化に注目しながら、口縁部の形態と手法を指標として逐次分類を行っていかうと思う。

甕形土器 A—I (31・34・54・56)

頸部で鋭角的にくびれて強く外方に張り出す口縁部の端面に 1 条の凹線文が巡らされることを指標とする。体部は上半部の豊かに張る無花果形を呈する。外面調整にハケやヘラミガキを用いるもの(34・56)と、平行叩きを行うもの(31)とがある。後者は叩きの方向が左上りで、その他の平行叩き甕と異っていること及び分割成形技法が用いられていることが注目される。特

記すべきは内面調整にヘラケズリを行うもの(34)があることで、凹線文を巡すことと併せて山陽・瀬戸内地方の影響が考えられる。

甕形土器Aは第4様式との関連が深く、西ノ辻I式に類例があるように、第5様式の中でも古い段階に位置づけることができる。

甕形土器A—II (29・30・52・53)

A—Iに準じるが、口縁端部に凹線文をもたず、ヨコナデによって上端を尖らせるものであり、A—Iから発展的に所謂ハネ上げ口縁が生まれることが判る。口縁部の開き方はA—Iと共通するもの(29)の他に、やや間のびして立ち上がり気味のもの(30)がある。また突出する平底をもつ例のあることも注意される。体部の外面調整には平行叩きを主に用いるが、部分的にハケ調整を加えているものがある。尚A—Iと同じく体部内面をヘラケズリするもの(29)がある。

甕形土器B—I (7・8・33・40～44・45～49)

口縁部が外反して開くもので、端部は丸く収めるものと、やや尖るものがあり、明瞭な面はもたない。大型のもの(7・8・33・43)では体部上半にハケ調整もしくはヘラミガキが加えられており、叩目痕を残していない。これに対して中型のもの(40・41・44～49)は調整がやや雑でハケ調整や指ナデ調整が叩き目上加えられる場合でも、部分的でしかない。また明らかに口縁部を叩き出している例(49)のあることも注目される。体部調整にはこの他に、極めて珍しい矢羽根叩きを用いる例(44)があるが、類例は少なく、今のところ京都府今里遺跡例以外を知らない。尚、口縁部径が体部径を凌ぐもの(41)があることは新しい特徴と言われるが、中・小型品にのみ認められて、大型品ではそうでないことから、単に時間差を示すものではなく、法量との対応を考えるべきであるのかも知れない。

甕形土器B—II (45・142)

B—Iに準じるが、一旦外反して開いた口縁部の先端がわずかに内弯するものを分離した。

甕形土器C (51)

外反して開く口縁部の先端に面をもつもので、ヨコナデによって端部は斜め外方に垂下される。安満遺跡周溝墓A 5—2に類例がある。

甕形土器D (50・55)

所謂受口状口縁をもつものであるが、口縁部内面の段が明瞭でない点と、端部が尖り気味で面をもたない点で後述の甕Eと異なる。体部の調整技法が特異で、中型品(50)では外面にケズリ調整を用い、肩部に装飾的に横位の綾杉叩きを加えており、大型品(55)では外面にハケ調整、内面には横位のケズリを用いている。後者は口縁部の立ち上がり部が内傾気味であることと併せて古い特徴とすることができる。

甕形土器E (32・143～145)

一旦水平に張り出した後、垂直に立ち上がる受口状口縁をもつもので、内外面に明瞭な段をもち、端部はヨコナデによって肥厚させ内斜する面を有している。32は体部が無花果形を呈し、

下半部はハケ調整を行っているが、刻み凸帯で界した上半部を紋様帯とし、頸部に櫛描直線文、それ以下を櫛歯刺突文と櫛描連続円弧文の繰り返しで飾り、これをヘラ描沈線で界している。近江地方の土器と何ら異るところがない。

弥生溝4から出土した3例も口縁部の特徴が共通するが、口縁部外面にも紋飾が認められ、斜位の櫛歯刺突文を施すもの(145)と段部に刻目文を施すもの(143・144)とがある。近江系の受口甕は第2様式からの伝統をもつもので第5様式を通じて見られるが、古手のものは立ち上がり部が内傾しており、新しいものはヨコナデによって端部が外側に張り出すという形態変化をたどり、紋飾も櫛歯刺突文が刻目文に置きかえられ、口縁部の文様が段部に移り、やがて無文化する方向性が見出しうるとされるので、本例はやや新しい段階に属するのかも知れない。但し32を見る限り、口縁部の無文化が認められはするものの体部上半の豊かに張る丈高の器形は古い段階に属さしめることに妥当性を見出しうるものと考えられる。

甕形土器F(146)

口縁部の先端が剣先状に尖るもので、口縁部下端に刻目文が施されている。体部はハケ調整によっている。畿内中心部には類例がなく、伊勢湾地方山中期併行の上箕田IV式との関連が考えられる。

小型甕形土器A(35・36)

口頸部の極めて短い型式で、口径は体部径を下まわる。体部上半のわずかに張る深い器形を呈している。体部外面調整は専ら平行叩きを用い、口縁部にまでこれが及んでいる点は後述のBに比べて新しい要素と言えよう。

小型甕形土器B(37～39)

「く」字状に頸部がくびれ、直線的に口縁部が開く形式で、口径と体部径とがほぼ等しい。口縁部の形状は端部がやや肥厚気味のもの(37・38)とそうでないもの(39)とがあり、前者は体部外面調整に叩き目の後にハケ調整を加えるのに対して、後者は叩き調整のみで、器形的にも底径が大きく、かつ器高が口径に及ばないもので、鉢形土器との分離が難しい。尚、前者には上げ底のもの(37)と平底のもの(38)とがある。

鉢形土器(71・72・148)

71と72はやや大型の鉢形土器である。口縁端部に凹線文をもつ点に共通点を見出しうるが71は受口状口縁を有し、体部も比較的深く、同時期の手焙形土器との関連(88参照)が考えられるのに対して、72は口縁部に甕Aとの関連性が見出しうるもので、体部の浅い器形をとっている。体部の調整法は共に叩きを用いておらずハケを用いるが、前者ではさらにヘラミガキが加えられている。弥生溝1以外では弥生溝4出土例(148)があるが、体部はやや浅く口縁端部に凹線文を欠いている。内外面共に良くヘラミガキされており、京都府今里遺跡SK1224に類品がある。

小型鉢形土器A(78・79)

口径が10cm余りのものを分離して小型とする。小型鉢Aは直口のもので、体部は内弯気味に開き、突出する底部をもっている。

小型鉢形土器B (76・77)

頸部でくびれてから口縁部の開くものである。口縁部が外反して開くもの(77)と内弯して開くもの(76)とがあるが、底部は共に突出した平底をもっている。

小型鉢形土器C (81・82)

内弯して開く体部に短く内弯して開く口縁部をつけたもので、底部は上げ底で側面に指頭圧痕が認められる。上げ底の鉢形土器は5様式の中でも新しく現われるものとされているが、西ノ辻I式の段階で既に登場している。

小型鉢形土器D (74)

所謂ハネ上げ口縁をもつもので、体部は球形に近く、深い器形で、突出しない平底をもっている。

小型鉢形土器E (75・149)

内外に明瞭な段を有する受口状口縁をもつもので、口縁部端面はヨコナデによって肥厚し内斜する面を形成している。弥生溝1出土例(75)はやや大きく、体部外面に粗いハケメ調整を用い無文であるのに対して、弥生溝4出土例(149)はかなり小型で口縁部外面に斜位の櫛歯刺突文、頸部に櫛描直線文、その直下に再び刺突文と波状文を施文しており、美しく飾る土器である。両者ともに近江地方のものとは何ら変るところが無い。

甑形土器A (83)

砲弾形を呈する直口の甑で、底部が丸底を呈している所以他の土器と組み合わせることなく正立することは不可能である。底部には焼成前に1個の円孔が穿孔されている。尚、この種の土器を有孔鉢と呼ぶことが佐原真氏によって行われているが、水を張った甕形土器の口縁部に架して、その水蒸気で蒸すと仮定すれば外面に煤が付着することも無い訳であるから甑の用途を考えるのが最も自然であると思われる。類例は安満遺跡周溝墓A 5-2に認められる。

甑形土器B (84~87)

直口の甑で、体部は直線的に開くが、先端で内弯する器形をとる。底部には1個の円孔を有するが、84はあらかじめ底抜けに成形したもので、安定を欠いている。85~87は小さな平底をもち、焼成前に一孔を穿孔するもので、叩き目調整によることが明らかな例がある。焼成前に底部を穿孔する甑は第5様式になって初めて登場する器種であるが、西ノ辻I式以降第5様式を通して認められ、器形の変化に乏しい。

手焙形土器(88・89)

弥生溝1から2点出土している。88は受口状口縁の鉢形土器の口縁部内面を接合面として蔽部を取り付けたもので、体部中位に2条の刻み凸帯が巡らされる点や蔽部下位に斜位の櫛歯刺突文が施される点など近江地方の土器との関連が強い。製作手法や器形、紋飾からみて手焙形土器としては最も古い段階に属するものと考えられる。本品は底部が叩き目調整によっている点が珍しく、丸底で、そのままでは正立できないことは手焙形土器の用法を考える上で重要な論点となってこよう。類品として京都市中臣遺跡11号竪穴住居址例を挙げることができる。

89は鉢部と蔽部の境に明瞭な段をもたず、全体にずんぐりした器形からみて88より後出のタイプと考えられる。紋飾に乏しく頸部直下に棒による列点文をもつのみであるが、鉢部と蔽部の接合法式が88と共通する点は注目に値する。

蓋形土器(90)

浅い笠形を呈し、口縁端部は上反りする。天井に環状のつまみをもつ点は本遺跡出土の第2様式のもの(167)と共通する点である。第5様式においては蓋形土器は稀であるが、大阪府西ノ辻1265番地出土品に類例がある。

器台形土器A(91)

直線的に開く受部の先端を垂下口縁とし、3条の凹線文上に竹管刺突文付きの円形浮文を貼付するものである。頸部が細いことから高坏と共通の脚部をもつものと推定される。類品として京都府中海道遺跡跡を挙げることができる。尚、口縁部の手法と紋飾は西ノ辻I式の壺形土器との共通性が窺われるが、西ノ辻I式にはこの種の器台を欠いており、西ノ辻E式以降唐古45号竪穴上層式に亘ってこの手法が認められることから、やや遅れて盛行したものと考えられる。その中にある本例は脚柱部の細い形態からみて後出的な存在と推定される。

器台形土器B(158~161)

弥生溝4出土の鼓胴形器台4点を一括する。ズン胴な柱状部をもつもの(158)と脚部から受部に曲線的に移行するもの(160・161)とがあり、前者の脚部は裾部が外反しながら開き、端面に1条の沈線と刻目文をもつものに対し、後者は裾の開きが小さく端部が尖り無文である。脚部に円孔を3~4個もつ点に共通性がある。垂下口縁には数条の擬凹線文が施されているが、この手法は前述の通り必ずしも古い手法ということとはできない。160のプロポーシオンは口径に比して器高が低く、新しい様相を示している。

高坏形土器A(92・94)

浅い底部に内弯して開く立ち上がり部を付けた坏部をもち、その境界には明瞭な稜を有している。脚部は中空の柱部の下に円錐形の裾部を接続している。立ち上がり部が内弯して開く高坏は、畿内の第5様式の高坏が西ノ辻I式以降徐々にその外反度を強めるという時間的変化からみて、その系譜から外れるものと考えなければならない。西ノ辻D式の高坏にも同様の特徴をもつものがあるが、ともに地域性を反映した土器と考えるべきであろう。

高坏形土器B(93・114・239)

内弯する底部に外反して開く口縁部を付けたもので、その境界には明瞭な稜を有している。畿内第5様式に通有のもので上六万寺式や唐古45号竪穴上層式に類例がある。弥生溝1出土品(93)は弥生溝3出土品(114)に比べて小型であり新しい様相を示している。

高坏形土器C(151)

弥生溝4から1点出土している。やや大型の高坏で口径25.1cmを測る。立ち上がり部が直線的に大きく開くもので、口径に比して坏部は浅い。大型で同様の特徴をもつものに西ノ辻E式があり、高坏形土器Bに先行する型式と考えられる。

高坏形土器D(95)

浅い椀状の器体に短く開く口縁部を付けたもので、脚部は柱状部のない円錐形の低いものを用いられている。中期以降、畿内第5様式を通じて見られる直口椀状高坏の一変形と考えられる。

高坏形土器脚部

3類に大別でき、I類は柱状部をもたない円錐形の脚部、II類は中空の柱状部の下に外反して開く裾部の接続する脚部、III類はII類に準じるが柱状部が中実のもの(116・154)である。I・II類中には連続成形技法によるもの(113)も無い訳ではないが、多くが別体式で坏部を接合するもので、その後粘土栓を充填するものも認められる。尚、III類は第5様式の内でも遅れて登場するもので北鳥池下層式などに例がある。

手捏土器(80)

口径5.0cmを測るミニチュアの鉢形土器で、口径に比して大きな平底をもち、体部は内弯して開く。内面には指頭圧痕が顕著に残されている。

2 石器

本遺跡からは多数の石器類が出土し、その種類も多岐に亘っている。利器には、農具類として石包丁、工具類として大小の扁平片刃石斧と太型蛤刃石斧及び方柱状石斧があり、武器として磨製石剣・円板状石器・石鏃があり、その他に砥石と玉材がある。遺構出土品で時期の特定できるものもあるが、そうでないものも含むため、器種別に分類を行いその説明の中で、これに触れたいと思う。

1) 磨製石剣(7・22)

弥生溝2出土品(7)は完形の鉄剣形磨製石剣で、細い柳葉形を呈し、表裏ともに中央部を鍔が真直ぐに貫き、断面形は扁平な菱形状を呈している。入念に砥がれ鋭い刃がつけられているが、基部の6~7cmの範囲には刃がつけられておらず幅1mm程度のフラットな面になっている。この部分が柄に装着されるものと考えられるが、特別な加工はなされておらず、丸く突出する端部は面とり状に擦られている。この種の石剣は山城及び近江地方に普遍的な形式である。本品は第4様式と伴出している。

22は折損品であるが、有茎式のもので、明瞭な関を有している。茎の両側にドリルによるノッチを造り出しており、柄の装着用と考えられるが、このような技法は従来丹後・丹波や近江には認められるが、山城では例の無ったものであることから、その分布の欠を埋めるものとして注目される。

2) 打製石鏃(14・20・21)

全て凸基式に属するが、大型幅広で木葉形を呈するもの(14)と小型で三角形を呈するもの(20・

21)とがある。打製石鏃は磨製と異なり、全てサヌカイトを石材に用いている点に共通点があり、中高で分厚いわりに、その刃部は鋭い。全て中期に属するものと思われる。

3) 磨製石鏃(1・2・4～6・11～13・25)

1点の小型の有茎式三角形鏃(6)を除いて、全て凸基式柳葉形鏃に属している。石材に粘板岩を用いることを共通点としているが、良く砥がれて両面に鏃をもち、断面が菱形を呈するものと、鏃が明瞭でなく断面がレンズ状を呈するものがある。中期に属するものは大型で作りが良いのに対して、第5様式土器と伴出した6は小型でやや粗造である。

注目すべきは磨製石鏃の未製品が3点(12・13・25)出土していることで、粘板岩の節理を利用して薄く削いだものに、簡単に打撃調整を加えた後に、研磨を行うという工程が明瞭に窺われる。このことから長刀鉾町遺跡において、集落内で石器が自己調達されている事実が判明した。

4) 円板状石器(29)

粘板岩の剝片の周縁に打撃調整を加えて刃をつけたものであるが、未製品であることが確実であり、やや小型である点が気になるが、環状石斧の未製品の可能性が高い。

5) 石包丁(26・27)

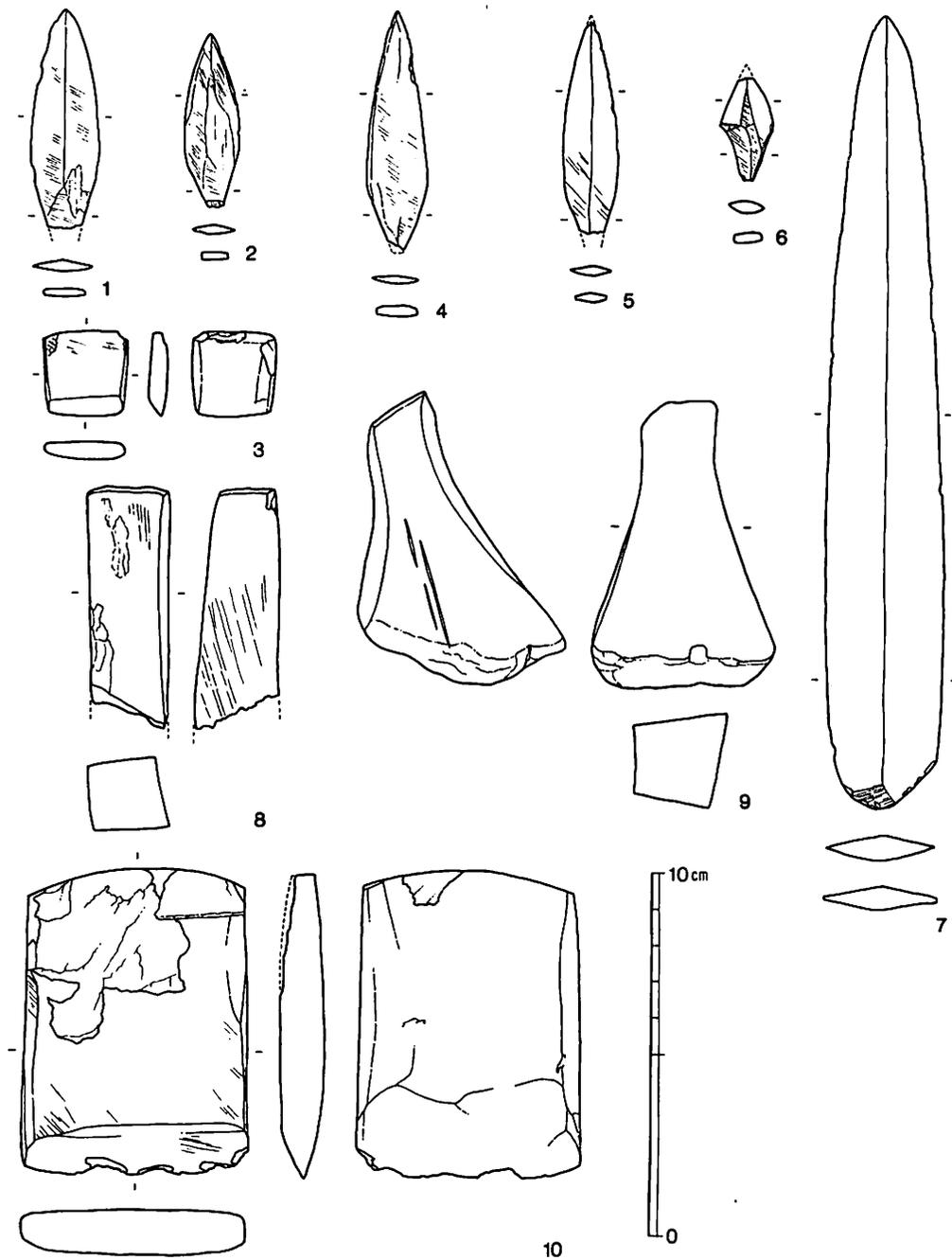
共に粘板岩製の石包丁で、全体の形を知り得ないが、鋭い片刃がつけられており、26は外弯刃長方形石包丁と推定される。背近くには2個の紐通し穴が両面穿孔されている点も共通点である。26は第2様式土器と伴出している。

6) 大型扁平片刃石斧(10・17)

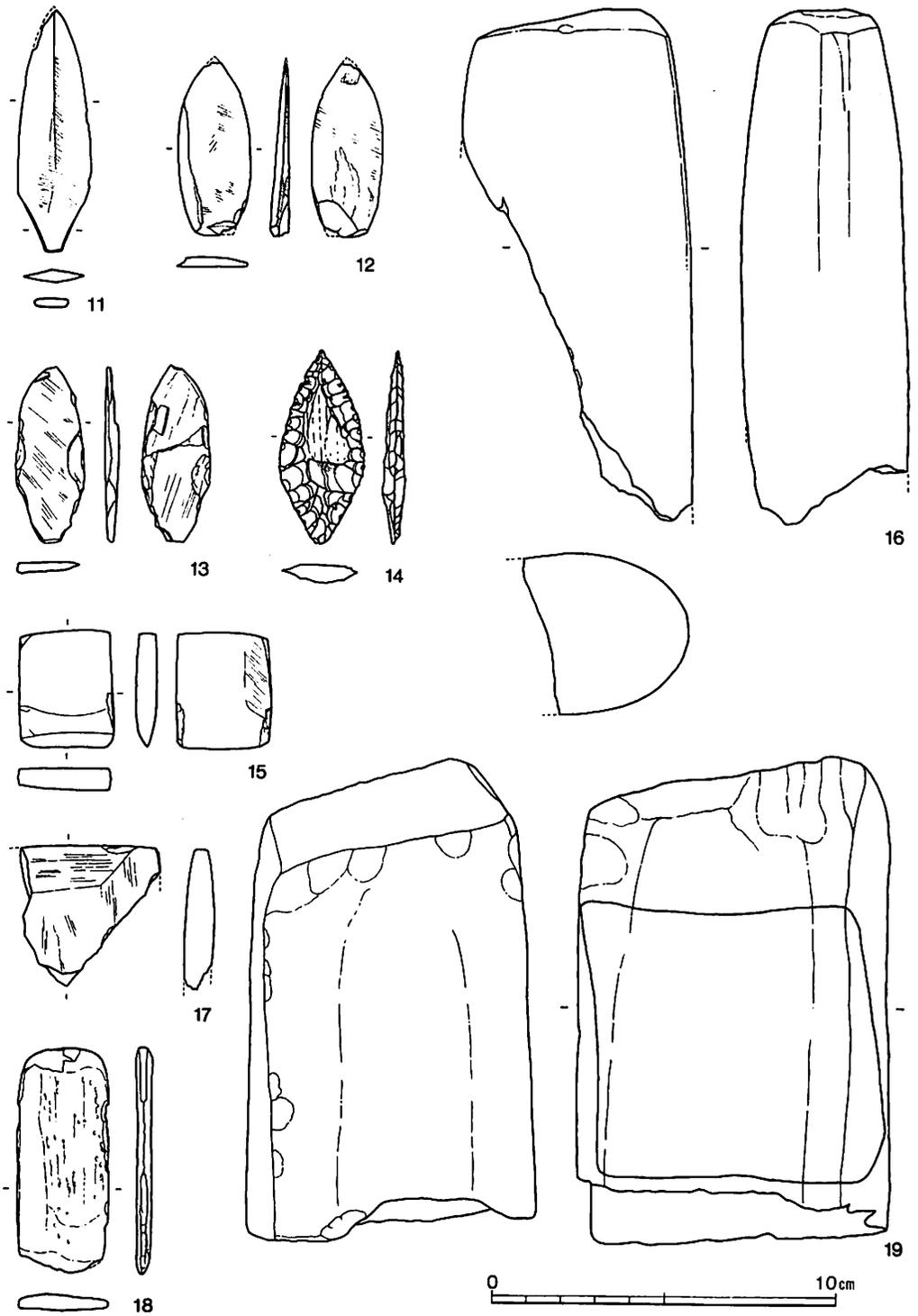
10は両面共に良く磨き込まれており、表面には角度のある刃をつけているが、裏面は内弯してそのまま刃先と交っている。整った長方形を呈するが頂部は直線ではなく外弯している。刃部に使用による折損を認める他、頂部付近の表面に剝離が著しく、着柄方法と関連して使用時に強い力が加わったものと考えられる。本石器は恐らく手斧などと同様のadzとして用いられたものと推測される。本品は第4様式土器と伴出している。

7) 小型扁平片刃石斧(3・15・18・23・24)

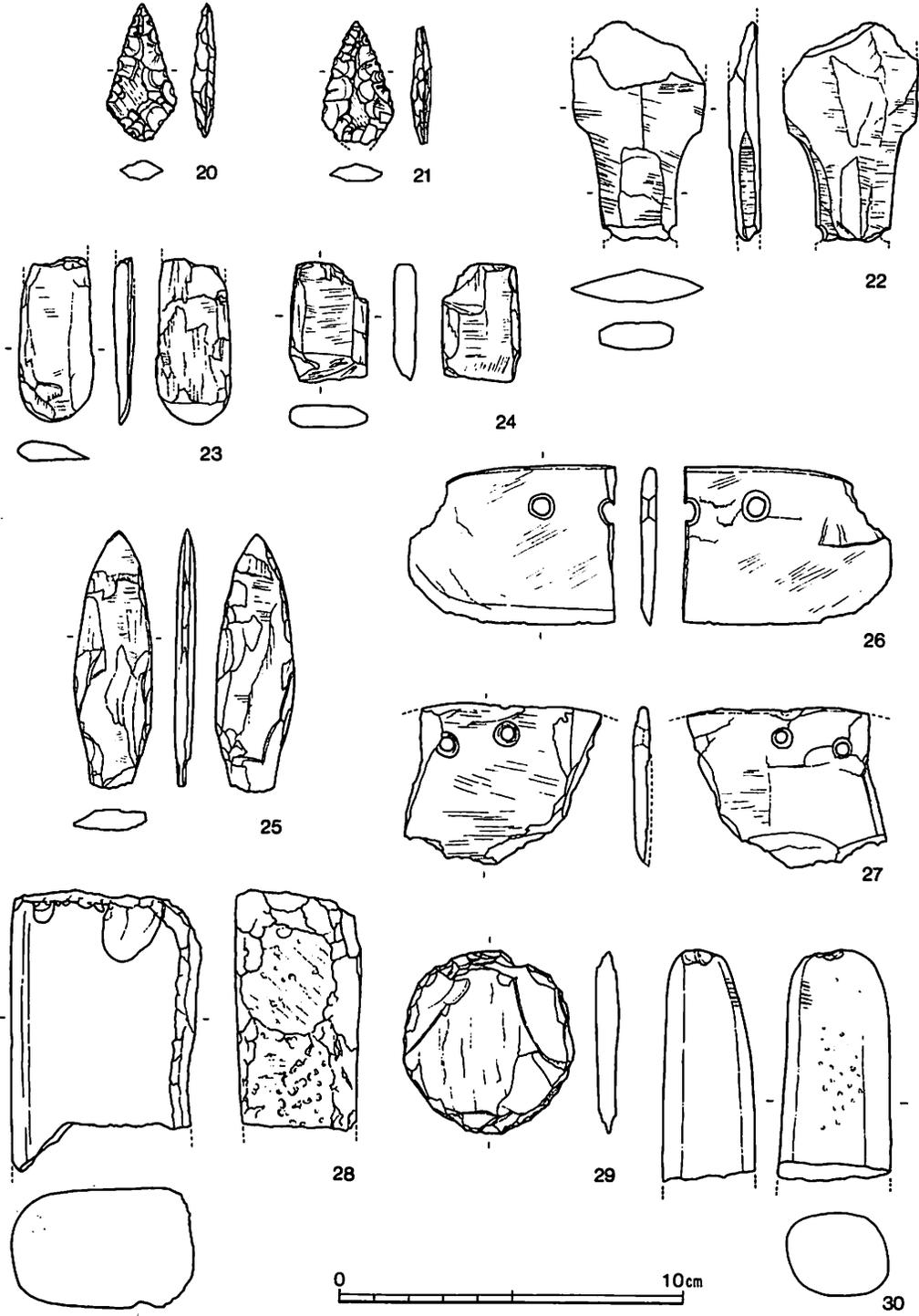
2点の変則的形態のもの(18・23)を除けば、3点とも大型扁平片刃石斧をそのまま縮小した形態のもので、刃のつけ方も全く共通している。頂部付近に欠損が認められる点は前述の如く着柄と関連のあるものと考えられるが、これら小型品は斧(adz)としてではなく、鑿のきと同様の使われ方をしたものと推測される。3は弥生溝1より第5様式土器と伴出したものであり、小型の扁平片刃石斧の内には後期まで使用され続けた実例のあることが判明した。尚、18と23は研



第44図 石器実測図(1)



第45图 石器实测图(2)



第46図 石器実測図(3)

磨のされ方が刃部を中心とした局部的なもので、粗製である点と平面形が細長い点から、他と区別されるが、用途は同一のものと考えられる。

8) 大形蛤刃石斧(16・30)

16は体部の一部と刃部を欠いているが、表面は非常に良く磨かれ、光沢を放っている。端正なつくりの大型品でaxeとして使用されたものと推測される。本品はSK1005より第2～3様式古段階の土器と伴出している。

30は小型品で、やはり刃部を欠いているが不整円柱状で頂部が尖ることから本類に入れた。体部には自然面も残り、磨き方は不十分である。頂部に打撃痕があるため、^{のみ}鑿の如き使用がなされたものかも知れない。

9) 柱状石斧(8・28)

共に刃部を欠失している。8は断面が整った正方形を呈しており、外形的には砥石と混同されやすいが、頂部に合計5個所の小さな打撃痕が認められることは石器としての使用のあり方を示すものと考えられる。恐らく片刃のつくものと推測される。弥生溝2より第4様式土器と伴出した石器群の一つである。

28は抉入柱状片刃石斧と推定される。横断面は隅円長方形を呈し、4側面の内、3面は良く磨かれているが、抉のある1面は磨かず打撃調整痕を残している。SK1003より第1～2様式土器を伴出している。

10) 砥石(9・19)

大小2点出土している。9は4側面が良く使い込まれ四角錘状を呈している。横断面形から見て各辺が直線的であることから直刃の利器を砥いだものと考えられる。左側面には刃先のあたった条痕も認められる。弥生溝2より第4様式土器と伴出している。

19は粗粒の砂岩を用いた大形の砥石で、直方体を呈しているが、一部を欠いている。4側面が使用されているが、上面と左面は中央部が中くぼみになっている。このことからみて本砥石は直刃の利器研磨用でなく、太形蛤刃石斧等の石器用の荒砥であったものと考えられる。

11) 玉材

脂質で淡緑色を呈する碧玉の玉材である。底辺2.5cm、高さ3cmの5角錘状を呈しており、頂部には自然面を残しているが、底面はプラットホームとなっており、ここに打撃を加えて側面5ヶ所を割りさいている。玉製作の荒割り作業を示すものと推定される。

第 3 表 石器 一 覧 表

番号	器 種	長 さ	幅	厚 さ	使用石材	出土地点・出土層	所属時期	備 考
1	磨製石鏃	(6.1)	1.9	0.3	粘板岩	弥生溝1覆土上A層	中 期	鎬明瞭
2	扁平片刃石斧	2.3	2.3	0.5	〃	弥生溝1第3検出面	第5様式	
3	磨製石鏃	(2.8)	1.5	0.3	〃	弥生溝2暗灰色粘質土層	第4様式	
4	〃	6.7	1.7	0.2	〃	〃	〃	鎬不明瞭
5	〃	(6.0)	1.6	0.2	〃	〃	〃	鎬明瞭
6	磨製石剣	21.8	4.3	0.7	〃	〃	〃	完 形
7	砥 石	7.8	5.1	5.9	凝灰質砂岩	〃	〃	完 形
8	柱状石斧	(6.5)	2.2	2.3	凝灰岩	〃	〃	刃部欠損
9	磨製石鏃	4.9	1.5	0.2	粘板岩	弥生溝1第3検出面	第5様式	鎬不明瞭
10	扁平片刃石斧	8.4	6.3	1.2	〃	弥生溝2暗灰色粘質土層	第4様式	表面剝離
11	磨製石鏃	7.1	2.1	0.3	〃	C区北西部暗灰色粘質砂	中 期	鎬明瞭
12	〃	(5.0)	2.1	0.5	〃	C区南部弥生第1層	〃	未製品
13	〃	5.1	2.0	0.4	〃	弥生溝3北部東肩砂層	〃	〃
14	扁平片刃石斧	3.4	2.7	0.6	〃	C区南部中央弥生砂層		
15	打製石鏃	5.6	2.5	0.6	サヌカイト	弥生溝3	中 期	完 形
16	大型蛤刃石斧	(14.8)	(6.5)	4.8	安山岩	SK1005	第2~3様式	刃部欠損
17	扁平片刃石斧	6.5	2.6	0.4	絹雲母片岩	弥生溝3西肩弥生砂層		粗 製
18	扁平片刃石斧	(4.0)	(4.0)	0.8	粘板岩	C区西南部		
19	砥 石	(13.9)	8.5	8.1	砂 岩	弥生溝3西肩弥生砂層		
20	打製石鏃	4.0	2.0	0.6	サヌカイト	D区西部弥生第1層	中 期	完 形
21	〃	(3.7)	2.0	0.5	〃	D区弥生溝4西側	〃	
22	磨製石剣	(6.4)	3.9	0.9	粘板岩	D区西部弥生第1層	〃	有茎式
23	扁平片刃石斧	(4.7)	2.1	0.6	〃	D区西部弥生第1層		粗 製
24	〃	3.5	2.3	0.6	〃	弥生溝4第1層(南部)	第5様式	頭裏面剝離
25	磨製石鏃	7.4	2.2	0.5	〃	弥生溝4上層		未製品
26	石包丁	(6.0)	4.6	0.4	〃	SK1003	第1~2様式	
27	〃	(5.7)	(4.6)	0.5	〃	D区西部弥生第1層		
28	柱状石斧	(8.0)	5.4	3.6	頁 岩	SK1003	第1~2様式	刃部欠損
29	円板状石器	5.3	5.0	0.6	粘板岩	弥生溝4テストピット		
30	蛤刃石斧	(6.7)	3.2	2.7	頁 岩	弥生溝4上層(南部)		刃部欠損

第3節 考察

1 近江系弥生式土器の成立と展開

山城における弥生式土器の地域色を考えようとした場合に、その地理的な特性のために周囲の各地域の文化的影響を強く受けている反面、独自のものを創出する力に乏しかったものと言われている。長刀鉾町遺跡の資料を検討してみると、畿内中心部の土器様式を骨組みとしながらも、中期から後期を通して近江地方との共通性の強いことが判る。

ここで甕形土器に注目してみると、第2様式土器を一括出土したS K1003において、畿内中心部の第2様式土器と同様な特徴を備え、佐原真氏によって大和型と呼称された甕形土器¹⁾(甕A)と共に、近江型の甕形土器²⁾が伴出している。この近江型の甕は口縁部が一旦外反して開いた後に端部が緩く立ち上がるもので、粗いハケ状工具によって、体部外面はタテハケ、端部外面をヨコハケ調整を行うことを特徴としており、口縁部内面にも同一工具によって波状文を加えるのを通常とし、頸部にも直線文を加える例があるなど、装飾性に富む特異な甕形土器である。しかし、この近江型甕形土器の中に、山形口縁をもつもの(甕C)と、そうでないもの(甕B)の二者が存在していることには十分に注意しなければならない。

現在、この近江型甕形土器の編年観は大いに揺れ、従来の第2様式とする考え方から一転して、第2様式後半³⁾もしくは第3様式⁴⁾とする考え方が支配的になりつつある。そこで長刀鉾町S K1003出土資料をもって再検討してみるならば、S K1003からは第1様式土器を伴出しており、しかも、これを壊して作られたS K1001にも第2様式土器を含むことから、間違いなく第2様式に所属するものといえる。また型式学的観点からは、近江型甕形土器は前述の通り山形口縁のものと、非山形口縁のものを明確に区別して考えるべきであり、後者は以後の様式に受けつがれるものの、山形口縁のものは、ほぼ第2様式に限定できるもので、その口縁端部の立ち上がり方と段の緩いことからみて、先行型式と考えるべきである。

そこで、この山形口縁の甕の出自について考究するならば、遠賀川式以来の弥生式土器の中には勿論、凸帯文土器の中にも求めることが不可能である。それならば独自の新創出と考えるべきなのであろうか、否。近江地方の縄文晩期土器に注目してみると、滋賀里式土器の中には頭初より四単位の山形口縁甕が存続しており、同I式からIII式に顕著である。しかし、西日本を席巻した凸帯文土器の時期(同IV～V式)にはその影をひそめてしまっている。ここでS K1003出土の山形口縁甕の内、甕C-Iと分類されたものに注目してみると、甕C-IIとの間に大きな懸隔を有していることに気づく。それは、器肉が薄手であり、前述した甕C-IIの粗いハケメ調整と異なり、調整が極めて丁寧で平滑であることに加えて、口縁部内外面に紋飾をもたず、口唇部に刻目をもつことである。この特徴は、滋賀里III式の山形口縁をもつ甕形土器⁵⁾と著しい共通性を有していることに気づかずにはいられない。両者の相違点は外面調整がケズリであるか、ハケであるかという以外にはほとんど見出しえない。この事実から、S K1003出土の山形口縁甕の内、甕C-Iは第2様式に一般的で近江・山城にいくつかの類例の認められる甕C-

IIの先行形態とすべきものであり、かつ、近江の晩期縄文式土器と甕C-IIとの型式学的連絡の間隙を埋める存在としてクローズアップされてくるのである。SK1003ではヘラ描沈線をもつ第1様式の甕形土器を伴出しているの、あるいは甕C-Iは前期まで遡らせるべきであるのかも知れない。

以上述べて来たように、第2様式に成立する近江型甕の祖型を滋賀里III式の山形口縁甕と仮定し、この独特な弥生式土器を近江地方の晩期縄文式土器からの伝統の上に成立したものと考えてみた。

このように畿内地方であっても周辺地域では弥生時代中期においてすら晩期縄文式土器の伝統を色濃く残しているという事実は、遠賀川式土器文化、いいかえれば前期弥生文化の定着が不十分で点的なものでしかなく、依然として縄文文化の伝統を継承していたことに他ならず、弥生文化の担い手が縄文人達であることを如実に示すものであろう。

同様の例は紀伊地方でも認められ、太田黒田遺跡を中心として分布する紀伊型の甕もやはり晩期縄文式土器の伝統下に第2様式の段階に成立する土器である⁹⁾。この紀伊型甕は器表の調整にケズリを用いることを特徴しており、その頸部の緩く内弯する器形からみても凸帯文土器からの系譜を窺うことができるから、晩期終末の伝統が弥生時代中期初頭まで持続されていたものと考えることができる。これに対して近江型甕の場合、それよりも古い段階の土器様式の伝統が継受された理由は凸帯文土器文化の浸透が不十分であったためと理解されよう。

同様に晩期縄文式土器との関連で始めて理解しうるものの一つに、近江系広口壺の口縁部内面に付けられたコブ状突起、同細頸壺口縁端部に付けられたつまみ上げ小突起を挙げることができる。これらの祖型と考えられるのは、前述の近江型甕形土器の祖型と仮定した滋賀里III式の時期から特に顕著になる甕及び鉢形土器の装飾法であり、単独の半円形突起も存在しているが、リボン状もしくは双頭状の如く、2個の突起を1組としたものが最も一般的である。この事実は第2様式の近江系壺形土器での突起のあり方とも対応するもので、双頭状の半円形突起は2個一組のコブ状突起へ発展したものと考えられるし、リボン状突起は下方へ延びて口縁部外面を飾る耳状突起(棒状浮文の祖型)へと進展したものと考えることができる。この近江系弥生式土器のメルクマールとも言えるコブ状突起は次第にその形状を退化させながらも、強い伝統を維持しつづけ第3様式新段階まで存続している(217)ことは注目に値しよう。また、本来口縁部を飾るべきこの装飾法が壺の体部外面を飾る装飾法として新方向を見出すのは比較的早い段階であり、本遺跡例^⑦の他にも、伏見区深草遺跡例⁷⁾や高槻市安満遺跡例⁹⁾がある。

ここまで、近江系弥生式土器の成立をめぐって、晩期縄文式土器との関係について専ら述べてみたが、勿論近江系弥生式土器の特徴をそれのみによって述べることは不可能である。近江系弥生式土器を特徴づけるもう一つの要素は、施文具の扱い方の特異性であり、第1様式のヘラ描沈線の多条化に対応して出現したと考えられる半截竹管やこれを複数束ねた施文具の多用及び複帯構成の櫛描文の採用など弥生文化の中で前段階からの発展としてとらえられるものである。また、口縁部内面や外面複帯構成櫛描文様帯を切って施文される縦描きの文様は伊勢湾

地方とも共通するもので、さらに東方の弥生文化との関係も十分に注意する必要がある。

近江系弥生式土器の諸特徴を十分に説明しつくすことはできなかったが、その分布について検討してみると、滋賀県側の資料が未だに十分でないものの、山城地方でのあり方が徐々に明らかになりつつある。第2様式の段階に限定してみても、山形口縁を呈し内面に波状文をもつ甕形土器(甕C-II)⁹⁾は近江では南滋賀遺跡など琵琶湖南岸に多く、山城地方では本遺跡の他、市内山科区中臣遺跡¹⁰⁾・同伏見区深草遺跡¹¹⁾・長岡京市神足遺跡¹²⁾に認められ、さらに口縁部内面に波状文をもち、大和型の甕が近江的に変容したものについては上記遺跡の他に遠く唐古遺跡にも2例が報告されている¹³⁾。またコブ状突起をもつ壺形土器は滋賀県守山市服部遺跡で良好な資料を出土している¹⁴⁾ようであるが、山城では本遺跡・中臣・深草の他、左京区北白川追分町遺跡¹⁵⁾に認められ、さらに摂津安満遺跡にも類例がある。以上の分布状況からみて、近江系弥生式土器の分布圏の中心は市域東部に限定されるようであり、本遺跡の資料が中臣及び深草遺跡の資料と器種や器形・紋飾等の多くの点に亘って酷似している点からみれば、この3集落は鴨川の水利を活かして互いに交流が深かったものと考えられる。しかもこの3遺跡における近江系弥生式土器の比重の大きさから考えれば、ただ単に近江の土器が伝播もしくは搬入されたのではなく、この地域が近江地方と共に独自の文化圏を形成していたものとする方が自然であろう。また淀川水系を下って摂津地方とも交流があったことは、この文化圏の影響力の大きさを反映したものと言えるであろう。

さて、第2様式の段階に確立された近江系弥生式土器の伝統は次代に確実にひきつがれて、ついには後期の独特な土器群を生む。これは甕形土器の口縁部の変化に注目してみると、第5様式の所謂受口状口縁へ発展していくことが無理なく捉えられるという事実であり、具体的には、第2様式で山形口縁の甕から緩い段をもって立ち上がる非山形口縁の甕へ発展したものが、第3様式には一般的となり、さらに第4様式には立ち上がりの角度を強め、ついには直立もしくは内傾するに至り、第5様式の完全な受口状口縁へと接続していく過程が完全に把握できるのである。同時に第3～4様式に属する近江系土器を出土する遺跡は市域南部及び西部に拡がって、新たに南区中久世遺跡¹⁶⁾や伏見区鳥羽遺跡¹⁷⁾、右京区西院月双町遺跡¹⁸⁾などがこの土器文化圏に取り込まれるのは、長刀鉾町・深草・中臣などの母村からの発展的分村状況を示すものかも知れない。

再び近江型甕の記述に戻るが、第3様式の段階では口縁立ち上がり部外面の粗い横ないし斜ハケが残るが、第4様式では本遺跡弥生溝2出土例(101)では既にこれを欠き、立ち上がり部は内傾する。第4様式の受口状口縁甕の好例としては他に滋賀里遺跡11号方形周溝墓出土例¹⁹⁾及び中久世遺跡出土例²⁰⁾があるが、共に直立する立ち上がり部をもち、胴部上半に数段の櫛描直線文を施し、その間を斜位の列点文で埋めつくしていることは第5様式の受口甕の装飾法の先駆をなすものとして注目される。ただし、この装飾法も第2様式以来のものが再構成されたものにすぎないことには十分注意しなければならない。もう一つ近江型甕から第5様式の受口状口縁甕への発展を通観して注目されるのは、頭初から最後まで外面調整にハケ状工具を一貫して使

用していることであり、第3様式に現われる畿内中心部の最新技法である叩きが全く使用されずに終わったことは、近江系弥生式土器の在地性の強さを示すもの以外の何者でもない。

最後に近江系弥生式土器の一貫したスタイルとしての受口状口縁の甕や細頸壺の内傾する口縁部について一考するならば、その器形を維持させたものは単なるファッションとは考えられず、機能であったものと推測される。それは近江系弥生式土器(大和型甕を除く)に伴う蓋形土器が著しく少ないことから考えて、当該地方では木製の蓋を調理用の甕や貯蔵用の壺に用いたものと考えられるのである。ゆえに、近江系弥生式土器の文化はまた木製蓋の文化であったと言い換えても良い。この伝統は受口状口縁甕が祖型となって生んだ伊勢湾地方のS字状甕形土器にも引きつがれていくものと考えられるのである。

註

- 1) 佐原真・井藤徹『池上・四ツ池』(大阪, 昭和45年)。
- 2) 佐原真『弥生式土器集成』本編(東京, 昭和43年)。
- 3) 集成において佐原氏は甕Bを甕Aより後出のものと考えている。また中臣遺跡では第2様式古段階では近江型の甕は含まれていないという。
- 4) 福岡澄男『中期甕形土器の一類型』(『湖西線関係遺跡調査報告書』所収, 大津, 昭和48年)。井藤暁子『入門講座弥生式土器—近畿2—』(『考古学ジャーナル』202所収, 東京, 昭和57年)。
- 5) 田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』(大津, 昭和48年)の図版33A170・A171。
- 6) 註1)と同じ。
- 7) 杉原荘介・大塚初重『京都府深草遺跡』(『日本農耕文化の成生』所収, 東京, 昭和36年)の第3図2。
- 8) 森田克行・橋本久和『安満遺跡発掘調査書』—9地区の調査—(高槻, 昭和52年)の第3図16。
- 9) 佐原真『琵琶湖地方』(『弥生式土器集成』本編所収, 東京, 昭和43年)。
- 10) 林屋辰三郎編『史料京都の歴史2考古』(京都, 昭和58年)の図版46—119・120。
- 11) 杉原荘介・大塚初重『京都府深草遺跡』(『日本農耕文化の成生』所収, 東京, 昭和36年)の第5図17。宇佐晋一・小川敏夫・星野猷二『深草遺跡』(『古代学研究』第39号所収, 堺, 昭和49年)の第3図。
- 12) 第6回調査成果交流会(1982・9・30)における長岡京市埋蔵文化財センター作成資料の第2図66。
- 13) 末永雅雄・小林行雄・藤岡謙二郎『大和唐古弥生式遺跡の研究』(京都, 昭和18年)1943の図版51。
- 14) 1982年秋に大阪市立博物館で開催された考古展『古代日本の再見』で実見。
- 15) 第6回調査成果交流会における京都大学埋蔵文化財研究センター作成資料のPL—3
- 16) 註10)の図版50—137, 図版51—140。
- 17) 同上図版51—142
- 18) 同上図版488—1526・152e
- 19) 田辺昭三他『湖西線関係遺跡調査報告書』の第50図—B5
- 20) 註10)の図版51—140

2 本遺跡出土第5様式土器の山城地方後期弥生式土器に占める位置

山城地方では未だ第5様式土器のまとまった資料も不十分であり、細分案等が提出されるに至っていない。こうした状況の中であって本遺跡の弥生溝1出土土器は無作為の排棄によるため器種にかたよりもなく、あらゆるものを含み、完形に復せるものが多かった点で恵まれており、今後、山城の第5様式土器を検討する際の基準資料となりうるものである。

但し、一括出土品として扱う場合に、型式学的観点から見れば古い様相を残すものと、新しい様相とが混在している状態にあり、遺構の説明で既に述べた通り、段階的発掘法を用いたにも関わらず、土器の新古と層序との対応が把握できなかったのも、ある程度の時間幅を与えた上で、一つの集合として土器群を扱い、これに検討を加えていこうと思う。このように考えた最も大きな理由は、ほぼ完形に復しえた土器の多くが溝底に近い第3検出面からの出土品(300番台の番号を付してある)であり、これらの中にさえ、新古2要素の共存が認められたので、これを敢て時間差と認めて完全に分離すべきでないと思慮したからである。

さて、弥生溝1出土土器は全て番号を付して取り上げており、その数は総計248の多きに達しており、図示できたものも99個体にのぼった。本稿では既に行った土器の分類との重複を避けるために、個々の土器を逐一扱うことはせずに、総体としてのあり方に注目してその編年的位置づけと、地域性の抽出に努めていきたいと思う。

まず弥生溝1出土土器群の中で古い要素を抽出してみると、①二重口縁壺が存在しないこと。②口縁部を拡張し凹線文をもつ広口壺(壺A)の存在、③口縁端部に凹線文をもち、体部をハケまたはヘラミガキ調整する甕(甕A-I)の存在の以上3点を挙げるのが可能である。そしてこれは第5様式を2分した場合の前半期の特徴として把握することができそうである。

これに反して、新しい要素を抽出するならば、④手焙形土器の存在、⑤細頸壺の存在、⑥小型甕の中に口縁部叩き出し手法によるもの(小型甕A)が存在すること、の3点を挙げるのが可能であり、これは大略第5様式の後半期の様相として捉えられるものである。

このように見ていくと、弥生溝1出土土器の総体としての時期は第5様式前半と後半の交る中葉の段階に置くことが妥当であろうという一つの仮定が生まれてくる。そして、地域性として抽出すべき項目として⑦近江系の受口状口縁の甕・壺・鉢の存在。⑧矢羽叩きの甕の存在を挙げるのが可能となってくる。

そこで、具体的に周辺遺跡の一括資料と比較検討を行いたいと考えるが、京都市域で一括資料として扱えるものが今のところ無いので、やむをえず乙訓地方及び摂津三島地方まで範囲を拡げて、A.大阪府高槻市安満遺跡周溝基A5-2¹⁾、B.京都府長岡京市今里遺跡S B1223²⁾、C.京都府向日市中海道遺跡溝状遺構³⁾の3つの資料群を祖上に乗せて逐次検討を行っていきたいと思う。

まず、中海道遺跡との比較を行ってみると共通点として、①近江系受口甕の共有、②手焙形土器の共有、③細頸壺の共有、④甕形土器口縁部叩き出し技法の共有、⑤頸部の細い垂下口縁

器台(91)の共有、の5点を挙げるができる。但し型式学的にさらに細かく検討してみれば、①の受口甕は中海道の場合、口縁端部の外方へのつまみ出しが著しく、文様の簡略化から見ても後出のものと認められ、②の手焙形土器にしても体部の凸帯を欠く点からみてやはり後出的存在として時間差を認めざるをえない。また、⑤の器台については畿内中心部には存在しないタイプであり、在地的なものと考えべきだという意見もあり、これを直接畿内第5様式土器の編年序列の中に置くことができない。以上の検討からは、中海道遺跡に長刀鉾町遺跡弥生溝1と共通の器種が存在するとはいえ、より後出的な要素の多いことが判る。

また逆に両者の相違点を抽出してみるならば、中海道には①欠山式類似の内弯する深い高坏がある。②二重口縁壺がある。③高坏に中実脚が目立つ。④体部が球形に近い甕形土器がある。以上4点を挙げる事が可能である。そしてこれは報告書にも述べられているように第5様式後半の中でも終末期に近い状況として捉えられるべきものである。以上の比較検討から総合して、長刀鉾町遺跡弥生溝1出土土器群を中海道遺跡溝状遺構出土土器群に先行するものと判断することが可能である。

次に、今里遺跡S B1223出土土器群との比較を行なってみると、共通点として、①近江系受口状口縁壺・鉢の共有、②手焙形土器の共有、③矢羽根叩きの甕の共有、④高坏形土器Aの共有、の4点を挙げる事ができる。この内、③の矢羽根叩きは稀有の存在であることから両遺跡の関係を紐解く鍵になりうるかも知れない。しかし①の近江系土器については今里例は製作が在地風であり、近江のものとは何ら変るところがない長刀鉾町例とはその受容のあり方に違いを示している。以上のことは単に編年序列を反映する事項と考えるより共通の地域性によるものと考えべきであるのかも知れない。

しかし逆に相違点をさがすと、今里に①二重口縁壺と②体部が球形に近い甕が存在することの2点を挙げる事が可能であり、長刀鉾町弥生溝1例より後出であることが明らかとなる。それと同時に今里例は器種の共通性だけでなく型式学的に長刀鉾町例と共通するものを含み、かつ中海道のように第5様式終末期に属させるべき器種を含まない点から、中海道例より先行するものという推定が可能となる。

ここまでのところを総合すると長刀鉾町例は今里遺跡例より古く、今里遺跡例は中海道遺跡より古いという三者の関係が明らかにされる。

最後に一括資料として質量共に良好で長刀鉾町例との間に多くの共通性を見出せうと考えられる安満遺跡周溝墓A 5-2一括土器との比較検討を行ってみたい。

共通点として①口縁部を拡張し凹線文と円形浮文で飾る広口壺の共存、②短頸壺の類似(長刀鉾2・131と安満27)、③長頸壺の共有、④高坏Bの類似、⑤近江系受口状口縁壺の共有、⑥二重口縁壺を共にもたないこと。の以上6点を挙げる事が可能であり、この共通点はただ単に器種が共通するという範囲を越えて、個々の土器が互いに型式学的観点からみて酷似するというレベルに達している。

逆に両者の相違点を捜すならば、①器台形土器の相違と、②甕Aが安満に無いこと。の以上

2点が挙げられるが、これは共に時間差としてではなく、地域差として還元されるべきものと考えられる。前述したように長刀鉾町の器台Aは畿内中心部に見られない型式で、近江・伊勢湾地方との関係が考えられるのに対して、安満の器台⁵⁾は第5様式に通例のものである。同様に甕形土器については、安満遺跡で甕A₁・A₂・B₁と分類されたものは全て鬼塚遺跡に類例があり、河内の土器と考えられる。この事実は両遺跡が近江系の土器を共有するとはいうものの、それぞれに異った地理的環境に支配されていることを如実に示すものであろう。

以上の事から長刀鉾町弥生溝1出土資料は安満遺跡周溝基A 5-2出土資料とほぼ同時期に置くことが可能となり、第5様式内での相対的な位置は安満の報告書で述べられているようにその中葉とすることは予め行った想定に矛盾しないものである。

ここでまとまった量の第5様式土器の出土があった弥生溝4と弥生溝1の比較検討を行うならば、口頸部が直線的で外反度の低い長頸壺の存在と、高坏Bに先行すると推定される高坏Cの存在は弥生溝4の資料を第5様式前半に置く材料となるが、直口の短頸壺、壺C、甕Eを共有し、しかも型式学的に近似するものと判断されることから見れば、やはりその年代は弥生溝1に近い第5様式中葉に置くべきものと考えられる。逆に弥生溝1に存在しないものとして、畿内中心部型の器台Bや伊勢湾地方との関連の考えられる甕Fが存在するが、これは弥生溝1の土器群中の欠を補うものとして注目すべきものと思われる。以上整理して模式図化すると次の様になる。

第4表 遺構存続表

時期 遺構	I 新	II	III 古	III 新	IV	V
S K1003	——	——				
S K1001		——	——			
S K1005		——	——			
弥生溝4		——	——	——	——	——
弥生溝3		——	——	——	——	——
弥生溝2					——	
弥生溝1						——
住居址						——
A区包含層		——	——		——	
C区包含層		——	——		——	——
D区包含層		——	——			

註

- 1) 森田克行・橋本久和『安満遺跡発掘調査報告書』—9地区の調査—(高槻, 昭和52年)。
- 2) 吉岡博之「長岡京跡昭和53年度発掘調査概報」(『埋蔵文化財発掘調査概報』所収, 京都, 昭和54年)。
- 3) 高橋美久二・金村允人・森毅「中海道遺跡発掘調査報告」(『向日市埋蔵文化財調査報告書』第3集所収, 向日市, 昭和54年)。
- 4) 飛野博文「山城の弥生後期の土器—京都市左

京区岡崎南御所採集の土器について—」(『京都大学構内遺跡調査研究年報』所収, 京都, 昭和58年)。

5) 安満の器台の内, 特にBをさす。Aは直線的に開く受部と垂下口縁に長刀鉾町の器台Aとの共通性が認められるが, 脚柱部が太い点で明確に区別すべきである。

6) 下村晴文「鬼塚遺跡発掘調査概要I」(『東大阪, 昭和53年)。

3 畿内周辺部における弥生時代の石器使用状況

本遺跡からは比較的豊かな弥生時代の石器を出土したが, 土器を伴って遺構から検出されたためにその時期を窺い知れるものが多かった点は特に恵まれていた。

実例を編年的に紹介すれば, 第1～2様式の段階に属するのがS D1003出土の石包丁と扶入柱状片刃石斧, 第2～3様式に属するのがS K1005出土の太型蛤刃石斧, 第4様式に属するのが弥生溝2出土の磨製石剣・磨製石鏃・柱状片刃石斧・大型扁平片刃石斧, 第5様式に属するのが弥生溝1出土の小型扁平片刃石斧と磨製石鏃である。

本稿で問題にしたいのは石器の終焉状況についてであり, 本遺跡調査によって第4及び第5様式の石器の実例が得られたので若干の問題提起を行ってみようと思う。

従来, 弥生時代は金石併用時代として捉えられ, 石器を利器の中心としながらも青銅器は勿論, 鉄器までも同時に併用されていたことが実際の出土例から確かめられている。但し, 青銅器は急速に祭器化の道をたどり, 銅鐸・銅剣など特殊なものに限定される反面, 日常生活に用いられる農工具の実例は驚く程に少い。同様に鉄器も, その腐食に弱い特性からか意外に実例は多くない。そこで弥生時代の一般的な利器は多くは石によって製作されたものと推測され, その実例も数量的に金属器をはるかに凌ぐ訳であるが, その石器は一体いつの頃まで利器の中心としての座にあったのであろうか。

弥生時代の分期法は前・中・後の3期法が用いられているが, 前中期文化と後期文化を分けるメルクマールとして前者を石器主流の時代, 後者を鉄器が大量に導入され石器の消滅した時代と考えることが広く行われている¹⁾。しかし, 石器は単独でその時期を細かく究明することが難しいために, 具体的にいつまで石器が存在するのかということが明確にされなかったのは, 々の出土状況に恵まれぬことによるものだともいえそうである。

このことにかかる具体的な記述としては, 小林行雄氏が西ノ辻N地点の土器説明において, 第4様式の最後の段階にあっても大阪府廳ノ巢山遺跡その他の例からみて, なお重厚な打製石器の豊富な時期と思われる²⁾と述べている以外にはほとんど知られていない。

今回長刀鉾町の調査の知見として, 第4様式の段階には武器・工具共に退化的でなく実利的な石器が用いられており, 第5様式中葉においてさえ第4様式からの系譜の追える磨製石鏃と

小型扁平片刃石斧が用いられていたという事実は、周辺部とはいえ畿内地方に属する山城地方の石器の終焉が以外に遅かったことを教えてくれた。

弥生式土器の様式細分法が畿内を中心とする地域と九州地方とで異り、九州地方の第4様式が後期とされている現在、弥生時代後期の文化内容を論じる場合、石器の遺存と、それから推測される鉄器の普及度の低さは十分に論究されなければならない重要な問題点となってこよう。

同時に古墳時代の到来を待たなければ強力な首長の墓としての高塚古墳が一般的とならないのも、一つには生産性の急激な向上と余剰を生みだすのに不可欠な鉄器の大量導入が弥生時代後期には果たされていなかったための帰結と考えることもできよう。

註

- 1 小林行雄『弥生式土器集成図録』（東京、昭和14年）。
- 2 小林行雄「大阪府枚岡市額田町西ノ辻遺跡N地点の土器」（『弥生式土器集成』資料編1，所収，東京，昭和33年）。

弥生式土器観察表（102頁～138頁）凡例

- 1 実測図の配列は遺構及び包含層別とした。
- 2 土器番号は一連の番号を用い、記述部分においてもこの番号を使用する。尚、文中では拓影図の土器は丸囲いの番号によって実測図土器と区別する。
- 3 観察表には、イ土器番号 ロ器種 ハ法量 ニ胎土・焼成・色調 ホ形態及び紋飾 ヘ技法 ト備考の各項目を設けた。
- 4 法量については単位（センチメートル）を省略した。
- 5 胎土については包含する砂礫の多寡を以下の記号で示す。
 多い……◎ 少い……▽
 やや多い……○
 これに続けて括弧内に砂礫の大きさを以下の記号で示す。
 小礫……LL 細砂……S
 細礫……L 微砂……SS
 粗砂……M
- 6 焼成についてはその程度を良好・普通・不良に分け、特に良好なものには、堅緻と記す。
- 7 色調については外面の最も広範囲を占める色を記す。但し、内面の色調が著しく異なる場合にはこれを続けて併記する。
- 8 備考の欄には出土位置・遺物取り上げ番号・残存率・その他を記す。
- 9 残存率は図示部におけるそれを記す。

おわりに

今回の発掘調査では、周辺地域でこれまでに行われた発掘の結果から、弥生時代の遺物の出土することはある程度予想されたところであった。

ところが、調査の進行に伴って、予想以上に弥生時代の遺構・遺物の残存状況の良いことが判明し、結果的には溝4本と住居址1基の遺構を確認し、出土した土器、石器の量も多大な量にのぼることになった。特に石器については、京都市内では類を見ないほど多種多量にわたっており、土器の組成などと共に山城における弥生文化の系統論に一つの重要な資料を与えるものになった。

整理期間の都合等から、これらの良好な資料を十分に消化しきって報告出来なかったうらみは残るが、資料としては出来うるかぎり図化して掲示できたと考えている。

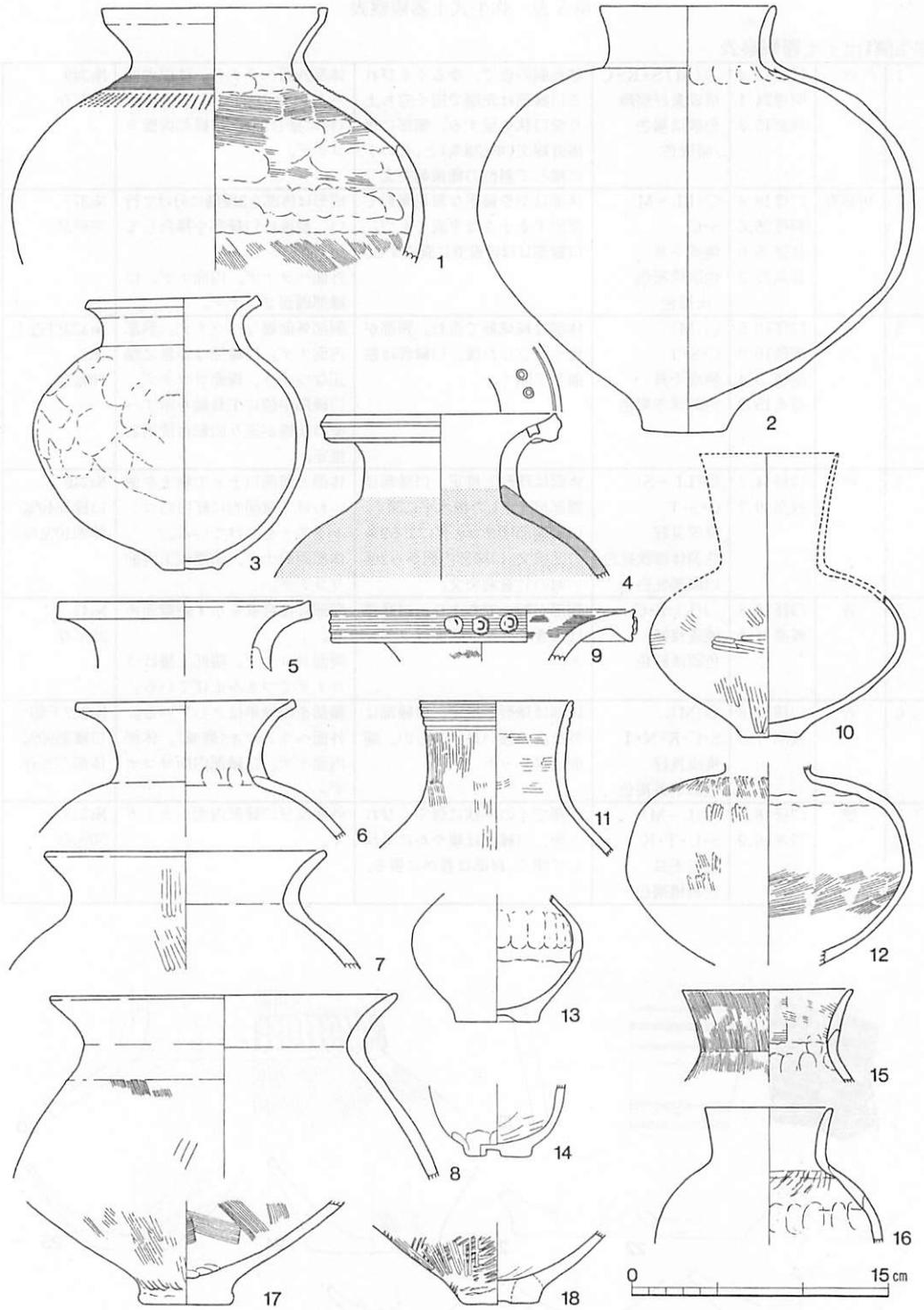
平安京関係の遺構については、邸宅跡等の明確な建築遺構は検出し得なかったが、多数の平安時代後期の井戸を検出した。そのうち丸太割りぬきの井戸はこの時期の京内の井戸としては類例の少い興味深い資料と言えよう。

遺物としても、平安時代の井戸内から、緑釉の施された円面硯、乾元大宝などが発見されており、また多くの土壇跡からは平安時代から江戸時代に至る良好な土器・陶器の資料を得ることが出来た。この資料に基いて作成した「土師皿編年図表」は、平安時代後期から江戸時代にわたる土師器の変遷の現段階における我われの考え方を集成したものであって、諸先学の御叱正をおおぎたいと思っている。

更に東西、南北に走る町内の溝は、いわゆる「四行八門」制では理解できないもので、平安時代以後宅地割の一つの実例として、今後の調査の集積が期待されるところであろう。

また、江戸時代の室、井戸、池状遺構など近世の資料については十分に報告できなかったが、今後の一つのテーマとして追求してゆかねばなるまい。

最後になったが、長期に渉る発掘調査と、それに伴う多大な費用を快く承諾いただいた三井銀行株式会社に、厚く感謝の意を表するものである。また、新築工事を担当する三井工務店・竹中工務店共同体の方々には、調査の期間中、プレハブ建設、重機による掘削、ベルコンの設定など、様々な面でお世話になった。あわせて謝意を表する次第である。

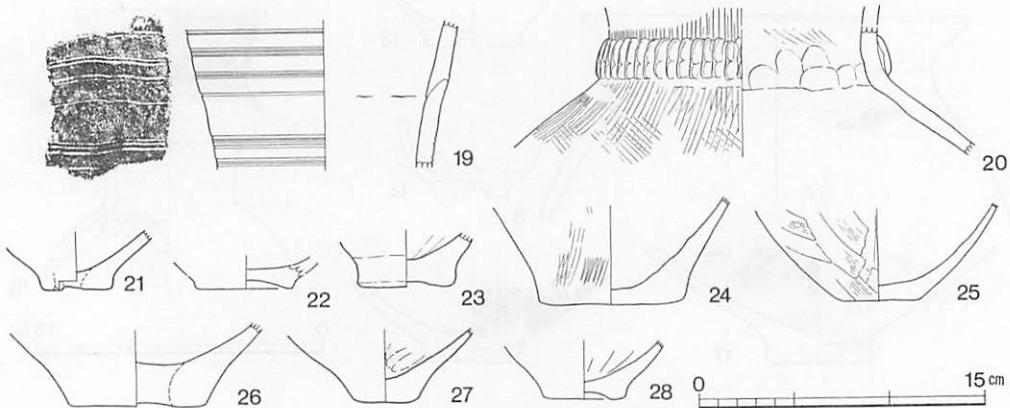


第47图 弥生式土器実測图(1)

第5表 弥生式土器観察表

弥生溝1出土土器観察表

1	壺	口径12.4 胴径24.1 残高15.2	○(M)S・K・C 焼成良好堅緻 色調淡褐色 /暗灰色	球形胴の壺で、ゆるくくびれる口縁部は先端で短く立ち上り受口状を呈する。頸部に楕円直線文(単位8条)と、その下に接して斜位の楕歯刺突文	体部外面ヘラナデ。体部内面ハケ調整の後一部指頭ナデ(特に接合部)。口縁部両面ヨコナデ。	No349 70%存
2	短頸壺	口径10.4 胴径26.6 底径 5.0 器高25.2	◎(LL~M) S・C 焼成不良 色調橙褐色 /灰褐色	体部はやや扁平な無花果形で突出する小さな平底をもつ。口縁部はほぼ垂直に直立する。	成形は体部を3段階に分けて行い、最後に口縁部を接合している。外面ヘラナデ。内面ナデ。口縁部両面ヨコナデ。	No377 完形品
3	壺	口径10.3 胴径16.0 底径 3.4 器高15.9	○(M) C・S・T 焼成不良 色調淡赤褐色	体部は扁球形で歪む。頸部が短く直立した後、口縁部は屈曲して開く。	胴部外面雑なヘラナデ。胴部内面ナデ。口縁部は非常に端正なつくり、両面ヨコナデ。口縁部中位に工具端を示す一条の沈線が巡り回転台使用と推定。	No323付近下部。 70%存
4	壺	口径14.2 残高 9.7	◎(LL~S) C・S・T 焼成良好 色調体部淡紅色 口頸部乳白色	体部は球形と推定。口縁部は頸部が直立した後水平に開く。口縁部はヨコナデによる2条の凹線文。口縁部内面から2個一対の竹管刺突文。	体部と頸部以上とで粘土を使いわけて意図的に紅白のコントラストをつけている。体部両面ナデ。頸部以上両面ヨコナデ。	No246 口縁部40% 体部10%存
5	壺	口径14.8 残高 4.3	○(L) S・C 焼成良好 色調淡紅色	頸部が短く立ち上り、口縁部は大きく外反。端面はフラット。	頸部に接合痕を示す剥離面あり。両面ヨコナデ。端部上稜はヨコナデでつまみ上げている。	No41 25%存
6	壺	口径12.8 残高 7.9	◎(M) S・C・K・N・T 焼成良好 色調淡黄褐色	体部は球形と推定。口縁部は外反度の強い長手のもの。端面はフラット	頸部を乾燥単位としている。外面ヘラミガキ(磨滅)。体部内面ナデ。口縁部内面ヨコナデ。	No332下部 口縁部90% 体部25%存
7	甕	口径16.4 残高 6.9	◎(L~M) S・U・T・K 焼成不良 色調橙褐色	頸部でくの字状に強くくびれた後、口縁部は緩やかに外反して開く。肩部は豊かに張る。	外面及び口縁部内面ヘラミガキ。	No333 50%存



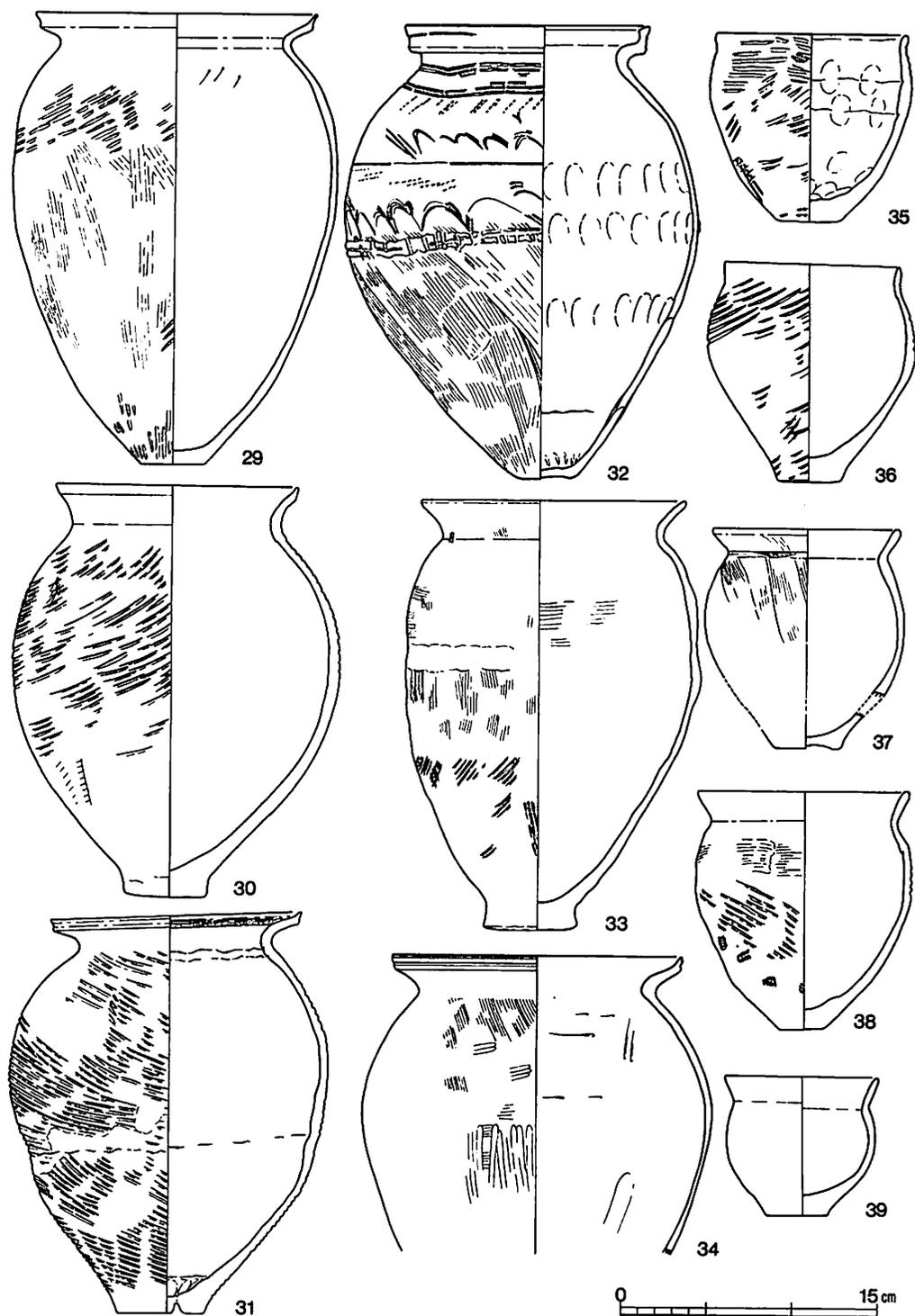
第48図 弥生式土器実測図(2)

弥生式土器観察表

8	壺	口径20.4 残高10.7	◎(L~M) S・K・N・T・C 焼成良好 色調乳白色	頸部でく字状に強くくびれた後、口縁部は緩やかに外反して開く。肩部の張りは豊か。	体部外面ハケ調整の後ナデ(断定できぬが1次調整は叩きの可能性もある)。体部内面ナデ。頸部~口縁部両面ヨコナデ。	No.334 20%存
9	広口壺	口径18.0 残高 2.9	△(S) S・C・N 焼成良好 色調淡紅乳白色	やや厚手。大きく外反して水平に開く。端部は下方へ拡張。口縁端部に3条の凹線文+3個一組の竹管押圧円形浮文(2組以上)。	外面細かい斜ハケ調整の後ナデ。内面細かい横ハケ調整。	No.312 25%存
10	長頸壺	胴径14.9 底径 3.3 残高 8.2	◎(L~M) S・C・N 焼成不良 色調暗褐色	口縁部を欠く。体部は扁球形を呈し微かに上げ底状の底部をもつ。	外面ヘラミガキ(縦位~横位)。内面ナデ。	No.339 図示部完存
11	長頸壺	口径 9.0 残高 9.1	△(S) S・C 焼成良好 色調赤褐色	肩部は撫肩状を呈し、明瞭なくびれを見せずに口縁部が直立する。口縁部上端に4条の凹線文。	外面ハケ調整後ヘラミガキ(縦位)。内面ハケ調整後ヘラミガキ(横位)。外面に白色粘土のスリップ。	a部中央区第3検出面50%存
12	細頸壺	頸径 5.0 胴径16.6 残高11.7	○(M~S) S・N・C・T 焼成良好堅緻 色調赤褐色/灰褐色	体部は肩の張った扁球形。底部は小さいものと推定。頸部で明瞭にくびれる。	外面粗いヘラミガキ。内面ナデ調整、一部ハケ調整。肩部内面に巻上痕。	No.280 70%存
13	壺	胴径10.0 底径 4.9 残高 7.4	△(S) C・U・K・T 焼成良好 色調乳白紅色	安定の良いドーナツ底をもつ。体部は扁球形で最大径を中位に有する。	体部を2段階に分けて製作。このため中位に明瞭な接合痕を残す。内外面共にナデ調整	No.363 70%存
14	壺	残径 8.0 底径 4.0 残高 4.1	◎(L~M) C・S・N・T 焼成良好 色調乳白色	突出する平底は外面中央部が不規則に凹む。体部は球形と推定。	底部付近外面指頭押圧。体部外面指ナデ調整。内面ヘラ押し。	No.35 50%存
15	壺	口径10.0 残高 5.3	○(L~M) S・C・K・N 焼成良好堅緻 色調暗灰褐色	肩部は撫肩状を呈し、頸部でゆるやかにくびれた後わずかに外反気味に開く。	頸部に乾燥単位をおく。粘土紐接合痕明瞭。外面タテハケ調整。口縁部内面ヨコハケ調整。頸部内面に指頭圧痕明瞭。	No.386 70%存
16	壺	口径 7.4 残高 7.9	△(M) S・C・T・U 焼成良好堅緻 色調乳淡紅色	体部は球形を呈する。口縁部はわずかに開く直口縁。	口縁部接合の際、頸部にシボリ技法を行っている。体部外面ナデ調整。体部内面指頭押圧と雑なナデ。口縁部両面ヨコナデ。	No.357付近 70%存
17	壺	底径 5.6 残高 6.6	△(SS) 焼成良好堅緻 色調乳白色/淡灰色	突出した平底をもつ。	外面調整縦位のヘラミガキ。内面ナデ調整後一部に斜ハケを加える。底部内面を中心に指頭圧痕。	No.333付近下部。 底部100% 体部20%存
18	壺	底径 4.7 残高 4.7	△(L~M) S・C・U・N 焼成普通 色調淡赤褐色	底部は平底だが中央部がわずかに凹む。体部は球形と推定。	外面調整右上りのラセン状叩きの後縦位のヘラミガキ。内面ナデ調整。底部の成形は円環技法による。	No.336付近下部。 図示部完存
19	広口壺	残径14.2 残高 7.8	○(M~S) S・T・C 焼成良好 色調淡乳褐色	徐々に開く太い頸部。広く間隔をあけて3・2・1条の歯を東ねた特殊な施文具を用いて3帯以上の直線文を施す。	内外面共にナデ調整。	覆土上A層 15%存

弥生式土器観察表

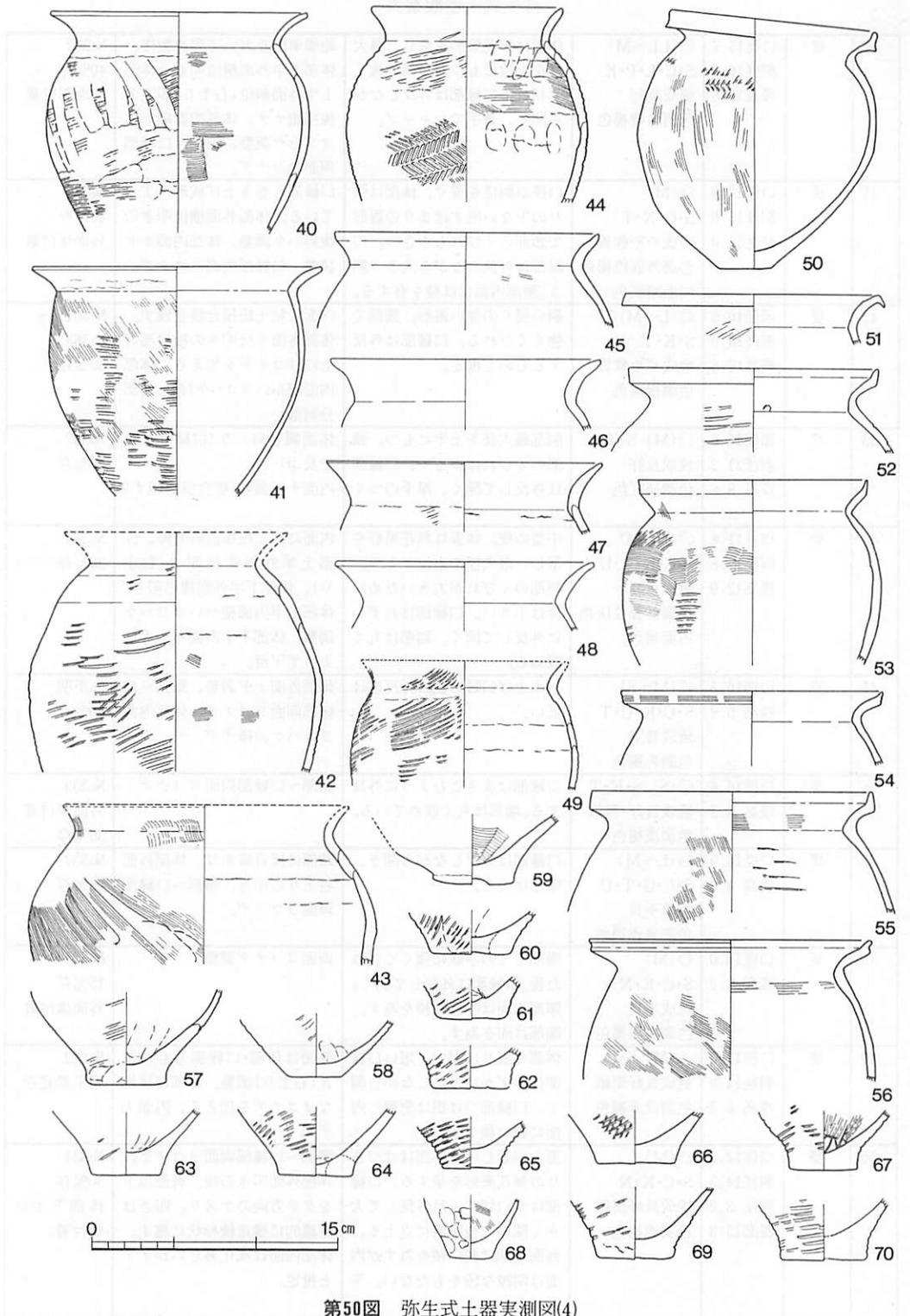
20	広口壺	頸径15.2 残高 7.8	△(M) S・U・T 焼成良好 色調淡赤褐色	体部が収束した後頸部は垂直に立上る。頸部に2指による指頭圧痕を付したキャクピラ状凸帯文。	外面調整間隔の粗いハケ。胴部は斜格子状に施す。体部内面ナデ調整。頸部内面調整粗いハケの後ナデ。	No340 25%存
21	壺	底径 3.8 残高 3.1	○(LL~M) S・C・U 焼成普通 色調淡橙色	わずかに凹み底の壺底部。	成形は円環技法による。調整は内外面共にナデ。底部付近外面に指頭圧痕。内面の観察から淡灰色の上に淡橙色スリップと判明。	No261 図示部完存
22	壺	底径 5.1	◎(LL~M) S・K 焼成不良 色調赤褐色	明瞭な上げ底。	調整は底面内面共にナデ。	北部 図示部完存
23	壺	底径 5.2 残高 2.8	○(M) S・C・U・K 焼成普通 色調赤褐色	突出する平底。底面は凹凸がある。	底面は最後に倒立して指頭調整。	No102 80%存
24	壺	底径 7.8 残高 5.6	○(LL~M) S・T・C・U 焼成普通 色調淡褐色	中心部の器厚の薄い平底。体部は無果実形になるものと思われる。	外面調整粗いタテハケ。内面調整ナデ。	覆土上A層 50%存
25	壺	底径 4.0 残高 5.0	◎(LL~M) S・N・C・K 焼成良好堅緻 色調乳白色	体部は球形を呈するものと推定。底部は突出しない平底。	平底は削りによって成形。外面調整ヘラナデ(木口状工具に準ずるが刻みは浅く平滑)。内面調整ナデ。	No46 60%
26	壺	底径 7.2 残高 4.3	○(M) S・K・T 焼成良好堅緻 色調淡褐色	分厚い平底。底面中央部が浅くくぼむ。	底部は円環技法による。内外面共ナデ調整(平滑)。	覆土上A層 70%存
27	壺	底径 3.5 残高 3.8	△(S) T・U 焼成不良 色調乳赤褐色	長頸壺の底部と推定される。底部は突出するやや不安定な平底。	外面調整不明(磨滅)。内面調整ナデ。	No336付近下部 70%存
28	壺	底径 4.4 残高 3.1	○(L・S) C・S・U 焼成良好堅緻 色調淡褐色	ドーナツ底の壺底部。	外面調整ナデ?内面調整ヘラオサエ。	覆土上A層 60%存
29	甕	口径16.4 胴径19.0 底径 3.7 器高26.4	○(M) S・C 焼成良好 色調橙褐色 外面は肩部を除いて煤付着。	口縁部の形状は口唇部が上方に尖る所謂ハネ上げ口縁で口径が大きい。体部は細長い無花果形で最大径を上位に有する。底部は小さな平底。	少くとも3段階に分けて製作。第1段階底部叩き調整、第2段階胴部浅いハケ調整、第3段階肩部叩き調整。頸部~口縁部両面ヨコナデ。肩部内面にヘラケズリ痕あり。	No383 70%存 但し修正復原実測
30	甕	口径14.2 胴径19.2 底径 4.8 器高24.0	○(M) S・K・C 焼成良好 色調淡赤褐色	口縁部は頸部での屈曲の弱いハネ上げ口縁。体部は丸味の強い無花果形で最大径を中位にもつ。底部は小さな突出する平底でやや不安定。	全体に整ったつくりである。体部外面は右上りの叩き調整。体部内面ナデ調整。頸部~口縁部両面ヨコナデ調整。	No361 完形品 底面に靱圧痕あり。
31	甕	口径14.6 胴径18.6 底径 5.2 器高23.2	△(S) S・K・C 焼成良好堅緻 色調外面濃茶褐色、内面淡褐色	口縁部は頸部で強く屈曲して水平に開く。端部はハネ上げている。体部は無花果形で最大径をやや上位にもつ。底部は平底(円板充填技法)。	胴部を分割成形している。そのため接合部を境に叩きの方向が異なる。体部外面左上りの叩き調整。体部内面ナデ調整。口縁部外面ヨコナデ。口縁部内面ヨコハケ調整。	No283下部 完形品



第49图 弥生式土器実測图(3)

弥生式土器観察表

32	甕	口径14.4 胴径20.7 底径 3.6 器高26.5	○(M~S) S・K・T・U・L 焼成良好堅緻 色調乳淡紅色 外面肩部以下に 煤付着。	口縁部は典型的な受口口縁で 端面は内斜する。体部は無花 果形で最大径をやや上位にも つ。底部は小さな平底。体部 中位に竹管刻み凸帯を巡しそ れ以上を文様帯とする。櫛描 波状文と刺突文(斜位)を2回 繰り返しこれをヘラ描直線で 圧切る。頸部には糜状文的ヨ コハケ、口縁部外面には中途 半端なヘラ描沈線。	底部に明瞭な乾燥単位があり 内外両面に補強用粘土を化粧 がけしている。体部下外面 斜ハケ(右上り)調整、体部上 半外面ナデ調整。内面ナデ調 整、接合部と凸帯裏に指頭圧 痕。底部内面に指頭爪圧痕。 薄手で丁寧なつくり。	No330 完形品
33	甕	口径15.5 胴径17.3 底径 5.5 器高25.0	◎(L~M) S・C・L・N 焼成普通 色調淡褐色	口縁部はわずかに外反する葉 口縁。体部は細長い無花果形 で肩部がやや張る。底部は突 出する不安定な平底。	体部を3段階に分けて製作。下 部は叩き目(右上り)調整、中 部はタテハケ調整、上部はハ ケメ(一部ヨコハケ)後ナデ調 整。口縁部両面ヨコナデ調整。 体部内面ナデナハケ調整。	No366 70%存 底面に 枳圧 痕あり。
34	甕	口径17.0 胴径20.5 残高17.2	◎(L~M) S・T・K・C 焼成良好 色調橙褐色	口縁部は頸部での屈曲の強い ハネ上げ口縁。体部は無花果 形を呈し、最大径を上位にも つ。 口縁部に2条の擬凹線文。	体部上半外面斜ハケ調整。体 部下外面ヨコハケ調整の後 ヘラミガキ(縦位)。体部内面 ケズリ調整(横位主体)。	No387 体部下 半に 煤付着。 30%存
35	小型甕	口径11.3 胴径11.8 底径 3.8 器高11.0	△(M) S・C・K 焼成良好 色調淡赤褐色	平底の小型甕。最大径を上位 にもち、頸部は微かにくびれ る。口縁部は短く直立し、端 部は尖る。	体部上半は幅2cm強の粘土紐 巻き上げ成形。内面には指頭 圧痕を多く残す。外面調整叩 き(方向は錯ソウ)。内面調整 指ナデ。	No316+ No310 付近下部。 60%存 内面枳圧痕
36	小型甕	口径10.4 胴径12.2 底径 3.7 器高12.7	△(M) S・C・K・L 焼成普通 色調赤褐色	体部は無花果形を呈し、最大 径を上位にもつ。頸部で微か にくびれた後、短い口縁部が 直立する。端部尖る。底部は 分厚い平底。	外面叩き調整(右上り)。体部 内面ナデ。口縁部両面ヨコナ デ。	No349下部 90%存
37	小型甕	口径11.0 胴径11.7 底径 4.1 器高(12.8)	◎(L) S・C・N 焼成普通 色調橙色~淡褐 色	体部は丸味のある無花果形を 呈し、最大径を中位付近にも つ。口縁部は頸部でくの字状 に屈曲して直線的に開く。底 部は浅い凹み底。	外面斜ハケ調整(ヘラナデ併 用)。内面ナデ。口縁部両面ヨ コナデ。 外面及び口縁内面に橙色のス リップ。	No326 80% 存
38	小型甕	口径12.4 胴径12.6 底径 2.6 器高13.8	○(M) S・C・K・N 焼成良好堅緻 色調赤褐色	体部は無花果形を呈し、最大 径を上位にもつ。頸部でゆる くくびれて、口縁部はわずか に外方に開く。底部は小さな 平底。	体部外面叩き調整(中央部は 左上りの粗い平行叩きで、下 部には細かい綾杉叩きを使 用)。肩部には布ナデを加える。 口縁部両面布ヨコナデ。	No366 80%存 スリップ懸 け。
39	小型甕	口径 9.0 胴径 8.7 底径 3.6 器高 8.0	○(M) S・L・K・T 焼成普通 色調淡赤褐色	体部は丈の低い球形を呈する。 口縁部は頸部でゆるくくびれ た後、わずかに外方に開く。 底部は平底。	体部の外面調整は叩きによる が、風化により図化不能。体 部内面指ナデ。口縁部両面ヨ コナデ。	No33 完形品



第50图 弥生式土器実測图(4)

弥生式土器観察表

40	甕	口径15.7 胴径16.0 残高13.6	◎(LL~M) S・C・L・P・K 焼成良好 色調暗橙褐色	体部は無花果形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部で強くくびれて口縁部は外反しながら開く。薄手でシャープ。	乾燥単位をにおいて順次製作。体部下外面横位叩き、体部上半外面斜位(右上り)叩きの後指頭ナデ。体部内面細かいヨコハケ調整。頸部~口縁部両面ヨコナデ。	No382 40%存 外面煤付着
41	甕	口径17.8 胴径15.6 残高14.0	◎(M) S・C・N・T 焼成やや軟質 色調外面橙褐色 内面暗灰色	口径が胴径を凌ぐ。体部は張りの少ない尻すぼまりの器形で頸部のくびれも小さい。口縁部は外反しながら大きく開き、頸部内面には稜を有する。	口縁部も巻き上げ成形によっている。体部外面横位叩きの後斜ハケ調整。体部内面ナデ調整。口縁部両面ヨコナデ。	No375 40%存 外面煤付着
42	甕	頸径10.5 胴径18.0 残高12.8	◎(L~M) S・K・T 焼成やや軟質 色調橙褐色	胴の張りの強い器形。頸部で強くくびれる。口縁部は外反するものと推定。	内面に粘土紐接合痕を残す。体部外面平行叩きの後肩部以上にヨコナデを加える。体部内面細かいヨコハケ(但し大部分剝落)	No361東+ No368 30%存
43	甕	頸径15.6 胴径21.2 残高 8.8	○(M) S・T・C 焼成良好 色調淡紅色	胴部最大径を上半にもつ。頸部のくびれはゆるく、口縁部は外反して開く。厚手のつくり。	体面調整斜ハケ(口縁部にまで及ぶ) 内面ナデ調整(接合痕を残す)	No362 40%存
44	甕	口径11.8 胴径14.8 残高12.0	○(L~M) S・C・K・T・U・L 焼成良好 色調外面淡灰色 内面黒色	中型の甕。体部は無花果形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部のくびれが大きいため口径は小さい。口縁部はわずかに外反して開く。端部は丸く収める。	内面に粘土紐接合痕明瞭。体部上半外面平行叩き(右上り)、体部下外面綾杉叩き。体部上半内面細かいヨコハケ調整。体部下内面布ナデによって平滑。	No344 30%存
45	甕	口径16.3 残高 5.9	◎(M~S) S・C・K・U・T 焼成普通 色調乳褐色	ハネ上げ口縁の甕。外反度は低い。	体部外面ナデ調整。頸部~口縁部両面ヨコナデ。体部内面ヨコハケの後ナデ。	No不明 40%存
46	甕	口径16.6 残高 4.3	○(S) S・K・T 焼成良好・堅緻 色調淡褐色	口縁部はまきこむように外反する。端部は丸く収めている。	頸部~口縁部両面ヨコナデ	No333 外面煤付着 30%存
47	甕	口径16.9 残高 4.2	◎(L~M) S・C・G・T・U 焼成不良 色調黄赤褐色	口縁部は外反しながら開き、端部は尖る。	頸部に接合痕あり。体部外面右上りの叩き。頸部~口縁部両面ヨコナデ。	No332 25%存
48	甕	口径16.0 残高 4.2	◎(M) S・C・K・N 焼成不良 色調淡赤褐色	頸部でくの字状に強くくびれた後、口縁部は外反して開く。頸部内面は明瞭な稜を為す。端部は面を為す。	両面ヨコナデ調整。	No357 15%存 外面煤付着
49	甕	口径12.7 胴径14.0 残高 8.3	△(M) S・C 焼成良好堅緻 色調淡赤褐色	体部の張りは弱い。短い口縁部はわずかに外反しながら開く。口縁部つけ根は肥厚し内面に鋭い稜をもつ。	外面は体部・口縁部ともに叩き(右上り)調整。頸部には雑なヨコナデを加える。内面ナデ。	No382 図示部完存
50	甕	口径12.8 胴径14.5 底径 3.2 器高15.3	◎(M) S・C・K・N 焼成良好堅緻 色調赤褐色	歪みが著しい。体部はすぼまりの無花果形を呈する。口縁部は受口状で一旦外反して大きく開いた後垂直に立上る。外面段部は鋭い稜を為すが内面は明瞭な段をもたない。平底。	頸部~口縁部両面ヨコナデ。体部外面叩きの後、肩部以下をタテ方向のケズリ。叩きは意識的に横走綾杉状に施す。体部内面は風化著しいがナデと推定。	No381 90%存 体部下半に 煤付着。

弥生式土器観察表

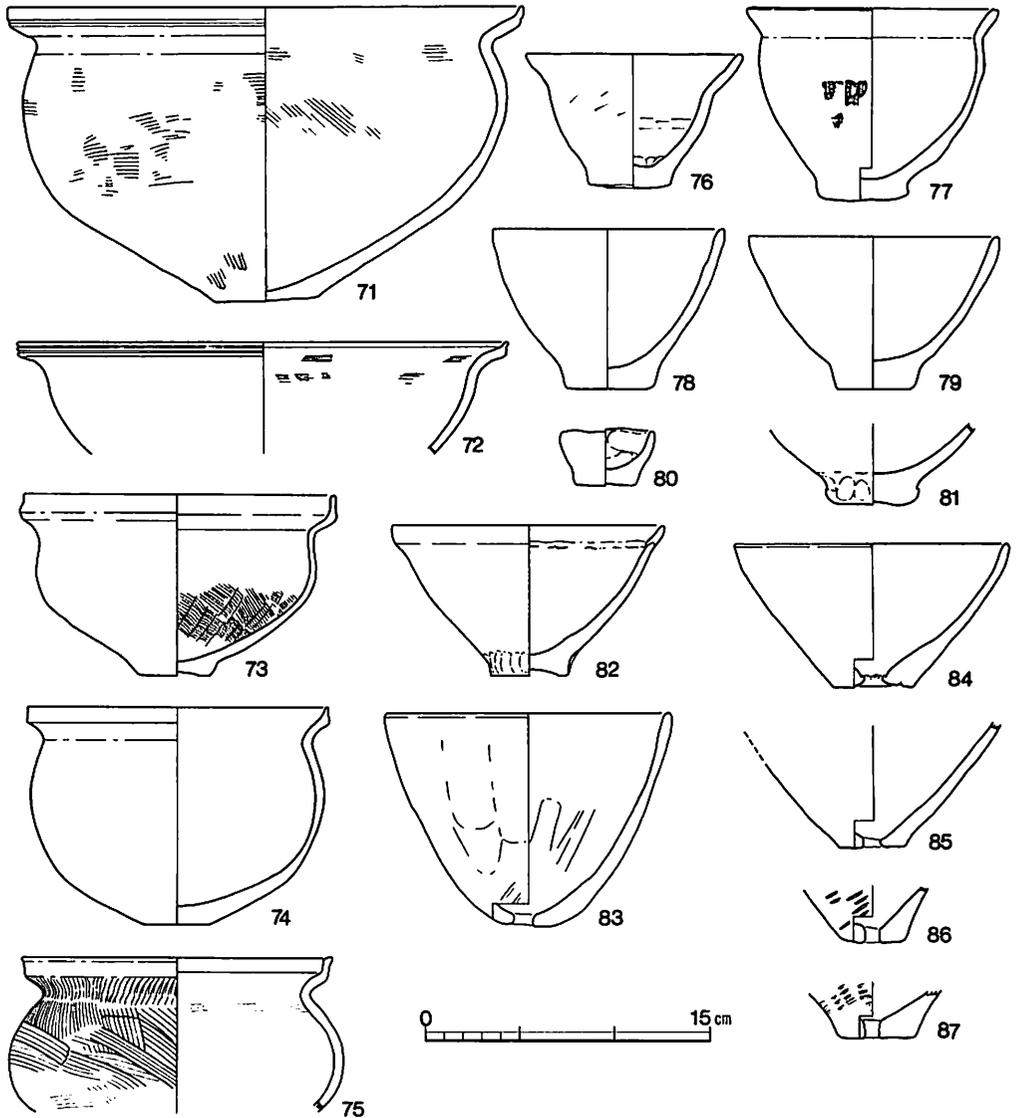
51	甕	口径15.5 残高 2.8	◎(LL~M) S・C・N・T 焼成普通 色調淡乳赤褐色	頸部のくびれは弱い。口縁部は外反しながら開くが、端部のヨコナデを強く行うことによって垂下口縁風に仕上げる。	外面右上りの平行叩き口縁部叩き出しの後ヨコナデ。内面ヨコナデ。	No229 20%存
52	甕	口径15.3 残高 5.0	◎(L) S・C・U 焼成不良 色調橙褐色	口縁部は受口状を呈するが、内面の段は明瞭でない。	外面平行叩き(横位)の後ナデ。頸部~口縁部両面ヨコナデ。内面ナデ。	No311(No46 も同一) 外面煤付着
53	甕	口径14.0 胴径15.8 残高11.2	△(M) S・C・T 焼成普通 色調淡紅乳白色	胴部最大径を上位に有し、やや肩が張る。頸部は鋭くくびれ、口縁部は直線的に開いた後、口唇部を垂直に立ち上らせている。準受口々縁。	外面は胴部水平叩き、肩部斜位(右上り)叩きの後、境界にヨコハケ調整を加える。口縁部両面ヨコナデ。内面ナデ、一部ハケ調整。	No380 70%存 外面煤付着
54	甕	口径16.0 残高 4.5	◎(LL~M) S・C・K 焼成不良・色調橙褐色	口縁部は所謂ハネ上げ口縁部で、外反度が強い。端面に2条の擬凹線。	体部内外面共ナデ調整。頸部~口縁部両面ヨコナデ。	No30 30%存 外面煤付着
55	甕	口径17.2 残高 7.3	○(M) S・C・T 焼成良好堅緻 色調橙褐色	体部の取りは強い。口縁部は水平に開いた後、口唇部の立ち上る受口状口縁で内面に段をもつ。頸部内面には稜を有する。つくり良く整美。	体部外面ハケ(斜位)調整。体部内面横位ケズリ。頸部内面ヨコハケ調整。口縁部両面丁寧なヨコナデ。	No380下部 80%存 外面煤付着
56	甕	口径17.2 胴径17.8 残高 8.5	○(M) S・C・K・T 焼成良好堅緻 色調淡紅乳白色	体部の取りは弱い。頸部でくの字状にくびれた後、口縁部は直線的に開く。口唇部はほぼ垂直に立ち上がりヨコナデによって外面に凹線、内面に緩い段を形成。つくり良く整美。	体部外面ハケ(斜位)調整。体部内面ナデ調整(一部ヨコハケ)。頸部~口縁部ヨコナデ。	No382 70%存 外面煤付着
57	甕底部	底径 4.8 残高 5.6	◎(L~M) N・S・K 焼成良好・色調淡褐色/黒色	中型甕下半部。底部は凸出する平底で体部には内湾しながら接続する。	底部内外面に指頭圧痕あり。外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ナデ。	No221 底部完存 体部20%存
58	甕底部	底径 3.2 残高 3.8	◎(L~M) S・C・N・T 焼成良好・色調暗茶褐色/灰色	凸出せず直線的に開く薄手の平底。受口状口縁の甕に共通。	外面調整平行叩き(右上り)の後ナデ。内面調整ナデ。底面に指頭圧痕あり。	No340 70%存
59	甕底部	底径 5.0 残高 4.2	△(SS) L・S 焼成普通・色調淡褐色/暗灰色	所謂ドーナツ底の底部。乾燥前に底部がつぶれて左傾している。	外面調整ヘラナデ。内面調整簾状文的ヨコハケ	中央区東壁 80%存 壺の可能性
60	甕底部	底径 5.0 残高 2.6	○(L~M) S・L・K・C 焼成良好・色調乳白色/黒色	わずかに凹み底の甕底部。体部器壁に比べて分厚い。体部には外反しながら接続する。	円環技法によって成形。外面調整(右上りの平行叩き)は下端にまで及ぶ。内面調整ナデ。	No07 60%存
61	甕底部	底径 4.5 残高 2.4	△(S) S・U 焼成良好堅緻 色調淡褐色	分厚い平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ヘラナデ。底面に籐状圧痕あり。	No109 70%存
62	甕底部	底径 4.8 残高 2.5	◎(L~M) C・S・T 焼成良好堅緻・色調淡紅色/淡灰褐色	分厚い平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ナデか。底面にも叩き目あり。	No39 60%存
63	甕底部	底径 4.2 残高 3.8	◎(L~M) C・S・K 焼成良好・色調淡赤褐色	器壁に比して部厚い平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整右上りの平行叩き(ほとんど磨滅)。内面調整ナデ(底部に指頭圧痕)。	No20 70%存

弥生式土器観察表

64	甕底部	底径 4.6 残高 4.0	○(M~S) S・L・U 焼成良好堅緻・ 色調淡赤褐色/ 淡灰褐色	器壁に比して薄い平底。体部には外反しながら接続する。	底部中央には粘土充填痕あり。円環技法と推定。外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ナデ(底部に指頭圧痕)。	No.315 60%存
65	甕底部	底径 3.5 残高 3.1	◎(L~M) S・C・N・U・T 焼成普通 色調淡乳褐色	小型甕の底部。体部には外反しながら接続する。	底面中央に粘土充填痕らしきものが認められ円環技法によるものか。外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ナデ。	No.306 図示部完存
66	甕底部	底径 4.8 残高 3.2	◎(L~M) S・C・N・U 焼成良好 色調淡茶褐色	比較的大型の平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整傾きの異なる右上りの平行叩きが重複して斜格子状を呈する。内面調整ナデ。	No.357付近 50%存
67	甕底部	底径 4.2 残高 3.9	◎(L~M) S・C・T・N 焼成良好堅緻 色調淡紅色	中型甕の底部。凸出する平底で体部には内湾しながら接続する。	安定の良い平底で非円環技法。外面調整平行叩き(緩い右上り)。内面調整ヘラナデ(ヘラ先の鋭い圧痕を残す)。	No.233 70%存
68	鉢底部	底径 2.6 残高 3.7	△(L~M) S・C 焼成良好堅緻 色調淡橙褐色	小型鉢もしくは小型壺の底部。器壁に比して分厚い平底。やや不安定。	外面調整指ナデ。内面ハケ調整。	No.19 60%存
69	甕底部	底径 4.6 残高 4.3	◎(L~M) S・C・K 焼成良好 色調赤褐色	平底。体部には外反しながら接続する。	底面中央に粘土充填痕らしきものあり。円環技法と推定。外面調整平行タキ(右上り)。内面調整ナデ。	No.340 図示部完存
70	甕底部	底径 5.0 残高 3.8	◎(M) S・C・U 焼成良好 色調淡紅色	比較的大型の平底で分厚い。体部には外反しながら接続する。	外面調整刻みの深い平行叩き(横位)。内面調整ナデ。	No.不明 30%存
71	鉢	口径27.2 胴径25.5 底径 5.4 器高15.4	○(L~M) E・S・K・T 焼成良好堅緻 色調橙色	体部は扁平で小さな平底をもつ。最大径を上位にもち肩部分が張る。頸部で強くくびれた後、口縁部は一旦大きく開いてから短く立ち上る受口状口縁。口縁端部外面にはヨコナデによって一条の沈線が巡る。	体部下外面ヘラミガキ(縦位)。体部上半外面横ハケ後ナデ。体部下内面ヘラナデ。体部上半内面斜ハケ後ナデ。口縁部両面ヨコナデ。頸部外面指ヨコナデ。底部は器厚に比して薄く、底面を削っている。	No.324+ No.336 60%存
72	鉢	口径26.0 胴径23.0 残高 5.8	○(S) S・C・T・U 焼成不良 色調淡赤褐色	体部は浅い半球形で最大径を頸部にもつ。頸部はくびれず、口縁部が大きく開く。端部はハネ上げている。口縁端部外面に3条の擬凹線文。	体部外面ナデ調整。体部内面ヨコハケの後ナデ調整。	No.318 20%存
73	鉢	口径16.4 胴径14.7 底径 3.8 器高 9.5	○(L~M) S・C・L・P 焼成良好 色調淡赤褐色	体部は扁平で最大径を中位にもつが張りは弱い。底部は粗雑な上げ底。頸部で緩くくびれた後、口縁部は一旦大きく開いてから垂直に立ち上る。内外共に段をもつ典型的受口状口縁。	体部外面ナデ調整。体部内面糜状文的ヨコハケ調整(上半はその後ナデ)。口縁部両面ヨコナデ調整。つくりはやや雑。	No.373 90%存
74	鉢	口径15.8 胴径15.4 底径 3.5 器高11.4	○(M) S・C・K・T 焼成良好 色調赤褐色	体部は球形状を呈し、最大径を中位にもつ。頸部でくびれた後、口縁部は一旦外反気味に開いてから垂直に立ち上る。内面に明瞭な段をもたない準受口状口縁。	体部外面ナデ調整後ヘラナデ。体部内面ナデ調整。頸部~口縁部両面ヨコナデ調整。	No.379 60%存

弥生式土器観察表

75	鉢	口径16.4 胴径17.6 残高 8.0	○(M)S・C・P 焼成良好 色調橙褐色/乳白色	体部は扁球形を呈し最大径を中位にもつ。頸部で強くくびれた後、口縁部は一旦外反気味に開いてから垂直に立ち上る。内面にも明瞭な段をもつ典型的な受口状口縁。端面内斜。	体部～頸部外面目の粗い原体によるタテハケ後、斜ハケを装飾的に施す。体部内面ナデ調整(一部ヨコハケ)。口縁部両面ヨコナデ調整。	No 3 0 9 + No06+No44 30%存 外面全体に 煤付着
76	鉢	口径11.4 胴径 8.6 底径 4.3 器高 7.0	○(S) S・U・T・L 焼成普通 色調淡赤褐色	体部半球形で最大径を頸部にもつ。頸部はくびれず、口縁部が内湾気味に大きく開く。底部は凸出する大きめな平底。	体部両面ヘラケズリ(横位)後ナデ調整。頸部～口縁部両面ヨコナデ調整。底部内面に指頭瓦痕あり。	No347 完形品



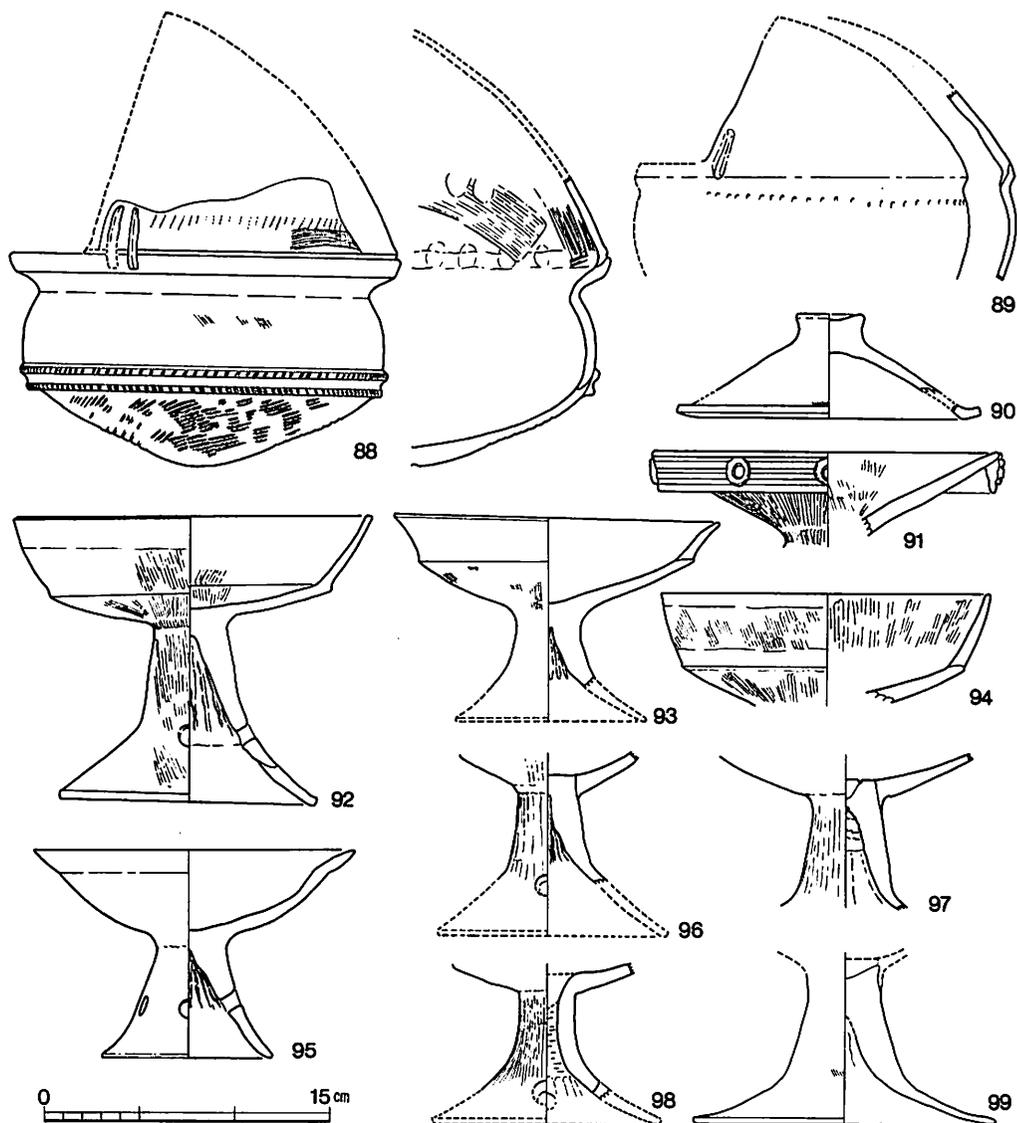
第51図 弥生式土器実測図(5)

弥生式土器観察表

77	鉢	口径13.3 胴径11.8 底径 4.8 器高10.0	◎(L~M) S・N・K 焼成不良 色調暗褐色	体部半球形で最大径を上位にもつ。頸部でわずかにくびれて、口縁部は短く開く。底部は凸出する平底。	体部外面細かいタテハケ調整。体部内面ナデ調整。頸部~口縁部ヨコハケ調整。つくりは雑。	No316下部 60%存
78	鉢	口径12.2 底径 4.8 器高 8.4	◎(L~M) S・C・N・T 焼成普通 色調淡灰褐色	無頸の鉢で最大径を口縁部にもつ。体部は内湾しながら開く。底部は凸出する平底。口唇部は丸く収める。	内外面共ナデ調整。つくりは雑。内面に暗褐色のスリップ。	No316下部 60%存
79	鉢	口径13.2 底径 4.1 器高 8.0	◎(M) S・T・K 焼成普通 色調乳白色	78に類するが、やや扁平な器形を示す。	外面風化。内面は乾燥が進んだ段階のナデにより平滑。	No286 完形品
80	手捏鉢	口径 5.0 底径 3.3 器高 2.9	○(L~M) S・U 焼成良好 色調乳白色	体部に比して大きな平底をもつ。丈の短い体部は内湾しながら開く。口縁部は波うっている。	手捏成形の後、外面ナデ調整。内面には指頭ナデ痕を残す。	No319 完形品
81	鉢	底径 4.9 残高 4.1	◎(L~M) S・C・K・N 焼成良好・色調 橙褐色/淡灰褐色	体部は半球形と推定。凸出する底部はわずかに上げ底。	底部は円環技法によるものか。底部外面に指頭圧痕。底面凹みは指頭ナデによる。	No08 60%存
82	鉢	口径14.4 体径12.9 底径 4.1 器高 7.9	◎(L~M) S・C 焼成良好 色調赤褐色	体部は直線的に大きく開き、頸部に最大径をもつ。頸部はくびれず、短い口縁部が内湾気味に開く。底部は上げ底。	底部側面に指頭圧痕。口縁部は一旦擬口縁をつくって乾燥させた後に接合。体部両面ナデ調整。口縁部両面ヨコナデ調整。	No371 完形品
83	有孔鉢	口径15.2 器高11.1	◎(M) S・C・N 焼成不良 色調赤褐色	砲弾形の器形を呈し、最大径を口縁部にもつ。底部は丸底。	外面叩きの後ナデ調整か。内面ナデ(一部ヘラオサエ)調整。底部には直径12mmの円孔を焼成前穿孔。	No233+ No226 70%存
84	有孔鉢	口径14.5 底径 4.2 器高 7.6	◎(L~M) S・C・K・T・U 焼成良好・色調 淡褐色/淡灰色	丈の低い体部は直線的に大きく開き、口縁部は若干内湾気味となる。底部は平面を為しておらず不安定。	内外面共にナデ調整。表面は磨減。底部の穿孔(焼成前)は鈍い。	No327 20%存
85	有孔鉢	底径 3.5 残高 6.1	◎(M) S・C・T 焼成不良・色調 乳白色~淡紅色	体部は直線的に大きく開く。底部は平底。	外面ナデ調整(精)。内面ナデ調整(粗)。底部の穿孔は生乾きの段階に施しており自重で幾分潰れている。	No336 70%存
86	有孔鉢	底径 3.3 残高 2.9	◎(L~M) S・C・N・K	やや不安定な平底の中央に直径8mmの一孔を焼成前穿孔。	外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ナデ。	No247 70%存
87	有孔鉢	底径 4.3 残高 2.8	◎(L~M) C・S 焼成良好・ 色調淡紅色	底部は平底。体部には外反しながら接続する。	外面調整平行叩き(右上り)。内面調整ナデ。底部の穿孔は焼成前に内側から鋭く開けられている。	No354 図示部完存

弥生式土器観察表

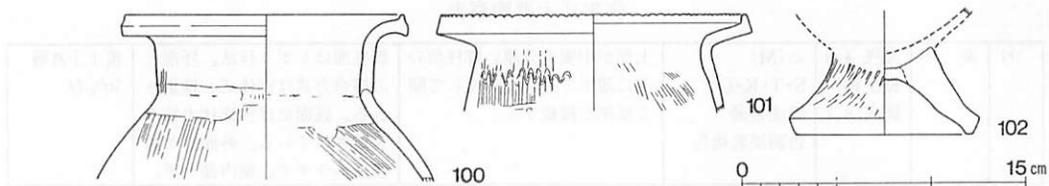
88	手焙形 土器	口径20.6 胴径19.0 鉢高11.0 推高23.8	◎(L~M) C・T・S・N 焼成普通 色調乳淡紅色	受口状口縁の鉢に蔽部をとり付けた器形。体部は扁平な独楽形を呈し、最大径を中位にもつ。底部は尖底で平置できない。頭部で強くくびれた後、口縁部は一旦外反してから立ち上がる。蔽部は現存部から見て比較的背丈が高い。紋飾は①蔽部下位に櫛齒刺突文(斜位)と部分的な櫛描直線文。②蔽部前端接合部に2条1組の棒状浮文。③体部中位の2条の凸帯に互いに方向の異なる斜位の刻目文。	3段階に分けて製作。①体部下半②体部上半③蔽部の口縁部への接合。体部下半外面連続ラセン状叩き。体部上半斜ハケの後、丁寧なナデ調整。蔽部外面ナデ調整。蔽部内面粗い斜ハケ調整。接続部は指頭圧の後指ナデ。体部内面ナデ調整。蔽部は受口状口縁の内側に接合している。体部の凸帯は接合部の補強帯としての機能を持ち、一本の粘土帯を中央の凹線で分割して製作したもの。	No253+16+ 254+369+ 270 体部80% 蔽部25%存
----	-----------	--------------------------------------	-------------------------------------	---	--	---



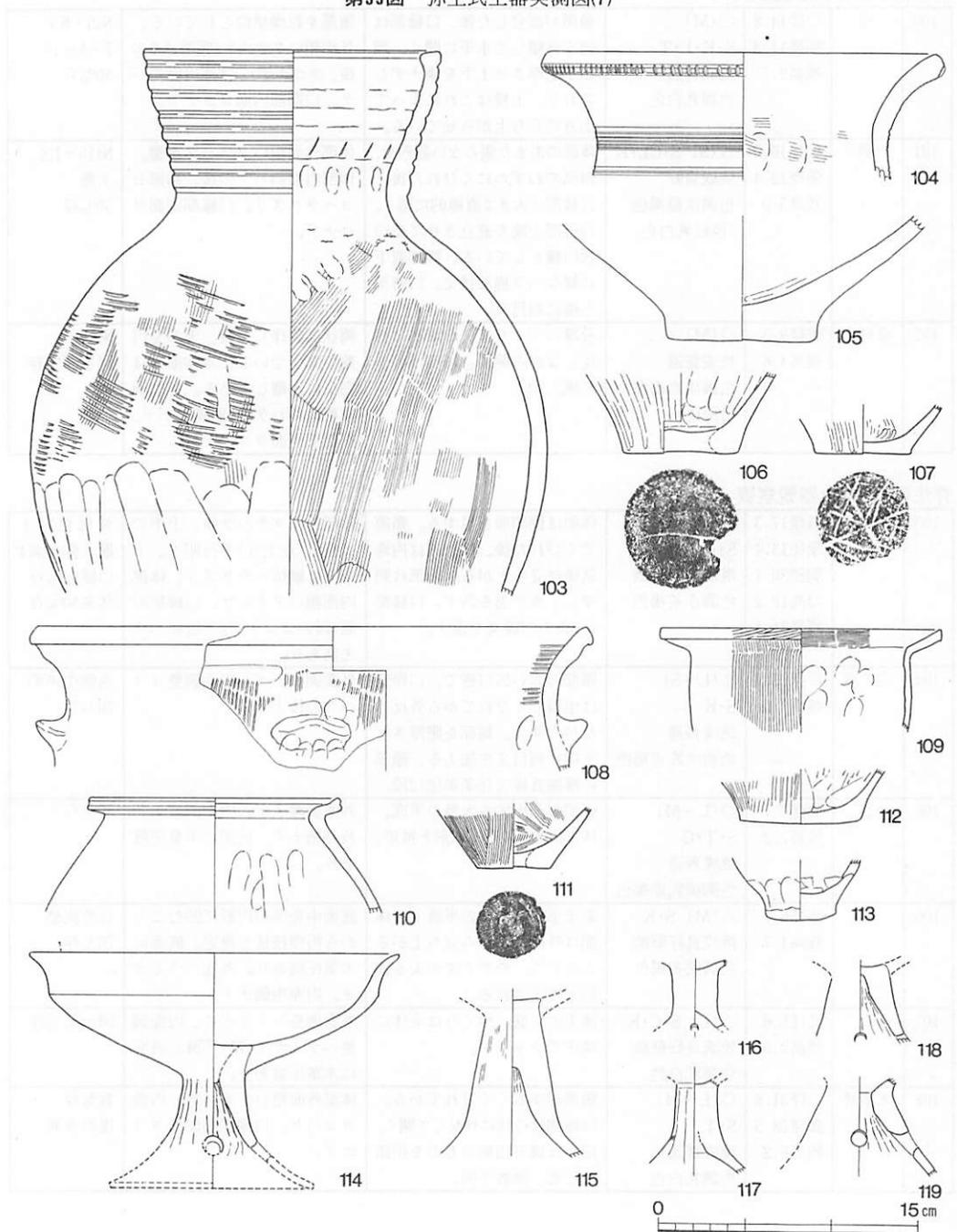
第52図 弥生式土器実測図(6)

弥生式土器観察表

89	手埴形土器	口径17.0 胴径17.6 残高10.0	△(M~S) C・S・K・T 焼成良好 色調淡赤褐色	体部は半球状を呈し、最大径を上位にもつ。頭部でわずかにくびれた後短い口縁部は逆S字状に屈曲しながら立ち上がる。蔽部は現存部から見て背丈が低い。紋飾は①頸部直下に刺突列点文。②蔽部前端接合部に補強帯様の棒状浮文。	蔽部は鉢口縁部の内側に接合している。外面ナデ調整。体部内面ヨコハケ調整。蔽部内面斜ハケの後、雑なナデ調整。蔽部端面は肥厚させていない。	No374 50%存
90	蓋	口径16.0 紐径 3.6 器高 5.5	○(L~M) S・C・U 焼成良好 色調赤褐色	勾配の緩い円錐形の蓋で、口唇部は上反する。紐は扁平で頂部が凹む。	外面調整ヘラナデ(一部ハケ)。内面調整ヘラナデ。	No116 30%存
91	高 坏	口径18.4 頸径 4.3 坏高 4.5	△(SS) S・C 焼成良好 色調淡赤褐色/ 淡灰色	坏部は直線的に大きく開き、口縁部を下方へ拡張している。この垂下口縁には3条の凹線文が巡り、竹管刺突を加える円形浮文を貼付(単位不明)。	坏部内外面共にヘラミガキ(縦位)。	No44 20%
92	高 坏	口径18.8 頸径 3.8 裾径13.5 坏高 5.5 脚高 9.4	○(L~M) C・S・K・N 焼成良好 色調淡赤褐色 ~淡灰色	口縁部は内湾気味に開き、端部は面とり風。底部は扁平で段部に稜をもつ。脚部はやや長い柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔を3個配置。	脚柱部はシボリ技法、裾部は粘土帯巻き上げ(逆位)成形。坏部との接合は坏底部の突起を嵌入する方式。外面と坏部内面ヘラミガキ(縦位)。裾部内面ナデ。口縁部両面ヨコナデ。	脚部No12 坏部No275+ No341 70%存
93	高 坏	口径17.2 頸径 3.4 坏高 4.8	◎(L~M) S・C・N・K 焼成良好 色調赤褐色	口縁部は外反して開く。底部は浅い丸底で段部に稜をもつ。脚部は短い柱部の下に外反して開く裾部が接続する。	脚柱部はシボリ技法。坏部との接合方式は不明だが突起嵌入式か。坏部外面ハケ調整の後ナデ。坏部内面ナデ調整。口縁部両面ヨコナデ。	No47+230 65%存
94	高 坏	口径17.4 残高 5.9	△(S) S・N 焼成良好 色調淡赤褐色	口縁部は内湾気味に立ち上がる。底部は92に比べて深さがある。段部には稜をもつ。	脚部接合部分で剝離している。外面調整縦位のヘラミガキ(精)。内面調整縦位のヘラミガキ(粗)。	No不明 図示部完存
95	高 坏	口径16.9 頸径 3.6 裾径 9.0 坏高 4.5 脚高 6.4	◎(M) C・S・T 焼成やや不良 色調淡褐色	坏部は浅い半球形碗状で、短い口縁部が屈曲して開く。脚部は柱部をもたずに直接外反しながら開くタイプ。脚部中に円孔を4個配置。	脚柱部はシボリ技法。坏部との接合方式は不明。器面は荒れているがナデ調整か。	脚部No348 坏部No323 脚部完存 坏部30%存
96	高 坏	頸径 3.1 残高 6.7	○(M) S・K・C 焼成良好 色調淡赤褐色	脚部は柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔を4個配置。	脚柱部はシボリ技法。坏部は脚柱部上端外側に接合。外面及び坏部内面ヘラミガキ。裾部内面ナデ調整。	No372 脚 図 の 100%、坏 20%
97	高 坏	頸径 3.6 残高 8.1	○(L~M) S・C・K・T・N 焼成普通 色調淡紅色	坏底部は浅い。脚部はやや長い柱部の下に外反して開く裾部が接続する。	脚部はシボリ技法。坏部を脚柱部上端外側に接合する方式で、底面には独楽状の栓が充填されている。外面調整ヘラナデ。	No384 脚部図示部 完存。坏部 15%存
98	高 坏	頸径 3.0 残高 7.2	◎(L~M) S・C・K 焼成良好 色調淡赤褐色	坏底部は扁平。脚部は中空で、細い柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部に円孔を4個配置。	脚部と坏部が連続して製作される所謂円板充填技法による。円板は剝離欠失。外面ヘラミガキ。脚柱部内面ヘラナデ。裾部内面ナデ。	No113 図示部完存



第53图 弥生式土器实测图(7)



第54 弥生式土器实测图(8)

弥生式土器観察表

99	高 坏	頸径 4.0 裾径16.0 脚高 8.2	△(M) S・T・K・C 焼成普通 色調淡乳褐色	上部が中実で分厚い脚柱部の下に薄手で大きく外反して開く裾部が接続する。	脚柱部はシボリ技法。坏部との接合方式は別体式と推定される。底面には独楽状の栓が充填されている。外面ハケ調整後ヘラナデ。裾内面ナデ。	覆土上A層 50%存
----	-----	----------------------------	-----------------------------------	-------------------------------------	---	---------------

弥生溝2出土土器観察表

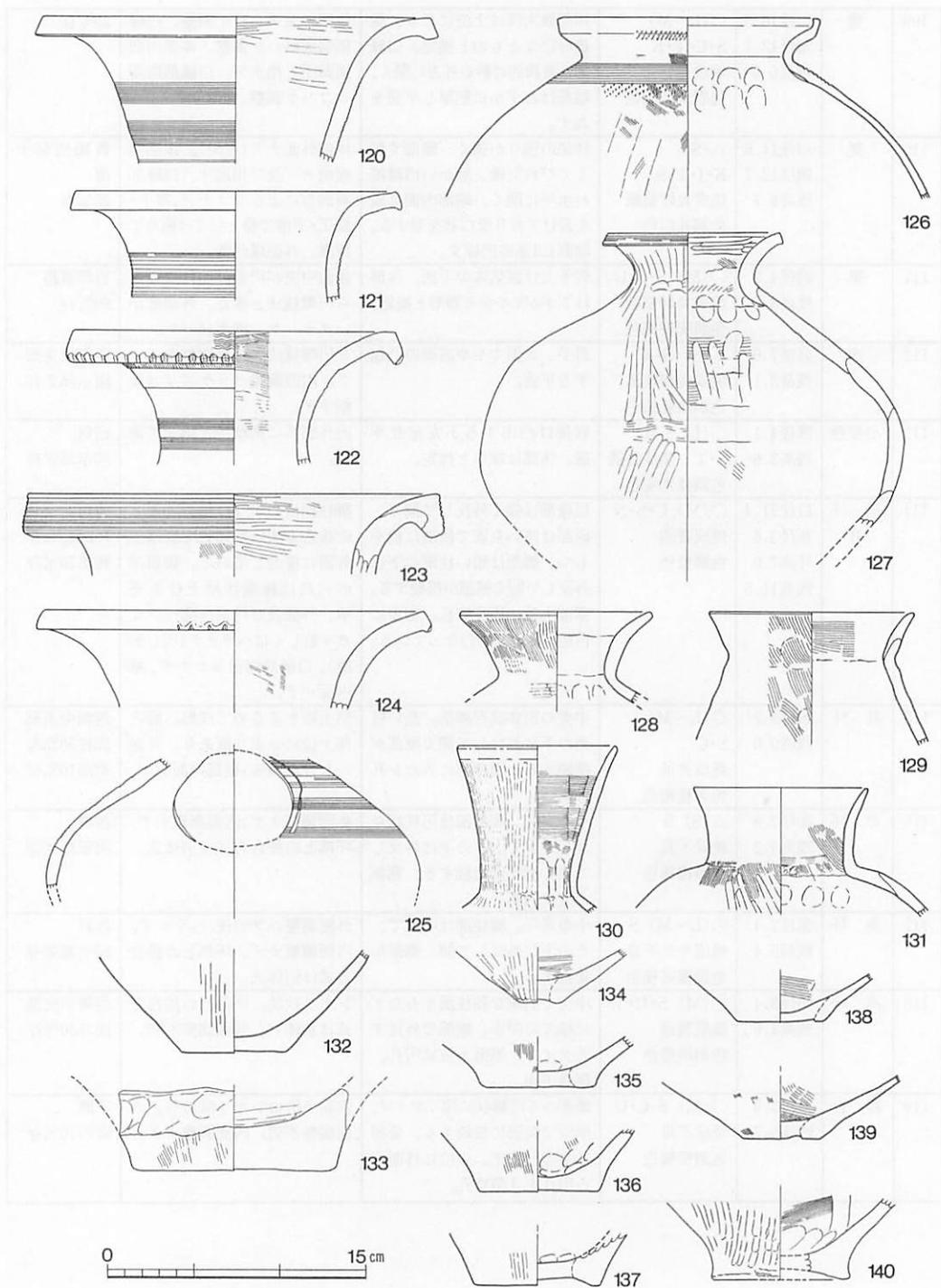
100	壺	口径14.8 頸径11.3 残高8.7	○(M) S・K・L・T 焼成普通 色調乳白色	頸部が直立した後、口縁部は強く外傾して水平に開く。端部を肥厚させ上下を横ナデしており、上縁はこれによって上方に立ち上がらせている。	頸部を乾燥単位としている。外面粗いタテハケ(頸部はその後、ヨコナデ)。体部内面斜ハケ。口頸部内面ヨコナデ。	№5+6+7+8+10 50%存
101	甕	口径16.2 頸径12.4 残高5.0	△(S) S・CL・K 焼成良好 色調淡橙褐色/ 淡紅乳白色	体部のあまり張らない器形で、頸部でわずかにくびれた後、口縁部は大きく直線的に開く。口唇部上端を直立させて受口状口縁としている。頸部直下に雑なヘラ描波状文。口唇部上端に刻目文。	体部外面粗いタテハケ調整。体部内面斜ハケの後、頸部ヨコヘラケズリ。口縁部両面ヨコナデ。	№15+I区 上層 50%存
102	甕脚台	底径9.3 残高4.6	◎(M) 焼成普通 色調淡赤褐色/ 暗灰色	分厚いつくりで、わずかに外反しながら開く。端部は面とり風。	筒状に製作した後、天井を円盤で塞いでいる。本体部分は完全に剝離している。外面調整粗い斜ハケ。内面調整ナデ。裾端部両面ヨコナデ。	№14 図示部完存

弥生溝3出土土器観察表

103	広口壺	口径17.3 頸径13.4 胴径30.1 口高10.2 残高31.1	○(M~S) S・K・C 焼成良好堅緻 色調赤茶褐色	体部は倒卵形を呈する。頸部でくびれた後、口縁部は内弯気味に立ち上がる。端部は肥厚し、水平面を為す。口縁部に9条の凹線文を巡す。	体部外面タテハケ後、上半では斜位(左上り)平行叩き。下半では縦位ヘラケズリ。体部内面粗いタテハケ。口縁部内面4段のヨコナデ。下位にヘラ先痕あり。	黄褐色粘土層+弥生溝4 口縁90%存 体部30%存
104	広口壺	口径23.4 残高7.3	△(L~S) S・K 焼成普通 色調淡乳赤褐色	頸部の太い広口壺で、口頸部は中程でくびれてから外反しながら開く。端部を肥厚させ下端に刻目文を加える。頸部に櫛描直線文(6条単位)2段。	外面調整ナデ。内面調整ヨコハケの後ナデ。	西側中央部 20%存
105	壺	底径8.7 残高7.2	◎(L~M) S・T・C 焼成普通 色調淡乳赤褐色	底部が凸出する大型の平底。体部は大きく張る球形と推定。	外面調整ナデ。内面調整ナデ及び指ナデ。底面に木葉圧痕あり。	50%存
106	壺	底径6.7 残高4.7	△(M) S・K 焼成良好堅緻 色調灰茶褐色	若干上げ底気味の平底で、体部は外反しながら立ち上がることから、やや下半の尖る器形と推定される。	底面中央部が円形に凹むことから円環技法と推定。底面に木葉圧痕あり。外面ヘラミガキ。内面指頭ナデ。	自然流路 70%存
107	壺	底径5.6 残高2.9	△(L) S・C・K 焼成良好堅緻 色調乳白色	薄手の平底。つくりは全体に端正でシャープ。	外面調整ヘラミガキ。内面調整ヘラミガキ(精・平滑)。底面に木葉圧痕あり。	図示部完存
108	大型鉢	口径31.8 頸径28.5 残高8.3	◎(L~M) S・T 焼成普通・ 色調乳白色	頸部がゆるくくびれてから、口縁部は弓状に外反して開く。把手は扁平山形のを指頭で圧着。個数不明。	体部外面粗いタテハケ。内面ヨコハケ。口縁部両面指ヨコナデ。	数%存 復原実測

弥生式土器観察表

109	壺	口径16.3 頸径12.7 残高6.0	○(L~M) S・C・T・K 焼成良好 色調淡乳褐色	体部最大径は上位にあり、倒鐘形になるものと推定。口縁部は直線的に斜め外方に開く。端部はわずかに肥厚し平面を為す。	体部外面タテハケ調整。口縁部端面斜ハケ調整。体部内面指頭圧と指ナデ。口縁部内面ヨコハケ調整。	20%存
110	壺	口径14.6 頸径12.7 残高6.7	△(S) K・I・T・S 焼成良好堅緻 色調乳白色	体部の張りが強く、頸部で鋭くくびれた後、短い口縁部が水平に開く。端部内面に段を設けており受口状を呈する。端面に1条の凹線文。	体部外面ナデ(平滑)。体部内面指ナデ及び指頭圧。口縁部両面布によるヨコナデ。厚手・端正・平滑で壺としては極めて特異。外面煤付着。	黄褐色粘土層 25%存
111	壺	底径4.2 残高3.5	○(M) S・C・U 焼成良好堅緻 色調灰茶褐色	若干上げ底気味の平底。体部は下半がやや尖る器形と推定。	底面中央が円形に凹凸ことから円環技法と推定。外面細かいタテハケ。内面斜ハケ。	自然流路 80%存
112	壺	底径7.0 残高3.1	△(S) S・K 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	薄手、大型でやや底面の凸起する平底。	非円環技法。外面調整タテハケ。内面調整ヘラケズリの後指ナデ。	西側中央部 図示部完存
113	小型壺	底径4.1 残高3.6	○(LL~M) S・T 焼成普通 色調淡乳褐色	底部は凸出する不安定な平底。体部は球形と推定。	内外面共に指頭圧と指ナデ調整。	西肩 図示部完存
114	高 坏 B	口径21.4 頸径3.6 坏高7.0 残高11.5	○(M) C・S・N 焼成普通 色調橙色	口縁部は強く外反して開く。底部は浅い丸底で段部に稜をもつ。脚部は短い柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔穿孔。器表に白色スリップを行なっている。	脚柱部はシボリ技法。坏部との接合方式は別体式で脚端部外面に接合している。脚頂部の穴には独楽状粘土栓を充填。外面及び坏部内面ヘラミガキ若しくはヘラナデ(但し剝離)。口縁部両面ヨコナデ、裾内面ナデ。	西肩 坏部40%存 脚部70%存
115	高 坏	頸径3.2 残高9.0	◎(L~M) S・C 焼成普通 色調橙褐色	中実の別体成形脚部。長い柱部の下に外反して開く裾部が接続する。現存部にスカシ孔は無い。	粘土板をまるめて成形。脚内面上位にシボリ痕あり。外面ハケメが残る。裾部内面ナデ。	西側中央部 脚柱50%存 裾部10%存
116	高 坏	頸径2.8 残高4.2	△(S) S 焼成不良 色調橙褐色	小型高坏。脚柱部は円柱状を呈し中実で、その下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔。	外面調整ナデ。内面調整ナデ。坏部との接合方式は別体式。	西肩 図示部完存
117	高 坏	頸径2.4 残高5.4	○(L~M) S 焼成やや不良 色調濃茶褐色	小型高坏。脚柱部は中実で、その下に外反して開く裾部が接続する。	外面調整ハケの後、ヘラナデ。内面調整ナデ。坏部との接合方式は別体式。	西肩 図示部完存
118	高 坏	頸径3.4 残高4.6	○(M) S・U・T 焼成普通 色調淡橙色	中空で明瞭な脚柱部をもたずに徐々に開き、裾部で外反するタイプ。裾部上位に円孔。個数不明。	シボリ技法。坏部との接合方式は別体式。外面調整不明。	西側中央部 図の80%存
119	器 台	頸径3.9 残高5.7	○(M) S・C・U 焼成不良 色調橙褐色	頸部から円錐状に開くタイプ。中空で受部に接続する。受部は小型と推定。中位に外面から円孔を3個穿孔。	内面上位にシボリ痕あり。外面調整不明。内面調整ナデ。	下層 図の70%存



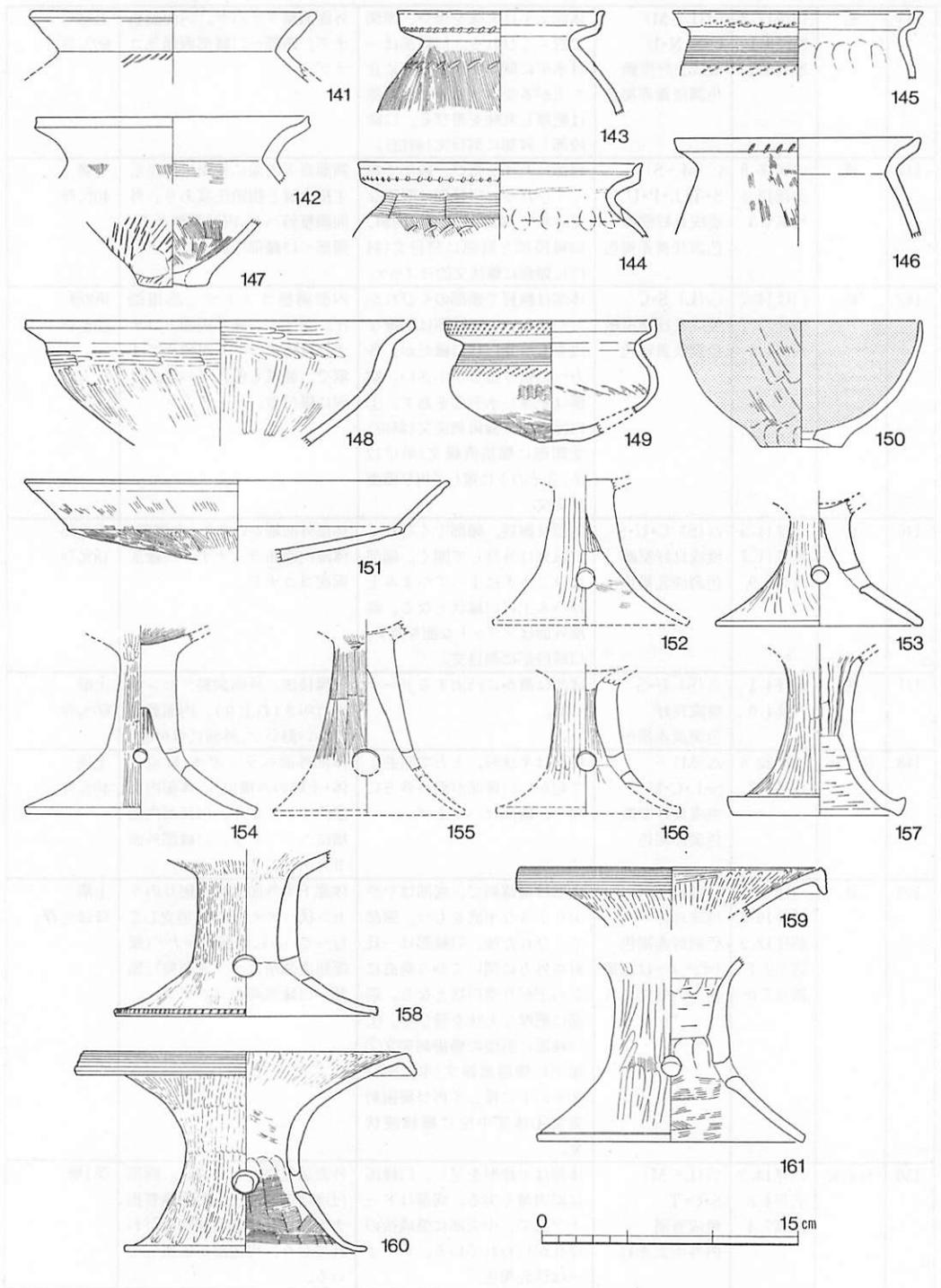
第55图 弥生式土器实测图(9)

弥生式土器観察表

120	広口壺	口径22.6 残高8.5	△(M) S・T・C 焼成不良 色調淡黄褐色	長い頸部は徐々に径を増し、口縁部は大きく外反して水平に開く。端部は下方に拡張し面を為す。頸部に櫛描直線文(単位12条)を3帝巡す。	外面調整ナデか。内面調整粗いヨコハケとナデ。	古流路十C区弥生第2層中央部図の25%存
121	広口壺	口径18.7 残高6.4	○(M～S) T・C・S・K 焼成良好 色調淡乳赤褐色	頸部は鼓状に中位でくびれ、口縁部は強く外反して開く。端部はわずかに拡張して面を為す。頸部に幅狭の原体(1.6cm)による複合櫛描直線文	内外面共布によるヨコナデ調整。	上層 30%存
122	広口壺	口径18.7 残高7.7	○(L～M) S・C・K・T 焼成普通 色調淡乳赤褐色	頸部は鼓状に中位で強くくびれ、口縁部は大きく外反して開く。端部は下方に拡張し面を為す垂下口縁。①口縁部端面に櫛描波状文十刻目文(下端)②上半に削り出しによる段を2段③下半に2帝の櫛描直線文(単位4条)	外面調整タテハケ後ナデ。内面調整ヨコハケ。	東層 25%存
123	広口壺	口径24.0 残高4.8	○(M) C・S・T・K 焼成良好堅緻 色調淡乳赤褐色	頸部は直立気味で口縁は上方で急激に外反して開く。端部は下方に拡張し垂下口縁とする。口縁部端面に凹線文(単位8条)	擬口縁を利用して口縁部を拡張。頸部外面斜ハケ調整。内面幅広原体によるヘラミガキ(横位)。	上層 20%存
124		口径22.0 残高5.8	◎(L～M) C・S・T・K 焼成普通 色調淡紅色	外反しながら大きく開く。端部はヨコナデによって下方へ微かに拡張。口縁部端面下端に刻目文。	外面調整ナデ。頸部内面斜ハケ調整。口縁部両面ヨコナデ。	東層 20%存
125	円窓壺	胴径21.8 残高7.5	○(L～M) S・U・T 焼成やや不良 色調淡乳赤褐色	体部は扁球形と推定され、中位が張り、上半は強く収束する。体部上位に大型の円窓を穿孔。体部上半に4帝の櫛描直線文(単位7条)。円窓の周縁にヘラ描沈線文。	外面調整斜ハケ後ナデ。内面調整ナデ。	上層 図の20%存 左右反転実測。
126	壺	口径15.4 頸径12.4 胴径28.3 残高10.5	○(L～M) S・C 焼成普通 色調橙褐色	体部は球形を呈し強く張る。口縁部は強くくびれてから一旦外反して開き、さらに端部が直立する受口状口縁。端部は水平面を為す。①口縁段部に櫛歯刺突文(斜位)②頸部に櫛描直線文(単位7条)③その下に接して櫛歯刺突文(斜位)。	頸部に乾燥単位。外面調整細かい斜ハケ後ナデ。内面調整ナデ、頸部に2段の指頭圧痕。口縁部両面ヨコナデ。	上層 60%存
127	壺	口径10.2 頸径7.1 胴径24.9 残高16.2	△(LL～L) C・K・A・P・S 焼成良好 色調橙褐色/ 暗茶褐色	体部は扁球形が中位で強く張る。頸部で細くくびれて口縁部は外反しながら開く。端部は面を為し櫛描直線文(単位4条)が巡されている。	内面に接合痕を残し乾燥単位が明瞭に判る。外面調整は接合部をヨコハケ調整した後、縦位のヘラミガキ(精)。内面調整ヨコハケ・ナデ・指頭押圧。	上層 図の70%存
128	広口壺	口径11.4 頸径7.0 残高5.2	△(SS) S・C・U 焼成良好堅緻 色調淡赤褐色	頸部で鋭くくびれた後、口縁部は緩く開き中位で外反度を増す。	体部外面横位ヘラミガキ(精)。口縁部外面タテハケ。口縁部内面ヘラナデ(2段に分けて施す)。頸部内面に指頭圧痕	上層 30%存

弥生式土器観察表

129	甕	口径12.0 頸径9.6 残高7.6	○(L~M) C・S・U 焼成普通 色調橙褐色	体部は撫刷で直線的に収束した後、頸部でくの字状にくびれて口縁部が直線的に斜め外方に開く。特異な器形。内外面に媒付着。	頸部に乾燥単位を示す接合痕。外面調整斜ハケ。体部内面横位のナデ。口縁部内面ヨコハケ調整。	上層 40%存。
130	長頸壺	口径9.5 頸径5.7 口高8.4	△(L) S・C・T 焼成良好 色調淡紅乳白色	頸部でくびれた後、長い口縁部は直線的にゆるやかに開くが、若干外反傾向がある。	外面調整縦位のヘラミガキ(精)。内面調整細かい痕状文的ヨコハケ。口唇部両面ヨコナデ。	上層 図の90%存
131	直口壺	口径10.2 頸径8.8 口高4.5 残高7.4	○(L~M) S・K 焼成良好堅緻 色調暗褐色	体部は肩部の張る球形胴と推定。口縁部は直立した後、上方で外反する。先端は尖る。	体部外面タテハケの後、一部幅広のヘラナデ。体部内面ナデ。頸部内面ヨコハケ。口縁部両面布によるヨコナデ。体部上方内面に指頭圧痕。	上層 30%存
132	壺	底径6.1 残高5.9	○(M) S・T・U 焼成不良 色調淡赤褐色	平底。体部は内弯気味に立ち上がることから倒卵形と推定。	体部外面粗いタテハケ調整(但し大部分磨滅)。体部内面ナデ。	上層 50%存
133	壺	底径12.0 残高4.8	○(M) S・K 焼成良好 色調淡赤褐色	分厚い大型の平底。底面は平直。側面上端は剝離面になっている。	底部を個別に製作し、側面上端に体部以上を接合。外面調整タテハケ。内面調整指ナデ。接合面に指ナデ痕	古流路 80%存
134	壺	底径2.6 残高3.1	△(M) C・S・K 焼成良好堅緻 色調淡乳橙色	体部下半の尖る器形で、底部は小さなドーナツ底。	円環技法と推定。外面調整幅広原体によるヘラミガキ。内面調整やや粗いヨコハケ。	上層 70%存
135	壺	底径6.9 残高2.9	○(L~M) S・K・T 焼成普通 色調淡乳赤褐色	わずかにドーナツ底の平底。体部には外反して接続する。	円環技法。外面調整細かいタテハケ。内面調整指頭ナデ。	60%存
136	壺	底径7.1 残高3.6	◎(L~M) S・K・T 焼成良好 色調淡乳褐色	安定の良い平底。体部には外反して接続する。	底面をナデており平滑端正。外面調整タテハケ後ナデ。内面調整指頭ナデと指頭押圧。	上層・ 図示部完存
137	壺	底径7.5 残高2.9	○(L~M) S・U 焼成普通 色調淡乳赤褐色	完全な上げ底で周縁のみ接地している。体部には外反して接続する。	円環技法。外面調整粗いタテハケ(但し大半磨滅)。内面調整指ナデ。	古流路 図示部完存
138	壺	底径5.0 残高2.9	◎(L~M) S・C・T・U 焼成普通 色調淡茶褐色	底部は高台状を呈し、周縁部と中央部との間にギャップがある。	円環技法。外面調整ナデか。内面調整ヨコハケ	東層 60%存
139	壺	底径4.4 残高3.7	○(M) S・U・C 焼成良好堅緻 色調淡褐色	底部はドーナツ底で、底面中央部には充填された粘土栓の形が窺われる。体部は大きく開く。	円環技法。外面調整細かい斜ハケ後ナデ。内面調整粗い斜ハケ。	第2層 60%存
140	壺	底径8.1 残高4.7	○(LL~S) C・S・K 焼成良好堅緻 色調淡褐色	底部は完全な上げ底で、外方へ張り出している。	外面調整粗いタテハケ(ヘラに類する)。内面調整細かい斜ハケと指ナデ。底面ヘラケズリ。	第2層 40%存
141	甕	口径16.9 頸径13.5 残高4.2	○(L~M) S・N・T・K・C 焼成良好 色調淡橙褐色	頸部で鋭くくの字に屈曲し、口縁部は直線的に開く。端部は丸く収める。頸部内面は鋭い稜を為す。	体部外面斜ハケ調整。体部内面及び口縁部両面布によるヨコナデ。	上層 15%存
142	甕	口径16.0 頸径12.3 残高4.0	○(L~M) S・C・U 焼成良好堅緻 色調淡灰褐色	頸部で鋭くくびれた後、口縁部は大きく外反して開くが、端部をヨコナデによって垂直に立ち上らせている。頸部内面は鋭い稜を為す。	体部外面細かいタテハケ調整。体部内面ヨコハケ調整。口縁部両面布によるヨコナデ。つくりは丁寧でシャープ。	上層 30%存



第56图 弥生式土器実測图(10)

弥生式土器観察表

143	甕	口径12.2 頸径9.1 残高6.2	◎(L~M) C・S・N・U 焼成良好堅緻 色調淡黄赤褐色	体部上半は丸味を帯び、頸部で鋭くくびれる。口縁部は一旦水平に開いてから垂直に立ち上がる受口状口縁で、端部は肥厚し丸味を帯びる。口縁段部と肩部に刻目文(斜位)。	外面調整タテハケ。内面調整ナデ。頸部~口縁部両面ヨコナデ。	上層 60%存
144	甕	口径16.8 頸径13.5 残高4.3	○(M~S) S・T・L・P・U 焼成良好堅緻 色調淡黄赤褐色	肩部は丸味を帯び、頸部で鋭くくびれる。口縁部は明瞭な受口状で、端部は肥厚し内斜。口縁段部と肩部に刻目文(斜位)。頸部に屢状文のヨコハケ。	頸部直下内面に乾燥単位を示す接合痕と指頭圧痕あり。外面調整斜ハケ。内面調整ナデ。頸部~口縁部内面ヨコナデ。	上層 40%存
145	甕	口径14.7 頸径12.7 残高4.0	○(L) S・C 焼成良好極堅緻 色調淡黄褐色	体部は撫肩で頸部のくびれかたが小さい。口縁部は明瞭な段をもつ受口状口縁だが、外方への張り出しが小さい。端部は肥厚し水平面を為す。①口縁段部に櫛歯刺突文(斜位)②頸部に櫛描直線文(単位12条)③その下に接して再び櫛歯刺突文	内面調整ヨコナデ一部指頭圧。頸部~口縁部両面ヨコナデ。全体につくりが極めて丁寧で、焼成も優れている。外面に煤付着。	第2層 20%存
146	甕	口径14.5 頸径11.7 残高5.9	△(S) C・U・S 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	体部は撫肩。頸部でくびれて口縁部は外反して開く。端部はヨコナデによってつまみ上げハネ上げ口縁状となる。端部外面はフラットな面を為す。口縁段部に刻目文。	体部外面細かいタテハケ調整。体部内面布ヨコナデ。口縁部両面ヨコナデ。	古流路 15%存
147	甕	底径4.1 残高4.0	△(S) U・S 焼成良好 色調淡赤褐色	底部は微かに凸出するドーナツ底。	円環技法。外面調整ラセン状平行叩き(右上り)。内面調整細かい斜ハケ。外面に煤付着。	上層 60%存
148	高 坏	口径22.8 残高7.3	△(M) S・L・C・U 焼成良好堅緻 色調赤褐色	坏部は半球形。上方で屈曲して短かい口縁部が斜め外方に開く。端部はハネ上げ。	体部外面ヘラミガキ(縦位主体・上端のみ横位)。体部内面縦位ヘラミガキ。口縁部内面横位ヘラミガキ。口縁部外面ヨコナデ。	上層 40%存
149	鉢	口径12.5 頸径10.5 胴径12.2 底頸2.7 器高7.0	○(M) S・C 焼成良好 色調鮮赤褐色 (ポディーは淡褐色。内外面にスリップ)	体部は扁球形で、底部はやや尖り小さな平底をもつ。頸部でくびれた後、口縁部は一旦斜め外方に開いてから垂直に立ち上がり受口状となる。端部は肥厚し丸味を帯びる。①口縁部に斜位の櫛歯刺突文②頸部に櫛描直線文(単位8条)③その下に接して再び櫛歯刺突文④体部中位に櫛描波状文。	体部下半外面逆時計廻りのラセン状ハケメ(器体を倒立して行っている)。体部内面ナデ(腰部屈曲箇所はヘラ先調整)。頸部~口縁部両面ヨコナデ。	上層 ほぼ完存
150	有孔鉢	口径14.2 底径4.8 器高7.4	◎(L~M) S・C・T 焼成普通 内外両面赤彩	体部は半球形を呈し、口縁部は器肉薄く尖る。底部はドーナツ底で、中央部に焼成後の穿孔が行われている。ポディーは淡乳褐色。	外面調整斜位のケズリ。底部付近は指頭押圧。内面調整指ナデ。穿孔は底面側から行われており、周辺部が破損している。	第1層

弥生式土器観察表

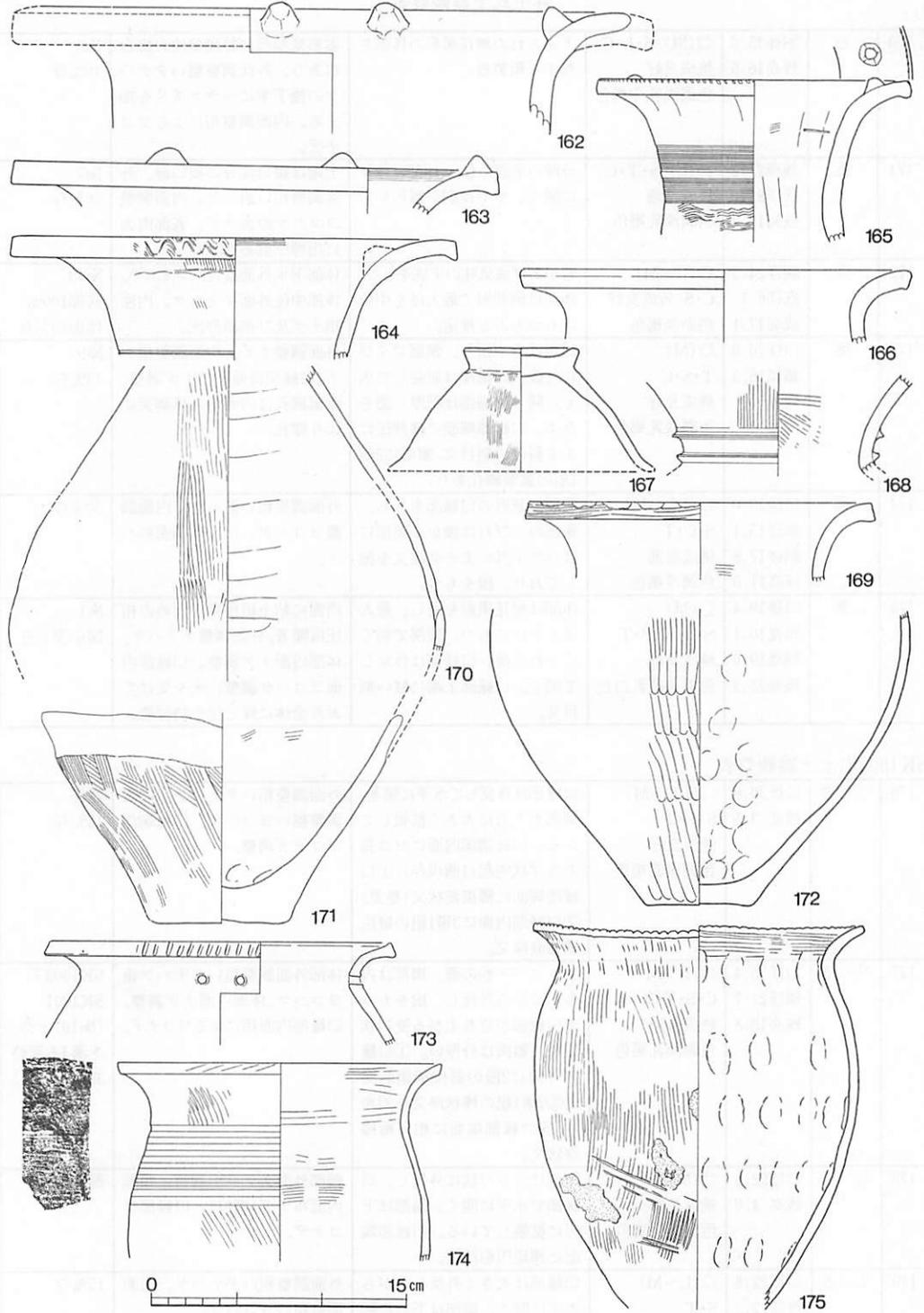
151	高 坏	口径25.1 残高4.7	△(M) S・N 焼成良好堅緻 色調明赤褐色/ 乳白色	扁平大型の高坏。坏底部は浅く、口縁部は直線的に斜め外方に開く。段部はヨコナデによって稜を為す。端面は平坦。	坏底部と口縁部は時間をおいてから接合している。坏底部外面ヘラミガキ(粗)。口縁部外面斜ハケ後ヨコナデ。坏底部内面ヘラナデ。口唇部両面ヨコナデ。	上層 45%存
152	高 坏	頸径3.5 残高7.8	◎(M) S・U 焼成普通 色調暗橙色	上部の中実な脚柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔(外面から穿孔)を3個配置。	脚柱部シボリ技法。坏部との接合は別体式。外面調整幅広原体によるヘラミガキ。裾部内面細かいヨコハケ	図の80%存
153	高 坏	頸径3.5 裾径12.2 脚高6.1	△(M) S・C・K 焼成良好堅緻 色調赤褐色	中空の短い脚柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔(外面から穿孔)を3個配置。	脚部を個別製作。底面が剝離面であることから坏部を接合する際、粘土を貼っている。外面調整幅広のヘラミガキ。脚柱部内面ナデ。	空洞部 図の70%存
154	高 坏	頸径3.3 裾径13.6 脚高9.5	△(M) S・K・C 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	丈の高い脚部。上半が中実で細く長い脚柱部の下に大きく外反して開く裾部が接続する。裾部上位に端正な円孔(外面から穿孔)を3個配置。	脚天井部はシボリ成形。外面調整縦位ヘラミガキ(精)。裾部内面ヘラミガキ。裾部内面ヨコナデ。穿孔は竹管刺突の可能性大。厚手だが、つくりは丁寧で優美。	第2層 図示部完存
155	高 坏	頸径3.6 残高7.5	△(M) C・S・U・B 焼成良好 色調淡乳褐色	裾広がり長い脚柱部の下に外反して開く裾部が接続する。天井は部厚い。裾部上位に大きめの円孔(外面から穿孔)を3個配置。	脚柱部シボリ成形。坏部との接合は別体式。外面斜ハケ調整後、上位のみヘラミガキ。	上層 図の90%存
156	高 坏	頸径3.7 残高5.9	○(M) S・C・U・T 焼成普通 色調淡乳褐色	中空の脚柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾部上位に円孔(外面から穿孔)を3個配置。	脚柱部はシボリ成形。連続成形技法で坏部まで製作した後、底部に独楽状の栓を充填。外面調整ヘラミガキ(縦位)。裾部内面ヘラオサエ。	第2層 図の70%存
157	高 坏	頸径4.1 裾径9.8 脚高8.8	◎(M) S・K 焼成良好 色調淡灰褐色	鼓状に中位がくびれて上下が開く中空の脚部。裾端部は上下に拡張して面を為す。透孔は無い。	連続成形技法の高坏。底部の円板を欠失。脚柱部シボリ成形。外面調整ヘラミガキ(粗)。裾端部ヨコナデ。裾部内面ヘラケズリ(横位)。	図の70%存
158	器 台	頸径6.0 裾径15.5 脚高8.1	○(M) S・G・N・T 焼成良好 色調褐色	ズン胴な円柱部の下に大きく外反して開く裾部が接続する。受部も外反して開くものと推定。裾部上位に整美な円孔(シャープな刀子穿孔)を3個配置。裾端面中央に沈線を巡し上端に刻目を加える。	外面調整縦位ヘラミガキ(精)。受部内面ヘラミガキ(粗)。柱～裾部内面ナデ。	上層 図の90%存
159	器 台	口径18.2 残高2.9	△(M) 焼成良好堅緻 色調淡紅色	外反しながら大きく開く受部。垂下口縁外面に擬凹線文(7条)を施す。	内外面とも縦位ヘラミガキ。	上層 図の70%存
160	器 台	口径19.1 頸径6.6 裾径14.3 器高11.7	△(M) S・U 焼成良好堅緻 色調淡紅色	受部径が裾部径を大きく上まわる器台。中位で強くくびれる。脚部は円錐形で端部で強く外反して水平に開く。受部は大きく外反して開き、端部は斜め下方に拡張。垂下口縁外面に擬凹線文(5条)を施す。脚部上位に円孔を3個配置。	頸部を乾燥単位とし、内面に指頭瓦痕を残す。外面ハケ調整後縦位ヘラミガキを3段に行う。脚部内面塵状的ヨコハケ。頸部内面ハケ調整の後ヘラナデ。受部内面ハケ調整の後ヘラミガキ。	上層 70%存

弥生式土器観察表

161	器台	柱径6.5 裾径15.5 脚高9.9	○(L~M) S・K・N・C 焼成良好堅緻 色調紫赤色	円柱部の下に外反して開く裾部が接続する。裾端部は面を為す。裾部上位に円孔を穿孔。ボディは乳白色で表面に赤色スリップ。	裾部と柱部、柱部と受部の接合部分を乾燥単位としており内面に指頭圧痕が残る。外面調整細かいタテハケの後裾広のヘラミガキ。裾部内面細かいヨコハケ。柱部内面ヨコハラケズリ。受部内面ナデ	60%存
-----	----	--------------------------	--------------------------------------	--	---	------

SK1001出土土器観察表

162	広口壺	口径37.6 頸径26.0 残高7.2	◎(M) S 焼成普通 色調淡乳褐色	直立する頸部から急激に外反して口縁部は水平に開く。口縁部内面に2個1組のコブ状突起(1組現存)。	現存部先端に剝離痕があり擬口縁とみられる。拡張口縁を接合と推定。内外面ナデ調整。口縁部内面ヨコハケ調整。	13%存
163	広口壺	口径28.4 残高2.6	◎(L~M) S・T・F・K 焼成良好 色調淡黄赤褐色	口縁部は外反して水平に開く。端部は面を為し、わずかに拡張。口縁部内面に2個1組のコブ状突起。	口縁部下部はヨコナデによる拡張。外面ヨコナデ調整。内面粗いヨコハケ調整。	C下層炭層 25%存
164	広口壺	口径26.1 頸径13.5 残高6.9	◎(L~M) S・T・C 焼成良好 色調淡赤褐色	長い頸部は徐々に径を増し、上方で大きく外反して水平に開く。口縁部は面を為し、わずかに下方に拡張。①口縁部端面櫛描波状文②頸部櫛描直線文。口縁部内面(外面から見えない低い位置)にコブ状突起(1個現存)。	口縁部下部はヨコナデによる拡張。外面調整タテハケ後指ナデ。口縁部内面粗いヨコハケ調整。頸部内面ナデ調整。	C下層炭層 +SK1003 30%存
165	広口壺	口径18.0 頸径10.3 残高9.5	◎(L~M) S・T・L 焼成良好 色調淡黄赤褐色 /暗灰色	頸部は長く鼓状を呈し、口縁部は外反して開く。端部は面を為し、わずかに下方に拡張。口縁部内面にコブ状突起(1個現存)。①口縁部上側に斜位の刻目文②頸部に上から櫛描直線文2帯と波状文(単位15条)	内外面とも板によるヨコナデ調整(屈曲部にも止めた痕跡があるのでRのついた工具を使用と推定)。口縁部両面ヨコナデ調整。口縁部下部はヨコナデによる拡張。コブ状突起は対向1対か直交2対と推定。	C下層炭層 40%存
166	広口壺	口径23.0 頸径17.5 残高4.3	◎(L~M) S・T・K・L 焼成良好 色調淡乳赤褐色	頸部は太く、短い口縁部がまきこむように外反して開く。口縁部部に稜をもつ。	口縁部部の稜はヨコナデによって形成。内外面ともナデ調整。口縁部両面ヨコナデ。	No5 15%存
167	甕蓋	鈕径6.8 裾径17.0 器高7.6	◎(L~M) S・T・C・U 焼成良好 色調淡乳灰褐色	斜め外方に開く高台状のつまみをもつ。体部は内弯気味のふくらみをもって開き、裾部で短く水平に開く。	体部外面細かいタテハケ調整。つまみ部ヨコナデ調整。内面ナデ調整。	C下層炭層 70%存
168	広口壺	頸径11.1 残高5.7	○(M) S・T・C 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	頸部で屈曲して外反しながら開く。頸部に2条の断面三角形突帯を巡す。	外面調整タテハケ。内面調整斜〜横ハケ。	No13
169	広口壺	口径20.2 頸径14.4 残高4.5	◎(L~M) S・T・K 焼成良好 色調淡乳褐色	頸部は太く、短い口縁部が外反しながら開く。口縁部は面を為す。口縁部端面に櫛描直線文を施し、上側に等間隔の軽い指押圧を加える。	外面調整ナデ。内面調整ヨコハケ後ナデ。口縁部両面ヨコナデ。	C下層 20%存



第57图 弥生式土器実測图(11)

弥生式土器観察表

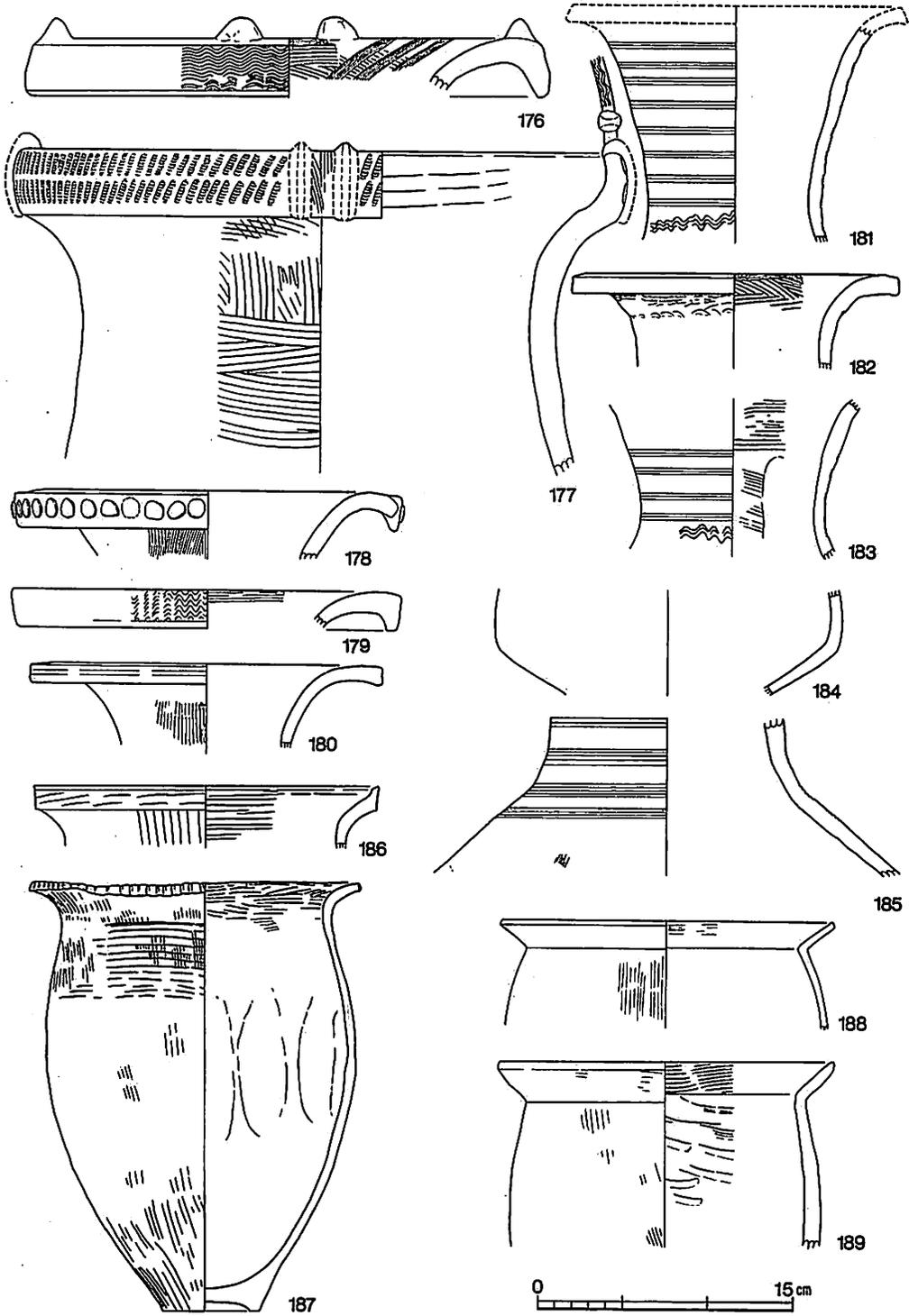
170	壺	胴径25.6 残高16.5	◎(M) S・L・C 焼成良好 色調淡乳赤褐色	下ぶくれの無花果形の体部を有する粗製壺。	器形変換部に乾燥単位の接合痕あり。外面調整粗いタテハケの後下半にヘラケズリを加える。内面調整布によるヨコナデ。	No5 40%存
171	壺	残径21.2 底径8.4 残高12.2	◎(L) S・T・C 焼成普通 色調淡乳褐色	分厚い平底をもち、体部は徐々に開く。やや長胴の器形か。	上端は接合部分の擬口縁。外面調整粗い斜ハケ。内面調整ヨコハケの後ナデ。底部内面に指押圧痕あり。	No7 50%存
172	壺	胴径24.5 底径6.1 残高17.1	◎(L~M) C・S 焼成良好 色調淡褐色	若干あげ底気味の平底をもつ。体部は倒卵形で最大径を中位にもつものと推定。	体部下外面縦位ヘラミガキ。体部中位外面タテハケ。内面指ナデ及び指頭押圧。	No13 底部100% 体部40%存
173	甕	口径20.0 頸径16.3 残高6.0	◎(M) T・S・C 焼成良好 色調淡乳褐色	肩部はやや張り、頸部でくびれた後、口縁部は屈曲して水平に開く。端部は肥厚し面を為す。口縁部端面に棒押圧による斜位の刻目文。頸部に2個1組の蓋緊縛孔あり。	外面調整ナデ。内面調整指ナデ。口縁部両面ヨコナデ調整。蓋緊縛孔は内面から棒刺突により穿孔。	No9 13%存
174	甕	口径19.0 頸径15.1 胴径17.8 残高11.5	◎(LL~M) S・C・T 焼成普通 色調淡褐色	所謂如意形の口縁部をもち、頸部のくびれは緩か。頸部にはハケ工具による直線文を施しており、段をもつ。	外面調整粗い斜ハケ。内面調整ヨコハケ。口縁部端面斜ハケ。	30%存
175	甕	口径19.4 頸径16.1 胴径19.0 残高22.3	○(M) S・L・K・P・T 焼成良好 色調淡紅乳白色	体部は無花果形を呈し、最大径を上位にもつ。頸部で弱くくびれた後、口縁部は外反して開く。口縁部上端に軽い刻目文。	内面に粘土紐接合のための指圧痕顕著。外面調整タテハケ。体部内面ナデ調整。口縁部内面ヨコハケ調整。火を受けており全体に煤と炭化物付着。	No1 図示部完存

SK1003出土土器観察表

176	広口壺	口径30.0 残高 3.5	○(LL~M) S・F・T 焼成良好 色調淡乳褐色	口縁部は外反して水平に開き、端部を下方に大きく拡張している。口縁部内面にヨコ長のコブ状突起(1個現存)。①口縁部端面に櫛描波状文(整美)②口縁部内面に3帯1組の縦位櫛描直線文。	外面調整粗いタテハケ。内面調整粗いヨコハケ。口縁部ヨコナデ調整。	西部 13%存
177	広口壺	口径35.4 頸径27.7 残高18.8	◎(L~M) C・S・T・K 焼成普通 色調淡乳褐色	キャリバー形の壺。頸部は内弯してから外反し、段をもって口縁部が立ち上がる受口状口縁。器肉は分厚い。①口縁部外面に2段の斜位櫛歯刺突文②2個1組の棒状浮文を対角4組③口縁部端面に粗い櫛描波状文。	体部外面調整粗いタテハケ後ヨコハケ。体部内面ナデ調整。口縁部内面指によるヨコナデ。	SK1003+ SK1001 (No10)+弥生溝3古流路 30%存
178	広口壺	口径22.6 残高 4.0	◎(M) S・T・C 焼成良好 色調淡乳褐色	頸部はラッパ状に外反し、口縁部で水平に開く。端部は下方に拡張している。口縁部端面に連続円形浮文。	頸部外面タテハケ調整。頸部内面布ナデ(横位)。口縁部ヨコナデ。	最上層
179	広口壺	口径22.8 残高 2.3	◎(L~M) S・T 焼成良好 色調淡乳褐色	口縁部は大きく外反しながら水平に開く。端部は下方に拡張している。口縁部端面櫛描波状文(鋭角的で整美)。口縁部内面のものは乱れる。	外面調整粗いタテハケ。内面調整粗いヨコハケ。	15%存

弥生式土器観察表

180	広口壺	口径20.5 頸径10.0 残高 4.8	◎(M) S・T 焼成普通 色調淡乳褐色	頸部はラッパ状に外反し、口縁部で水平に開く。端部は肥厚する。口縁部端面はヨコナデによって凹む。	外面調整タテハケ。内面調整ヨコナデ。	
181	長頸壺	口径19.3 頸径10.2 残高13.9	○(L~M) S・F・T 焼成良好 色調淡橙色	長い頸部は一旦くびれてから外反しながら径を増し、口縁部で大きく開く。頸部に8帯の櫛描波状文(単位3条)を間隔をあけて巡し、最下に波状文(乱れる)を施す。	体部外面ナデ調整。体部内面ヨコハケ調整(但し磨滅)。	SK1003+ SK1001 20%存
182	広口壺	口径19.1 頸径11.3 残高 5.5	◎(M) T・S・C 焼成良好 色調乳白色	頸部は直立し、口縁部は強く外反して水平に開く。外面は折れるように屈曲している。端部は面を為す。頸部上位に爪形文を連続させ段を為す。	屈曲部外面に横走るシワが認められることから非粘土巻上技法によって屈曲させたと推定。頸部外面指ナデ。頸部内面ナデ。口縁部外面粗いタテハケ。口縁部内面横~斜ハケ。	上層 40%存
183	長頸壺	頸径10.8 残高 9.3	◎(LL~M) S・T・G 焼成良好 色調淡乳褐色	頸部は鼓状を呈し、上方で外反して開く。間隔をあけて4帯の櫛描直線文(単位3条)。最下に波状文。	外面調整ナデ。内面調整ヨコハケと指ナデ。	25%存
184	壺	胴径20.4 残高 6.0	◎(L~M) S・L・P・K 焼成普通 色調淡乳褐色	胴下半部は大きく開き、中位で屈曲して立ち上がる。	外面調整ナデ。内面調整ナデか(剝落)。	25%存
185	壺	頸径13.8 浅径27.5 残高 9.2	◎(L~M) S・C・T 焼成良好 色調淡褐色	体部から緩かに直立する長い頸部に移行する。頸部~肩部にかけて4帯の櫛描直線文(単位5条)を残す。	外面調整細かい斜ハケの後ナデ(平滑)。内面調整ナデ。	20%存
186	壺	口径21.0 頸径16.4 残高 3.6	○(M) S 焼成不良 色調濃茶褐色	頸部から外反した後、口縁部は直立し受口状を呈する。端面は内斜する。	頸部外面タテハケ調整。口縁部外面断続的ヨコハケ調整。内面ヨコハケ調整。原体は粗く断面凸レンズ状。	最上層 25%存
187	壺	口径19.1 頸径15.7 胴径18.0 底径 5.7 器高24.9	◎(M) S・L・K・E・T 焼成普通 色調淡燻赤褐色	底部は上げ底。体部は張りの少ない倒錐形で最大径を中位にもち、頸部はわずかにくびれる。口縁部は外反して大きく開く。口縁部端面に刻目文。火を受けており頸部以上煤付着。	外面調整タテハケの後、頸部のみヨコハケを加える。内面調整指ナデ。口縁部内面ヨコハケ。	No10~12+ SK1001下層 炭屑 完形品
188	壺	口径19.4 頸径16.5 残高 6.3	◎(M) T・S・F・C・B 焼成良好堅緻 色調淡乳赤褐色	頸部でくの字状に強くくびれて直線的に開く。内面には鋭い稜をもつ。体部の張りは弱い。薄手で極めてシャープなつくり。端部は面を為す。	体部外面タテハケ調整。体部内面ナデ調整。口縁部内面ヨコハケ後、両面ナデ調整。	15%存
189	壺	口径19.6 頸径16.4 胴径18.3 残高10.9	◎(L) S・T・C・K 焼成普通 色調淡乳赤褐色	頸部でわずかにくびれた後、口縁部はやや内弯気味に開く。端部は尖る。体部の張りは弱い。分厚いつくり。	体部外面斜ハケ調整(磨滅)。体部内面ヘラ状工具による強いナデ。口縁部外面ヨコハケ後ヨコナデ。口縁部内面ヨコハケ調整。	上層 30%存



第58图 弥生式土器実测图(12)

弥生式土器観察表

190	甕	口径18.4 頸径14.3 胴径16.8 残高12.1	△(S) S・L・K・T 焼成良好 色調燻赤褐色	推定4単位の山形口縁。頸部でく の字状にくびれた後、口縁部は一旦外反気味に開いてから端部が内屈する。体部の張りは弱い。口縁部端面に刻目文。外面に炭化物付着。	外面調整浅い斜ハケ。内面調整浅い斜ハケ後ナデ。調整は全体に丁寧。	
191	甕	口径20.0 頸径17.0 胴径18.4 残高11.2	◎(M) S・T・C 焼成普通 色調淡黄赤褐色	体部の張りは弱く、頸部のくびれ方も緩やか。口縁部は巻きこむように外反して短く開く所謂如意形口縁。	体部外面粗い斜ハケ調整。体部内面指ナデ調整。口縁部内面ヨコハケ調整。口縁部端面にも横～斜ハケを加える。	20%存

SK1005出土土器観察表

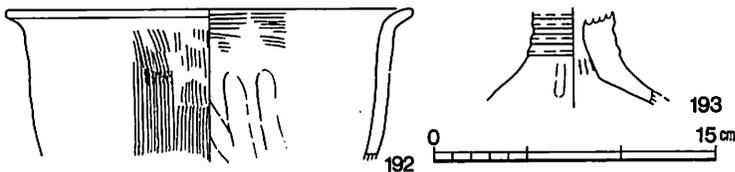
192	甕	口径21.5 頸径18.6 残高 7.9	◎(L) S・C・T・U 焼成良好 色調淡褐色	体部は倒錐形で最大径を頸部にもつ。短い口縁部は屈曲して開く。	外面調整タテハケ。体部内面指ナデ調整。口縁部内面ヨコハケ調整。	10%存
193	台付鉢 脚部	柱径 4.4 残高 4.8	◎(M) C・S・T	中空の脚柱部の下に大きく開く裾部が接続する。脚柱部に4条の断面半円形凸帯を巡す。	脚柱部はシボリ成形、外面調整幅広のヘラナデ。内面調整ナデ(平滑)	30%存

C区 弥生第1層出土土器観察表

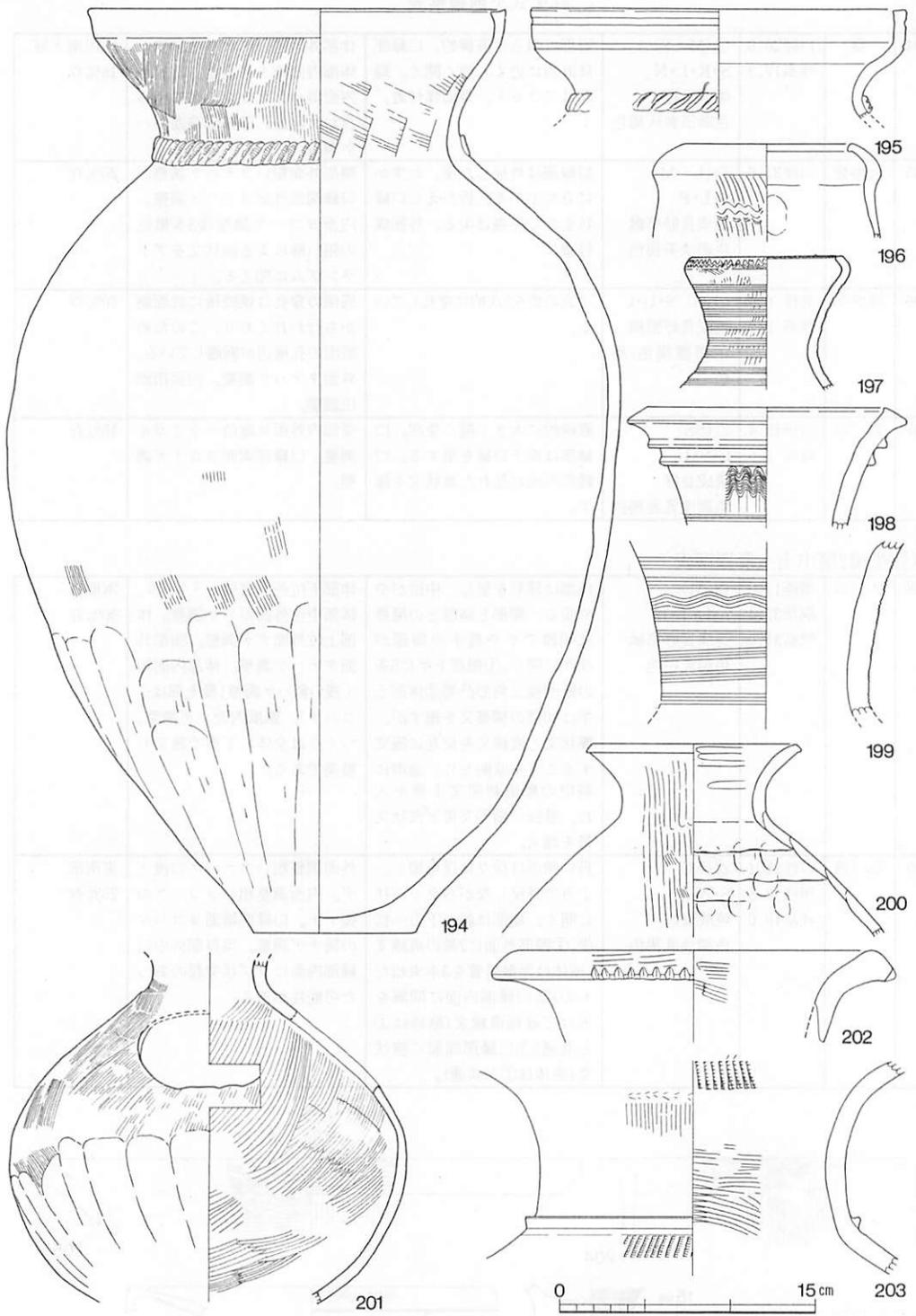
194	広口壺	口径24.6 頸径18.5 胴径35.7 底径 9.7 口高 9.0 体高44.9 器高53.9	○(M) S・K・C・T 焼成良好堅緻 色調淡紅乳白色	底部は安定の良い平底。体部は倒卵形。頸部は外反して小さく開いた後、端部が直立する。端部は肥厚し、水平面を為す。頸部に粘土帯を巡しハケ工具による斜位の刻目文を施す。	体部は3回の乾燥単位において成形。口縁部は薄手で丁寧なつくり。体部下位外面縦位ヘラケズリ。体部中位外面タテハケ。体部上位外面ナデ。頸部外面タテハケ。体部内面ナデ。頸部内面縞状文的ヨコハケ。口縁部両面ヨコナデ。	70%存
195	広口壺	口径22.1 頸径16.8 残高 6.5	○(M～S) K・S・T 焼成良好 色調乳白色	頸部が外反して開いた後、口縁部は段をもって直立する。端部は水平面を為す。①口縁部に2条の凹線文②頸部にヘラによる刻凸帯。	内外面とも布を用いたヨコナデ調整。	25%存
196	異形土器	口径 9.8 頸径12.6 残高 5.5	◎(M) S・T・K 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	煤付着状況より上下を推定。煮沸用土器。体部は内傾し、口縁部は一旦張り出して内湾する所謂袋状口縁。頸部直下に櫛波状文。	体部外面粗いハケ調整。体部内面ナデと指頭圧。口縁部両面ヨコナデ調整。	20%存

弥生式土器観察表

197	細頸壺	口径 8.9 頸径 6.5 口高 5.5 残高 7.8	△(M) S・K・C 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	体部上半は徐々にすぼまる器形を呈す。頸部はわずかに外反しながら立ち上がり、端部で急激に内折する。端部は水平面を為す。①頸部～体部に8帯の櫛描直線文(単位3条)を残す。②口縁端部外面に波状文③口縁部端面に波状文(ヘラ描?)	外面調整タテハケ。	地山砂層部 80%存
198	広口壺	口径14.0 頸径 9.5 残高 7.2	◎(L～M) S・T・U・N 焼成良好 色調淡乳赤褐色	頸部は緩かに外反しながら開く。端部は肥厚し内外の稜が尖る。端面はフラット。①口縁部外面に2条の断面三角形凸帯②頸部に上から櫛描波状文(端正)と直線文。	内外面調整ナデ。口縁部両面ヨコナデ調整。口縁部外側の稜をヨコナデで尖せることによって凸帯に見せかけている。	河川上層 20%存
199	広口壺	頸径13.2 残高10.1	◎(L) S・K・T・G 焼成良好 色調淡褐色	長頸の広口壺で、頸部と体部の境界は明瞭でない。頸部は徐々に上方で外反の度を増す。頸部に8帯の櫛描文帯(内1帯は波状文、他は直線文)。	内外面調整ナデ。器肉は分厚い。	北西部 40%存
200	壺	口径11.9 頸径 8.4 残径22.2 口高 4.0 残高11.2	◎(LL～L) S・G・T・C・K 焼成良好 色調乳褐色	体部は上半が徐々にすぼまる器形を呈することから全体は算盤玉形と推定。頸部で緩くくびれてから口縁部は大きく外反しながら開く。端面はフラット。口径は器径に比して小。	内面に粘土紐接合痕を明瞭に残す。外面調整タテハケ後縦位ヘラミガキ。内面調整ナデ(指頭圧痕を残す)。口縁部内面横位ヘラミガキ。ポディーは灰褐色で表面にスリップがけ。	70%存
201	円窓付壺	頸径 6.6 胴径23.3 残高20.0	○(M) K・S・C 焼成良好堅緻 色調暗赤褐色	胴の張りの強い球形胴で、最大径を中位にもつ。頸部は細くくびれる。胴部上半にタテ6.5cm×ヨコ8.0cmの円窓を穿孔(時計廻り刀子穿孔後指ナデ調整)。	外面調整斜ハケの後、胴部下半は縦位ヘラケズリ。内面調整粗い原体による斜～横ハケ。頸部以上ヨコナデ調整。	焼土周辺 40%存
202	広口壺	口径20.8 残高 5.3	○(L) S・K・P 焼成良好堅緻 色調淡黄赤褐色	頸部が徐々に開いた後、口縁部で外反して大きく開く。端部はわずかに外側に拡張。端部下端に鋭く端正な刻目文。	口縁部接合面のセクションは外下り。外面調整ナデ(平滑)。内面調整ハケ後ヘラミガキ。口縁部端面ヨコハケ調整。	北西部 20%存
203	広口壺	頸径18.0 残高12.3	◎(M) T・S・C 焼成良好堅緻 色調淡乳褐色	大型の広口壺。長い頸部は鼓状を呈し、上方で外反して大きく開く。①頸部と体部の境界に断面三角形凸帯を巡し、その下に接して断続櫛齒文②口縁屈曲部にヘラ先による横走稜杉文。③口縁部内面にも断続櫛齒文。	外面調整粗いタテハケ後ナデ。内面調整ヨコハケ後、上半はナデ。断続櫛齒文は窟状文と異り明確に切れる施文法。	30%存



第60図 弥生式土器実測図(14)



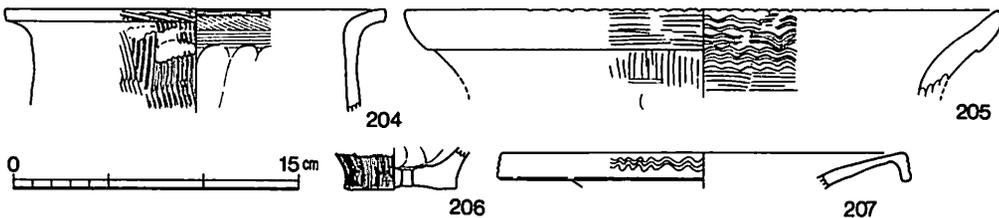
第61图 弥生式土器实测图(15)

弥生式土器観察表

204	甕	口径20.0 残高17.3	○(M~S) S・K・L・N 焼成良好 色調淡黄灰褐色	肩部は張らず直線的。口縁部は直角に近く、短く開く。端面はフラット。外面煤付着。	体部外面粗いタテハケ調整。体部内面指ナデ調整。口縁部内面斜ハケとヨコハケの組み合わせ調整。口縁部端面斜ハケ調整。	河川南上層 15%存
205	大型甕	口径31.6	◎(L~M) S・L・P 焼成良好堅緻 色調淡茶褐色	口縁部は外反した後、わずかに立ち上がる。折かえし口縁状をなし先端は尖る。外面煤付着。	頸部外面粗いタテハケ調整。口縁部外面ヨコハケ調整。内面ヨコハケ調整後3本単位の粗い櫛による波状文をアトランダムに加える。	20%存
206	甕底部	底径 6.0 残高 2.2	○(L) S・U・C 焼成良好堅緻 色調橙褐色/黒色	平底の甕を2次的に穿孔している。	底部の穿孔は焼成後に底面側から行われており、このため底面の孔周辺が剝離している。外面タテハケ調整。内面指頭圧調整。	70%存
207	器台	口径19.4 残高 1.6	△(SS) C・S・U 焼成良好 色調淡乳赤褐色	直線的に大きく開く受部。口縁部は垂下口縁を呈する。口縁部外面に乱れた波状文を施す。	受部内外面共縦位ヘラミガキ調整。口縁部両面ヨコナデ調整。	15%存

C区弥生第2層出土土器観察表

208	広口壺	頸径12.9 胴径32.4 残高34.0	△(M) S・L・T・K 焼成良好堅緻 色調乳白色	体部は球形を呈し、中位がやや張る。頸部と体部との境界は明瞭でやや長手の頸部が徐々に開く。①頸部下半に5条の断面垂三角形凸帯②体部上半は10帯の横帯文を施すが、籐状文と直線文を交互に施文することを原則とし、途中で斜位の櫛歯刺突文1帯を入れ、最後に扇形文帯と波状文帯を施文。	体部下位外面縦位ヘラケズリ。体部中位外面斜ハケ調整。体部上位外面ナデ調整。頸部外面タテハケ調整。体部内面粗く浅い斜ハケ調整(最上部はヨコハケ)。頸部内面ナデ調整。つくりは全体に丁寧で施文も整美である。	南壁 30%存
209	広口壺	口径25.4 頸径13.8 残高10.0	△(M) S・N 焼成良好 色調淡乳褐色	長い頸部は徐々に径を増し、上方で外反しながらラッパ状に開く。端部は斜め下方へ拡張。①頸部外面に2帯の直線文(原体は半截竹管を3本束ねたもの)②口縁部内面に間隔をあけて縦描直線文(原体は①と共通)③口縁部端面に波状文(原体は①と共通)。	外面調整粗いタテハケの後ナデ。内面調整粗いヨコハケの後ナデ。口縁部端面ヨコハケの後ナデ調整。現存部外の口縁部内面にコブ状突起のあった可能性がある。	東南部 25%存



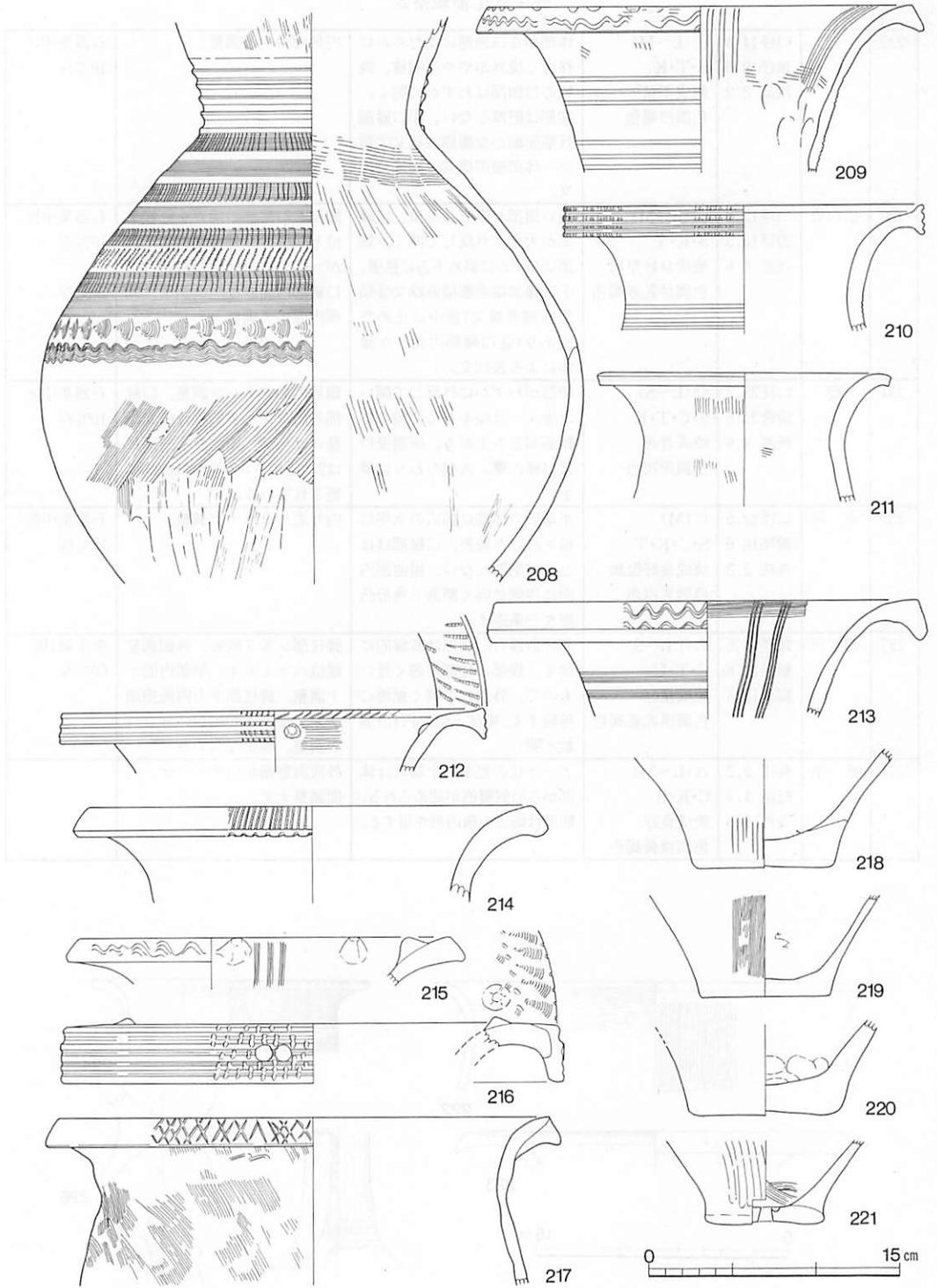
第62図 弥生式土器実測図(16)

弥生式土器観察表

210	広口壺	口径21.4 頸径14.2 残高 7.5	△(S) T・C・S 焼成良好堅緻 色調淡乳赤褐色	頸部は太く鼓状を呈し、口縁部は外反して水平に開く。端部を上下に拡張。①口縁部端面に3条の凹線文を施し、これに半截竹管による縦描直線文を加える②頸部に櫛描直線文	頸部外面布を用いたヨコナデ調整。頸部内面ナデ調整	30%存
211	広口壺	口径17.5 頸径12.0 残高 7.7	◎(L~M) T・S・C 焼成普通 色調淡乳黄褐色	頸部は鼓状を呈し、中位でくびれる。口縁部は外反しながら水平に開き、端部は若干垂れる。	外面調整タテハケ後ナデ。内面調整ヨコハケ後ヨコナデ。	35%存
212	広口壺	口径25.2 残高 3.7	◎(L~M) S・T・C 焼成良好 色調橙褐色	頸部は大きくラッパ状に開き、口縁部は屈曲して水平に開く。端部を下方に拡張。①口縁部端面に3条の凹線文を施し、さらにヘラ描横走稜杉文を加える。②口縁部内面に2段の斜位櫛歯刺突文。③頸部上端内面に退化したコブ状突起	外面調整ヨコナデ。内面調整ヨコハケ。	20%存
213	広口壺	口径25.0 残高 7.0	○(L~M) S・K・T・P・C 焼成良好 色調淡乳褐色	頸部は大きくラッパ状に開き、上方で外反の度を強める。端面は分厚く斜め下方に拡張。①口縁部端面に波状文②頸部に一見2帯の直線文③口縁部内面に一見2帯の縦描直線文。これらの原体は3条単位の櫛を間隔をあけて2個束ねたもの。	頸部外面タテハケ後ナデ調整。内面調整ヨコハケ後ナデ。口縁部端面ヨコハケ後ナデ調整。	東南部 20%存
214	広口壺	口径26.2 残高 5.7	◎(LL~M) S・T・C 焼成不良 色調乳白色	口縁部は大きく外反しながら開く。端部は分厚く、斜め下方に拡張。①口縁部端面に櫛歯刺突文②同下端に刻目文(櫛歯使用)。	外面ナデ調整。内面調整ヨコハケ後ナデ。	15%存
215	広口壺	口径22.0 残高 2.9	◎(L~M) S・T 焼成普通 色調淡乳黄褐色	口縁部は大きく外反して開く。端部は徐々に厚みを増し、斜め下方へ拡張。①口縁部端面に櫛描波状文(乱雑)②口縁部内面に縦描直線文(工具は半截竹管を間隔をあけて3個束ねたもの)③口縁部内面に2個1組のコブ状突起。	頸部外面ヨコハケ調整。粗いヨコハケ調整。内面調整ハケ後ナデ。	12%存
216	広口壺	口径29.6 残高 4.5	○(M) C・S・T 焼成良好堅緻 色調橙褐色	口縁部は大きく外反して水平に開く。端部は下方に大きく拡張して垂下口縁とする。①口縁部端面に4条の凹線文を施し、これに棒状の工具で縦描直線文を加え、最後に2個1組の円形浮文を貼付②口縁部内面に2段の扇形文帯を巡し、その間に列点文を施す③口縁部内面に低平なコブ状突起を貼付(単位不明)。	垂下口縁部は、一旦擬口縁を製作の後に接合。内外面ともヨコナデ調整	図の13%存

弥生式土器観察表

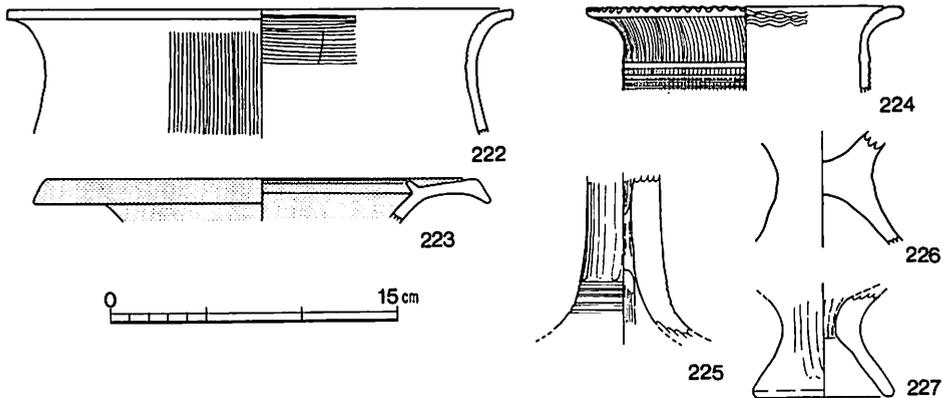
217	太頸壺	口径29.3 頸径24.2 残高10.0	△(L~M) S・T・C・K・U 焼成普通 色調乳褐色	体部上半はズン胴に近い器形で、頸部で微かにくびれてから口縁部は短く外反して開く。端部は徐々に肥厚し、斜め下方に拡張。口縁部端面にヘラ描斜格文。	口縁端部は貼りつけによって下方に肥厚させている。外面調整斜ハケ。内面調整ナデ。	中央部
218	壺底部	底径 8.6 残高 7.0	◎(L) S・T・K 焼成普通 色調淡乳黄褐色	厚手の平底。体部には外反しながら移行する。	外面調整粗いタテハケ。内面調整ナデ。	50%存
219	壺底部	底径 7.8 残高 6.0	△(L) C・S・T 焼成普通 色調淡乳灰褐色	完全な平底。体部の器肉は極めて薄い。	外面調整極めて細かいタテハケ。内面調整ハケの後、ナデ。	南部 50%存
220	壺底部	底径 9.0 残高 5.5	◎(L) S・T・K 焼成普通 色調淡乳褐色	微かに上げ底風の平底。器肉は分厚い。	外面剥落。内面調整指ナデ。	完存
221	壺底部	底径 7.1 残高 5.0	○(L) C・T・S 焼成良好 色調淡乳黄色	微かに上げ底風の平底。円板状の底面に体部が接合されている。底部中央に焼成後に一孔が穿孔されている。	外面調整幅広い縦位ヘラミガキ。内面調整ヘラナデ及びビナデ。内面に先端の丸い錐による穿孔失敗痕。	南部 65%存
222	壺	口径26.4 頸径22.5 残高 6.6	○(L~M) S・K・T 焼成良好 色調淡乳褐色	体部の張りは弱く、頸部のくびれも不明瞭で、口縁部はそのまま外反しながら短く水平に開く。端部は薄手で面取り風。	口縁端部のヨコナデ調整は入念。外面調整タテハケ。体部内面ナデ調整。口縁部内面ヨコハケ調整。	
223	壺	口径16.6 頸径12.7 残高 4.5	◎(L) S・T 焼成良好 色調淡乳赤褐色	体部はほとんど張らず、口縁部は強く外反して水平に開く。 ①口縁部端面上側に棒押捺状刻目文②頸部下に粗い楕描直線文③口縁部内面にハケ原体による波状文。	外面調整粗いタテハケ。体部内面指ナデ調整。口縁部内面粗いヨコハケ調整。口縁部端面斜へ横ハケ調整。外面煤付着。	20%存
224	高 坏	口径22.4 頸径17.0 残高 2.3	◎(M) T・S・C・K・U 焼成良好堅緻 色調乳白色	体部は浅い半球形状を呈し、口縁部が水平に開く。端部は斜め下方に拡張し面をなす。頸部内面には断面矩形のシャープな凸帯を巡す。	内外面共にナデ調整か。	東部 10%存 全面赤彩
225	高 坏	脚径 3.9 残高 9.0	◎(L~M) S・K・P・T・C 焼成良好堅緻 色調茶褐色	柱状部の長い中空足で、裾部は外反して開く。裾部上位に5条の凹線文(合わせ目で勢い余って3cm以上重複)。器肉は分厚い。	柱状部は粘土板をまるめてシボリ成形し、両端から指を差しこんでナデている。脚柱部外面縦位ヘラミガキ	50%存
226	脚 台	頸径 4.9 残高 5.9	◎(L~M) S・T・C・N・K 焼成普通 色調淡紅乳白色	緩く外反しながら開く円錐形の短脚。器肉は分厚く、天井部も同様。	外面調整縦位ヘラミガキ。内面調整ナデ。接合方式は不明。	図示部完存。
227	脚 台	頸径 4.0 裾径 7.4 脚高 3.5	◎(L~M) S・L・K 焼成普通 色調淡茶褐色	直線的に開く円錐形の短脚。裾端面は面取り風。	頸部内面にシボリ痕を残す。迎統成形技法によるものだが円板は離脱。外面調整縦位ヘラミガキ。内面調整ナデ。	図示部完存
228	壺	口径20.6 残高 6.0	○(L~M) S・K・C・T 焼成良好 色調淡褐色	口頸部がわずかに開きながら立ち上がるもので、口縁端部で若干内湾する。端面は水平で内側に肥厚する。口縁部に2条の指頭圧痕文凸帯。	外面下半斜ハケ調整。内面ナデ調整。口縁部両面及び端面ヨコナデ調整。内面に凸帯貼付時の指頭圧痕あり。	15%存



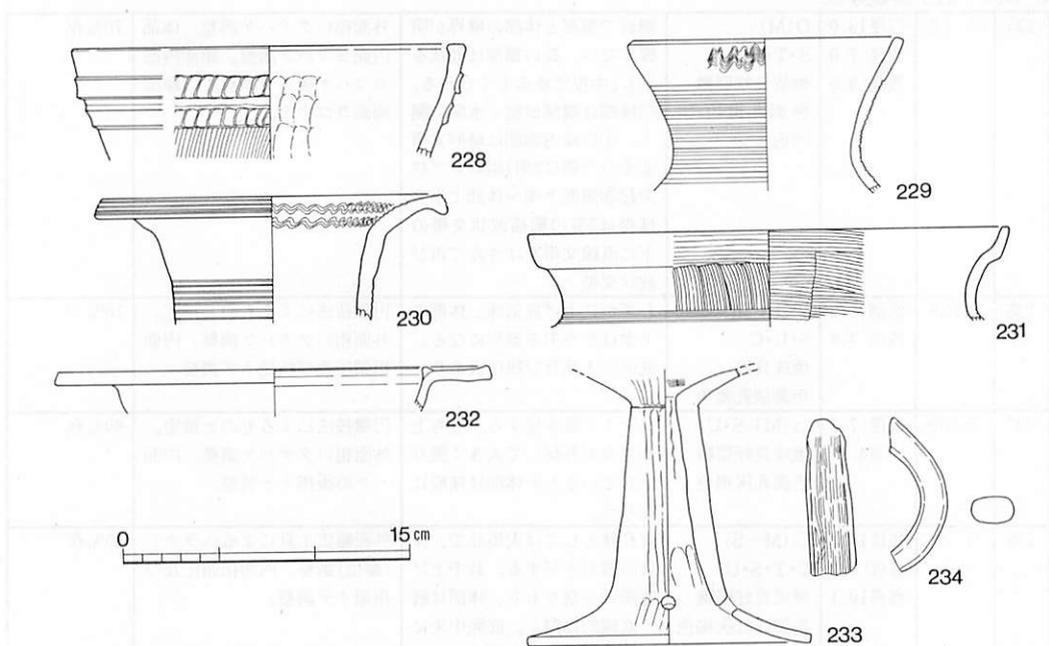
第63图 弥生式土器実測图(17)

弥生式土器観察表

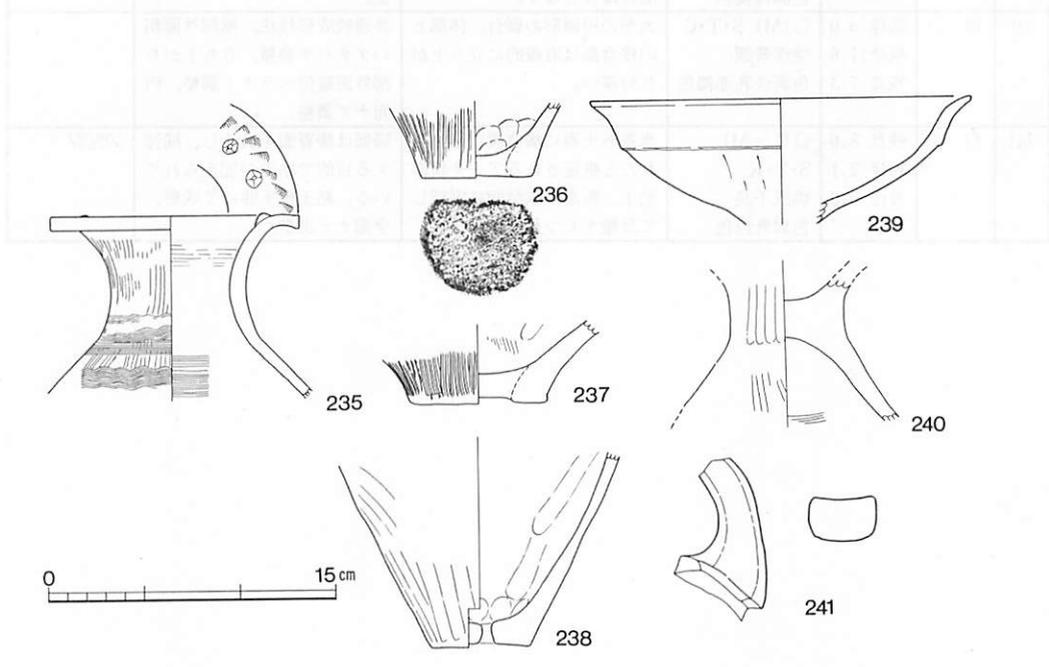
229	壺	口径14.4 頸径 9.8 残高 8.2	○(L~M) S・T・K 焼成不良 色調橙褐色	体部から口頸部になだらかに移行し境界がやや不明確。筒状の口頸部はわずかに開く。端部は肥厚しない。①口縁部外端面細かな櫛描波状文②頸部~体部複帯構成の櫛描直線文。	内外面共ナデ調整。	石器集中区 10%存
230	広口壺	口径17.8 頸径10.3 残高 6.6	◎(L~M) S・K・T 焼成良好堅緻 色調淡乳赤褐色	長い頸部が直立した後、口縁部が大きく外反して開く。端部はわずかに斜め下方に拡張。①口縁部端面櫛描直線文②頸部櫛描直線文(途中で止めた痕あり)③口縁部内面ハケ原体による波状文。	頸部と口縁部の境界を乾燥単位としており外面に指頭圧痕が一巡する。外面調整斜ハケ。口縁部内面ヨコハケ調整。頸部内面ナデ調整。	石器集中区 10%存 20%存
231	甕	口径25.2 頸径21.6 残高 4.9	◎(L~S) S・C・T・K 焼成普通 色調灰褐色	頸部がわずかに外反して開いた後、一旦段をもって短く口縁部が立ち上がる。所謂受口状口縁の甕。大型のわりに薄手。	頸部外面タテハケ調整。口縁部外面ヨコハケ調整。内面調整ヨコハケ。頸部直下外面には2次的にヨコハケが装飾的に施されている。	石器集中区 10%存
232	高 坏	口径22.5 頸径16.6 残高 2.3	◎(M) S・C・K・T 焼成良好堅緻 色調乳白色	半球形の体部に幅広の水平口縁を付けた器形。口縁部はほとんど肥厚しない。屈曲部内面に内側に向く断面三角形凸帯を一条巡す。	内外面共ヨコナデ調整。	石器集中区 15%存
233	器 台	頸径 3.5 裾径14.8 脚高12.4	△(LL~S) C・T・U 焼成良好 色調淡乳赤褐色	高坏形器台。受部は直線的に開く。脚部は柱部が細く長いもので、外反して開く裾部に接続する。裾部上位に円孔(個数不明)。	脚柱部シボリ成形。外面調整縦位ヘラミガキ。裾部内面ナデ調整。脚柱部下方内面指頭ナデ。受部内面細かいヨコハケ調整。端正なつくり。	弥生第1層 60%存
234	把 手	長径 2.2 短径 1.4 残長 8.0	△(L~M) C・K・S 焼成良好 色調淡黄褐色	アーチ状の把手で上端には体部からの剝離痕が認められる。断面は幅広の楕円形を呈する。	外面調整細かいタテハケ。内面調整ナデ。	



第64図 弥生式土器実測図(10)



第65图 弥生式土器实测图(19)

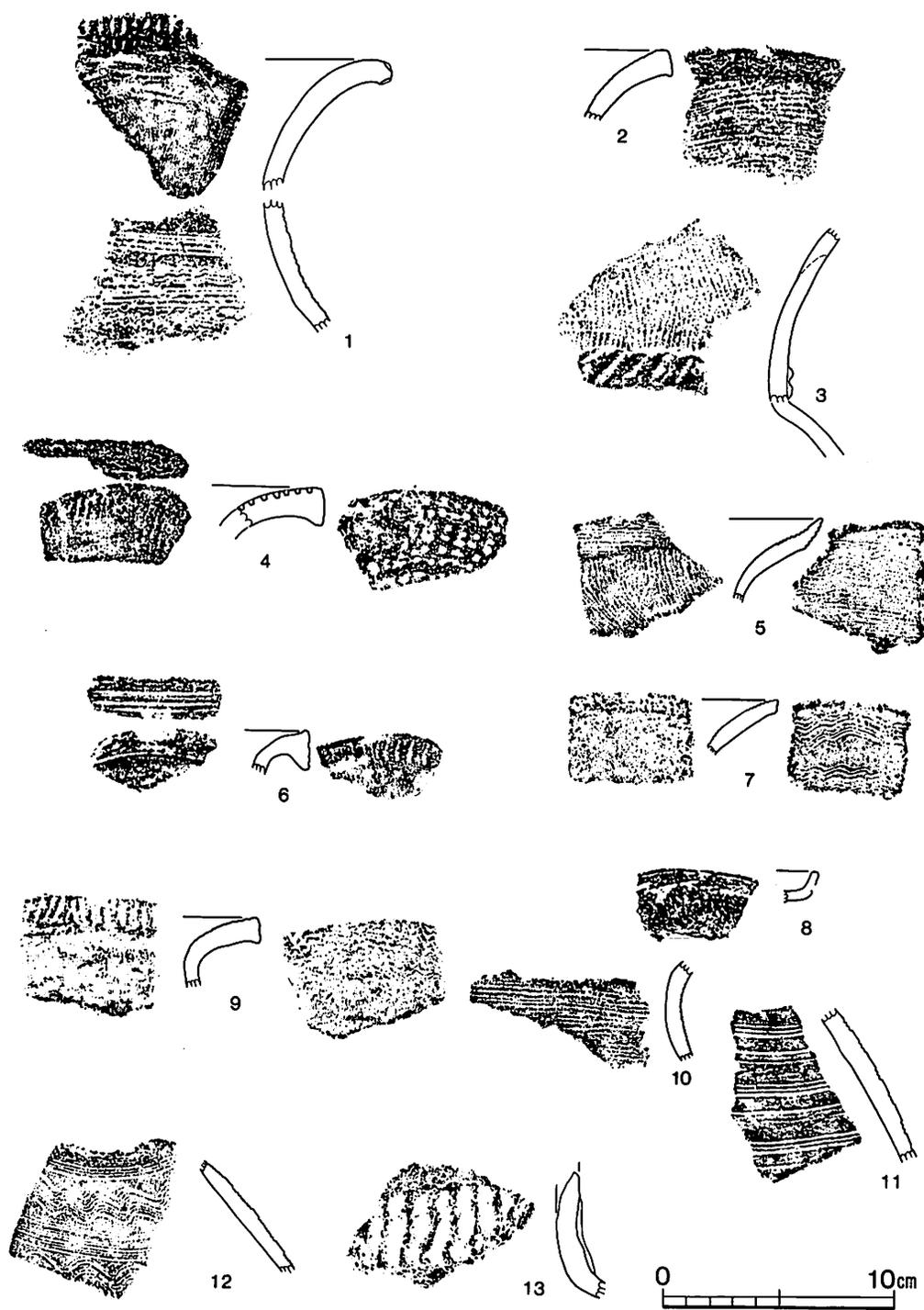


第66图 弥生式土器实测图(20)

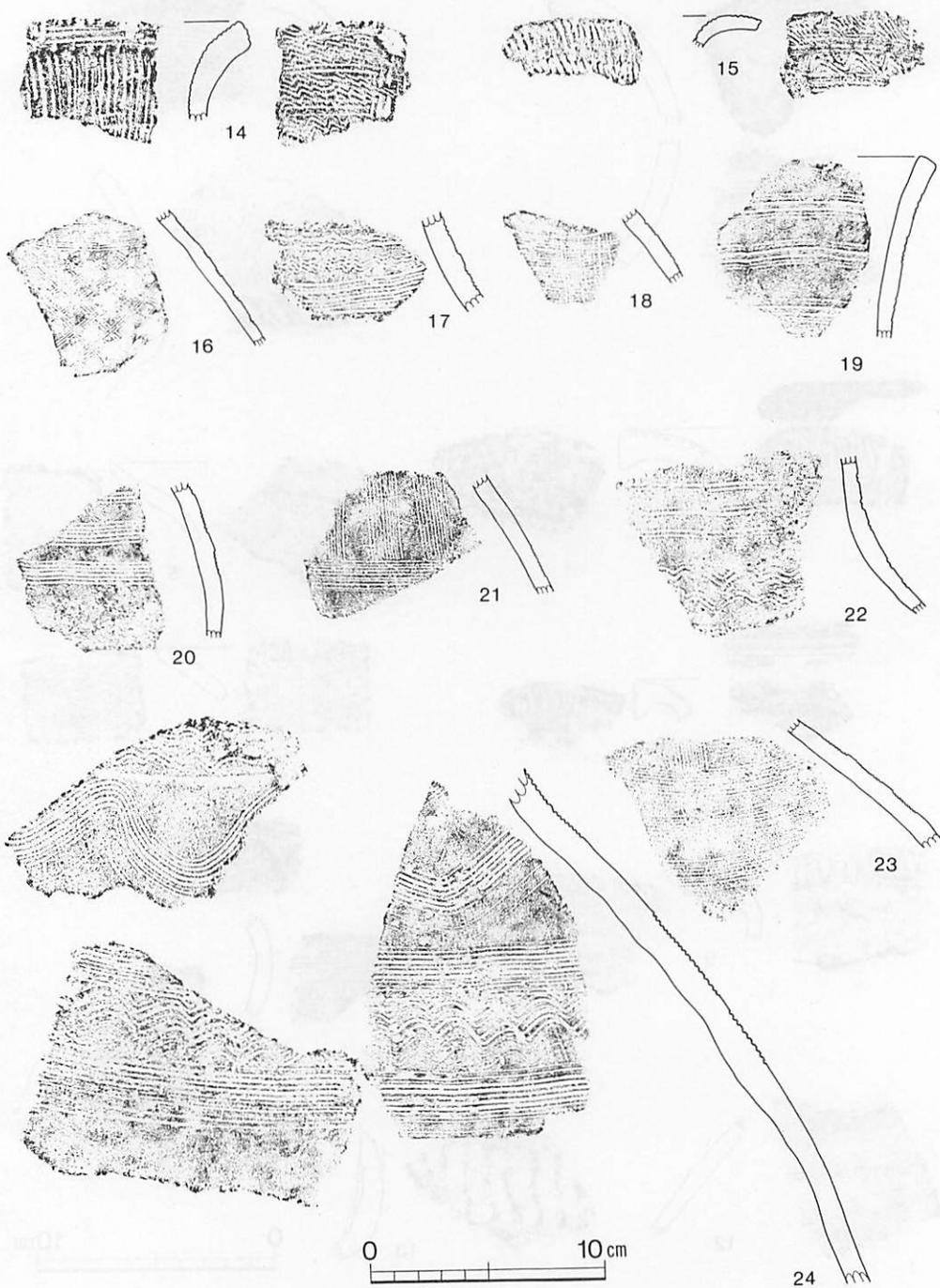
弥生式土器観察表

C・D区一括土器観察表

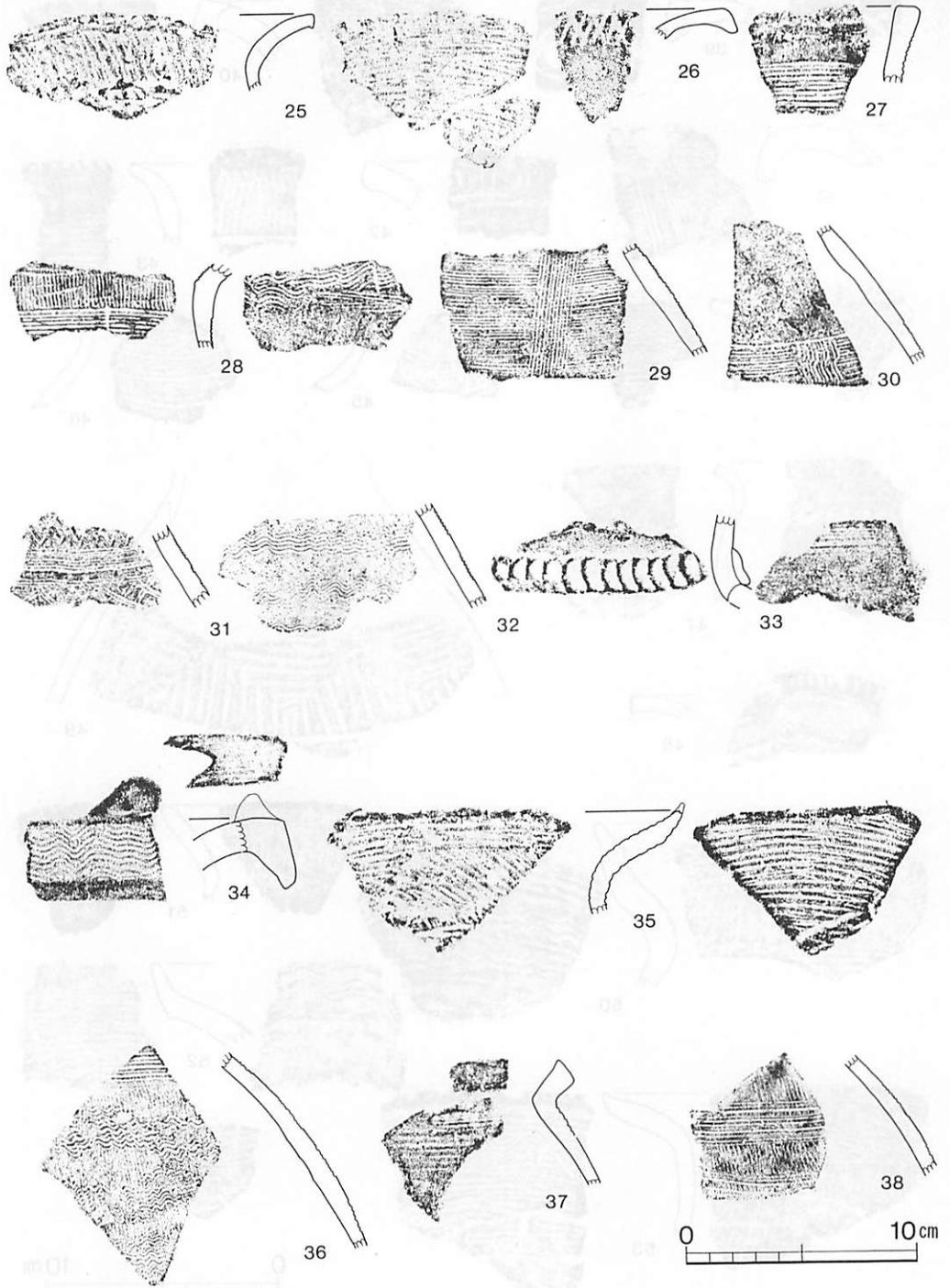
235	広口壺	口径13.0 頸径 7.0 残高 9.6	O(M) S・T・K 焼成良好堅緻 色調乳橙色/淡 灰色	撫肩で頸部と体部の境界が明瞭でない。長い頸部は鼓状を呈し、中程でゆるくくびれる。口縁部は端部が短く水開に開く。①口縁内端部に扇形文帯②その内側に2個1組のコブ状突起③頸部下端～体部上半文帯は2帯の櫛描波状文帯の下に直線文帯をはさんで再び波状文帯	外面粗いタテハケ調整。体部内面ヨコハケ調整。頸部内面ヨコハケ後ナデ調整。口縁部両面ヨコナデ。	70%存
236	甕底部	底部 5.9 残高 3.8	◎(L～M) S・U・C 焼成良好 色調淡乳褐色	わずかに上げ底気味。体部の下半はやや尖る器形になる。底面に木葉及び紐圧痕あり。	円環技法によるものと推定。外面粗いタテハケ調整。内面指頭圧及び指頭ナデ調整	70%
237	壺底部	底径 7.3 残高4.2	△(M) S・U 焼成良好堅緻 色調灰赤褐色	ドーナツ底を呈する。立ち上がり方が外反して大きく張り出しているため体部は球形になろう。	円環技法によるものと推定。外面粗いタテハケ調整。内面ハケの後指ナデ調整。	80%存
238	有孔鉢	残径14.8 底径 5.2 残高10.1	○(M～S) C・T・S・U 焼成良好堅緻 色調淡紅灰褐色	有孔鉢としては大型品で、深鉢の器形を呈する。若干上げ底風の平底をもち、体部は緩く直線的に開く。底面中央に焼成前に一円孔を穿孔。	外面幅広工具によるヘラナデ(縦位)調整。内面指頭圧及び指頭ナデ調整。	80%存
239	高杯	口径19.8 体高 6.5	○(L)S・K 焼成不良 色調橙褐色	浅い壺状の底部に外反して開く口縁部を付けた器形で、外面には稜をなす。	口縁部両面幅の広いヨコナデ調整。底部外面ヘラケズリ調整。	15%存
240	脚台	頸径 6.0 残径11.6 残高 7.3	○(M) S・T・C 焼成普通 色調淡乳赤褐色	大型の円錐形の脚台。体部と接合部は直線的に立ち上がり分厚い。	非連続成形技法。裾部外面粗いタテハケ調整。立ち上がり部外面縦位ヘラナデ調整。内面ナデ調整。	
241	把手	残長 8.6 短径 2.1 長径 3.6	◎(L～M) S・T・K 焼成不良 色調乳白色	水差し土器に横位置に貼付されたと推定されるアーチ状の把手。断面は取付面に平行して長軸をもつ長方形。	端部は接着面を広くし、補強する目的で粘土が加えられている。粘土板を曲げて成形。全面ナデ調整。	50%存



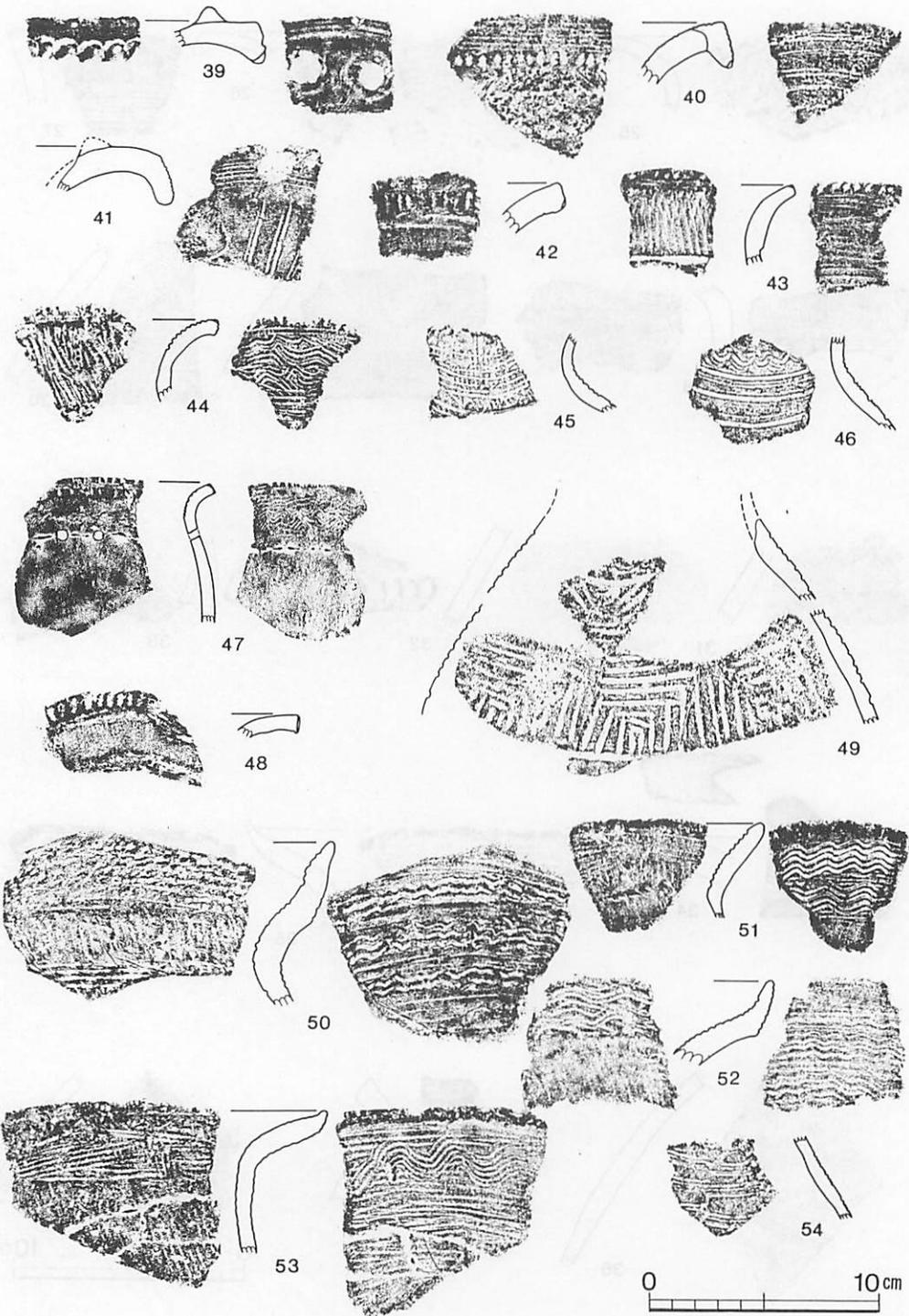
第67图 弥生式土器拓影(1)



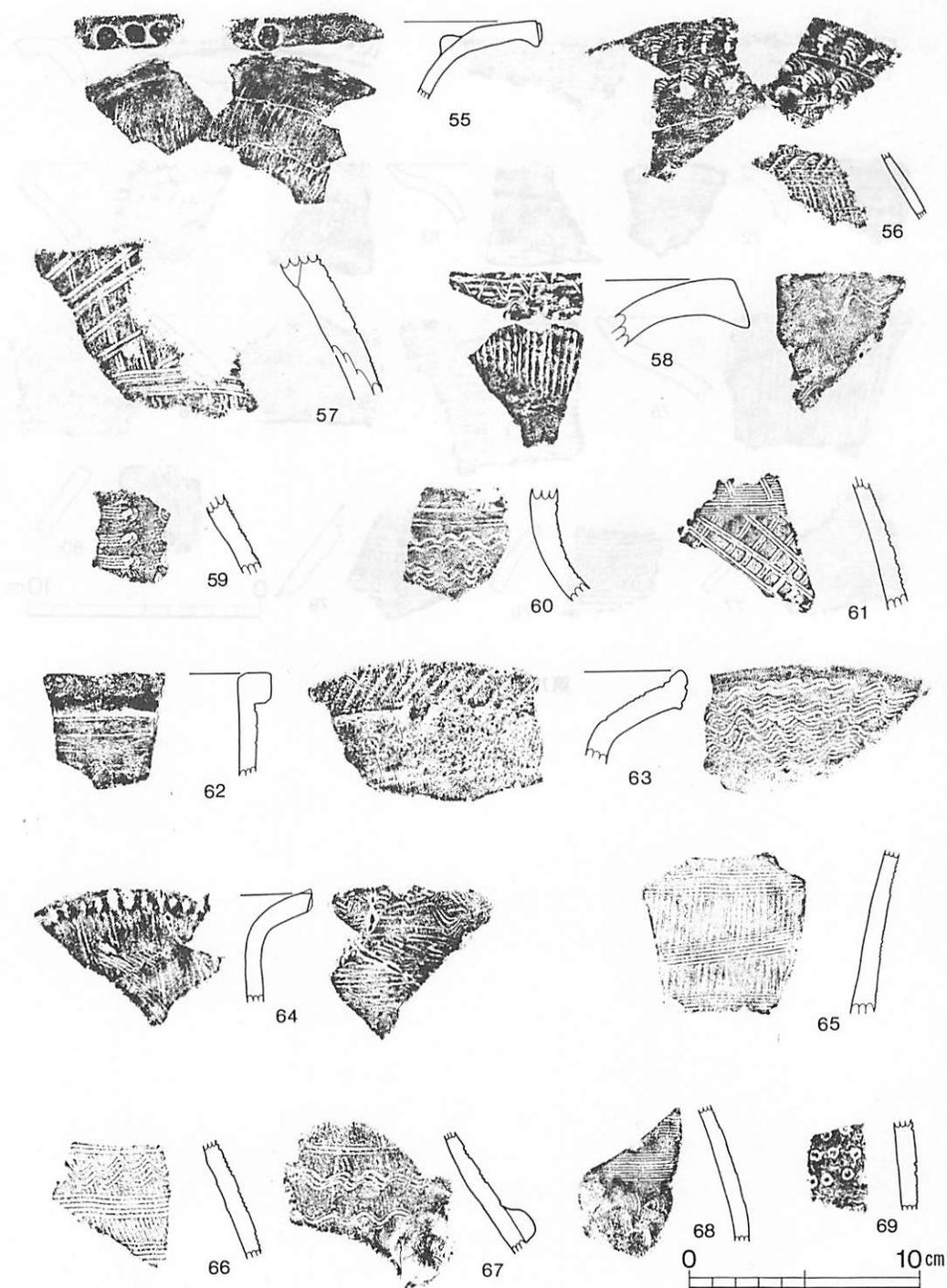
第68图 弥生式土器拓影(2)



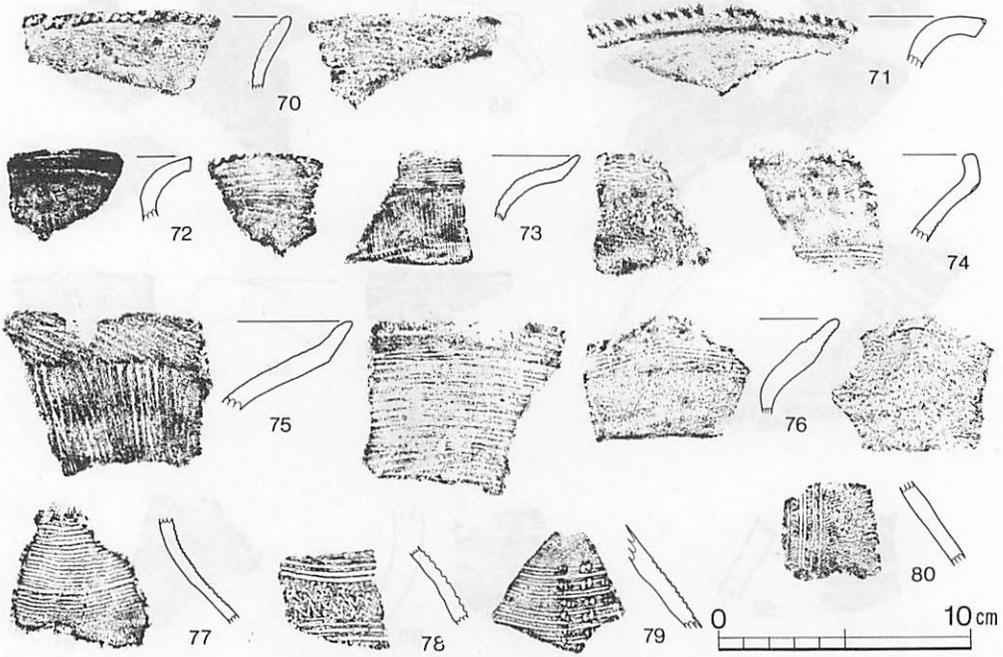
第69图 弥生式土器拓影(3)



第70图 弥生式土器拓影(4)



第71图 弥生式土器拓影(5)



第72图 弥生式土器拓影(6)

圖 版



上：調査前の三井銀行 下：A区調査後全景

図版第2



上：SE220 下：SE218、SE219



上：SE218 下：SE219

図版第 4



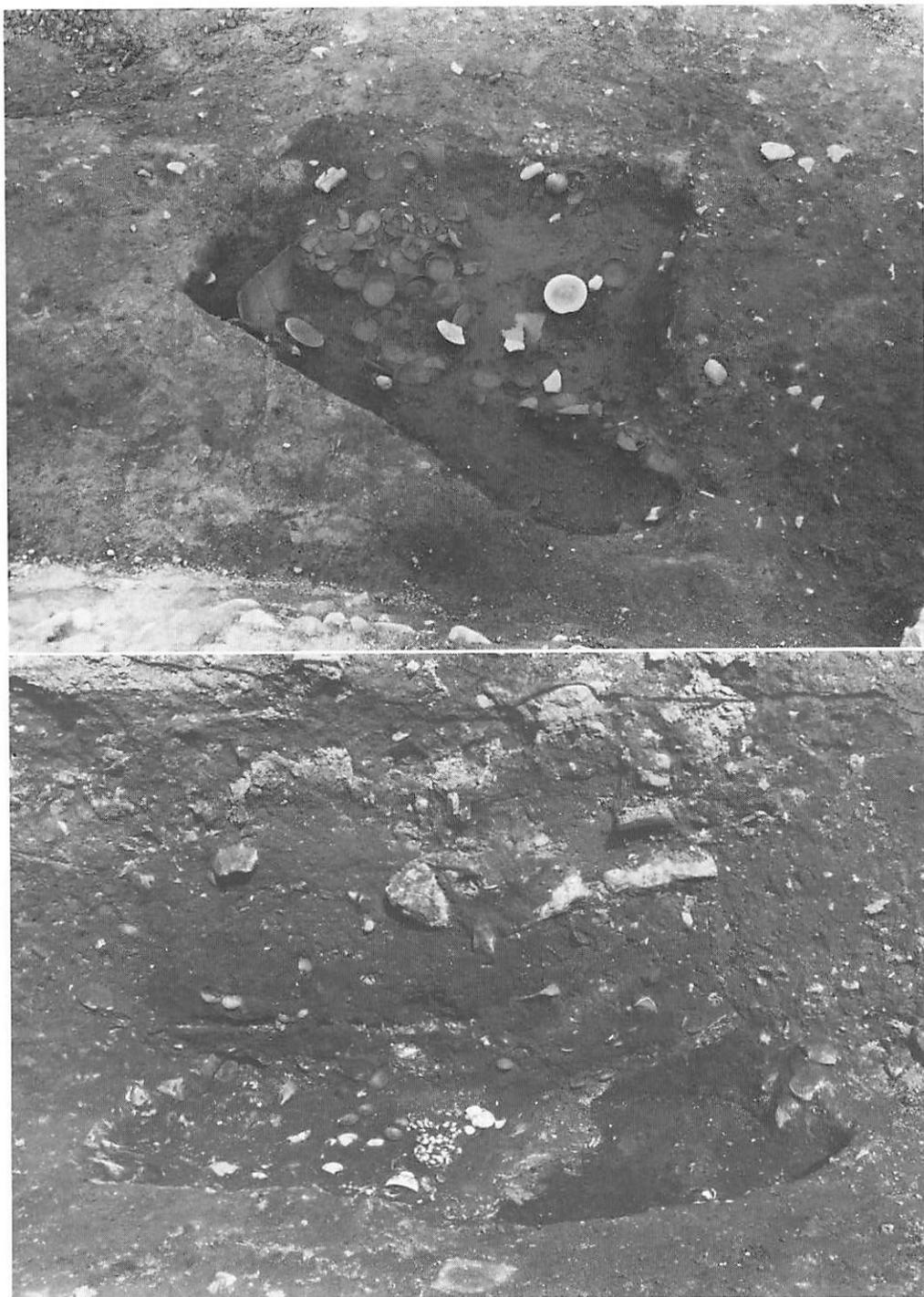
上：SK49 下：SK53



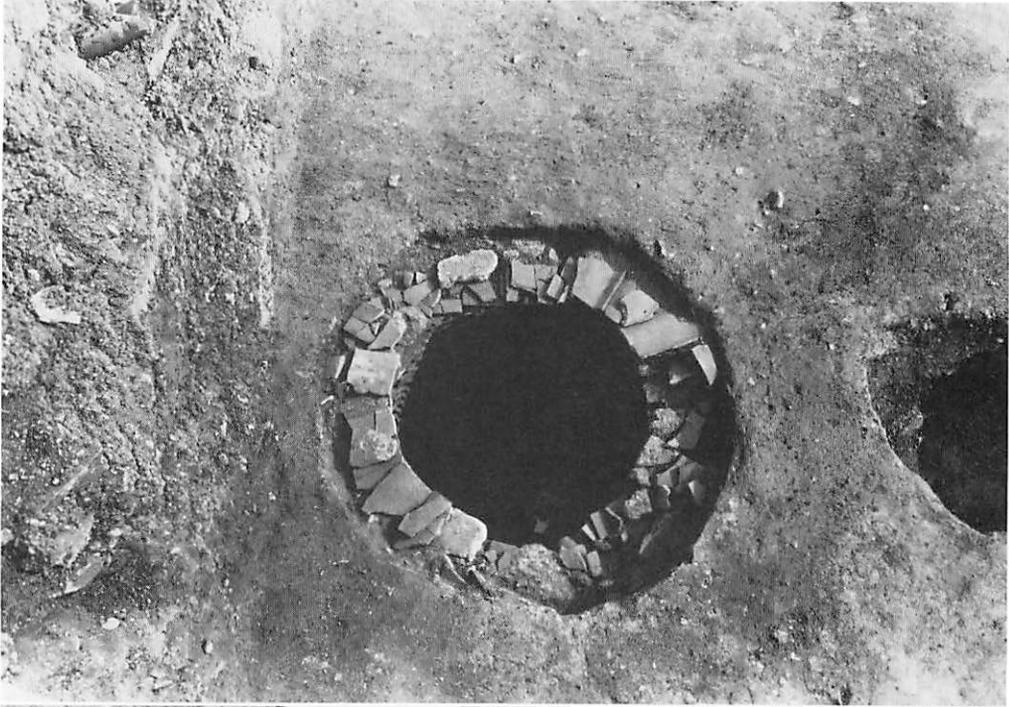
上：SK87遺物出土状態 下：同完掘後



上：SD44 下：SK45



上：SK31 下：SK02



上：SE06 下：同細部

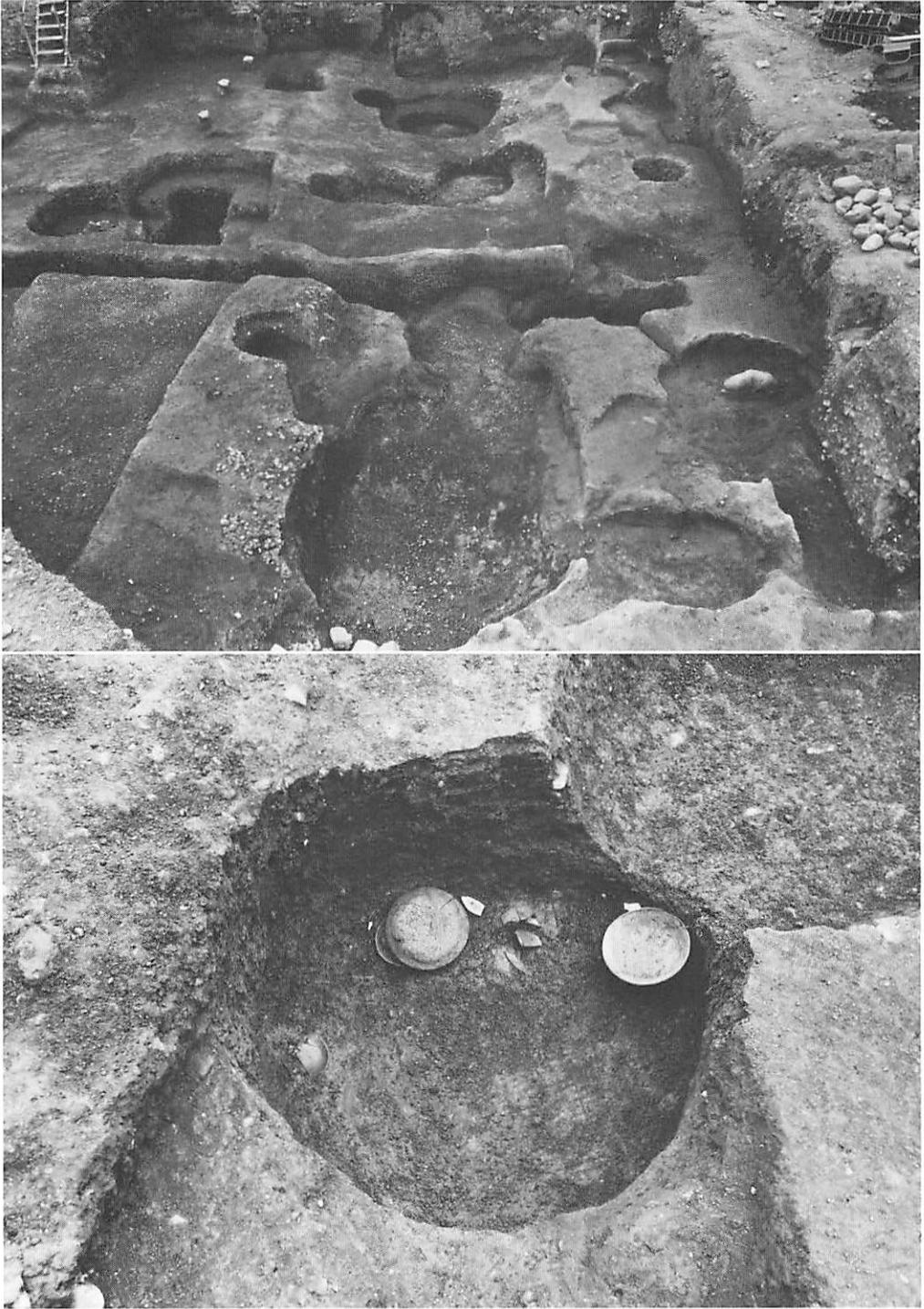


上：B区全景(南から) 下：同(北から)

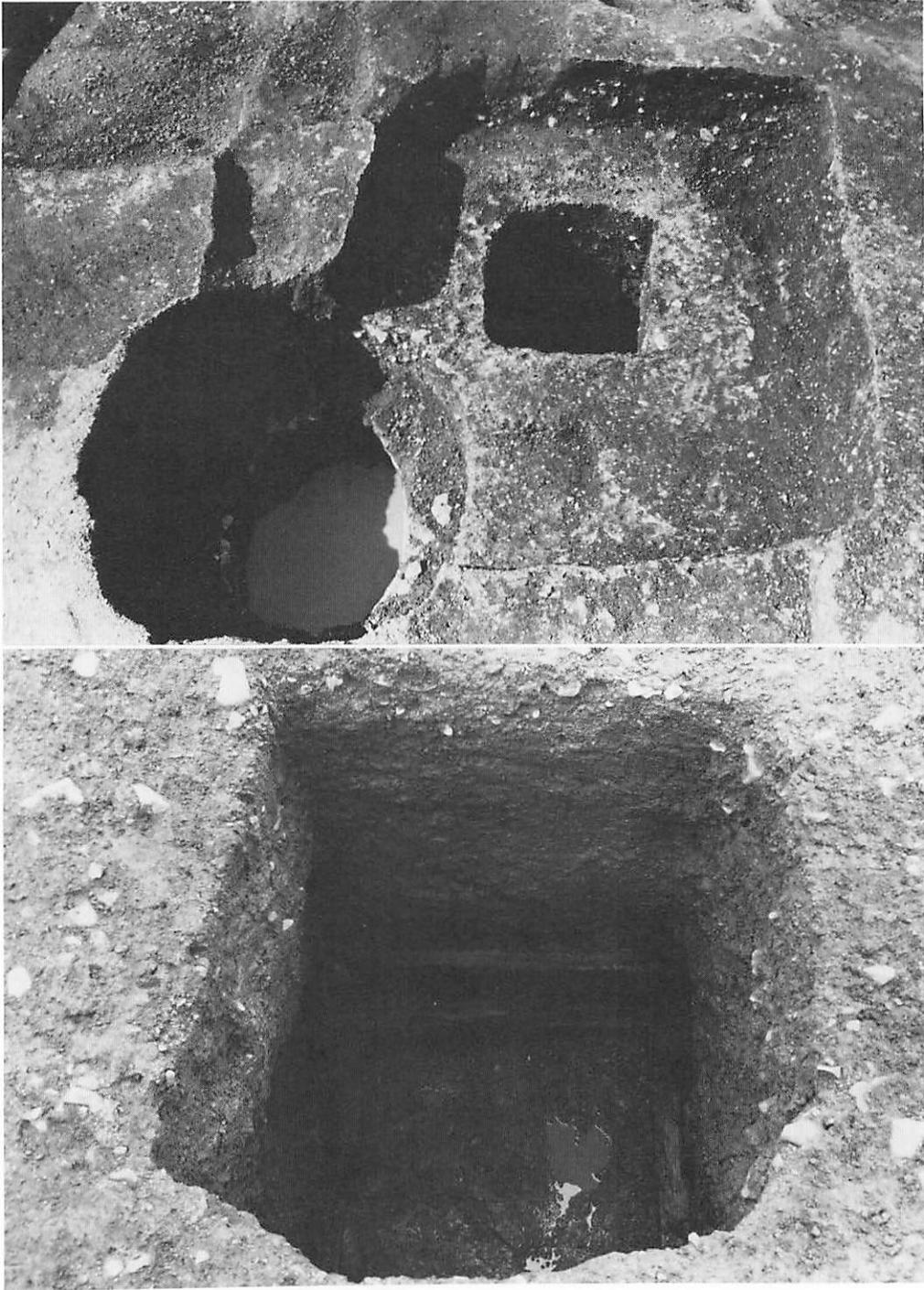
図版第10



上：SD145(西から) 下：SD148(南から)



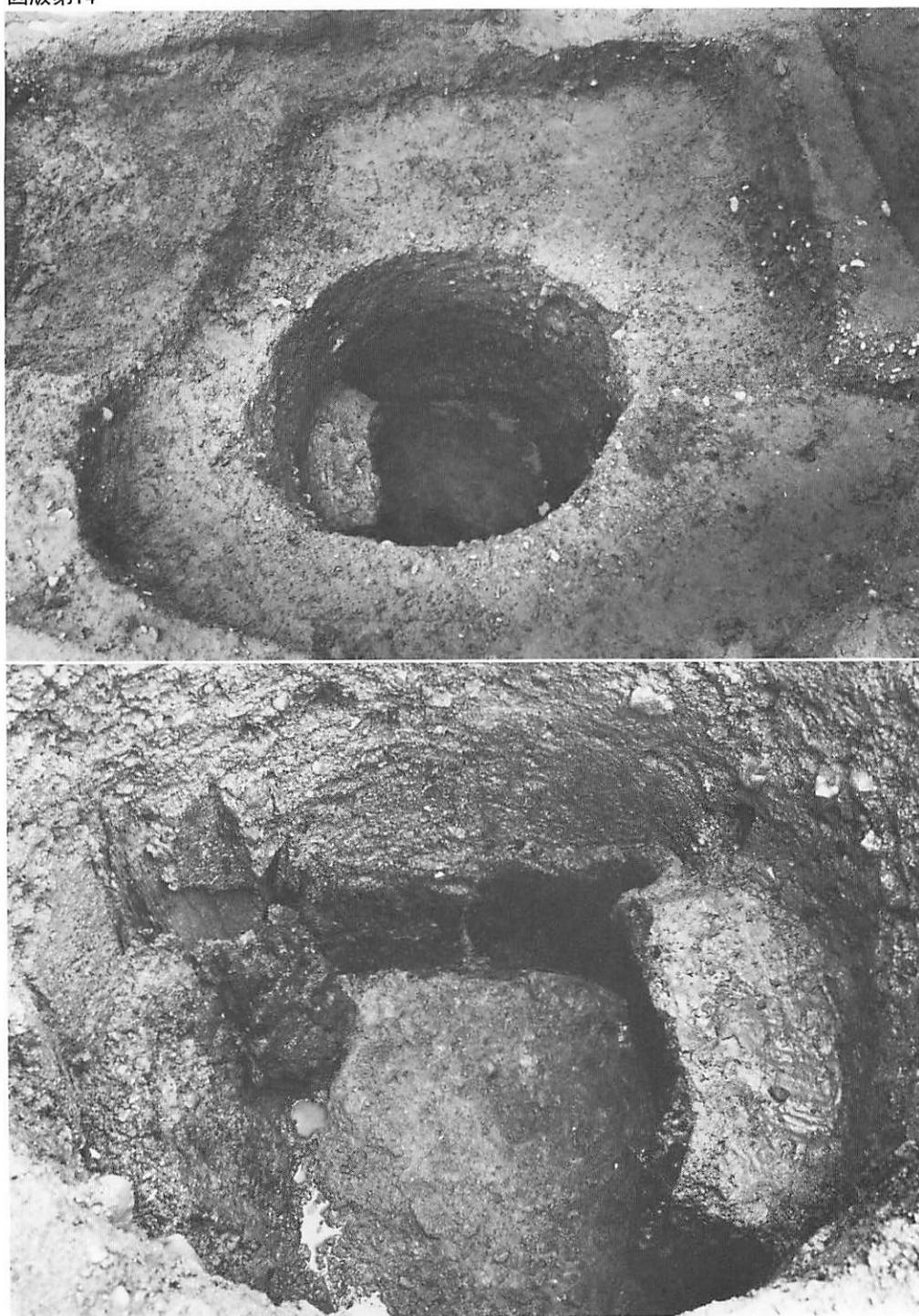
上：C区全景(南から) 下：SK512



上：SE734 下：同細部



上：SE418 下：SE723



上：SE423 下：同細部

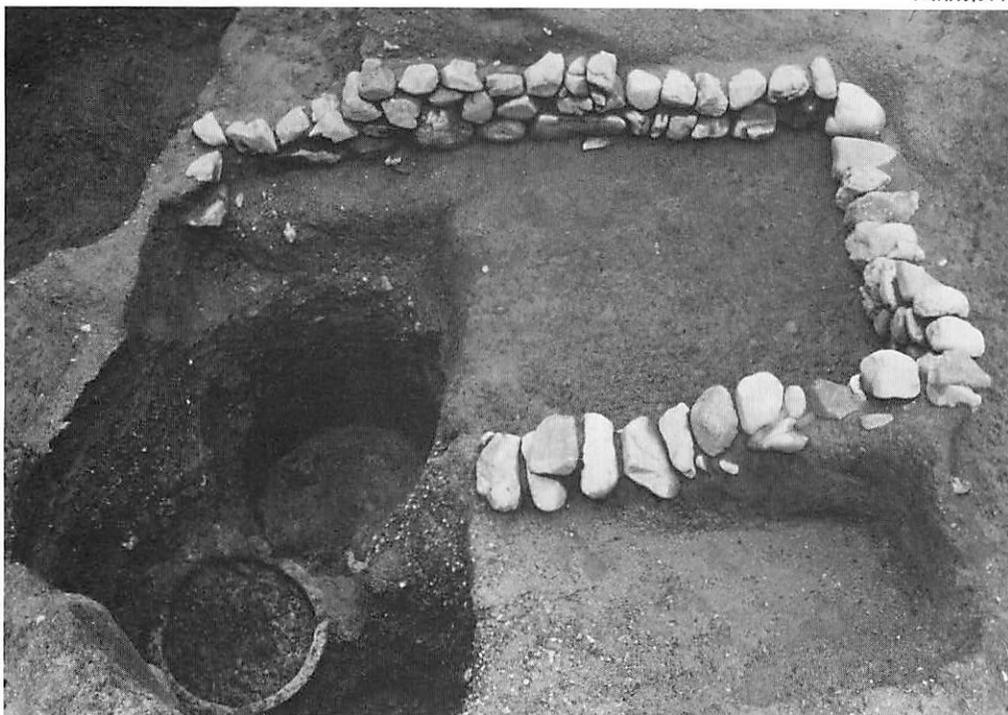


上：SK355 下：SK350

図版第16



上：SB353 下：SX400



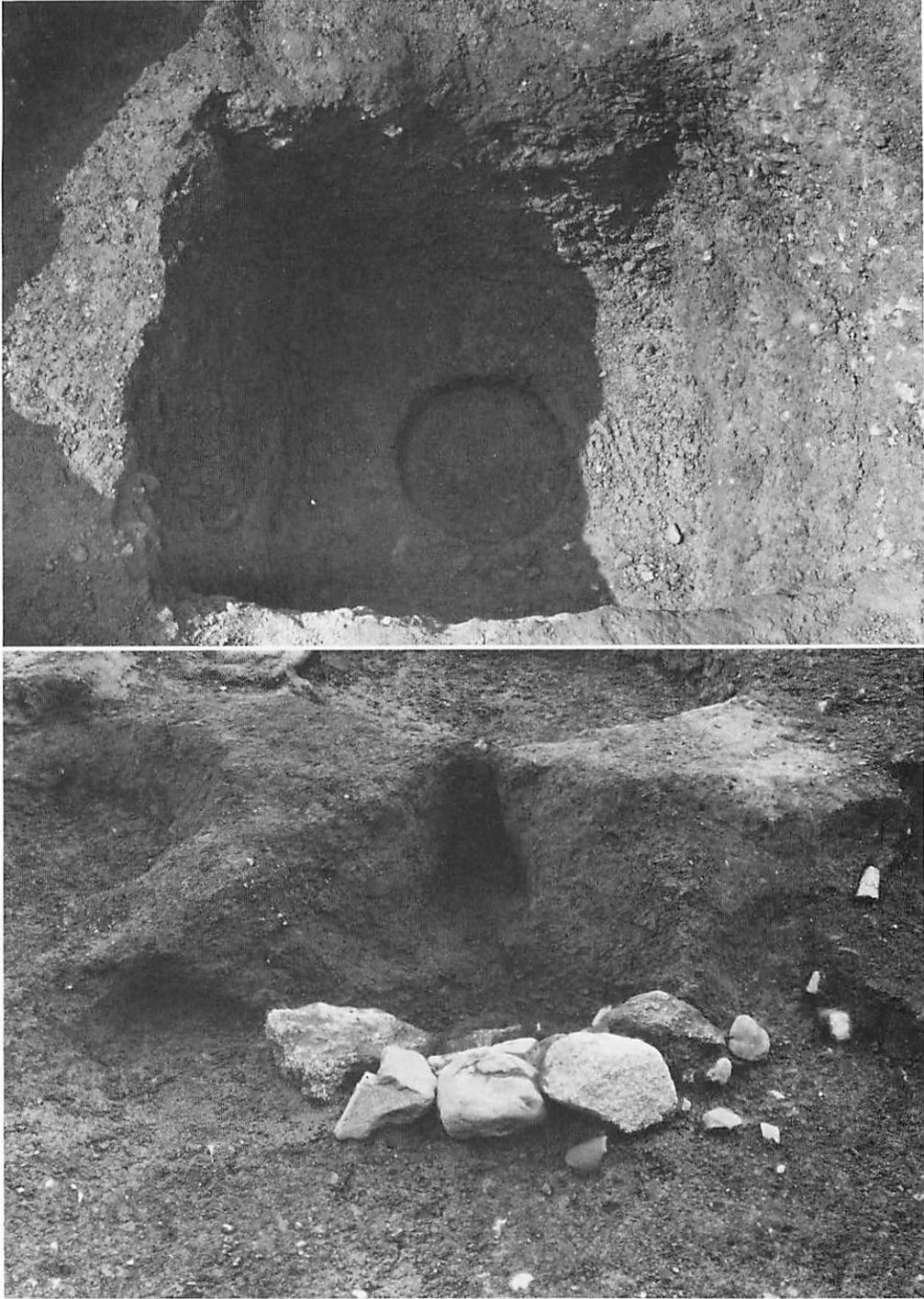
上：SX369 下：SE354



上：SE412 下：SD145



上：D区全景(西から) 下：同西部(北から)



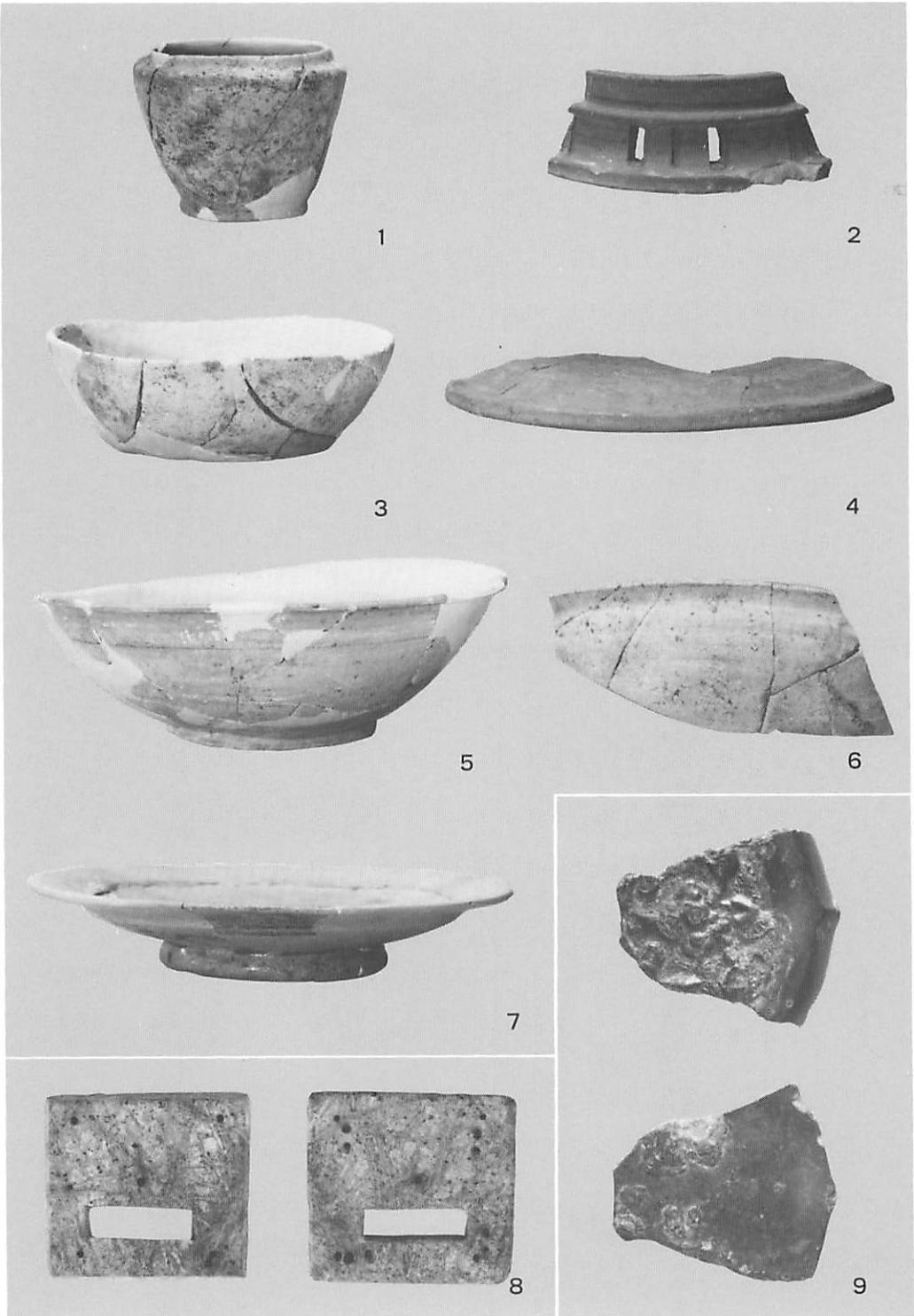
上: SE531 下: SK534



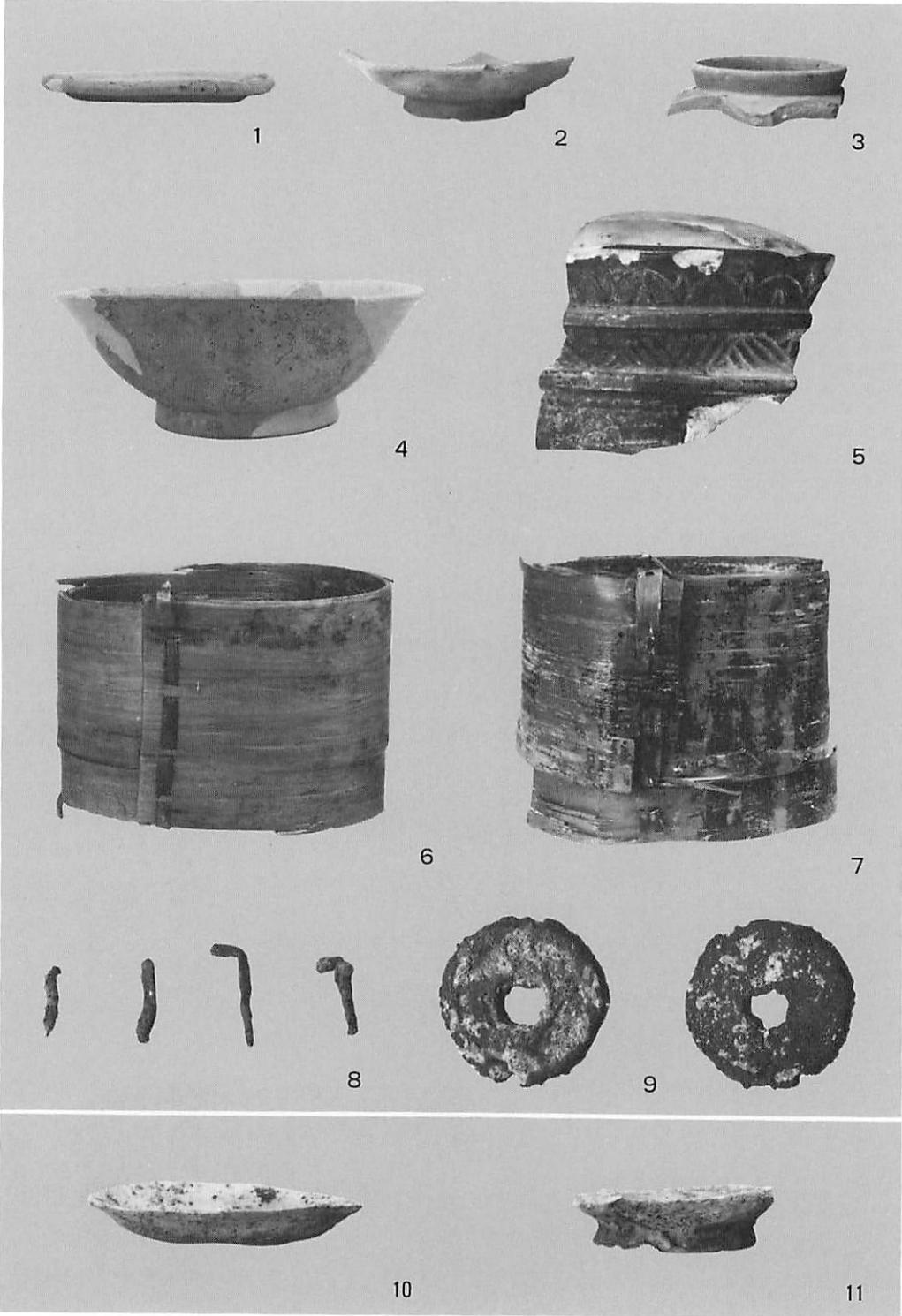
上：SK533 下：SK524



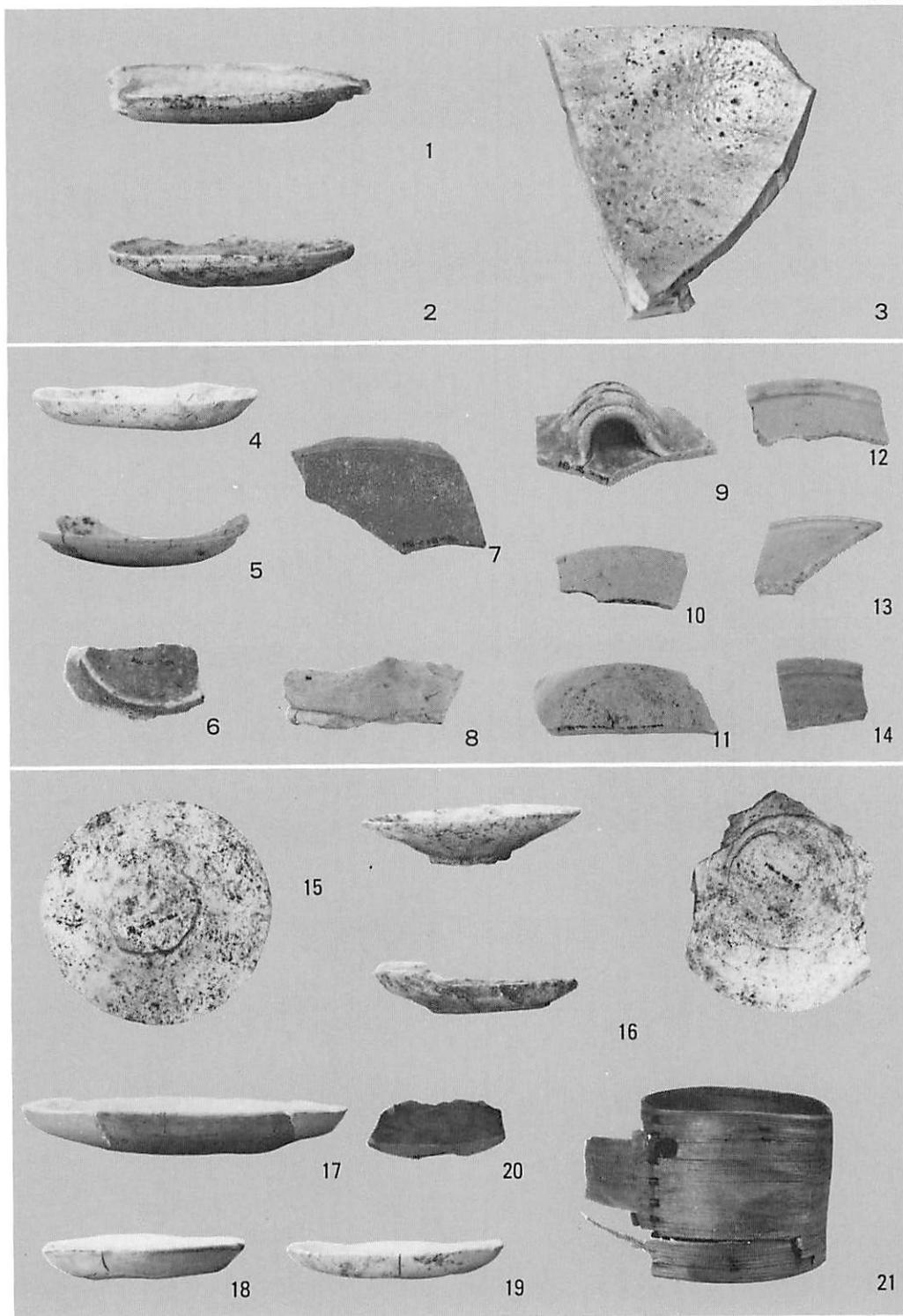
上：SD515 下：SB502

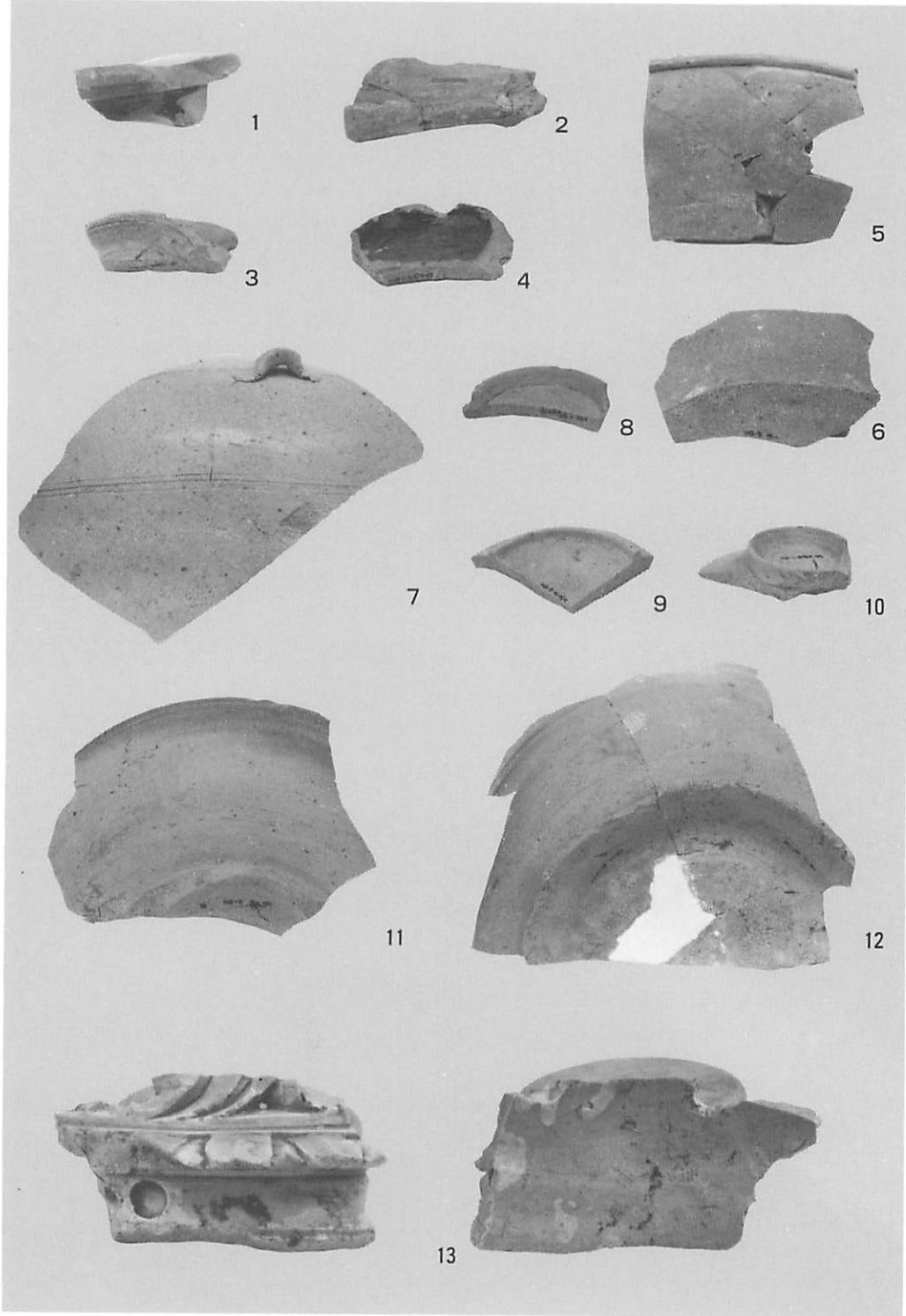


平安時代前期の遺物

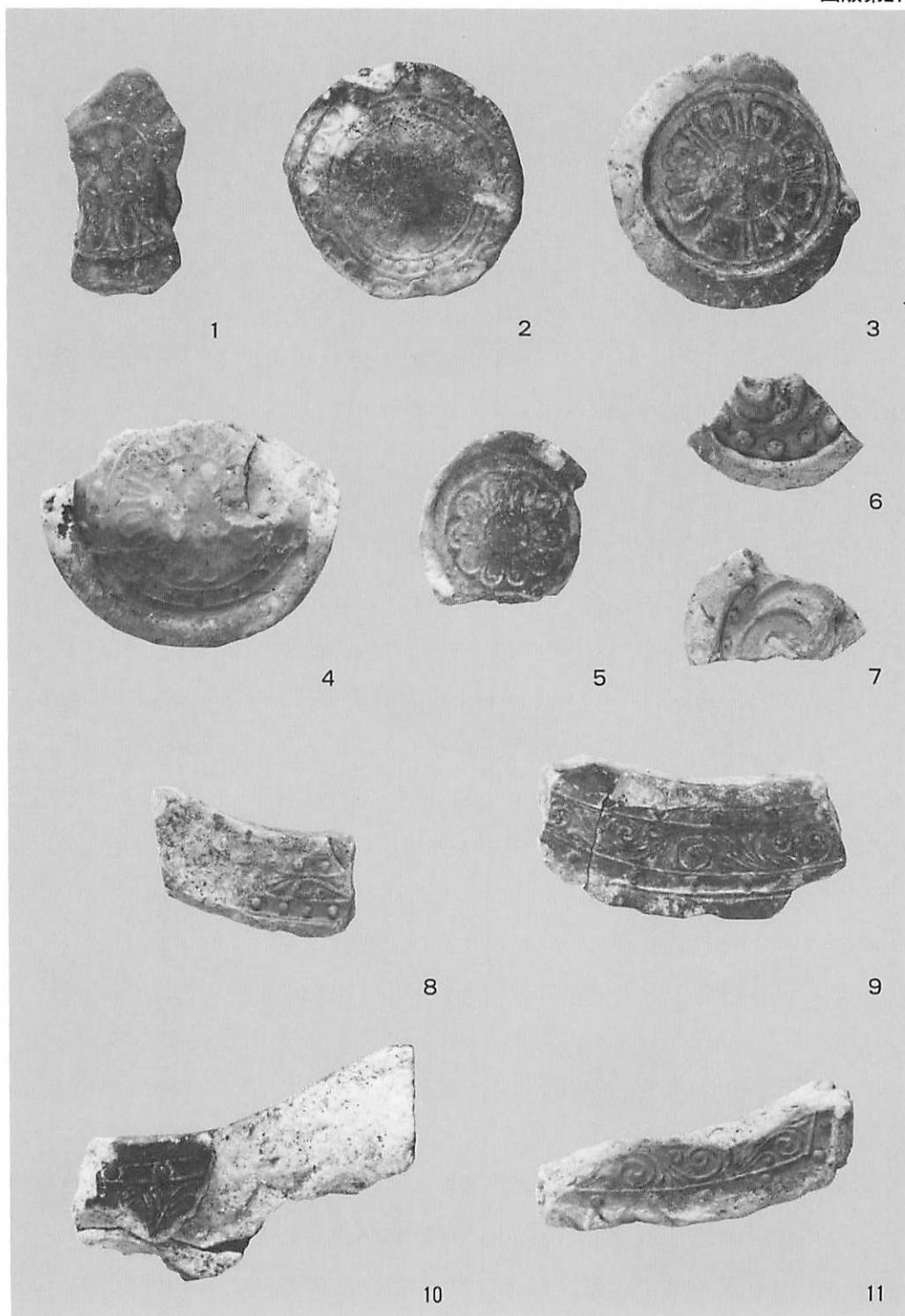


SE220・SK215出土遺物

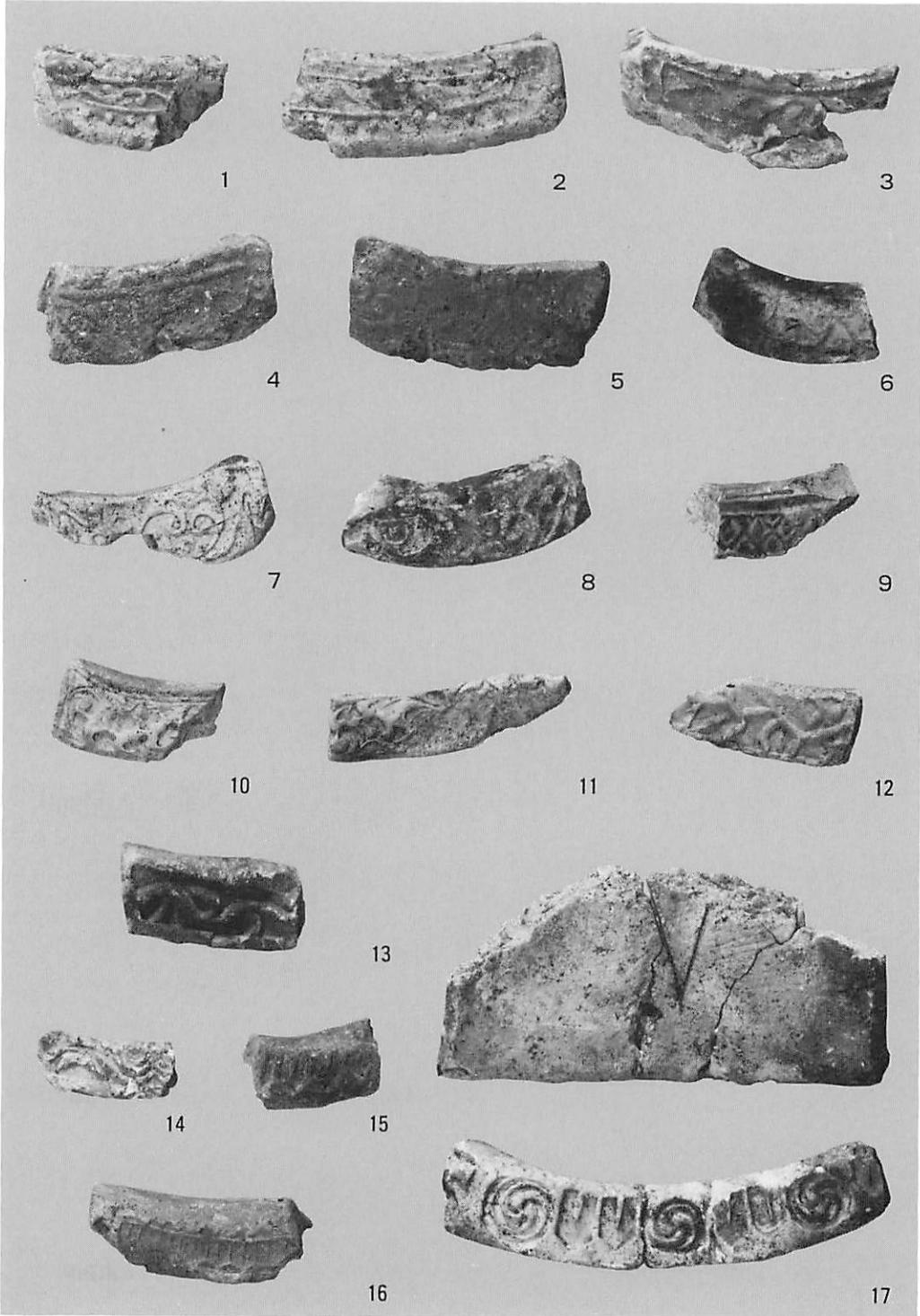




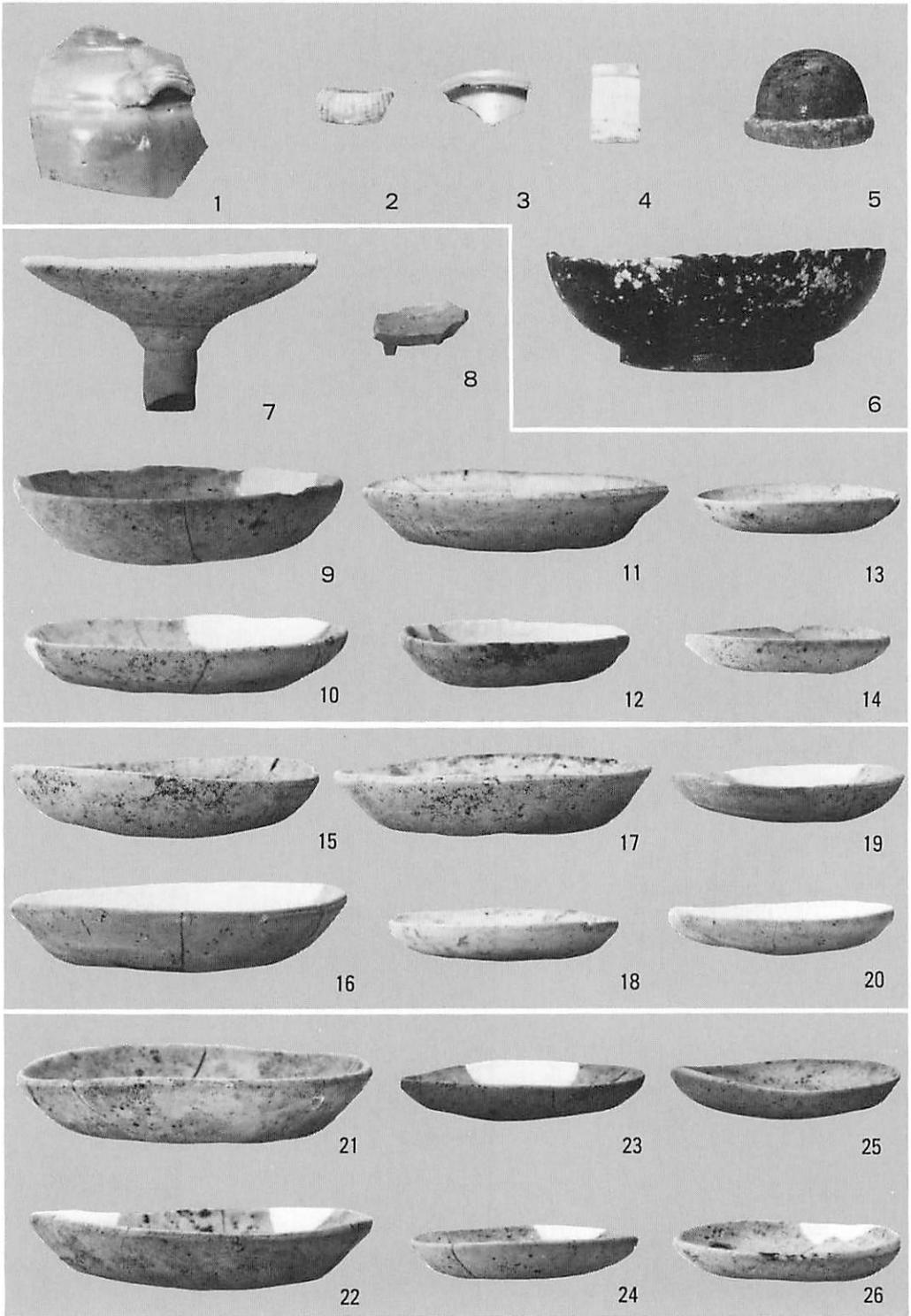
平安時代後期包含層出土の遺物



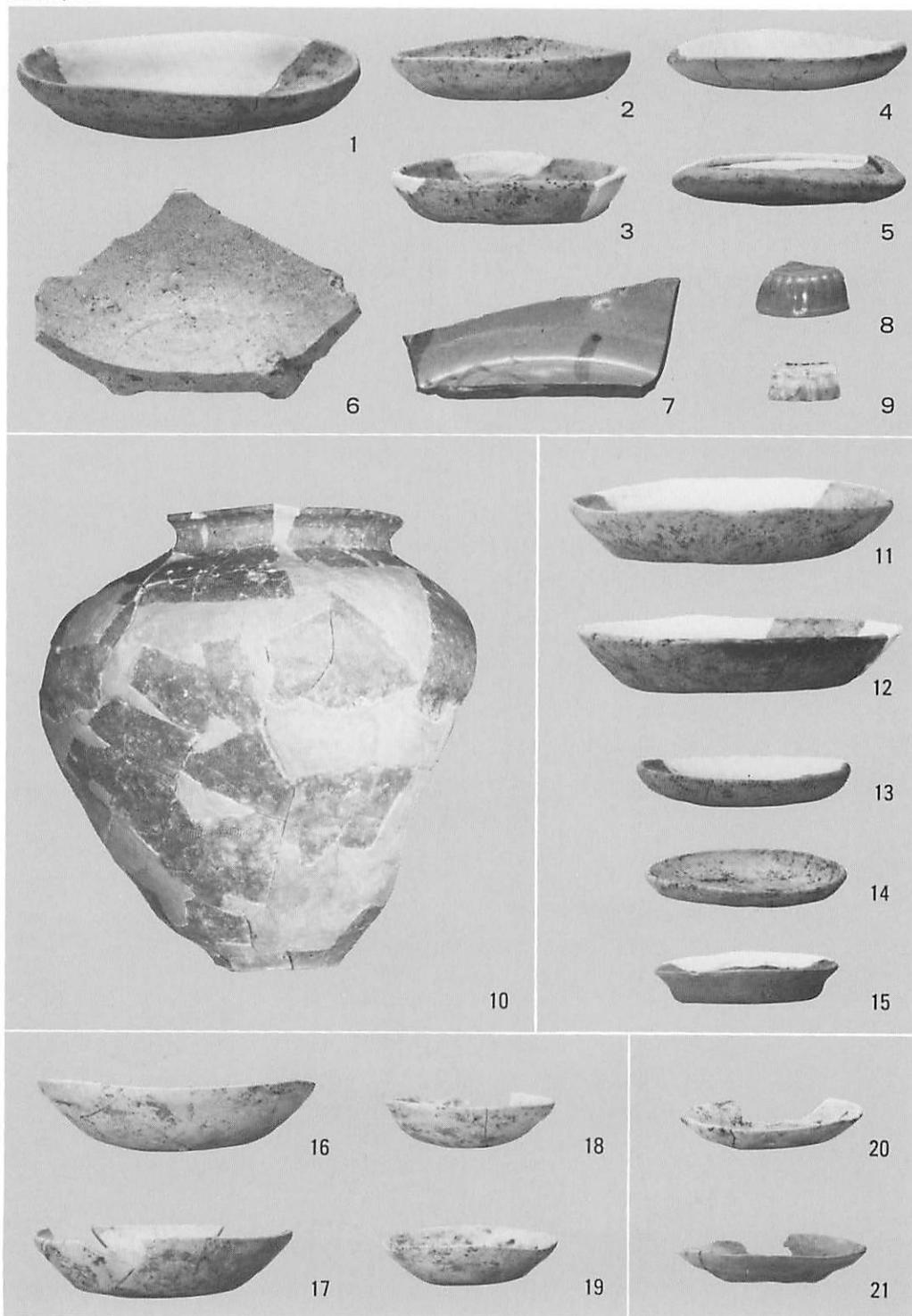
軒丸瓦・軒平瓦(1)

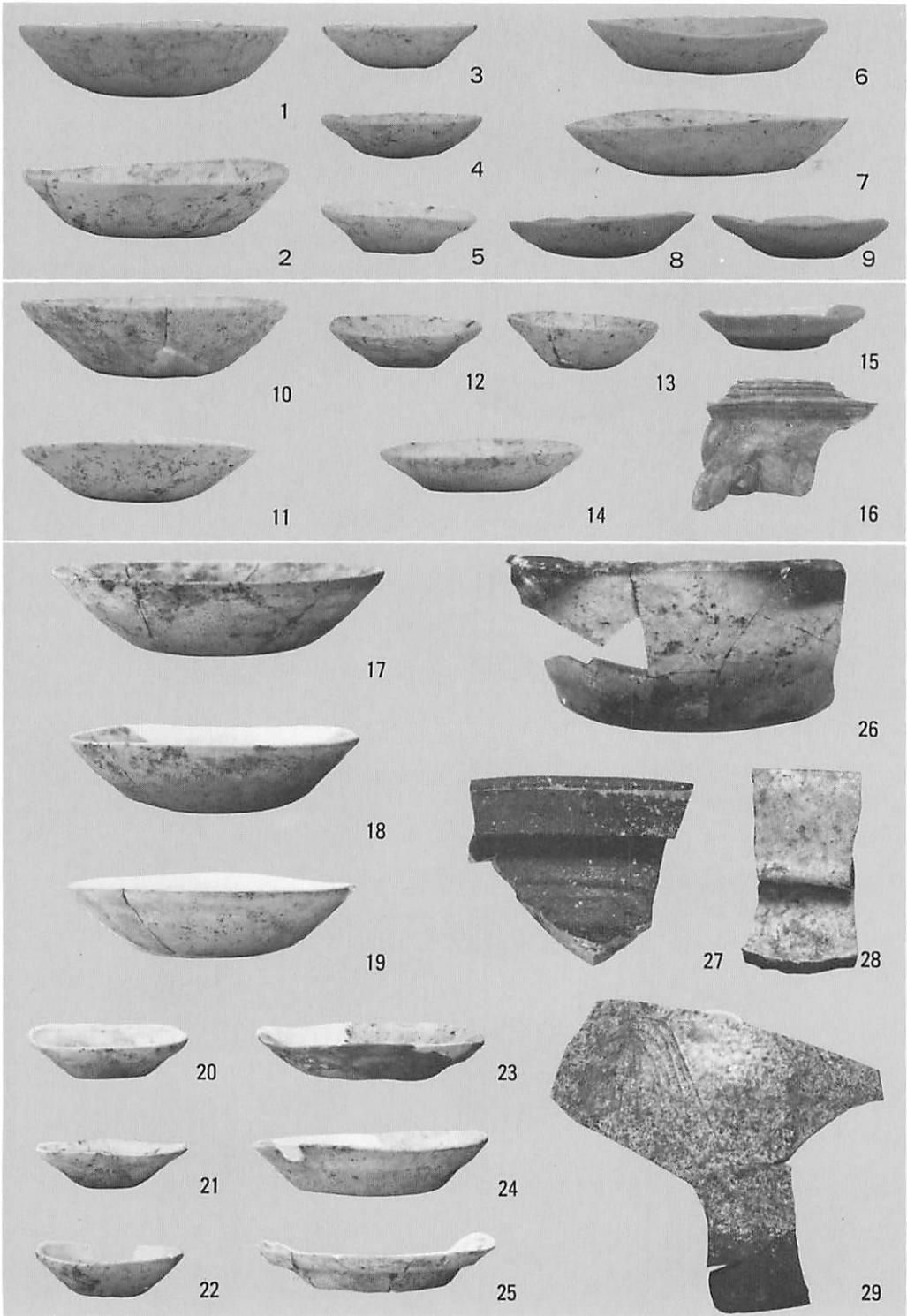


軒平瓦(2)

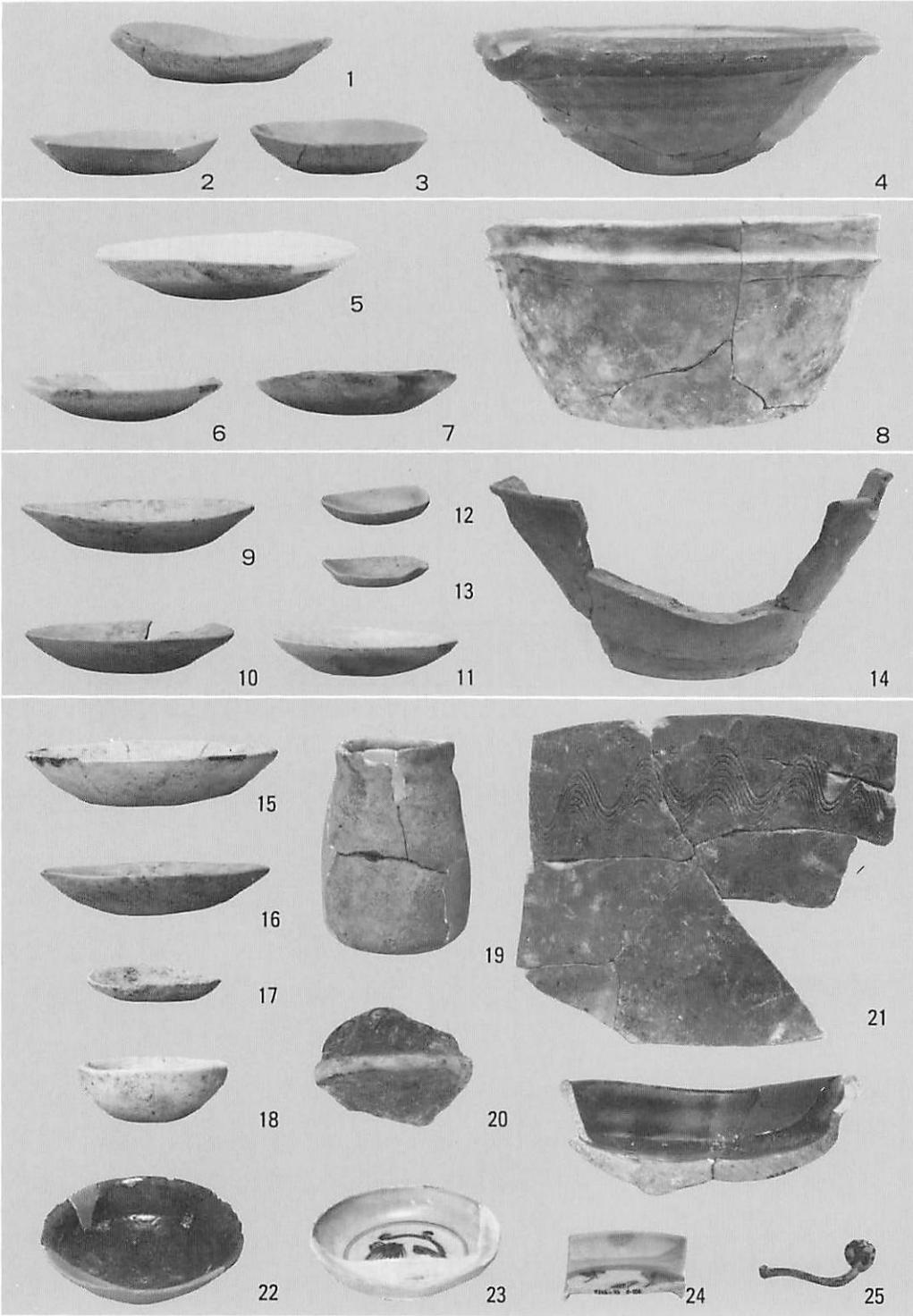


图版第30





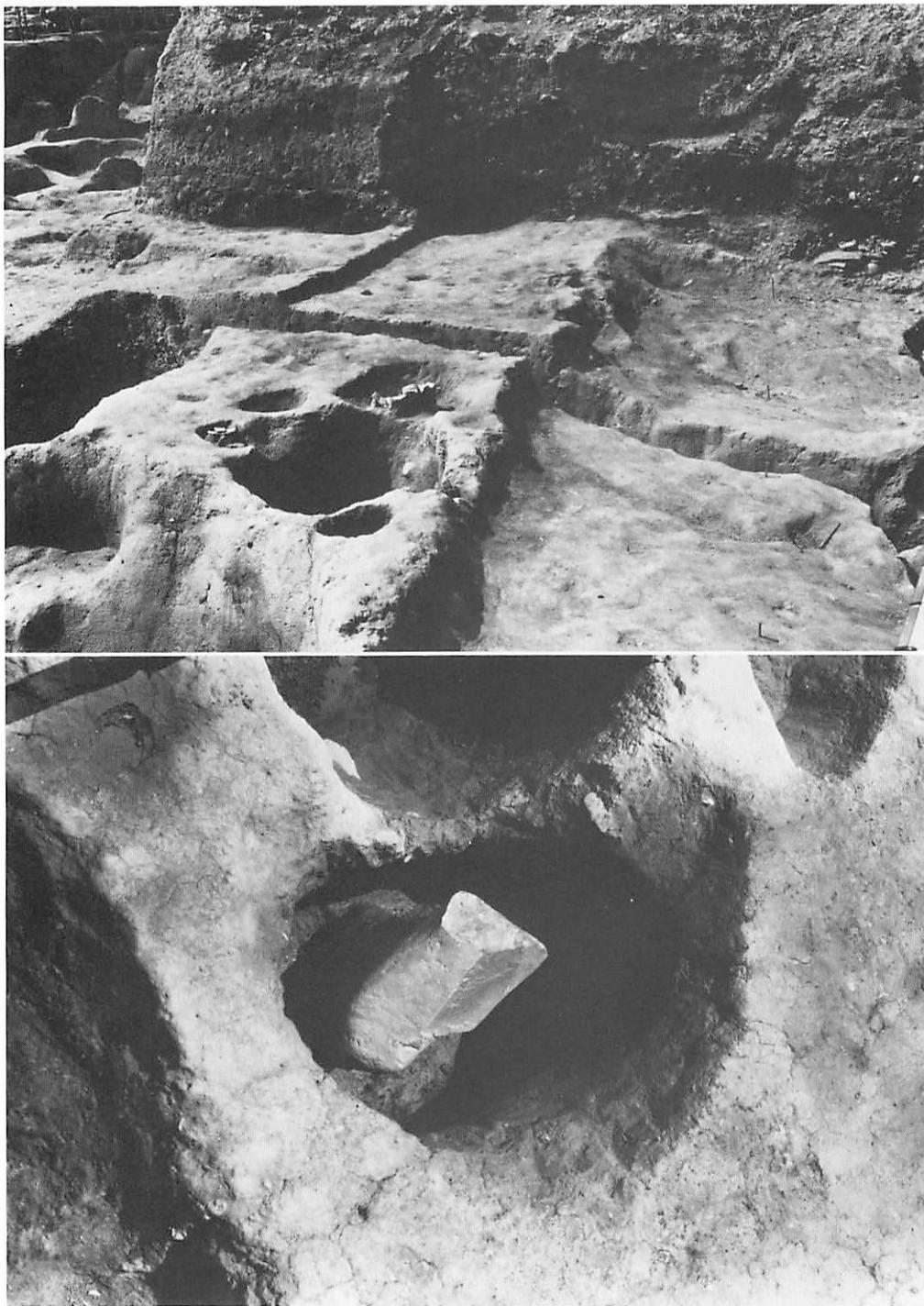
图版第32



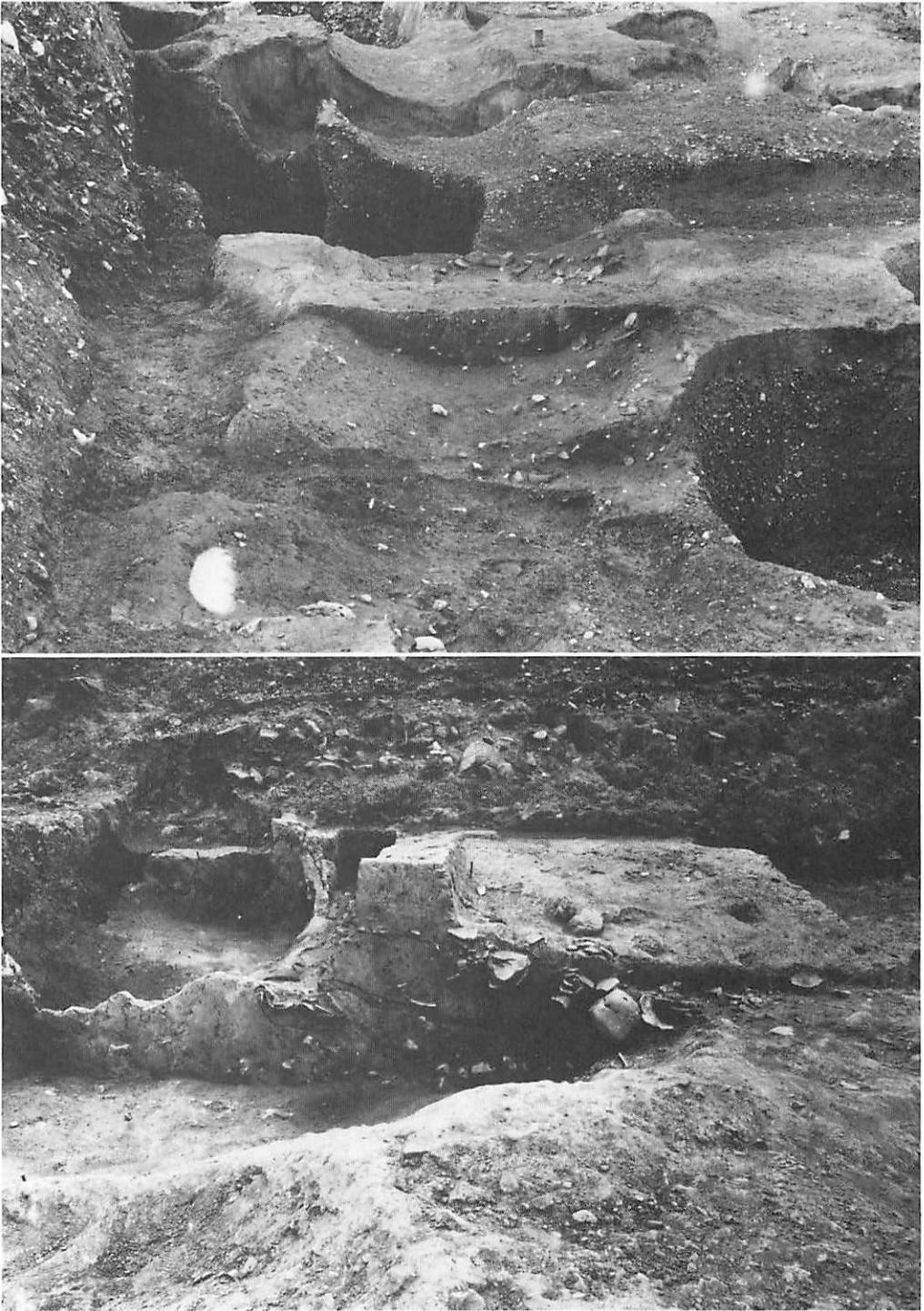


SK339・02出土遺物

図版第34



上：弥生住居址全景(東南から) 下：同ピット



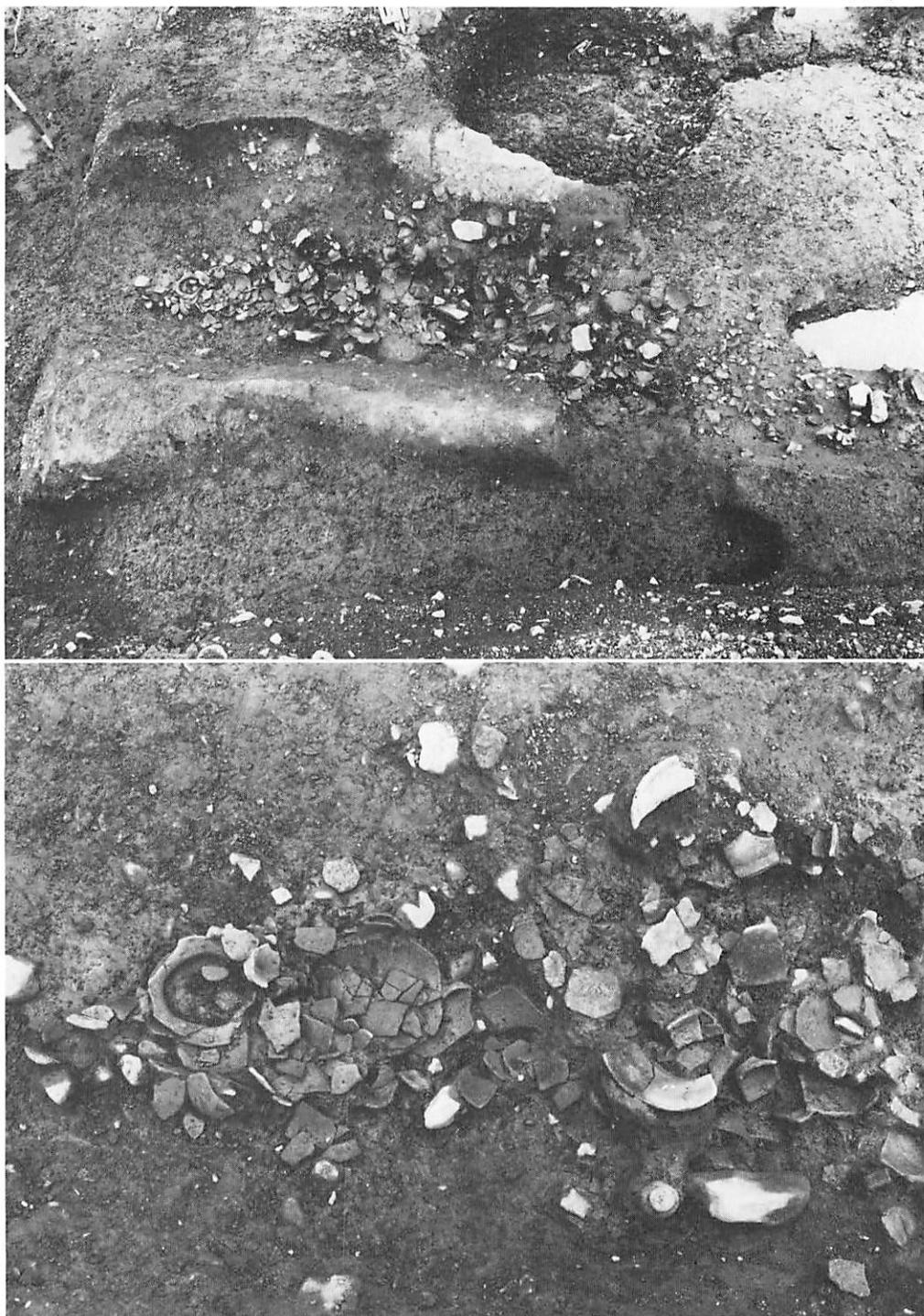
上：弥生溝1第1検出面全景(南から)

下：弥生溝1南部縦断土層(東から)



上：弥生溝1 中央部第1 検出面(北から)

下：弥生溝1 中央部第2 検出面(東から)



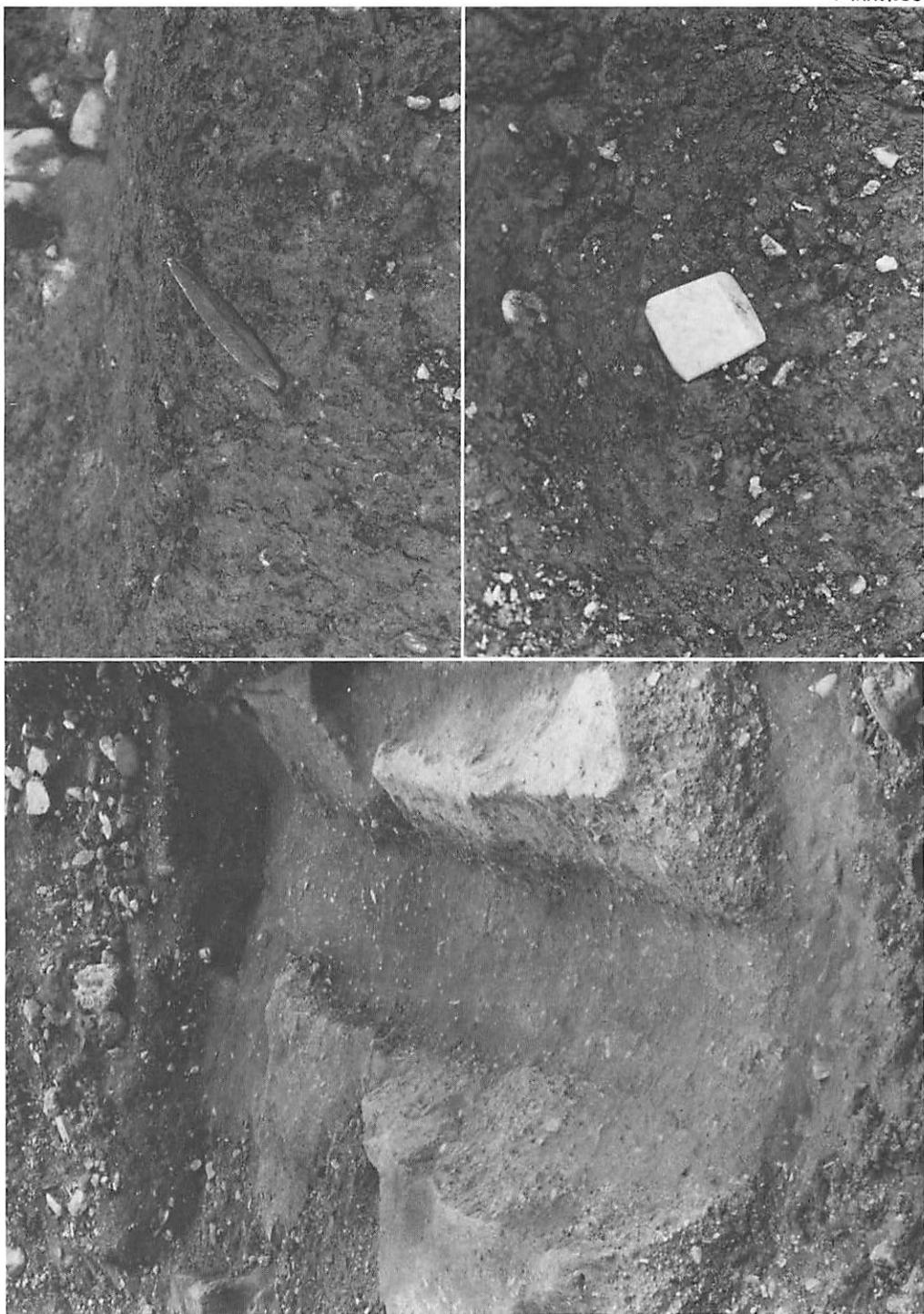
上：弥生溝 1 中央部第 3 検出面遺物出土状況(西から)

下：同細部



上：弥生溝1 南部第3 検出面遺物出土状況(東から)

下：同細部

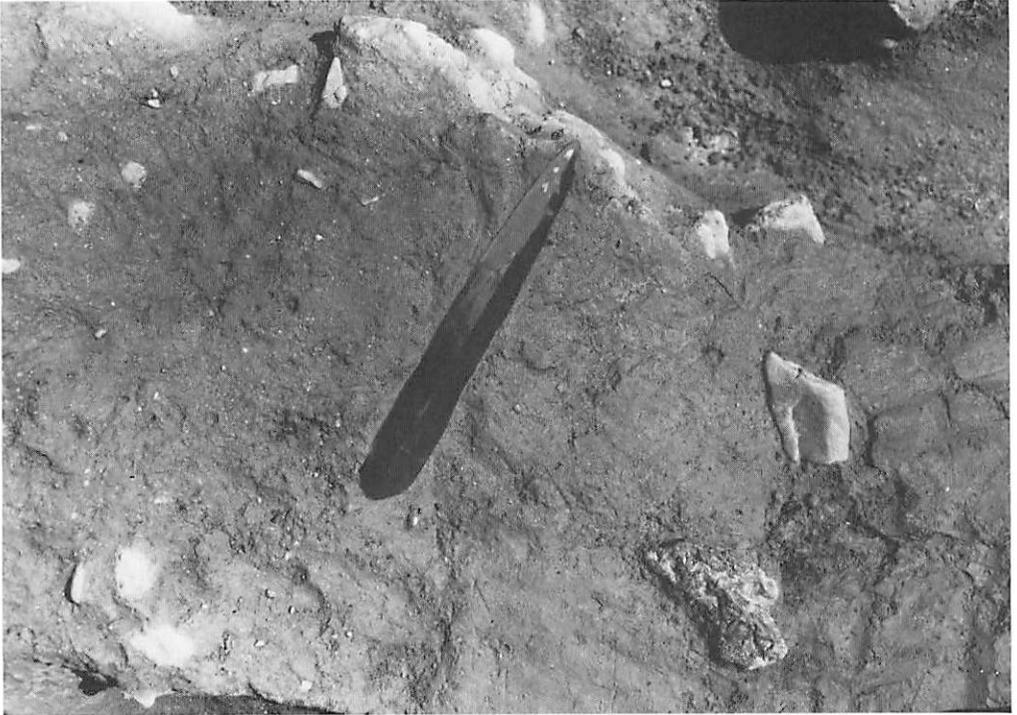


左：弥生溝 1 中央～南部完掘状況
右上：弥生溝 1 南部最上層磨製石鏃出土状況
右下：弥生溝 1 中央部第 2 検出面扁平片刃石斧出土状況



上：弥生溝2 遺物出土状況

下：弥生溝2 完掘後全景(東から)



上：弥生溝2磨製石劍出土狀況

下：弥生溝2扁平片刃石斧出土狀況



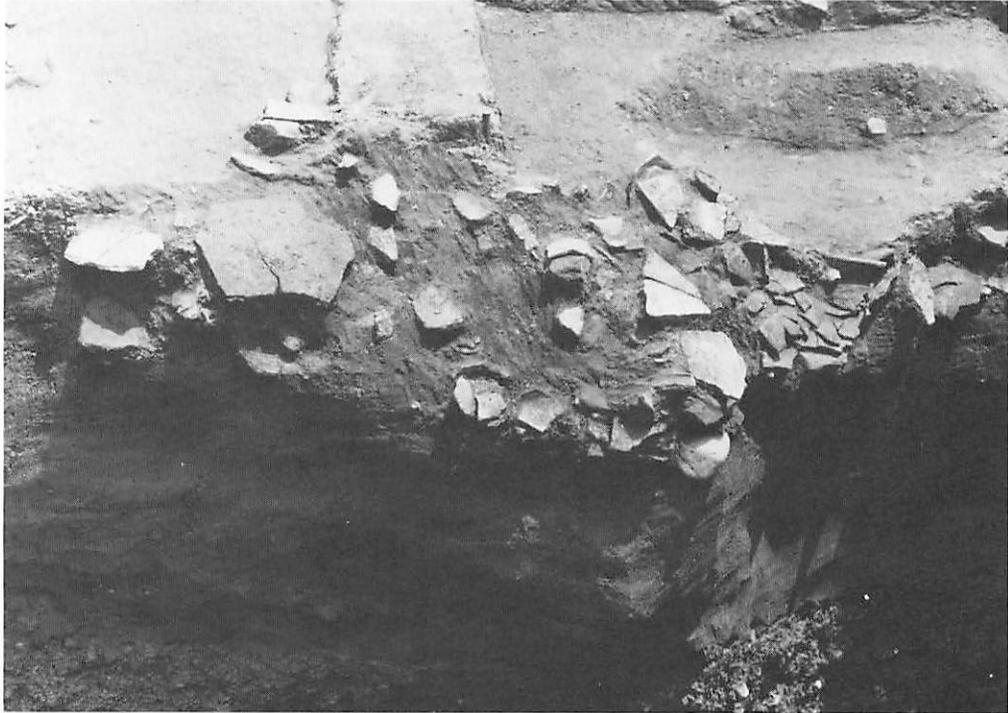
上：弥生溝3 西肩遺物出土状況(東から)

下：弥生溝3 南部横断土層(北から)



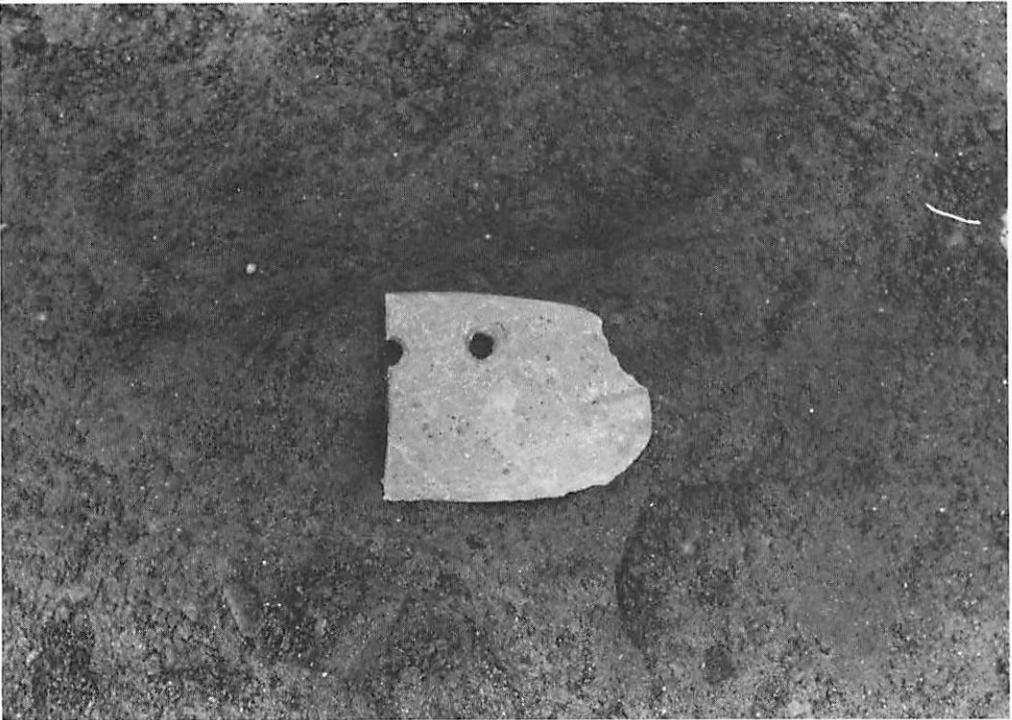
上：弥生溝4 全景(南から)

下：同細部(北から)



上：SK1001遺物出土状況(西から)

下：同襲出土状況



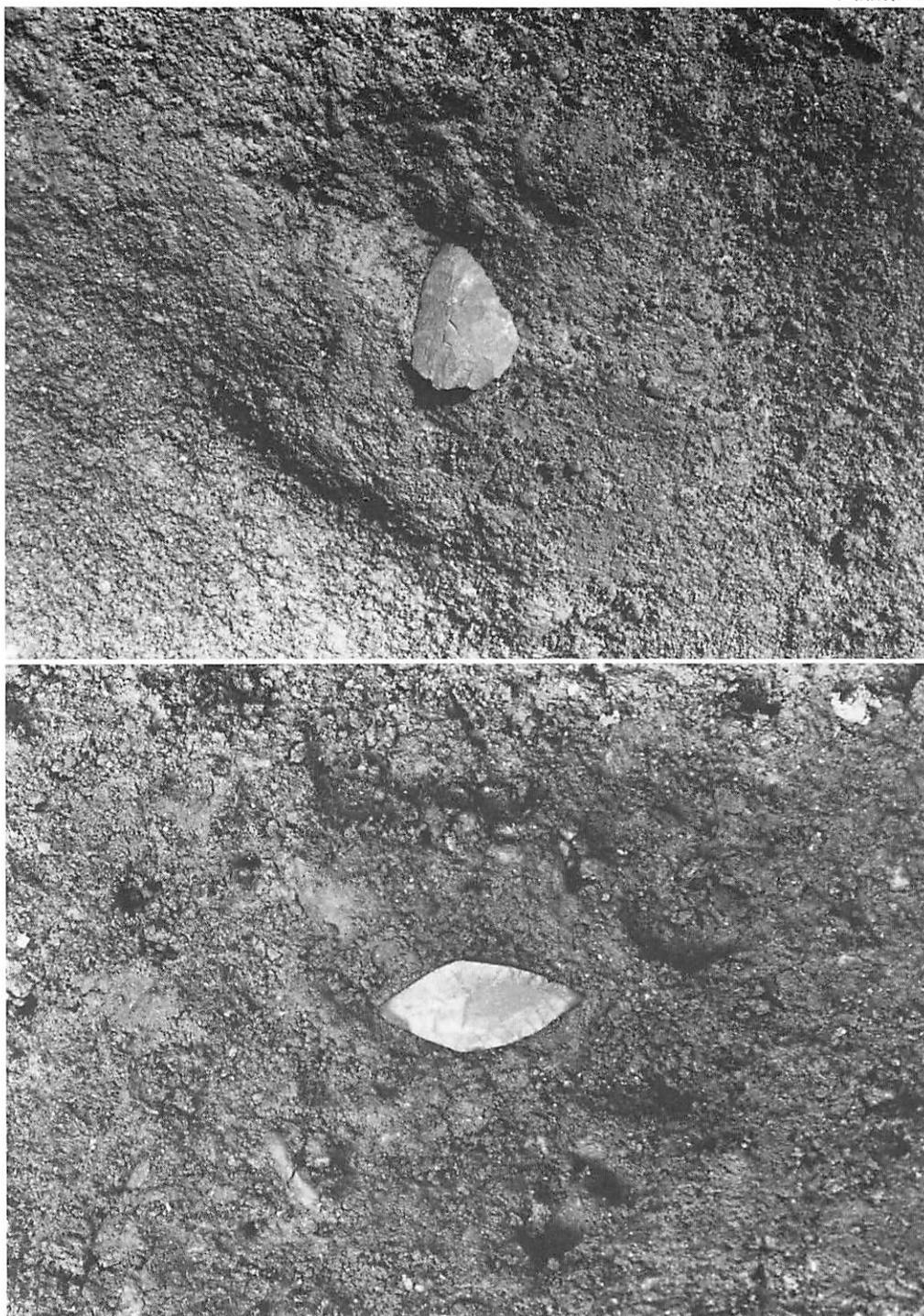
上：SK1003遺物出土状況(南から)

下：SK1003石包丁出土状況

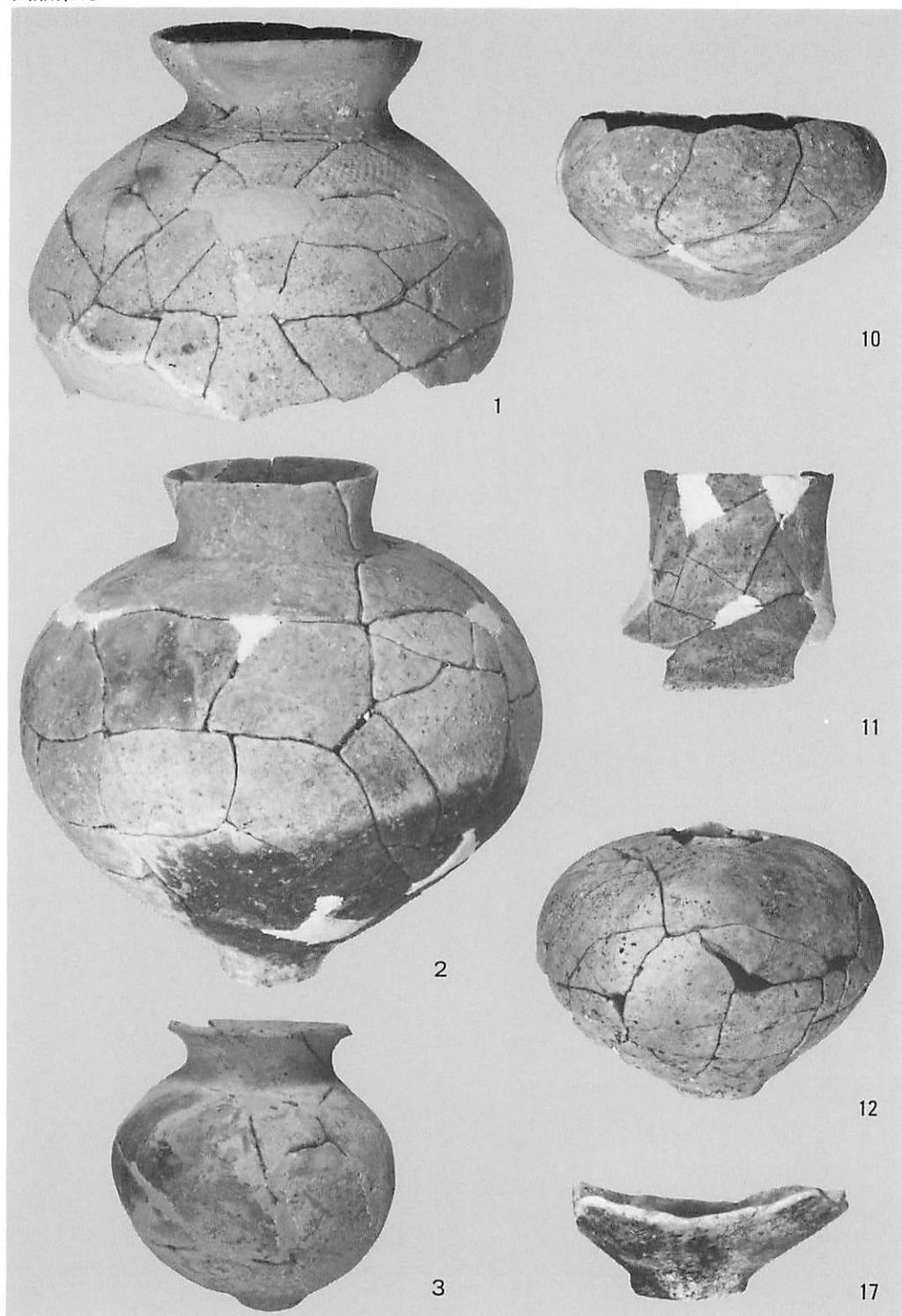


上：C区甗出土状况

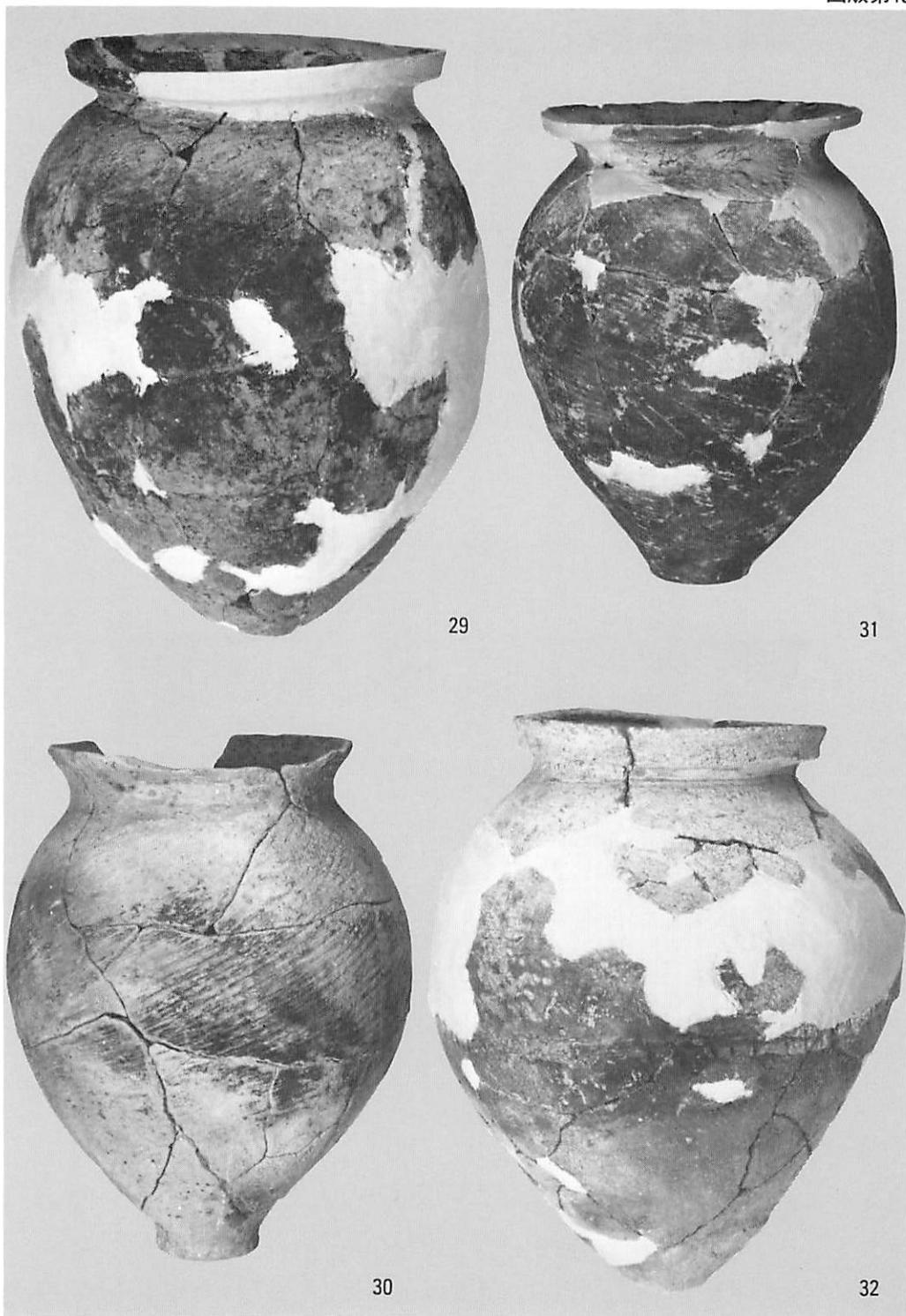
下：C区大形磨製石鏃出土状况



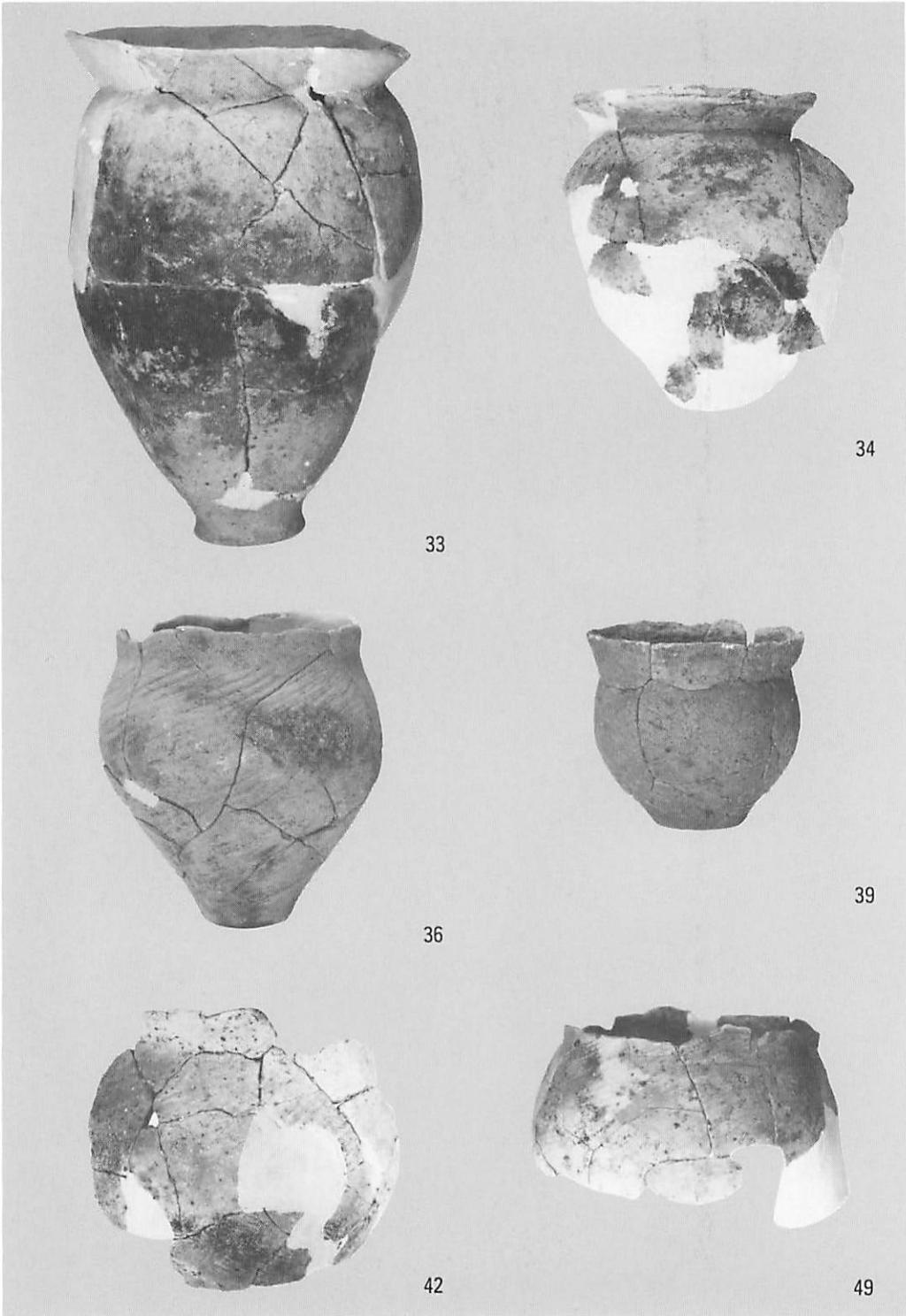
D区弥生溝4 西側打製石鏃出土狀況



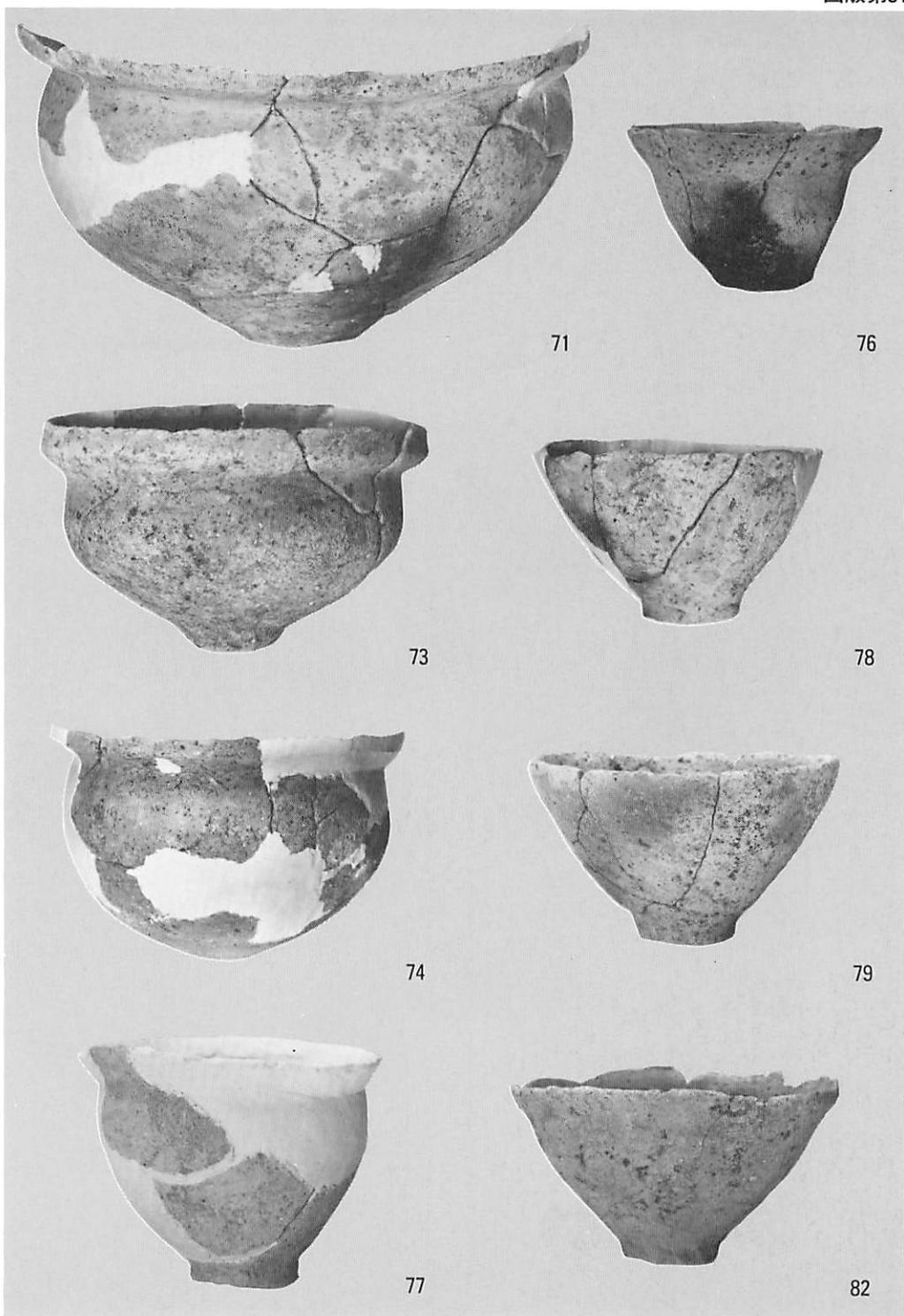
弥生式土器(1)



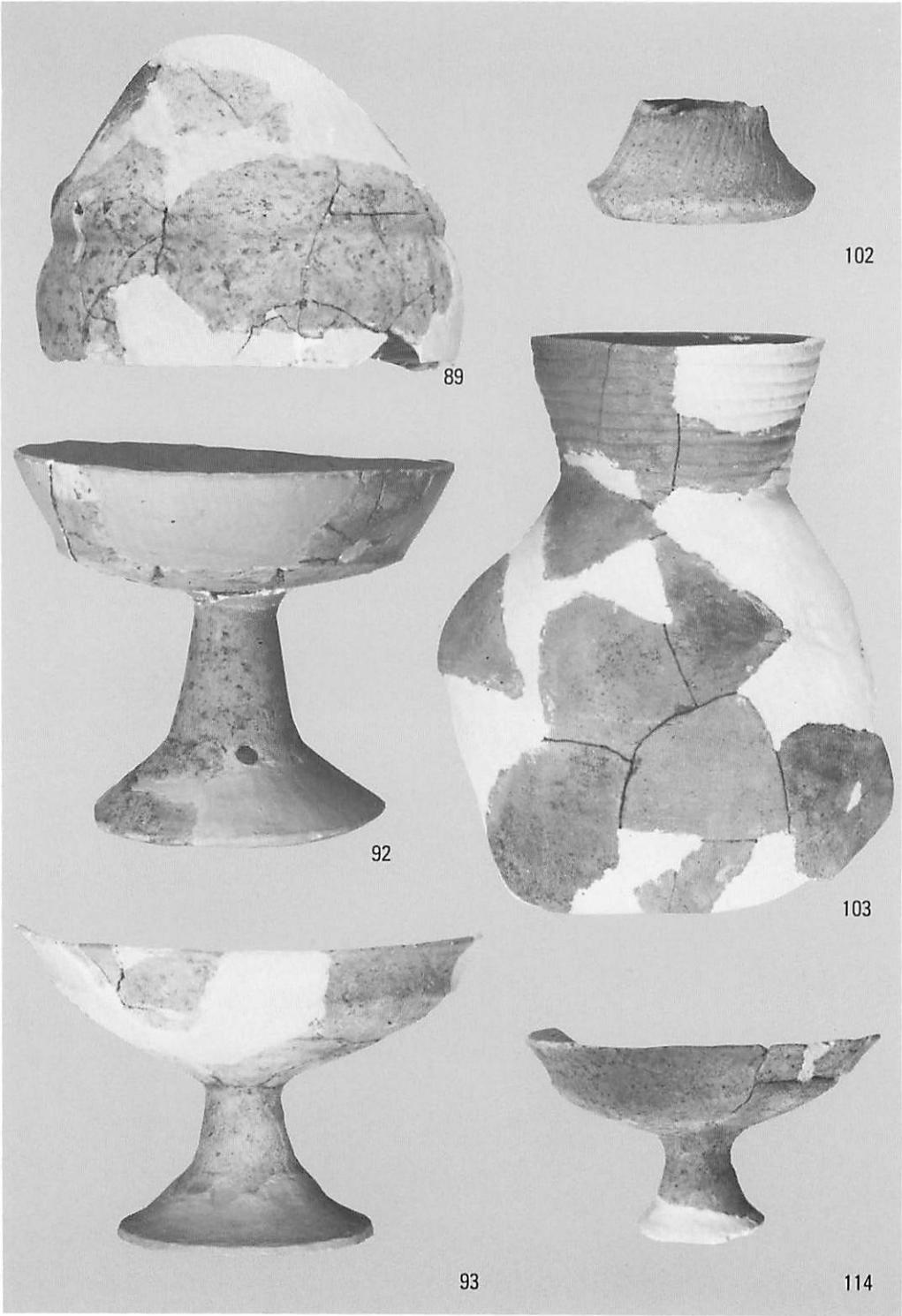
弥生式土器(2)



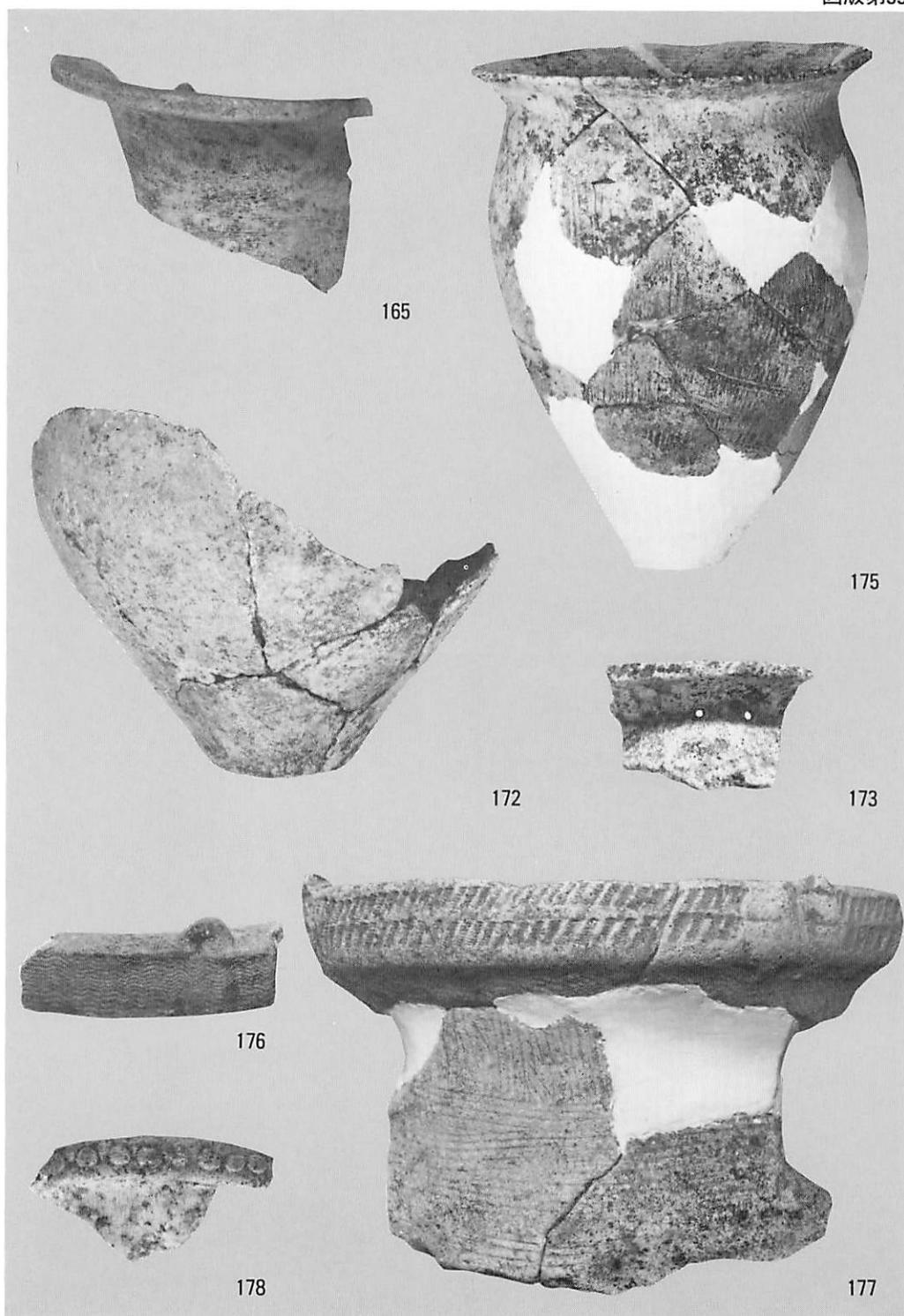
弥生式土器(3)



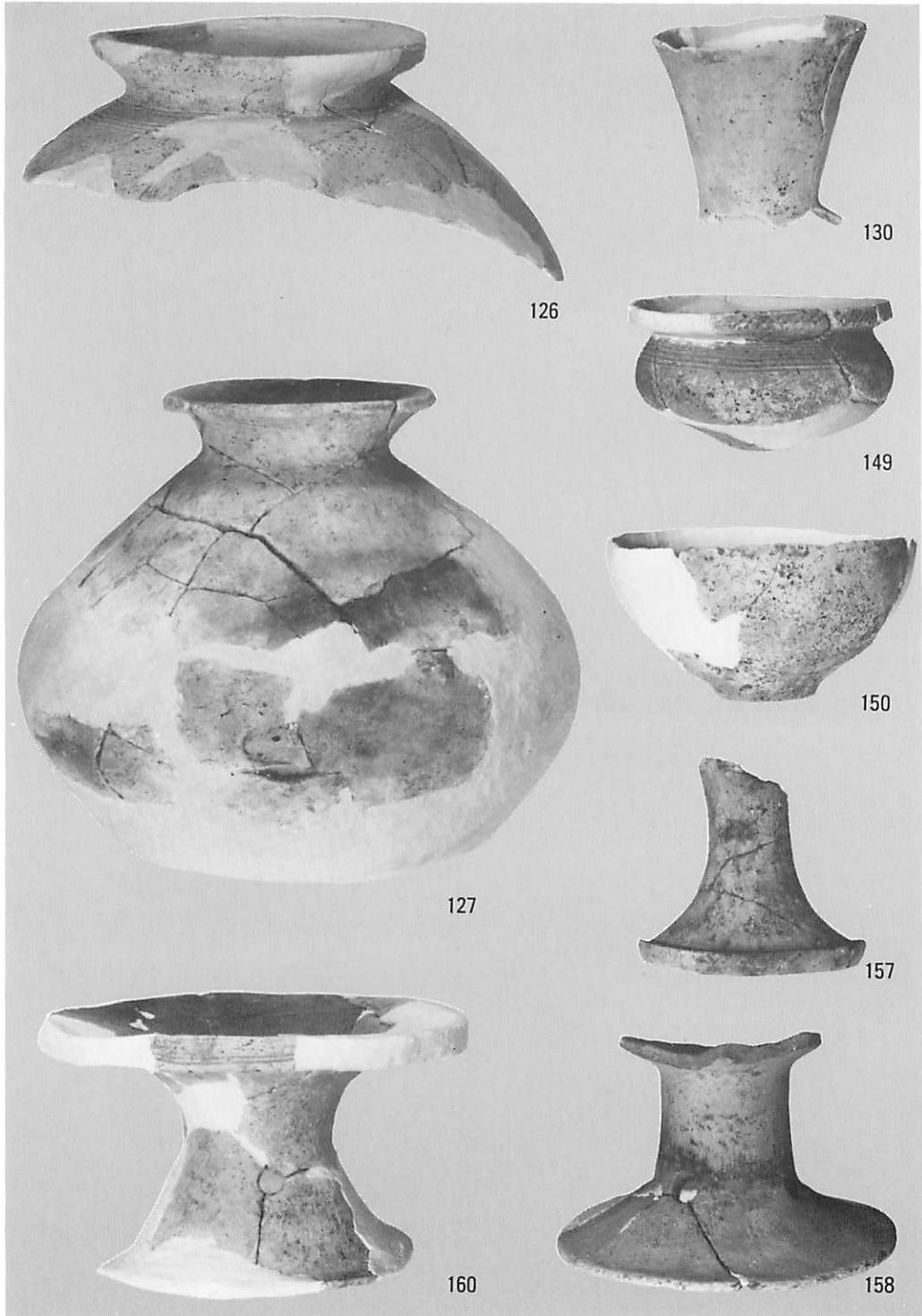
弥生式土器(4)



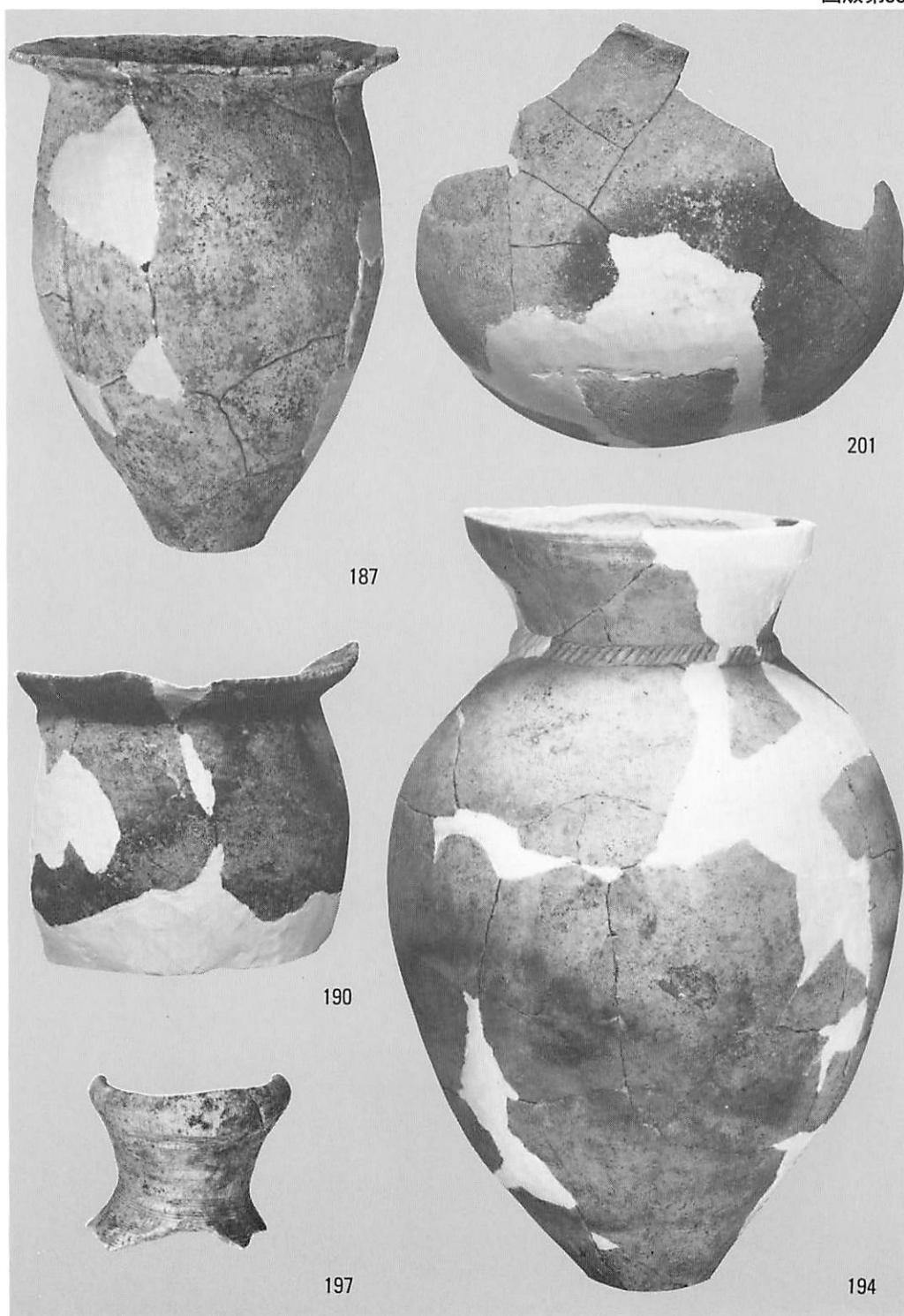
弥生式土器(5)



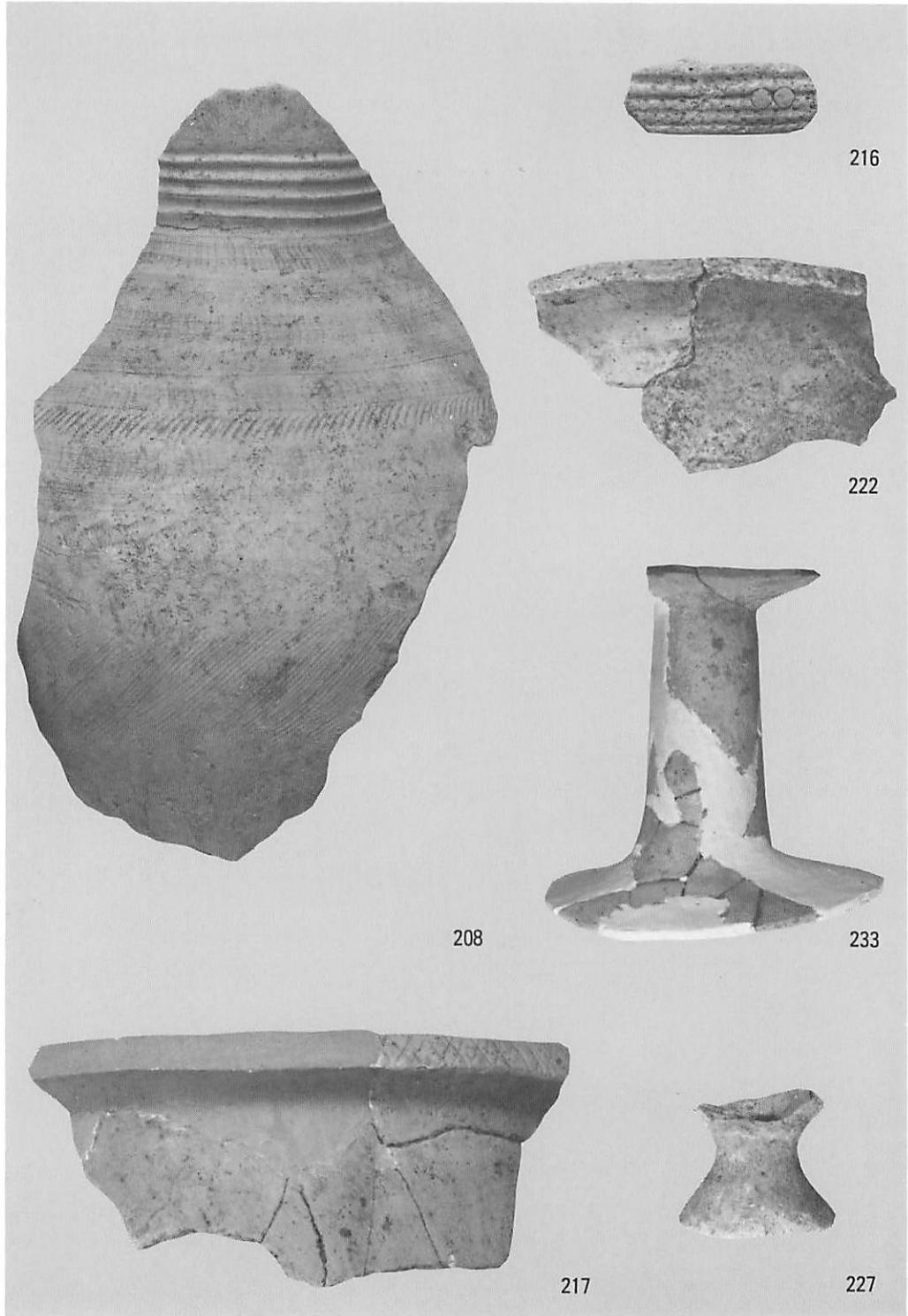
弥生式土器(6)



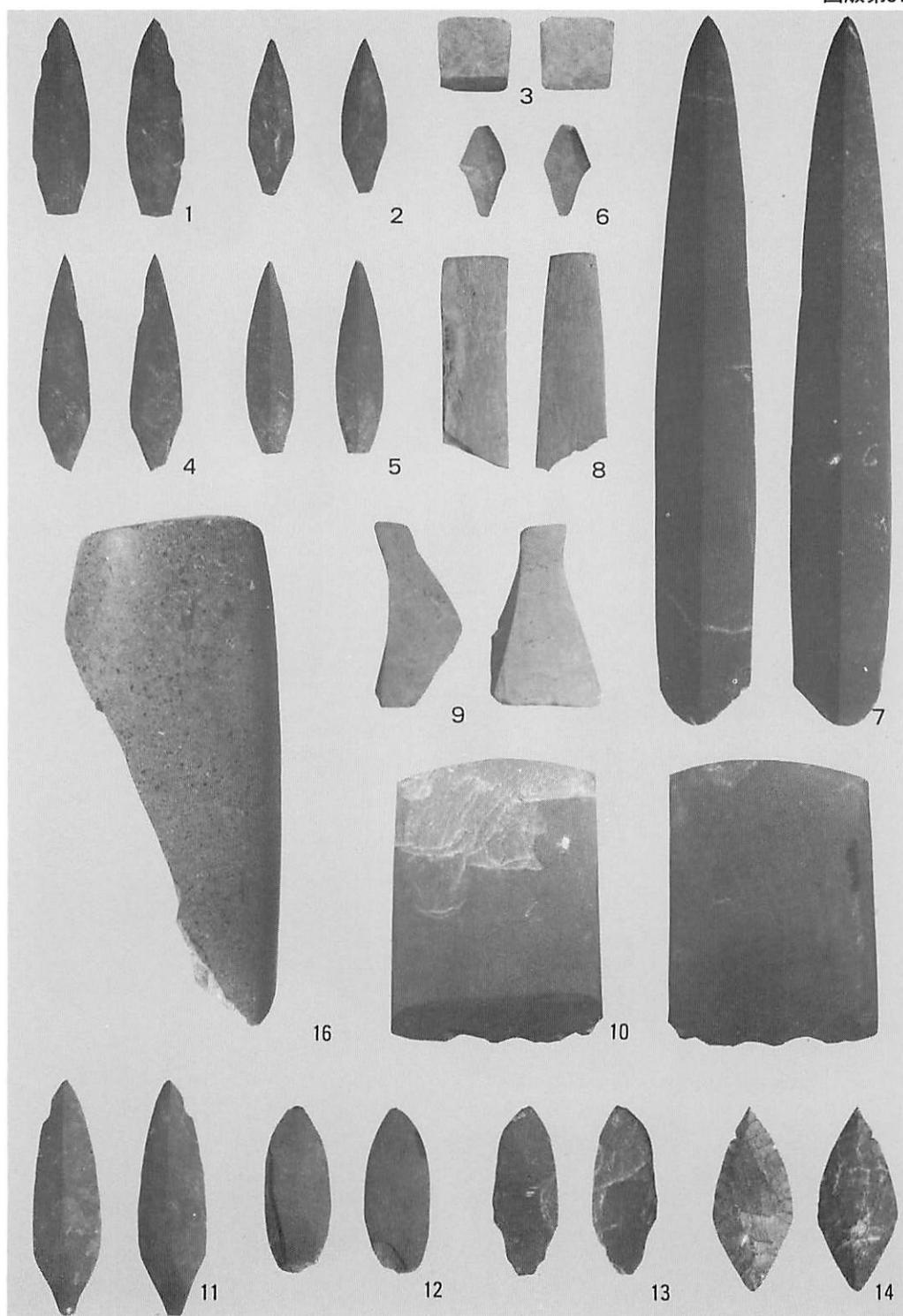
弥生式土器(7)



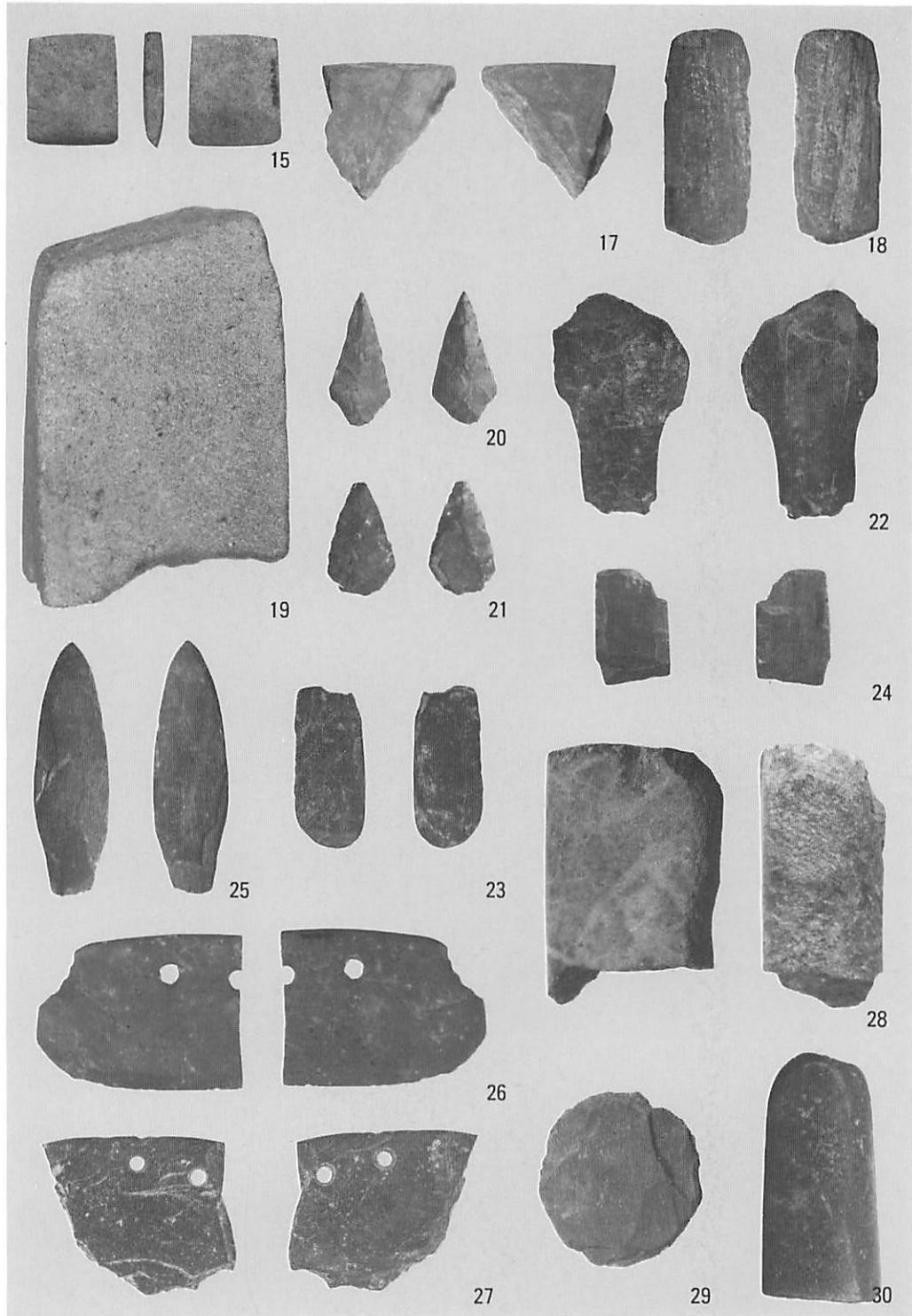
弥生式土器(8)



弥生式土器(9)



弥生時代石器(1)



平安京跡研究調査報告 第11輯
平安京左京四條三坊十三町 一長刀鉾町遺跡一

発行日 昭和59年3月1日

編集 平安博物館考古学第四研究室 寺島 孝一

発行 財団法人 古 代 學 協 會

604 京都市中京区三条高倉
振替京都 8-850番
TEL. 075(222)0888

印刷 東 洋 紙 業 株 式 会 社

556 大阪市浪速区芦原1丁目3番
TEL. 06 (567) 2 1 1 1

PALAEOLOGICAL STUDIES

IN THE CAPITAL HEIAN, VOL. XI

EXCAVATIONS AT THE THIRTEENTH
INSULA, REGIO III, DECUMANUS IV
IN THE PARS ORIENTALIS OF
THE CAPITAL HEIAN

THE PALAEOLOGICAL ASSOCIATION OF JAPAN, INC.

KYOTO, MCMLXXXIV